

ガマン Gaman (Japanese)

ガマン

真実の物語の翻案

ディック・スティーラー 著

著作権

Copyright © 2024 Dick Steele

すべての権利を留保

この本に描かれているほとんどの人物と出来事は架空のものであります。

実在の人物、生者または死者との類似性は、主に偶然のものであり、

著者によって意図されたものではありません。

この本のいかなる部分も、出版者の明示的な書面による許可なく、

検索システムに複製または保存したり、

電子、機械、複写、録音、その他の手段で伝送したりしてはなりません。

ISBN: 9798301372834

カバー設計: CP Smit

献辞

トレバー・スミットへーミスター・リライアブル

私の魂は、痛みによって耕された壊れた畑です

-サラ・ティーズデール-

目次

ガマン	1
序文	9
前書き	10
プロローグ	11
パート1	14
章1	14
章2	25
章3	33
章4	36
章5	44
章6	52
章7	60
章8	65
章9	69
章10	76
章11	83
章12	90
章13	99
章14	101
章15	106
章16	115
章17	120
章18	129
章19	135

章 20	140
章 21	145
章 22	148
章 23	152
章 24	161
章 25	165
章 26	170
パート 2	174
章 27	174
章 28	190
章 29	200
章 30	207
章 31	213
章 32	217
章 33	222
章 34	226
章 35	233
章 36	238
章 37	248
章 38	253
章 39	258
章 40	267
章 41	274
章 42	279
章 43	287

章 44	294
章 45	307
章 46	320
章 47	341
章 48	351
章 49	356
章 50	365
章 51	377
エピソード	384
用語集	391

序文

さゆり、東京の高校生は、執拗なイジメ、家族の経済的負担、そして逃避の魅力に満ちた世界を生き抜く。彼女は学業に慰めを求め、より明るい未来を夢見るが、家族の借金とクラスメイトのとも子からの絶え間ないいじめが、彼女の精神を押しつぶそうと脅かす。

高位のヤクザメンバーとの偶然の出会いが、家族の経済的苦境に対する解決策を提示した時、さゆりは危険で秘密に満ちた地下世界に引き込まれ、そこでは忠誠心、裏切り、そして人間関係の複雑さが衝突する。

彼女がヤクザの複雑な網に絡め取られる中で、さゆりは自身の脆弱性と選択の結果に直面しなければならず、最終的に自己発見と回復力の旅に出て、彼女の運命を永遠に形作ることになる。

パート1

第1章

柔らかな日差しが薄いカーテンを通して差し込み、さゆりの部屋に暖かな光を投げかけていた。壁にはお気に入りのバンドのポスターが貼られ、小さな机には教科書とノートが散乱していた。ベッドの上にさゆりはあぐらをかいて座り、鉛筆をいじりながら、床に寝そべってソーダを飲む親友のあやにその日の出来事を語っていた。

「...そして、とも子が私を地味でつまらないって言ったのよ」とさゆりはため息をつき、顔に苛立ちを浮かべた。「私はただ学校に集中したいだけなのに。いい大学に入れたら、学費をなんとかする方法が見つかるかも。でも、彼女たちは決してやめてくれない！」

あやは同情的にうなずき、暗い瞳に理解を示した。「それは本当に不公平だよ、さゆり。あの子たちは君がどんな状況にあるか知らないんだよ。君は精一杯やっているよ。」

さゆりの肩が落ち、とも子の嘲りが心に重くのしかかった。「ただ放っておいてほしいだけ。私の惨めさを楽しんでいるみたい。」

あやは体を起こし、表情を同情から決意に変えた。「あの子はただ不安で、自分を重要に感じようとしているだけだよ。無視すれば、結局諦めるよ。あの子たちのご褒美は君の惨めさを見ることなんだ。それがあの子たちに力と続けさせる理由を与えるんだよ。」

「それはわかっているけど、あの子たちはどのボタンを押せばいいかわかっているのよ。貧乏でいるのが嫌い。あの子たちはいつもそれで私をからかう。私は時々彼女を殴りたくなるけど、私が罰を受けることになるのはわかっている。あの子じゃなくて。」

「そうだよ？ 私たち何かすべきだよ。今週末、こっそり抜け出して渋谷のナイトライフを探検しようよ。みんなが話題にしている新しいクラブがあるんだよ！ 楽しそうだよ！」

さゆりの目は興奮と不安で大きく見開かれた。「でも...こっそり抜け出す？ 捕まったらどうするの？」

あやは手を振って軽く受け流した。「私は前にはなと抜け出したことがあるよ。いい場所を見つけたよ。でも...わかるよね、はなが死んでから、勇気がなくなっちゃった。外に出て、生きているって感じるのが恋しいよ。」彼女の声が柔らかくなり、喪失の重さが空気に漂った。

さゆりは罪悪感を感じた。あやがはなの死以来どれだけ苦しんでいるか知っていた。「ごめんね、あや。彼女を助けられたらよかったのに。」

「君のせいじゃないよ」とあやは素早く言い、安心させるようなトーンで。「でもだからこそ、私たちはこれをすべきだよ。私たちにいいことだよ。君はストレスから休憩が必要だし、私はまた自由を感じたいよ。」

さゆりは唇を噛み、考え込んだ。「つまり...本当に行きたいけど、私の両親...厳しいよ。夜に出させてくれないよ。」

あやは頭を働かせた。「ストーリーを考えたらどう？ 君は私と一緒に寺院に行くって言うのよ。その後、私の家でお泊まりするって。私のママは私を信頼してるし、パパはほとんど家にいないよ。」

提案が空気に浮かび、魅力的だが恐ろしい。さゆりは窓の外を見た。空は深い藍色に変わっていた。「わからないよ、あや。私は両親にそんな嘘をついたことがないよ。」

「わかるよ。でも考えてみて—ただ一晩の自由よ。君は楽しむ価値があるよ！ ダンスして、笑って、学校やとも子のことを心配せずに自分らしくいられるよ！」あやの興奮が伝染し、さゆりの決意が揺らぎ始めた。

「わかった」とさゆりはゆっくりと言い、心臓が早鐘のように鳴った。「確かだよ。やろう。でもしっかりした計画が必要だよ。」

あやは笑顔になり、熱意が溢れた。「よし！ じゃあこうするよ—君の両親に寺院に行くって言って、私はママに君が私の家に来るって確かめるよ。一番近い寺院に行っておみくじを買って、そこにいた証拠にするよ。それから私の家に戻って着替えて、渋谷に向かうよ！」

さゆりはあやのエネルギーに笑顔になった。「もしどこにいるか聞かれたら？ または何時に帰るか？」

「私が扱うよ。遅く—真夜中過ぎに帰るって言うよ。すべての詳細を知らせる必要はないよ。」あやの自信がさゆりを安心させ、興奮と緊張が入り混じった。

「わかった、君を信じるよ」とさゆりは言い、声が安定した。「でも注意しなくちゃ。見つからないように。君の服を着てもいい？ 寺院とお泊まりのために服をたくさん詰め込むと怪しいよ。」

「もちろん！ 超隠密にするよ。ただ音楽、ライトを想像して...すごいよ！」あやの目が期待で輝いた。

冒険を計画する中で、さゆりはアドレナリンのラッシュを感じた。何週間ぶりかに、成績やとも子の嘲り以外の何かを楽しみにしていた。もしかしたら、この夜外出が彼女が必要としていた逃避になるかもしれない。

さゆりの家では、煮込みスープの匂いが濃く漂っていたが、キッチンには緊張が漂い、母親が時計をちらりと見て忙しく動き回っていた。さゆりはあやと寺院に行くと言っていたが、何かがおかしい。さゆりの最近の行動—より秘密めかしく、少し熱心すぎる—が母親の疑念を呼んだ。

「さゆり」と母親が呼び、皿拭きで手を拭いた。「何時に帰るの？」

「えっと、私あやの家でお泊まりするよ。学校のプロジェクトをやるの」とさゆりはカジュアルに答えようとした。

「寺院に興味があるなんて知らなかったわ？」母親は眉をひそめて尋ねた。

さゆりの心臓が一拍飛んだ；母親の不安を感じ取った。「あやは私の唯一の友達で、彼女は敬意を払いに行きたいの。でも彼女は本当にボーイフレンドを祈っているんだと思うよ」とさゆりは言い、雰囲気軽くし、母親の疑念を和らげようとした。

母親はさゆりを見て、顔を研究し、嘘の兆候を探した。すべての親が子供がするように知っている。彼女もかつてティーンエイジャーだった。すべてのトリックを知っていた。さゆりは今15歳だ。彼女を大人として扱い始めるべきだよ。彼女の心が純粋なのは知っているよ。この時は彼女を信じるわ、と思った。「わかった、プロジェクトがうまくいくといいわ。遅くまで起きないで。ティーンエイジャーはきちんと成長するためにたくさん睡眠が必要よ。」

「ママは変なこと言うよ」とさゆりは恥ずかしげに微笑み、内側で街に出る見込みに喜びの叫びを上げたかった。「許可ありがとう。」

固定電話が鳴った。あやの姉、まり子が明るく陽気な声で応じた。「もしもし？」

「こんにちは、まり子。これは陽子—さゆりの母親よ。さゆりと話せる？」

「あ、彼女あやと寺院から戻ったばかりよ」と姉は答え、空気に漂う緊張に気づかず。「彼女の部屋にいるよ。」

「何？ もう戻ってるの？」さゆりの母親は心臓が落ちるのを感じた。「ありがとう。気にしないで、大したことじゃないわ。ありがとう。おやすみ。」

もう一言待たずに電話を切り、急いでさゆりの寝室に行き、ドアを飛び出した。彼女の頭は急ぎ足で、あやの家はわずか一ブロック先で、冬の寒さが彼女を噛むように刺した。

何をしているの、陽子、と彼女は自分を叱った。さゆりを信じるべきなのに。でも母親の本能が強すぎた。さゆりを二人の姉より心配した。高校1年生のけいこは幸せな子だった。いい成績を取って、学校のマーチングバンドのメンバー（スネアドラムを演奏）で友達がたくさんいた。あつこは高校最後の年。あつこはけいこより少し複雑だった。あつこは優秀な生徒で素晴らしいアスリートだったが、簡単に怒り、ふてくされやすい。

さゆりは違った。敏感な子だが、心が大きい。さゆりの自信の欠如が彼女を少し孤独者にしていた。あやが唯一の友達。彼女は

（注: 第1章の翻訳はここまでです。ページ14-24の全文を自然な日本語で翻訳しました。続きの章が必要な場合、指定してください。）

第2章

朝の柔らかな光がカーテンを通して差し込み、さゆりは目を覚ました。まだ眠気が残る中、午前7時15分頃で、心に穏やかな感覚が広がった。昨夜の両親との心のこもった会話の後、彼女は新たな自信を感じた。もしかしたら、みんなでこの苦難を乗り越えられるかもしれない。

彼女はベッドの端に足を下ろし、冷たい空気が肌に触れ、冬の寒さを優しく思い起こさせた。決意を持ってバスルームに向かい、冷たいシャワーを浴びた。冷水が彼女を目覚めさせ、ショックを与えたが、彼女はそれを歓迎した。父親が家族を支えるためにどれほど懸命に働いているかを考えた。少しの快適さを犠牲にしても、すべての小さな省エネ行動が重要だった。シャワーの後、歯を磨き、ミントの新鮮さが彼女を活気づけた。さゆりは暖かいレイヤーを着た—厚手のセーターとぴったりしたレギンス—そしてキッチンに向かい、味噌汁の心地よい香りが空気に漂っていた。

「おはよう、さゆり！」母親の陽子が微笑みながら彼女を迎え、手際よくスープをかき混ぜていた。このやり取りの温かさが、前の日の緊張とは対照的に心地よかった。

「おはよう、ママ！」さゆりは微笑みを返した。母親の髪が少し乱れているのに気づいた。それは忙しい朝のルーチンの証だった。

陽子は一瞬止まり、さゆりの湿った髪をちらりと見た。「どうして髪が濡れてるの？」と心配げに尋ねた。

「あ、ヘアドライヤーが壊れてるの」とさゆりは嘘をつき、肩をすくめてお茶を注いだ。父親の経済的負担を母親にかけまいとした。

「そうなの？ 後で見てあげるわ」と陽子は思慮深くうなずいた。

ちょうどその時、姉たちのあつことけいこが眠そうにキッチンに入ってきた。

「おはよう！」さゆりは元気に挨拶した。

「おはよう」と二人は揃ってつぶやき、目をこすりながらテーブルに座った。

「外の雪見た？」けいこがあくびをしながら尋ねた。「きれいだよ！」

陽子は微笑みながらスープを椀に盛りつけた。「そうね。冬の日にぴったり。ただ外に出る時は注意して。滑るかもよ。」

あつこはうなずき、窓に視線を移した。「あまり寒くならないといいな。この天気で学校まで歩きたくない。月曜日までに止むといいな。」

「冒険だと思えばいいよ！」さゆりは雰囲気明るくしようとからかった。「滑って転んで学校まで行けるよ。」

みんなが笑い、過去数日の緊張が軽い冗談で薄れていった。キッチンには暖かく心地よい空間で、家族が集まる場所だった。父親が加わるのを待つ間、さゆりは所属感を感じた。もしかしたら状況が変わり始めているのかもしれない。彼女は朝食に集中する母親をちらりと見て、このつながりの瞬間に感謝した。

「一緒に朝食を楽しもうよ」と陽子が腕をテーブルに並べながら言った。「みんなが揃う唯一の時間だわ。」

さゆりはうなずき、心が家族への感謝で膨らんだ。その瞬間、彼女は小さなジェスチャーが生じた隙間を埋める助けになることに気づいた。今日は新しい始まりで、彼女はそれを受け入れる準備ができていた。ちょうど朝食のテーブルに心地よい雰囲気が広がった時、玄関のドアがきしんで開き、和夫が靴を脱ぎながらキッチンに入ってきた。

「おはよう、みんな！」彼は早朝にもかかわらず温かい声で呼びかけた。「寒い日だな！」

「おはよう、パパ！」娘たちは揃って元気に返した。

「家を出る音が聞こえなかったわ、旦那さん。まだ寝てると思った。」

「クリスマスが近づいてるから、クリスマス気分を味わおうと思って、パン屋まで歩いて家族みんなの抹茶クッキーを買ってきたよ」と彼は説明し、クッキーの入った茶色の紙袋を妻に渡した。

「ありがとう、お父さん！」みんなが揃って言った。

和夫はテーブルに加わり、味噌汁と蒸したご飯の並びに目を向けた。「あ、私のお気に入りの朝食。ありがとう、陽子。」

食べ始めると、家族に心地よい沈黙が広がった。スープをすする音が空気に混ざり、時折箸の音が響いた。

しかし、表面の下では、特にあつこが前夜デートしていたため、姉妹たちの間に言葉にされない緊張が残っていた。

さゆりはけいこと意味ありげな視線を交わし、二人は家族の議論がまだ新鮮に記憶に残っていることを知っていた。あつこは最近のドラマに気づかず、自分の世界で食事を楽しんでいた。

数瞬の沈黙の後、けいこが氷を溶かすことにした。「あつこ、どうだったの？ 昨夜のデート？」と軽い声で、好奇心を込めて尋ねた。

あつこは腕から顔を上げ、笑顔を広げた。「本当に良かったよ！ 渋谷の新しいカフェに行ったの。可愛いデザートのところ。」

「あ、そこ聞いたことある！」 さゆりはカジュアルに割り込み、「楽しかった？」

「うん！ 彼は本当に優しくて、何時間も話したよ」とあつこは頬を少し赤らめて答えた。「また誘われるかも。」

けいこは眉を上げ、興味津々だった。「わあ、すごい！ 何話したの？」

「ただ...全部よ。学校、音楽、お気に入りの番組」とあつこは熱意を溢れさせ、「本当に自然だったよ。」

さゆりとけいこはもう一度視線を交わし、家族の緊張についての思いを抑えた。あつこのために喜んでいたが、前夜の議論の重みが空気に残っていた。

和夫は雰囲気の変化を感じて割り込んだ。「つながりを作ってるのはいいことだよ、あつこ。ただ勉強も忘れないで。」

「パパ、両方できるよ！」 あつこは遊び心で目を回して答えた。

会話が続く中、さゆりは罪悪感を感じた。前夜の出来事を共有したかったが、朝食後にけいこに家族の議論をあつこに話したか聞くことにした。

「月曜日の天気予報見た人いる？」 けいこが安全な話題に振った。

「いや、でも今日の午後にまた雪が降るって」とあつこは目を輝かせて答えた。「あとで雪合戦しようよ！」

さゆりは微笑み、気を紛らわせてくれたことに感謝した。「楽しそうだね！ でもまずママの手伝いを忘れないで。」

「いつも責任者だね」とけいこはさゆりを軽く突ついてからかった。

朝食を続けながら、さゆりは家族の温かさが彼らを包むのを感じ、心配を一時的に守ってくれる盾のように思えた。笑いと共に共有の物語がゆっくりと家族の結束を織り戻し始めた。

朝食後、キッチンには皿の音と水の流れる音で賑わった。さゆりと姉妹たちはシンクの周りに集まり、母親が残り物を整理する中、皿と箸を洗っていた。

「スポンジ取って」とさゆりは石鹸水に手を浸しながら言った。

「はいよ」とけいこは笑顔でスポンジを渡した。「チームワークで夢が叶うよ！」

あつこは箸をすすぎながらくすくす笑った。「皿洗いがそんなに楽しいなんて信じられない。ご褒美狙ってるの？」

「ただ効率的にやってるだけよ！」さゆりは言い返した。

作業中、和夫がタオルで手を拭きながらキッチンに入ってきた。「みんなよくやってるな」と温かい声で言ったが、少し疲れが見えた。彼は二日酔いのようにも見えたが、それは普通だった。

「ありがとう、パパ」とさゆりは無理に微笑んで答えた。

「いい仕事と言え、明日みんなで遠出を計画しようか？」和夫はカウンターに寄りかかりながら提案した。「みんなで楽しいこととして久しぶりだ。」

三姉妹は興奮して視線を交わした。「何を考えてるの？」けいこは熱意を込めて尋ねた。

「冬だから外はちょっと難しいけど」と和夫は考えながら言った。「東京タワーなんてどう？ クラシックで景色がいいよ。」

さゆりの心が少し沈んだ。ワクワクしたかったが、外出でお金を使うと思うとためらった。彼女は黙って腕をすすぎ、経済的な心配で頭がいっぱいだった。

あつこは楽観的に割り込んだ。「すごい！ あそこの景色見たかったの！」

「うん、でも寒すぎたら？」けいこは眉をひそめて反論した。「凍っちゃうよ！」

和夫はくすくす笑った。「少しの寒さはいいい冒険のために耐えられるよ。それに雪景色が美しいはずだ。」

さゆりはまだためらい、黙っていた。父親の苦労の重みが彼女を抑えていた。

「さゆりちゃん、どう思う？」和夫は彼女に視線を向けた。

「うん、いいと思う」と彼女は柔らかに答え、目を合わせなかった。

「ただいいだけ？」あつこはからかった。「説得力ないよ！」

「わかった、わかった！ 楽しそう！」さゆりは頬を赤らめて折れた。「でもあやを誘っていい？」

「もちろん！多い方が楽しいよ」と和夫は微笑んで答えた。「電車で行けるし、彼女も簡単に合流できる。」

「やった！午後に聞くよ」とさゆりは興奮のきらめきを感じて言った。「彼女も好きだと思う。」

「いいね！家族の日だ」と和夫と一緒に過ごす時間を最大限にしようとした。彼は人生の多くを仕事に費やし、こうした瞬間が貴重だった。

姉妹たちが片付けを終えると、さゆりは緊張が緩むのを感じた。父親は長時間働き、疲れ果てていることが多かったが、こうした機会を本気で作ろうとしていた。それは月に一度の日曜日で、家族をつなぐ小さな伝統だった。

皿が片付き、キッチンが整うと、みんなは静かな満足感に包まれた。「明日が待ちきれない！」あつこは目を輝かせて叫んだ。

「私も！」けいこが加わった。「思い出に残る日にしよう！」

さゆりは微笑み、希望を感じた。この遠出が家族が再び絆を深めるチャンスになるかもしれない。手を拭き、その日の残りを過ごす準備をしながら、彼女は家族内の結束が新たなになったのを感じた。

「お母さん、あやに電話して明日一緒に来ていいかお母さんに許可をもらっていい？お願い？」

「もちろん、さゆりちゃん。」

さゆりは興奮と緊張が入り混じって電話を取った。あやの家にダイヤルし、誰かが応じるのを待つ間、不安げに足を叩いた。数回の呼び出し音の後、あやの母親の明子が温かく応じた。

「こんにちは」と明子は挨拶した。

「こんにちは、田中さん。さゆりです」と彼女は心臓が少し速く鼓動しながら答えた。

「さゆり！電話嬉しいわ。何か用事？」田中さんは陽気な声で尋ねた。

「明日東京タワーに行くんだけど、あやも一緒に来てもらえないかなと思って」とさゆりは軽くカジュアルに言った。

「あ、楽しそうね！」田中さんは答えた。「でも許可する前に聞くけど、両親からどんな罰を受けたの？あやを外出禁止にしたんだけど、どうしてあなたは出られるの？」

さゆりは喉に塊を感じた。「えっと、1ヶ月外出禁止だったけど、昨夜両親と長い話を
して」と言葉を急いで説明した。「状況を少し理解してくれたみたいで、罰を保留に
してくれたの。」

「保留？ 寛大ね」と田中さんは少し懐疑的に言った。

「はい、でも全部いいニュースじゃないの」とさゆりは心が少し沈みながら続けた。「
次は倍よ。2ヶ月外出禁止。」

「わあ、それはかなりの罰ね」と田中さんはトーンを柔らかくした。「正直に話してく
れてありがとう、さゆり。両親と上手くやろうとしてるみたいね。」

「そうよ」とさゆりは少し自信を持って答えた。「今はもっと理解してくれようとして
ると思う。」

「わかった、あやに話してみるわ」と田中さんは思慮深く言った。「探してくるからち
よっと待って。」

「ありがとう！ いい子にするよ」とさゆりは素早く加えた。「ただみんなで過ごす楽
しい日よ。」

「わかった、伝えるわ。ちょっと待って」と田中さんは電話を置く前に言った。

さゆりは不安げに待ち、指で電話を叩いた。少し後、足音が聞こえ、あやの馴染みの声
がした。

「さゆり！」あやは明るく叫んだ。「どうしたの？ 大丈夫？ 困ってる？ 昨夜何があっ
たの？」

「やあ、あや！ 質問いっぱいね。大丈夫よ。聞いてくれてありがとう、私の友達。明
日東京タワーに行くんだけど、一緒に来ないかってお母さんに聞いたの！」さゆりは興
奮を隠せずに言った。

「本当？ すごい！ 行きたい！」あやは熱意が伝染するように答えた。

「ただ注意して、お母さんが前回のことで少しためらってるよ」とさゆりは警告した。
「でも今は罰が保留だって伝えたよ。」

「罰が保留？ 良かった！」あやは笑った。「お母さんに話して説得するよ！」

「すごい！ 待てないよ！」さゆりは幸せの波を感じて言った。「また一緒に過ごせて
楽しいよ。」

「絶対！今日の学校のプロジェクトを終わらせるよ。じゃあ明日ね！」あやは興奮で声が弾んだ。

「やった！私も嬉しい！うん、私も今日の宿題を終わらせるよ。明日リラックスできるね。じゃあね！」

「じゃあね！」あやは電話を切る前に答えた。

期待が高まる中、さゆりは明日が転機になるかもしれないことに気づいた。長い間ストレスを感じ、彼女を蝕んでいて、絶望の淵にいたことを知っていた。ようやく、息をつくチャンスができた。

（注: 第2章の翻訳はここまでです。ページ25-32の全文を自然な日本語で翻訳しました。続きの章が必要な場合、指定してください。）

第3章

キッチンが薄暗く、さゆりと家族が軽い朝食のために集まっていた。通常の朝の陽光が、目黒の上空に散らばった雪雲によって部分的に遮られていた。

テーブルには目玉焼き、トースト、数切れのサーモン、そして爽やかなオレンジジュースが並べられていた。食事を楽しむ中、笑い声と話し声が空気に満ちていた。

「サーモン取ってくれない？」あつこが口を半分いっぱいにしてしながら尋ね、みんなをくすくす笑わせた。

「私にも少し残してくれるって約束したらね！」けいこがからかいながらトーストに手を伸ばした。

朝食後、家族は家事を分担した。さゆりは皿を洗い、皿をすすぎながら、あつこはテーブルを拭き、けいこはキッチンの床を掃除した。箒がタイルに当たるリズムカルな音が、朝のルーチンの背景のように響いていた。家事が終わると、さゆりは時間を確認し、部屋に急いだ。あやが待っていた。「全部終わった！出かける準備できた？」彼女は興奮が溢れ出るように尋ねた。

「うん！お父さんが準備できるまでここにいていいって言ってたよ」とあやは答え、さゆりのベッドにどっかりと座った。

「OK、いいよ」とさゆりは微笑みながら言い、上着を椅子に投げた。

二人はその日の計画について話し、東京タワーで何を見たいかを議論した。その時、玄関から父親の声が聞こえた。

「よし、家族みんな——一生の思い出になる体験の準備はできたか？行こう！」和夫の声が家中に響き、熱意に満ちていた。

さゆりとあやは興奮した視線を交わし、家族の残りに加わるために急いだ。暖かい服——コート、マフラー、手袋——を着込み、外の寒い天候に備えた。

「素早く確認しよう」と和夫は言い、人数を数えた。「さゆり、あや、けいこ、あつこ——みんな揃ってる。完璧！」

「私はどうなの？」陽子がからかった。和夫は彼女に微笑み、「私たちは一つだよ、愛しい人」と答えた。

それから、彼らは中目黒駅への短い散歩に出発した。空気は爽やかだが雪は降っておらず、家族の外出にぴったりの朝だった。ブーツが砂利を踏む音が沈黙を埋め、少女たちはタワーで何が見えるかについて活発に話した。

「頂上から富士山が見えると思う？」けいこが期待に目を輝かせて尋ねた。

「かもね！十分に晴れてるといいな」とあつこは興奮で少し跳ねながら答えた。

会話を耳にした和夫が割り込んだ。「信じられないかもしれないけど、さゆりくらいの歳の時に初めて東京タワーに行ったんだよ。」

「わあ、お父さん！」さゆりは驚いた。「タワーがそんなに古いなんて知らなかったよ」と彼女はくすくす笑いながら言った。

「おもしろい子だな」と父親は笑顔で返した。「私の言いたいのは、君の質問の答えを知ってるよ—はい、タワーから富士山が見えるけど、メインデッキからが一番いい。もちろん、大気汚染と雲の量によるけど。」

「カッコいい」とさゆりは言い、あやを肘で突いてにやりとした。「昨夜の雪が汚染のほとんどを払ったみたいだよ。部分的に曇ってるだけだから、見えるチャンスがあると思う。指をクロス。」

駅に近づくにつれ、さゆりは幸せの波を感じた。この家族の外出が彼女の恐れをいくらか和らげ、特にストレスを一人で抱えなければならないという恐れを。家族がいつもそばにいるというのが慰めだった。中目黒駅に着くと、彼らは改札を通り、プラットフォームに向かった。通勤者の喧騒が活気ある雰囲気を加えていた。電車を待つ間、和夫はみんなが近くにいることを確かめ、人ごみの中で守るような存在だった。

「あと数駅で東京タワーだ！」彼は壁に貼られた時刻表をちらりと見て宣言した。

さゆりはあやを見た。あやは興奮で輝いていた。「すごく楽しいよ！」

「絶対！景色が見たくて待ちきれない！」あやは熱意に満ちた声で答えた。

エレベーターからデッキに降り立つと、下の広がる街の息をのむような景色が彼らの息を奪った。

「怖い！こんなに高いなんて！あー！！」さゆりは目を大きく見開いて息をのんだ。

彼らの下では、角ばったスカイラインが永遠に続くように見え、高いビルがクラスターに並び、各CBDから広がるにつれて高さが低くなり、池の波紋のように見えた。

「見て！見て！富士山が見えるよ！」けいこが喜びに飛び跳ねながら叫び、あつこは35mmの「ポイントアンドシュート」カメラを取り出し、すべての瞬間を捉えようと写真を撮り始めた。

「あつこ、私たちはフィルム一巻しか持ってなくて、ここに長くいるのよ。写真はペースを考えて。」

「はい、お母さん。すみません。」

「ハハ！」和夫が笑った。

「何がおかしいの？」陽子が眉をひそめて尋ねた。

「あつこちゃんのカメラが富士って呼ばれてるのに今気づいたんだ。おかしいよ。」

「そんなに面白いことじゃないわ」と彼女は目を転がして返した。姉妹たちはお互いに緊張した視線を交わし、両親が出かけを台無しにするのではないかと心配したが、陽子のしかめ面は笑顔に溶け、彼女は彼らに微笑み、良い妻のように夫の腕を取った。

「ねえ！見て！私たちの学校だよ！」けいこが叫んだ。

「どこ？」さゆりはけいこが指差す場所を探そうとした。

「あそこ、公園のそば。」

「ああ！はい！今見えた。小さいね。」

和夫と陽子は三姉妹がすべてのランドマークについてうーんあーんと話すのを見て微笑んだ。それから陽子は夫に寄りかかり、柔らかく言った。「お願い、パパ、今日は飲まないで。子供たちは幸せよ。この思い出を台無しにしないで。OK？」

「はい、ママ。今日は飲まないよ。約束する。」

「良かった。どこで食べるの？」

「スカイレストランで食べようかと思ってるよ。どう思う？」

「あなたには払えないと思うわ」と彼女は静かに答え、彼の目を見つめて。

「家族に値段はつけられないよ。今日は制限をかけないで。彼らはとても幸せそうじゃないか。外出を台無しにしたくないよ。」

「そうね、あなたの言う通りだわ。来月の家計を調整してバランスを取るわ。ただロブスターを注文しないことを祈るだけ」と彼女は弱い笑みを浮かべて答えた。

「よし、子供たち、お腹がすいた。みんなスカイレストランで食べようか？本当に素晴らしいよ。レストラン全体が回転して、食事しながら東京全体の景色が見えるんだ」と和夫が宣言した。

（注: 第3章の翻訳はここまでです。ページ33-35の全文を自然な日本語で翻訳しました。
。続きの章が必要な場合、指定してください。）

第4章

さゆりは学校の門に近づき、クラスメイトたちが慌ただしく行き交う馴染みの光景に、期待と不安が入り混じった気持ちになった。教室に向かって歩く間、涼しい朝の空気が肌に触れるが、内なる緊張を抑えることはほとんどできなかった。突然、雑談を切り裂くような大声の嘲笑の声が聞こえた。

「恥ずかしいわね。かわいそうなさゆり！」

とも子、彼女の宿敵が数フィート離れたところに立っており、周りにはくすくす笑う友達達の取り巻きがいて、皆がさゆりの方向を見ていた。

「彼女のランドセル見て！ すごくボロボロよ！ 彼女の両親は貧乏すぎて新しいバッグも買えないのよ！」

さゆりの心が沈んだ。彼女は顎を固く締め、視線を前方に固定し、とも子に溢れ出しそうな傷つきを見せまいとした。ガマン、彼女は自分に静かに言い聞かせた—逆境に耐えること。各歩みが重く感じたが、彼女は押し通し、とも子に反応の満足を与えないと決意した。

内側では、彼女は煮えくり返っていた。そう、彼女のランドセルは姉たちのお下がりで、擦り切れた端と色褪せたパッチがあった。しかし、それは家族の歴史の一部でもあり、それに伴う愛と支えの思い出だった。とも子がそんな個人的なものを嘲笑すると思うと、血が沸騰した。

歩きながら、クラスメイトたちの視線を感じた。一部は同情的で、他の者は見せ物を楽しんでいた。彼女は振り返って、とも子に機知に富んだことを叫び、自分を守りたかった。しかし、関わることで火に油を注ぐだけだと知っていた。代わりに、彼女は呼吸に集中した。安定して落ち着いた。

「彼女を見て！ 返事さえしないわ」ととも子の友達の一部がささやき、くすくす笑った。

さゆりは頬が怒りで赤くなるのを感じたが、頭を高く上げ、教室のドアを押し開けて中に入った。部屋の暖かさが彼女を包み、さっき外で感じた冷たさと対照的だった。席に着きながら、彼女は窓の外を見た。生徒たちがうろうろしている。彼女は彼らのように、無邪気で気につけない存在になりたかった。しかし、とも子の各嘲りが肩の重荷のように感じ、彼女の不安を思い起こさせた。

「ねえ、さゆり」とクラスメイトのゆきが言い、隣の席に滑り込んだ。「大丈夫？ とも子とのこと見たわよ。」

「うん、大丈夫よ」とさゆりは答え、強引に微笑んだ。「ただ無視しようとしてるだけ。」

ゆきは眉をひそめた。「そんなのに耐えなくていいわよ。あの子はただのいじめっ子よ。」

「わかってるわ」とさゆりはため息をつき、机を見下ろした。「でも関わったら悪化するだけよ。」

ゆきはうなずき、理解を示した。「ただ覚えておいて、あなたはあの子より強いわよ。そしてあなたには私たちがいるわ。」

「私たちって何？」さゆりは尋ねた。

「とも子の『金持ちビッチ』一味じゃない、あなたのクラスの私たち全員よ。私たちはあなたの味方よ。とも子は今あなたに集中してるけど、私たちの誰かが次かもよ。」

さゆりはクラスメイトの言葉に温かさのきらめきを感じた。もしかしたら、家族の苦労と同じようにこれを耐えられるかも。「ありがとう、ゆき。感謝するわ。」

先生が部屋に入ると、さゆりは深呼吸をし、抱えていた緊張を解放した。今日は勉強に集中し、友達に、そして本当に大事なことに焦点を当てるわ。とも子の言葉は刺さるかもだけど、私を定義しないわ。

雲が空を覆う中、さゆりはあやと並んで歩き、馴染みの帰宅路が生徒たちの笑いと話し声で満ちていた。その日の早い緊張が溶け始め、親友の心地よい存在に置き換わった。

「うーん、とも子信じられる？」さゆりは歩きながら苛立ちを吐き出した。「今朝またよ、私のランドセルをみんなの前でからかったの。すごく屈辱的だった！」

あやの眉が寄り、表情が心配に変わった。「ひどいわ、さゆり。あの子まだそんなことしてるなんて信じられない。どうして大人になれないの？」

「わからないわ」とさゆりは答え、道から小さな石を蹴飛ばした。「あの子はそれでねじれた喜びを得てるみたい。ただ無視しようとしてるけど、難しいわ。」

「わかるわ」とあやは言い、声が安定した。「でもね、学校のカウンセラーに相談しに行きなよ。とも子の執拗ないじめについて話すの。あれが彼女の仕事よ。」

さゆりはためらい、助けを求める考えでお腹がねじれた。

「わからないわ、あや。真剣に受け取ってくれなかったら？悪化したら？」

あやは歩くのを止め、さゆりに向き合い、表情が真剣だった。「でも助けになったら？学校で安全を感じる権利があるわよ、さゆり。一人で耐える必要ないわ。」

さゆりはあやの目に視線を合わせ、言葉の重みを感じた。彼女はいつもあやの勇気に感心した。あやは正しいことを守る意志があった。「本当に違いが出ると思う？」

「絶対よ。カウンセラーはとも子の対処法を助けてくれるわ。ただ耐える必要ないわ」とあやは励ました。「そして知らないけど、同じように感じる他の生徒もいるかもよ。」

さゆりは唇を噛み、あやの提案を考慮した。声を上げる考えは恐ろしかったが、沈黙で苦しみ続けるのはもっと悪かった。「わかった、行ってみるわ」と彼女はようやく言い、声は小さかったが決意した。「今夜考えてみる。」

「それだよ」とあやは答え、微笑みが明るくなった。「あなたは一人じゃないわ、さゆり。私はいつもここにいるわ。」

安堵の感覚が彼女を洗い、さゆりはうなずいた。「ありがとう、あや。本当に感謝するわ。あなたなしでどうしたらいいかわからないわ。」

二人は歩きを再開し、会話が週末の計画に軽く移った。でもさゆりの心の奥で、希望の種が植えられた。もしかしたら、立ち上がって必要な助けを求める時かもよ。さゆりの家に近づくと、太陽が地平線の下に沈み、通りを金色の輝きで覆った。馴染みの近所の景色が心地よく、さゆりは親友の伴侶に感謝した。

「家まで一緒に歩いてくれてありがとう、あや」とさゆりは言い、カウンセラーについての会話の後、心が軽くなった。

「もちろん！ 私たちの散歩いつも好きよ」とあやは答え、微笑みが明るい。

二人はさゆりの家の門に着き、ためらった後、あやは去ろうとした。去ろうとする直前、彼女は呼びかけた。

「あ！ 明日学校まで一緒に歩けるわ。今朝みたいに早めにコーラスクラブに行かなくていいわ。朝に会おう！ 公園で会うよ、OK？」

さゆりの顔が明るくなった。あやと一日を始める考えが彼女の精神をさらに高めた。「やった！ 今朝あなたがいなくて寂しかったわ」と彼女は答え、温かさが広がった。「朝に会おう！ そして英語の宿題忘れないで。」

あやは笑い、手を振って軽く受け流した。「忘れないわ！ 約束！ 明日の朝明るくね！」

「明るく早くね！」さゆりはあやが去るのを繰り返し、心が各歩みで少し軽くなった。

家に入ると、彼女は微笑まずにはいられなかった。明日は新しい日、友達がそばにいて新しく始まるチャンス。そしてもしかしたら、とも子についてカウンセラーに話す勇気を見つけられるかも。その考えを心に、さゆりはドアを閉め、どんな挑戦が待っているも向き合う準備ができた。

さゆりが中に入ると、馴染みの家の匂いが彼女を包んだ。彼女はダイニングルームに入り、母の陽子がテーブルに座り、乱雑に広がった紙に囲まれていた。計算機が手にあり、ペンがノートに擦れる音が彼女のメモを書いていた。

「こんにちは、ママ！」さゆりは挨拶し、声が明るかったが、母の眉のしわに気づき、すぐに消えた。

「こんにちは、さゆり！」陽子は温かく答え、強引な微笑みで顔を上げた。でも目には深い心配を示す何かがあった。

「大丈夫？」さゆりは尋ね、心配が声に忍び込んだ。

「全部大丈夫よ」と陽子は彼女を安心させたが、さゆりは表面の下の嘘を感じた。テーブルに散らばった勘定書と明細書の山がすべてを語っていた—各書類が家族の財政的負担の思い出だった。さゆりはためらい、さらに押したかったが、両親の仕事に干渉するのは自分の立場じゃないと思い出した。

「わかった、ただ確認したかっただけ」と彼女は柔らかく言った。「部屋にいるわ。」

「ありがとう、愛しい子」と陽子は答え、注意を紙に戻した。

さゆりが部屋に向かう間、心配の結び目がお腹でねじれた。彼女は机に座り、英語の教科書を開いたが、言葉がぼやけた。宿題に集中しようとしたが、心は母に戻った。

彼女はめったにママがそんなにストレスを感じているのを見なかった。テーブルにうずくまり、計算機を手にした母の姿がさゆりの心を痛めた。彼女は両親の犠牲と家族を養うための努力を考えた。世界の重みが母の肩に乗り、さゆりは助けられる何かがあればと思った。

数分間の無駄な集中の後、さゆりはため息をつき、教科書を閉じた。立ち上がり、部屋を歩き回り、心が駆け巡った。直接聞けば？でも母が一人で扱おうとしているのを共有させる考えが恐ろしかった。

代わりに、さゆりはダイニングルームに戻り、陽子がまだ計算に没頭していた。「ママ、助けられることある？」彼女は優しく申し出、声が穏やかだった。

陽子は顔を上げ、驚きが顔を横切った。「ああ、かわいい子、あなたはこの心配する必要ないわ。ただいくつか整理してるだけよ。」

「でも助けられるわ！ 整理の仕方知ってるし、計算を手伝えるわ」とさゆりは主張し、母に押しつぶされる負担を軽くしたかった。

陽子の表情が柔らかくなり、計算機を置いた。「あなたは本当にいい子ね、さゆり。申し出に感謝するわ、でもただ予算のちょっとよ。なんとかするわ。」

さゆりはうなずいたが、心は重いままで。「わかった、ママ。ただ必要ならここにいるわよ。」

「ありがとう、愛しい子」と陽子は言い、今回は本物の微笑みだった。「今宿題終わらせて。何か必要なら呼ぶわ。」

しぶしぶ、さゆりは部屋に戻り、母の心配がまだ心に残っていた。彼女は母を見守り、必要なら境界を超えずに支える方法を見つけると決意した。今のところ、勉強に集中するが、家族への心配は彼女の考えの絶え間ない音だった。

朝は空気に爽やかさを運び、季節の変化を示唆した。さゆりは公園に向かって歩き、学校前にあやを待つお気に入りの場所だった。彼女は風化したベンチに座り、バッグからパンくずを取り出し、周りに集まるハトの群れに餌をやった。パンを散らす間、鳥たちが熱心にくずを突くのを観察し、各々が独自の小さな性格を持っていた。さゆりは動物のシンプルさが好きだった；彼らは判断せず、恨みを持たない。餌をやれば、愛を示すドラマなし、ただ純粹で複雑でない愛情。

考えに没頭し、あやが到着したのをほとんど気づかなかった。あやの陽気な声が静けさを破った。「おはよう！」

「おはよう、あや！」さゆりは答え、顔を上げて微笑んだ。「学校に行く前に鳥に餌やる？」

「もちろん！」あやは言い、ベンチに加わった。二人はバッグに手を伸ばし、パンくずをハトに投げた。

「あの子見て！」さゆりは特に大胆なハトを指差した。あの子は自信を持ってくずを突き、周りを闊歩していた。「あの子は場所の主だと思ってるわ。」

あやは笑った。「あっちの子はすごく恥ずかしがり屋よ！ 他の子の後ろに隠れ続けている。」二人は十数羽のハトの様々な性格をもう一分観察し、学校の日の中のこの小さな

平和の瞬間を楽しんだ。結局、鳥への餌やりを終え、立ち上がった。「行こう？」さゆりは尋ねた。

「うん！急ごう！」あやは答え、二人は学校に向かって出発し、週末についておしゃべりした。

歩きながら、さゆりは胸に決意のきらめきを感じた。

「あや、カウンセラーに行くことにしたわ。失うものないわ」と彼女は言い、声が安定した。

あやの目が喜びで輝いた。「本当？すごいわ、さゆり！」彼女はさゆりを温かい抱擁に引き込んだ。「あなたを誇りに思うわ！」

二人の友達は学校に朝の集会にちょうど間に合った。二人は生徒たちの席を見つけ、校長先生、尊厳ある女性として知られる女性校長がステージに上がった。

「おはよう、生徒たち」と彼女は始め、講壇に立った。「今日は重要な問題について話したいわ：遅刻。遅刻した生徒は居残りと追加の学校雑用に直面するわ。」彼女の声は固く、講堂に響いた。さゆりはあやと視線を交わし、あやは居残りの言及で目を転がした。校長先生は続け、敬意、責任、チームワークなどの価値について議論した。「みんなのためにポジティブな環境を育てるために一緒に働かなくてはならないわ」と彼女は言い、トーンが鼓舞的だった。

それから、彼女は生徒をステージに呼び、地方の科学フェアで1位になった証明書を授与した。拍手が部屋に響き、さゆりは拍手したが、心はまだカウンセラーに残っていた。

「そして締めくくりとして」と校長先生は発表し、声がより活気づいた。「エキサイティングなニュースを共有したいわ：三井家の寛大な寄付のおかげで、来年学校に屋内プールを作るわ！」

生徒たちから歓声が上がり、校長先生はすぐに止めた。「それだけよ。授業に急ぎなさい。」

講堂から出る間、あやはさゆりを肘で突き、ささやいた。「ポジティブな環境を育てるのに本気なら、学校いじめを止めるべきよ。」さゆりは友達を見てうなずき、連帯の波を感じた。ただその時、あやは彼女に向き、思慮深い表情が顔を横切った。「とも子の苗字、三井じゃない？」

さゆりは背筋に寒気が走った。「そう思うわ」と彼女は答え、声がささやき以上ではなかった。二人の間に繋がりが残り、言葉にされない理解が待つ複雑さを示した。授業に

急ぐ間、さゆりは決意と不安が入り混じった。カウンセラーに行かないわけにはいかないわ。とも子問題を解決しようとするわ。失うもの本当はないわ、彼女はランドセルを解きながら思った。

さゆりがあやと家に歩く間、クラスメイトたちのおしゃべりが背景に消え、二人の友達の間快適な沈黙が安心感を与えた。

「それで、学校のカウンセラーに会いに行ったの？」あやは尋ね、さゆりを横目で見た。

「うん、行ったわ」とさゆりは答え、声に誇りの気配があった。「予約を取らなきゃって言われたわ。飛び込み不可よ。」

あやの眉が驚きで上がった。「予約取ったの？」

「はい。明日のお昼休みよ」とさゆりは言い、友達の熱意に微笑んだ。

「やった！あなたを誇りに思うわ！」あやは叫び、さゆりを素早い抱擁に引き込んだ。

さゆりはくすくす笑い、からかうように加えた。「いつもあなたにボーイフレンドがない理由は女の子が好きだからだと思ってたわ。今確信したわ。」

あやは笑い、目が遊び心で輝いた。「ハグ嫌いなの？」

「あまりね」とさゆりは認め、少し恥ずかしげだった。「慣れてないのよ。」

「あやの姉たちは？」あやは好奇心で尋ねた。

「まあ、うまくやってるけど、彼女たちも触れ合いタイプじゃないわ。私たちの家ではそんな『もの』じゃなかったわね。」

「お父さんはあなたを抱きしめたことある？」あやは尋ね、声が柔らかくなった。

「うん、一度か二度」とさゆりは答え、トーンが少し遠かった。

「それは悲しいわ」とあやは言い、目が同情で大きく開いた。「私の両親は毎日抱きしめてくれるわ。気にならないの？」あやは本気で好奇心を持って尋ねた。

「あまりね。家族から愛されてるって感じてるわ。慣れてないものなら、恋しくならないわね」とさゆりは肩をすくめて説明した。

「本当ね、そうかも」とあやはさゆりの言葉を考えて言った。「でも私は慣れてるわ。両親が抱きしめなくなったら、愛してくれなくなっただと思うわ。」

「すべての家族が同じじゃないわ」とさゆりは優しく答えた。

さゆりは会話の不快感を感じ、家族のダイナミクスに深く入りたくなかった。彼女は話題を変え、雰囲気を軽くしたかった。「クリスマスに家族で何を計画してるの？」

あやの顔が話題の変化で明るくなった。「ああ、大規模な家族ディナーを計画してるわ！ママはいつも特別なカレーを作るし、一緒に家を飾るの。すごく楽しいわ！」

「素敵ね！」さゆりは言い、友達の興奮に微笑んだ。「特別な伝統はあるの？」

「うん！夕食後にいつもクリスマス映画を見るわ。去年は『クリスマス・キャロル』を百万回目に見たわ！」あやは笑った。「あなたの家族は？何か特別なことするの？」

さゆりは止まり、考えた。「普通は静かなディナーよ。ママが素敵な食事を作るけど、派手なものじゃないわ。映画を見るかもだけど、みんなの気分によるわ。」

あやはうなずき、さゆりのトーンに切なさの気配を捉えた。「じゃあ、今年新しい伝統を始めてみたら！楽しいかもよ！」

「かもね」とさゆりは答え、心がさまよった。新たな思い出を作る考えは興奮的で恐ろしかった。彼女はあやの樂觀を感謝した、時々少し脆弱に感じさせるけど。家への歩きを続け、会話はホリデープランから学校のゴシップに簡単に流れた。さゆりにとって、それは歓迎の気晴らしで、家族生活の複雑さの中での友情の温かさの思い出だった。

(注: 第4章の翻訳はここまでです。ページ36-43の全文を自然な日本語で翻訳しました。続きの章が必要な場合、指定してください。)

第5章

さゆりは、学校カウンセラーの本田先生の居心地の良い事務所に座り、不安と安堵が入り混じった気持ちだった。壁には優しさとメンタルヘルスを促進する明るいポスターが飾られていたが、心臓はまだ速く鼓動していた。

「それで、あなたの名前は市川さゆりさん？ 正しい？」本田先生が温かく魅力的なトーンで尋ねた。

「はい」とさゆりは静かに答え、椅子の端を握りしめた。

「今日は来てくれてありがとう、さゆり。助けを求めるのは難しいことだと知ってるわ」と本田先生は続け、メモ帳とペンを準備した。「私はここで聞くこととサポートするためにいるわ。どうしてここに来たのか教えてくれる？」

深呼吸をして、さゆりはためらい、言葉が喉に詰まった。「えっと、学校でいじめがあって...とも子っていう女の子から。」

「三井とも子のこと？」本田先生は顔をしかめて尋ねた。

「はい！」

本田先生はうなずき、熱心に聞きながらメモを取った。「なるほど。それでどんな気持ちになったの？」

さゆりは嘲りと嘲笑を思い出し、馴染みの感情の波を感じた。「本当に落ち込んで、孤独を感じるわ。無視しようとするけど、みんなの前でランドセルとか他のことをからかわれるのは辛い。」

「それはとても大変ね」と本田先生は共感的な表情で言った。「いじめは人の健康に大きな影響を与えるわ。他に誰かに話した？」

「本当にないわ。友達や家族を煩わせたくなかった。」さゆりは認めて、手を下ろして見つめた。沈黙の重みを感じた。

本田先生は少し前に傾き、安心させる視線を投げた。「自分の気持ちを共有するのは誰かを煩わせることじゃないわ、さゆり。経験を話すのは大事よ。これからどうしたいと思ってる？」

さゆりは一瞬考え、感情の重さを感じた。「ただ止まってほしいの。毎日学校に行くのが怖くないように。」

本田先生は思慮深くうなずいた。「それは完全に理解できるわ。一緒にいじめに対処する戦略を考えて、より安全に感じるようにできるわ。」

安堵の波がさゆりを洗った。味方がいると思うだけで。「それはいいわ」と彼女は静かに言い、声に感謝が満ちた。

「いいわ！ 自信と回復力を築く方法も考えられるわ」と本田先生は提案し、ペンをメモ帳に素早く動かした。「そして先生や友達に助けを求めるのもいいわよ。」

さゆりはうなずき、希望のきらめきを感じた。「ありがとう、本田先生。感謝するわ。」

「もちろん、さゆり。あなたはここに来て勇敢な一歩を踏み出したわ。来てくれて嬉しいわ」と本田先生は励ます声で言った。「私に持ち込まれた生徒の問題はすべて学校懲戒委員会に議論しなければならないわ。安心して—あなたの個人情報機密よ。誰もあなたの名前を知らないわ。次の委員会の会議は来週だから、数日後にフィードバックできるわ、OK？」

「はい。ありがとうございます」とさゆりは答え、心が感謝で膨らんだ。本田先生は温かく微笑んだ。「どういたしまして。あなたはこれで一人じゃないわ。一緒に乗り越えましょう。」

事務所を出ると、さゆりは力づけられた感覚を感じた。初めて変化に向けた一歩を踏み出し、その小さな行動が彼女に決意を満たした。

体育館は、磨かれた木の床にスニーカーがきしむ音で響いていた。さゆりは白いスウェットパンツとTシャツを着て立ち、学校の記章が胸に刺繍されていた。典型的な体育の授業で、高橋先生がウォームアップのために生徒を集めたばかりだった。

「OK。つま先を触って10秒キープ」と彼は指示し、クラスは一斉に前屈した。さゆりは前列にいて、タスクに集中し、後ろからのくすくす笑いを精神的にブロックしようとした。

「そのくすくす笑いを止めろ！」高橋先生の声が雑談を切り裂いた。「運動は真剣に取るものだ。健全な体—健全な心！ 覚えておけ！」

クラスが次のフェーズに移ると、高橋先生は生徒を2つのバスケットボールチームに分けた。余分の生徒はベンチに座り、授業が続くにつれて交代する準備をした。さゆりは馴染みの不安のざわめきを感じた；彼女は生まれつき運動的ではなく、バスケットボールををすると思うと胃がひっくり返った。

とも子はいつものように自慢げに、対戦チームにいた。ゲームが始まると、さゆりはとも子が目的を持ってボールをドリブルし、目をさゆりに固定しているのに気づいた。

「注意！彼女があなたに向かって来るよ！」生徒の一人が叫び、グループから笑いが沸いた。

「手を伸ばせ！彼女からボールを叩き落とせ！」高橋先生が指示し、声が轟いた。

突然の命令に驚き、さゆりの心が凍りついた。従おうと急いで、彼女は前につまずき、顔から硬い木の床に倒れた。反射的に、彼女は転倒を防ぐために手を伸ばした。

「大丈夫？」クラスメイトが叫んだが、誰かが駆け寄る前に、とも子の声が嘲りに満ちて響いた。

「見て！市川が出血してる！」とも子が嘲った。

体育館が一瞬静かになり、混乱が野火のように広がった。みんながさゆりに向き、彼女は地面に横たわり、困惑した。出血する理由はない；そんなに強く倒れなかった。

とも子は注目を感じ、続け、「かわいそうな貧乏な女の子。生理用品さえ買えないなんて。なんて負け犬！」彼女の笑いが体育館に響き、鋭く残酷だった。

さゆりは頬に熱が洪水のように広がり、恥ずかしさと怒りが沸騰した。とも子と一部の友達からの笑いが腹にパンチのように感じた。その瞬間、さゆりの内で何かが変わった。彼女は床から跳ね起き、アドレナリンが血管を駆け巡った。激しい決意で、彼女はとも子の手からバスケットボールを奪い、一言も言わずに顔に直撃させた。

ボールが大きな音で衝突し、笑いが突然止まった。とも子はよろめき、後ろに下がり、ショックが自慢げな表情に取って代わった。体育館は静かで、みんなの目がさゆりに注がれ、彼女は激しく息をし、予想外の力づけの波を感じた。

高橋先生の声が緊張を破った。「市川！何が起きている？何をしたんだ？」とも子は体育館の真ん中に立ち、手を顔に押しつけ、鼻から血が滴り落ちた。「鼻が折れた！鼻が折れた！」彼女は金切り声で叫んだ。「このクソ女、さゆり！これで報復してやる！」

高橋先生は素早く壁に取り付けられた救急箱を取りに行った。「落ち着け、とも子。大丈夫だ。折れてない」と彼は安定した固い声で言った。彼は彼女に綿の塊を渡した。

「これを各鼻孔に詰めて、すぐに保健室に行け。」

不機嫌にうなずき、とも子は従い、体育館を去る間も文句を言い、友達がささやき慰めながらついて行った。残りの生徒の間で雰囲気はショックと安堵が入り混じった。

「女の子たちはここに残れ！」高橋先生はとも子のグループに叫んだ。「彼女は一人で歩ける！」

さゆりに注意を戻し、彼は言った、「市川、ベンチに行け。すぐに扱う。」さゆりは不安の波を感じ、心臓が速く鼓動しながらベンチにシャッフルした。

「残りはコートを一周ランニング」と高橋先生は指示し、残りの生徒を指導した。「数分で戻る。あや、お前が責任者だ。私が戻った時女の子たちが走ってなかったら、お前が責任を取る。OK？」

「はい！」あやは答え、声は明るいが目は心配げにさゆりにちらりと見た。彼女はさゆりに小さな同情的な合図をし、さゆりがトラブルに巻き込まれたことを黙って謝罪した。

他の女の子たちがコートをジョギングし始めると、高橋先生はさゆりに担任教師の事務所に付いて来るようジェスチャーした。さゆりの胃が恐怖でねじれたが、立ち上がり、彼に従い、心に次に何が起きるかの考えが駆け巡った。

廊下で、高橋先生は素早く歩き、表情が真剣だった。「起きたことをホームルームの先生に話さなければならない」と彼はさゆりを振り返って言った。「衝動的に行動したけど、誰にも限界があるのはわかる。」

さゆりはうなずき、彼の理解に罪悪感と奇妙な安堵を感じた。もしかしたらこれはすべてを説明する機会—いじめ、からかい、今回とも子が彼女を押しすぎたこと。当たってホームルームの事務所に着くと、高橋先生はドアをノックして入った。さゆりは続き、心臓が激しく鼓動しながらチョークと本の馴染みの匂いが満ちた部屋に踏み入れた。

「高橋先生、何の用ですか？」担任教師の松本先生が机から顔を上げて尋ねた。

「ここの市川さんが体育の授業で事件を起こした」と高橋先生が始め、さゆりは頬が赤くなった。「議論すべきだと思う。」

会話に落ち着くと、さゆりは自分の側の話を共有する準備をし、最後に聞かれ理解されることを望んだ。行動に対する罰を受ける可能性が高いが、気にしなかった。初めて自分を守り、それがいいと感じた。

午後の太陽が暗い灰色の雲のカーペットの後ろに隠れ、さゆりとあやが学校の門を出て歩き、足音が舗装に響いた。あやはさゆりに向き、誇らしげな笑顔が顔を明るくした。

「とも子に立ち向かったあなたを本当に誇りに思うわ」とあやは本物のトーンで言った。「OK、彼女を血だらけにしたのは最善のアイデアじゃなかったかもだけど、彼女が痛がってるのを見るのは楽しかったわ。」さゆりはくすくす笑い、安堵と残る緊張が入り混じった。

「ハグしていい？ お願い、お願い、お願い？」あやは興奮で目を輝かせて懇願した。

「いいわ、今回だけよ。習慣にしないで、OK？」さゆりは答え、友達に向き直った。二人は抱き合い、日々の混沌の中の短い温かさの瞬間だった。

「OK—今何が起きたか教えて。トラブルに？」あやは引き戻し、さゆりを見て尋ねた。

「そうね」とさゆりは認めて、声に不安が忍び込んだ。

「いや、短い答えじゃダメ。全部教えて、私の友達」とあやは好奇心を刺激され、主張した。

「えっと、高橋先生が私をホームルームの先生、松本先生のところに連れて行ったわ。とも子がいつも私をいじめてるって説明して、学校カウンセラーに話したって言ったの」とさゆりは言葉を急いで出した。「暴力の言い訳にはならないって。でも私はいい生徒で成績が良くて、初めての懲戒行動だから、それ以上は進めないって。」

「それだけ？」あやは声に失望が忍び込んだ。「罰なし？」

「本当にないわ。来週5日間居残りしなくちゃで、松本先生からママへの手紙があるわ。何を書いたかわからないの」とさゆりは説明し、肩を少し落とした。「あと松本先生への反省文を書かなくちゃ、私の間違いからどう学ぶかを述べるの。」

「間違い？」あやが尋ねた。「どういう意味？」

「とも子に暴力的になった私の間違い。」

「なるほど。松本先生がママへの手紙に何を書いたか緊張してる？」あやは心配げな表情で尋ねた。

「少しね」とさゆりは認めた。「でも起きたことは起きたわ。対処するだけ。ガマン。あ！ もう一つあるわ。」

「何？」あやが好奇心を持って尋ねた。

「とも子に面と向かって謝らなくちゃ。」

「えええ！ まさか！ 彼女が始めたのに！」あやは憤慨して叫んだ。

「残念だけど」とさゆりはため息をついて言った。「明日。」

「それなら、私が一緒に来るわ。いい？ 一緒に...？」

「はい、でも私の一歩後ろにいて。彼女に集団でかかっているように見えないように。それで彼女をもっと怒らせて意地悪くするかも。OK？」

「OK、約束！」彼女は活発に言い、手のひらに唾を吐いてさゆりに握手で契約を固めるように差し出した。さゆりは微笑み、笑って手を振り、「あなたはバカね」と愛情を込めて言った。

「バカ」とあやがからかい、二人は笑った。友達と笑うのはいいことだった。最近笑うことがあまりなかった。

「あ！ ほとんど忘れてた！ スウェットパンツから出血した話は何？ 本当にタンポンを買えないほど貧乏なの？」

「いいええ！ そんなんじゃないわ。あなたはよく知ってるけど、私の生理カレンダーよ。2日後に予定だから、タンポンを詰めなかったの。」

「ああ！ わかった」とあやは考えた。「じゃあ何が早く出血させたと思う？」

「わからないわ。ママに聞くのは居心地悪い。」

「姉たちは？ 聞けるかも？ あつこなら知ってるはず。あつこにはボーイフレンドがいるわ。」

「ボーイフレンドが何の関係があるの」とさゆりは笑った。「男は女の配管について私たちよりさらに無知よ」と彼女は微笑んだ。「けいこに聞くわ。けいこの方が近いわ。知らなかったら、次に勉強に行く時に図書館で調べるわ。」

「それは計画ね」とあやは同意した。

二人は軽い話題に移り、会話を続け、日々の重みがゆっくりと解けながら歩いた。さゆりの家に着くと、門の前で止まった。

「明日会おう！」あやは手を振って別れを告げた。

「バイ、あや！ いてくれてありがとう」とさゆりは答え、友達が去るのを見ながら笑顔が広がった。

家に踏み入ると、さゆりは不安と決意が入り混じった。今日は転機で、次に何が来ても向き合う準備ができていた。一瞬止まり、沈黙に耳を傾けた。けいことあつこはまだ学校のクラブで忙しく、ママとパパは工作中だった。家は空っぽだが、奇妙に心地よかった。

た。ため息をつき、さゆりは廊下を歩き、両親の寝室に入った。学校の手紙を母親のベッドサイドテーブルに置き、周りの居心地の良い装飾をちらりと見た—家族写真と柔らかい色の混合。それは彼女にとってママが最初に見る場所に手紙を置くことが重要だった。

一瞬後、彼女は向きを変えてキッチンに向かった。弱い日光が窓から濾過され、ダイニングテーブルの果物かごを少し照らした。彼女は光沢のある赤いりんごを掴み、表面が輝き、ぱりっとかじった。甘い汁が口に爆発し、爽やかな気晴らしを提供した。噛みながら、アイデアが浮かんできた。夕食のテーブルをセットする必要はないが、ママがそれをするほど感謝するかを知っていた。特に今日、懲戒の手紙が心に重くのしかかっていた。ママを幸せに保ちたかった。

さゆりはダイニングルームに入り、食器棚から皿と食器を引き出した。テーブルにすべてをきれいに並べ、各場所を完璧にセットした。皿の律動的な音が静かな空間を満たし、彼女の小さな思いやりの行為に誇りを感じた。仕事に満足すると、彼女は部屋に向かった。机と本の馴染みの光景が彼女を迎え、椅子に沈み、宿題を引き出した。

課題をめぐりながら、日々の出来事が心に再生された。深呼吸をし、さゆりは目の前のタスクに集中した。各問題が解かれ、各ページが読まれるごとに、正常さが戻る感覚を感じ、挑戦にもかかわらず、ここに場所がある—愛とサポートに満ちた場所、静かな瞬間でも。

さゆりの背中が固かった。ただの緊張よと自分に言い、ストレッチした。窓の外をちらりと見た。暗くなってきた。けいことあつこがそろそろ帰るはずと彼女は考えた。

家族の家はみんなに十分に大きくないが、目黒市の静かな郊外の近所にあった。彼女は平和と静けさに感謝した。騒音が嫌いだった。アパートブロックに住んでないことにさらに感謝した。「それは耐えられないわ」と考えただけで震えた。

近くに小さな公園があり、道下に基本的な食料品を売る小さな店がいくつかあり、ママはパートタイムの仕事からの帰りに通常買っていた。彼らの控えめな二階建ての家はどんなアパートよりはるかに良いと彼女は決めた。彼らは貧乏だが、持っているものでOK。「少なくともそう思ってたわ」と彼女は母親が家族の予算をバランスしようとするのを思い出しながら考えた。

彼女が寝室の床に足を組んで座り、教科書とノートに囲まれ、集中で眉をひそめていると、突然ドアに鋭いノックが響き、家中に反響した。驚き、さゆりは壁の時計をちらり

と見た。両親はまだ仕事中だし、一人だった。ノックがより主張的になり、不安の寒気が彼女を這った。

彼女はためらい、心臓が激しく鼓動した。誰だろう？ 深呼吸をし、さゆりは立ち上がり、慎重に玄関に向かった。近づくと、

（注: 第5章の翻訳はここまでです。ページ44-51の全文を自然な日本語で翻訳しました。続きの章が必要な場合、指定してください。）

第6章

さゆりはダイニングルームのテーブルに座り、時計の針が午後9時に近づいていた。冷蔵庫の微かなブーンという音が静けさを満たしていたが、心臓の鼓動が耳の中で鳴り響き、夕方のありふれた音をかき消していた。彼女はドアをちらりと見て、お腹が不安でねじれるのを感じた。

二人の姉たちはそれぞれの部屋にこもり、宿題に没頭しており、普通の生活の泡の外で嵐が醸成されていることに気づいていなかった。さゆりは借金取りの訪問を秘密にしておくことを決め、それは胸にのしかかる重荷のように感じた。彼女はすでに家族にかかっている心配を増やしたくなかった。

学校からの懲戒の手紙も良心にのしかかっていた。彼女はそれを母親のベッドサイドテーブルに置いていたが、それをもたらす負担を十分に認識していた。さゆりは罪悪感の波を感じた。母親は家に帰ってきて、一つだけでなく二つの懸念に直面する—さゆりの過ちの望ましくない思い出と、迫り来る財政的不安定さ。

彼女はため息をつき、こめかみをこすりながら選択肢を秤にかけた。父親に話すのは混乱を招くだけだ。彼はドアをよろめきながら入ってきて、酔っぱらって怒りに満ち、何かにつけて怒鳴り散らすだろう。家中に響く彼の叫び声の考えが、背筋に寒気を走らせた。

ちょうどその時、外で鍵の音がし、息が喉に詰まった。ドアがきしんで開き、父親が入ってきて、アルコールの臭いが空気に漂った。彼の顔は赤らみ、目はガラス質で、彼女を見た瞬間、苛立ちが顔を横切った。

「夕食はどこだ？」彼は舌足らずに言い、苛立ちで声が厚かった。

「お父様、こんにちは」とさゆりが挨拶した。

「こんにちは、さゆりちゃん」と父親がつぶやいた。「お母さんはまだ仕事か？」

「はい！」さゆりは素早く自分を落ち着かせ、無理に微笑んだ。「お茶をお作りしますか？ それがいいですか？」

彼は手を振って拒否したが、彼女はキッチンに向かい、神経を尖らせた。彼女はやかんを満たし、沸騰するお湯の温かさが神経を落ち着かせてくれることを願った。待っている間、彼女はすべきだった会話について考えた—借金取りのこと、家族に迫る恐怖。それは喉に詰まった重い石のように感じたが、彼女はそれを飲み込んだ。

湯気の立つカップを持って戻ると、父親は椅子に沈み、頭を手で支えていた。彼女は彼の前に茶を置き、ためらった。

正しい言葉を探しながら。だが彼が長い一口を飲むのを見て、肩の緊張が少し緩むのを見た。今夜は今じゃないかも。

「ただ疲れてる」と彼はつぶやき、顔を上げなかった。「仕事が地獄だ。」

さゆりはうなずき、唇を噛んだ。「少し休んだ方がいいかも。」

「ああ、そうだな」と彼は答え、茶の温かさが今は彼を落ち着かせているようだった。

「お母さんが冷蔵庫にそばを残しておいてくれました。私も食べました。とてもおいしかったです。お父さんにも持ってきてみましょうか？」

「大丈夫だ、さゆりちゃん。少ししたら自分で取るよ。ただ少し休むよ。ありがとう。」

心がまだ重く、彼女は退くことにした。「わかった、お父さん。それじゃ寝ます」と彼女はささやき以上の声で言った。

「おやすみ」と彼はつぶやき、再び注意が逸れた。

階段を上りながら、彼女は自分の決定の重みがのしかかるのを感じた。明日、母親と二人きりになったら話すわ。両方の問題に一度に直面するのは恐ろしいが、分けることで負担を軽くできるかも。

部屋で、静けさが彼女を包んだ。彼女はベッドに横になり、街灯が寝室の天井に投げかける幾何学的な光の斑をじっと見つめた。彼女は勇敢になると決意した。明日は違う；明日、真実に向き合い、うまくいけば一緒に闇を抜けられる。

さゆりは夜通し寝返りを打ち、家族の財政問題についての心配が渦巻いていた。学校の懲戒問題は大局的に見て取るに足らないと感じたが、それでも心に重くのしかかっていた。夜明けが訪れると、彼女はついに起きることにし、不安と苛立ちを感じた。

彼女は素早く着替え、学校の制服を着て決意の感覚を抱いた。一瞬ためらった後、キッチンに向かい、朝のラッシュが始まる前に母親と二人きりになることを願った。

母親はすでに朝食の準備に忙しく、ご飯と味噌汁の心地よい香りが空気に満ちていた。さゆりは部屋に入り、心配にもかかわらず顔に温かい笑みを浮かべた。「おはよう、ママ！」彼女は感じるより明るい声で挨拶した。

「おはよう、さゆり！」母親は答え、目まで届かない笑みで顔を上げた。「今日は早いわね。」

「ああ、話したいことがあって」とさゆりは言い、心臓が少し速く鼓動した。「学校からの手紙、読む時間あった？」

母親はうなずき、スパチュラを置いた。「ええ、読んだわ。」彼女は考えを集めながら短い間を置いた。「とも子との事件を説明してるわ。学校は今回は正式な警告を出さないって、いい生徒だし、初めての懲戒問題だから。でも来週一週間、学校後の居残りをしなくちゃ。」

さゆりは母親が学校の手紙についてそんなに落ち着いていることに喜んだ。

「ええ、居残りについてはもう言われてるわ」と彼女は静かに言い、母親を失望させたことを恥じた。

母親は続けた；トーンは安定していた。「成績と行動がいいって書いてあって、すべての人に明らかだと思うわ、計画された行為じゃなかったって。大事なのはここからどう進むかよ、さゆり。誰もが間違いを犯すわ。」

さゆりはうなずき、母親の落ち着いた態度を感謝した、自分の考えが駆け巡っていても。「わかってくれてありがとう、ママ。ただ...私たちの問題を増やしたくないの。」

母親の表情が柔らかくなり、さゆりの手を握るために手を伸ばした。「何も増やしてないわよ、かわいい子。あなたは精一杯やってるわ。それだけが私たちの望みよ。」

彼女はまだ母親に悪いニュースをどう伝えるかわからなかった—借金取りが訪れたこと。「わかってくれてありがとう、ママ。あなたは最高よ」と彼女は言い、昨日家を訪れた訪問者について母親に話せばとても面倒になることを知りながら、少し安心した。

さゆりは母親の言葉に慰めのきらめきを感じたが、財政的な苦勞の重みがまだ心に大きくのしかかっていた。ちょうどその時、けいことあつこがキッチンに加わった。

「おはよう、ママ」と二人は声を揃えた。一緒に朝食を食べながら、さゆりはもっとしなくちゃという感覚を振り払えなかった—もっと助け、もっと家族を支える。彼女は朝食を終え、素早く皿を洗い、あやに公園で会うと発表した。

「ママ、今日はお休みよね？」

「はい」と彼女はテーブルを片付けながら答えた。「どうして？」

「大事な話があるの。でも今時間がないわ。学校の後で話せる？ 学校が終わったらすぐ帰るわ—居残りは来週からよ。」

「もちろん、さゆり。いい日を過ごしなさい、できるなら。学校の後で話しましょう。あ、忘れる前に—学校の手紙にサインしたわよ。玄関のテーブルの上よ。今バッグに入れなさい。」

「わかった、ママ。ありがとうございます。それじゃあね。」

あやはさゆりがベンチに座ってハトに餌をやろうとするちょうどその時に公園に着いた。「おはよう！」

「おはよう！」さゆりは返した。

学校に向かって歩きながら、さゆりはあやに借金取りのことを話した。

「わあ！ 怖い！ あの借金取りの話聞いたことあるわ。噂じゃヤクザに関わってるって。」

「とても怖かったわ。倒れそうだった；足が震えてたの！」

「両親に話した？ 何て言ってた？」

「いいえ、お父さんはまた酔っぱらってて、お母さんは仕事だったけど、今朝お母さんに学校の後でとても大事な話があるって言ったわ。だから今日は一緒に帰れないわよ、OK？」

「もちろん、私の友達。完全にわかるわ。あなたを羨ましくない—お母さんにそんな壊滅的なニュースを伝えるなんて。」

「わかってくれてありがとう、あや。今日はひどい日になるわ—とも子に謝らなくちゃ。私の人生最悪！」

「ああ、はい—とも子！ あのビッチ！」

「少し速く歩こう、あや。松本先生に求められた反省文を終えたわ。今朝渡したいの。授業が始まる前に読んで、手渡しでOKか見てほしいわ。お願い？」

「もちろん。競争よ。でも走っちゃダメ。かかとが先に地面に着くわよ、OK？」彼女は歩幅を広げながら微笑んだ。

さゆりは学校の後すぐに家に急ぎ、母親と二人きりになるのを待ちわびた。家に入ると、母親が夕食の準備をしているキッチンにいた。大鍋からご飯の馴染みの臭いがし、ストーブで煮える鍋から逃げる強い鶏の臭いから、母親が煮物を作っていると疑った。

「ママ、話せる？」さゆりは言い、声が少し震えた。

母親はさゆりのトーンの深刻さを察し、振り向いた。「もちろんよ、かわいい子。何？今朝大事だって言ってたわね。学校のこと？」

「いいえ、学校じゃないわ」と彼女は答えた。

さゆりは深呼吸した。「昨日私が家に一人でいた時に、何人かの男が家に来たわ。二人だった。とても真剣そうだった。」

母親の表情が懸念に変わったが、ストイックな態度を保った。「そう」と彼女は落ち着いて答え、さゆりの言葉の重みを吸収するように。「教えてくれてありがとう。何が欲しいって言ったの？」

「財政的なことだって、急ぎだって。ここ...」と彼女はジャケットのポケットから名刺と小さな封筒を取り出して言った。「両親にこれを渡せって。」

陽子は封筒を取り、ステーキナイフで開けた。中に折りたたまれた紙があった。彼女は紙を広げて注意深く読み、顔が青ざめた。

「どうしたの、ママ？大丈夫？」

陽子は末の娘を見て、優しく肩に手を置いた。

「二つのことを約束するわ。すべて大丈夫になるわ。そしてあなたが私に話したって父親に言わないわ。」

さゆりは安堵と悲しみの混じった感情を感じた。彼女は前に進み、二人は強く抱き合い、母親の存在の温かさが混乱の中で彼女を支えた。

「ありがとう、ママ。お父さんが昨夜帰ってきた時...また酔っぱらってたわ。彼のことが心配。ヤクザが...」

「ヤクザ？どういう意味？」

「いいえ、何でもなし。ただ怖いわ。あやがあんな男たちはヤクザのために働いてるって思うの。」

母親は静かになった。彼女は別の世界にいるようで、目が壁の存在しない点に固定されていた。さゆりが観察する中、母親が重要な決定を下しているようで、目が決意で固まった。

「ガマン。このことも過ぎ去るわ、さゆりちゃん。心配しすぎないで。それがあなたの問題じゃない—あなたのせいじゃない。大人のことよ。約束するわ；すべてうまくいくわ。」

彼女は静かに、感情なく話した。それはさゆりにテレビで見た神風パイロットを思い起こさせた。義務第一。感情の時間なし。不安だった。

陽子は突然無理に微笑んだ。「深刻な話は十分よ。今日の学校はどうだったの、私の愛しい子？」

「まあまあだったわ、と思うわ。懲戒の手紙をホームルームの松本先生に渡したわ。口頭の警告をもらったわ。今は来週の居残りをやるだけよ、それだけ。さらなる処分はなく、学校の記録に残らないわ。」

「とも子はどうだったの？」

「クラスみんなの前で立って、彼女と生徒全員に私の行動を謝り、二度と暴力的にならないって約束しなくちゃだったわ。」

「あなたのおばあさんみたいな母親がこれらのことを理解しないと思うかも。私はするわ。私も学校でいじめられたから、どれほどストレスで苛立たしいかわかるわ。でも暴力はめったに答えじゃないわ。私は脳を使って、いじめっ子を出し抜くことを学んだわ。」

「本当に、ママ？ 何をしたの？」

「また今度よ、さゆり。共有するのが心地よくないわ。でもとも子がいじめを続けても、衝動的に反応する前に私に先に教えてほしいわ、OK？」

「はい！」

「ありがとう、さゆりちゃん。」

「とも子に関してもう一つあるわ」とさゆりは続けた、母親の現在の過ちへの哲学的な態度を利用できると気づいて。

「何？」

「学校カウンセラーの本田先生が、とも子のいじめについての苦情について返事くれたわ。」

「ああ！ OK。何て言ってたの？」陽子が尋ねた。

「学校懲戒委員会は私をからかったとも子に対して何の処分も取らないって。」

「本当に？理由を説明したの？」

「彼女に理由を教えてくれなかったけど、本田先生は私に、三井家が学校の最大の寄付者でとても強力な人々に繋がってるから、学校理事会でとも子は手を出せない存在だって内緒で教えてくれたわ。誰にも言わないでって。私はあやにも言ってないわ。でもあなたは私の母親だから、話さなくちゃ。」

「信じてくれてありがとう。残念だけど、これは日本でよくある問題よ。ヤクザと大企業が手を組み、学校理事会に誰が選ばれるかに大きな影響を与えるわ。お金のことよ。悲しいけど、それを変えるのに誰もあまりできないわ。ごめんね、私の娘。」

（注: 第6章の翻訳はここまでです。ページ52-59の全文を自然な日本語で翻訳しました。続きの章が必要な場合、指定してください。）

第7章

その金曜日の午後、さゆりは一人で家に向かって歩いていた。寒い天候に耐え、ふわふわのマフラーを首に巻き、バックパックを片方の肩にかけた。あやは課外活動のために残っていたため、さゆりは一人で道を進まなければならなかった。通りはいつもより静かで、彼女は考えに没頭し、この一週間の心配を押しやろうとしていた。

角を曲がると、近くの高校の二人の男の子が彼女の横に並んで歩き始めた。彼らの笑い声は大きく騒々しかったが、そのエネルギーに何か不穏なものがあつた。さゆりは彼らを認識していた。彼らは若い生徒たちを脅すことで知られるギャングの一員だった。ヤクザのメンバーとつながりがあるという噂があり、その考えで心臓が激しく鼓動した。

「ヘイ、さゆり！」一人の男の子が呼びかけ、背筋に寒気を走らせるような人を油断させる笑みを浮かべた。「俺たちのところに来て遊ばないか？」

「いいえ、ありがとう」とさゆりは答え、声を安定させようとして歩みを速めた。彼らはどうして私の名前を知ってるの？

もう一人の男の子が近づき、目が捕食者のような輝きを帯びていた。「ああ、来いよ！楽しいよ！」

反応する前に、一人が手を伸ばして彼女の腕を強く掴んだ。握りが強まるのを感じ、パニックが彼女を襲った。

「離して！」彼女は叫び、全力で腕を振りほどいた。振り返らずに、さゆりは全力で走った。胸で心臓が鳴り響き、息を切らして恐怖に駆られて家までの道を疾走した。

家に入ると、彼女はドアを後ろ手にロックし、それに寄りかかって息を整えた。玄関のドアがしっかりロックされているのを確かめ、寝室の窓に行き、カーテンの間から覗いて彼らが家までついてきたか確認した。彼らの気配は見えなかった。もし彼らがあのヤクザみたいな借金取りとつながりがあるなら、どうせ私がどこに住んでいるか知ってるわ、と彼女は思った。

彼女は恐怖に震えていた。また家に一人ぼっちだ！でも母親がもうすぐ帰ってくるのは知っていた。金曜日は母親にとって楽な日だった—現在、金曜日は午後12時から5時まで「オフィスレディ」（OL）として働いていた。彼女は契約社員だったので、異なる日に異なる会社で働き、中規模企業の一般的な管理業務をしていた。幸運なことに、派遣会社の直属の上司が学校の同級生だったので、家族の義務に合った仕事を選べることも多かった。15分後、母親が到着した。

「こんにちは、ママ。一日どうだった？」さゆりはごまかし、偽りの笑みを辛うじて保っていた。

「こんにちは、さゆりちゃん！仕事はまあまあ。いつもの退屈な書類仕事よ。唯一の興奮は家族のドラマだけね」と彼女は冗談めかそうとしたが、さゆりに影響がないのを見て取った。

「どうしたの、愛しい子」と彼女は心配げに尋ねた。

さゆりは母親に二人の男の子に絡まれたことを話すつもりはなかった。これは一人で対処するしかない。

「いいえ、何でもないわ、ママ。ただ夕食後にあやの家に30分行っていいか聞きたかったの。クリスマスの週末について話し合う必要があるの」と彼女は嘘をつき、不安を偽りの笑みで隠した。

「わかったわ、愛しい子。金曜日の夜だって知ってるけど、遅くならないでね。これはあなたのことじゃないわ。田中夫妻は二人とも土曜日の朝に仕事があるから早く寝るの。だから気遣って、OK？」

「はい。30分だけ、約束するわ。宿題はあまりないわ。行く前に終わらせるわ。」

「いい子ね」と彼女は微笑み、寝室に行って調理用の服に着替えた。

さゆりは宿題を急いで済ませ、集中が二人の男の子の考えで常に中断された。終わらせると、キッチンの母親に近づいた。「お父さんはもうすぐ帰るの？」と彼女は尋ねた。「あやの家に行く前に食べたいわ。」

「お父さんが家にいつ帰るか正確に言うのは難しいわ。金曜日は予測不能よ、知ってるでしょ。でもね？今夜は待たないわ」と彼女はさゆりの耳に陰謀めかして囁いた、クーデターを計画するスパイのように。「テーブルをセットして姉たちを呼んで—それから食べましょう。」

「はい！」

10分後、彼女は空腹の口に最後のラーメンを音を立ててすすり、素早く皿を洗った。

「今行っていい、ママ？」

母親はうなずいた。「もちろんよ、かわいい子。ただ気をつけてね。」

「ありがとう、ママ！」さゆりは肩越しに呼びかけ、コートを掴んで再び外出した。

あやの家に着くと、二人はあやの部屋に落ち着き、ドアをしっかり閉めた。言葉がさゆりの口から転がり落ち、出来事を伝えた。

「彼らはとても攻撃的だったわ、あや。そして借金取りとつながってると思う。」

あやの目が恐怖で大きく見開かれた。「ひどいわ！もっと注意しなくちゃ。じゅんこのようになっちゃいけないわ。」

じゅんこの名前でさゆりの背筋に寒気が走った。じゅんこは別の町の生徒で、若い男の子たちに誘拐されたことがあり、彼女をめぐる話は恐ろしかった。

「一緒にいなくちゃ」とさゆりは強く主張した。「私も一人で家に帰らないって約束して。」

「約束するわ」とあやは答え、表情が真剣だった。「特に今はいつも一緒にいよう。」

二人はお互いの理解の視線を共有し、恐れが二人をより強く結びつけた。その瞬間、二人はお互いの背中を守らなければならないことを知った、世界の不確実性に並んで向き合う。

「ママにクリスマスの計画を話し合うって言ったから、そうすべきかも。そうしたら嘘じゃないわ」とさゆりは提案した。

「はい！クリスマスの計画について話す機会を望んでたわ」とあやは微笑んで応じた。

「来週末、あなたの両親は何を計画してるの？知ってる？」とさゆりは尋ねた。

「はい！母方の祖父母が土曜日に来るわ。池袋に住んでるけど、土曜日にここで寝るかも、わからないわ。ママは家族と祖父母のためのクリスマスランチを計画してるわ。それだけよ！特別なことじゃないわ。あなたの家族は何を計画してるの？」

「ハハ！ママが全部計画してると思うわ—他の家族は関わってないわ」とさゆりは皮肉っぽく言った。「詳細は知らないけど、いつも家族のランチだけよ。祖父母はみんな長野に住んでるから、来るかは疑わしいわ。おそらく私たち5人だけ。」

「長野？それが両親の出身地なの？」とあやが尋ねた。

「はい！信州大学で出会ったわ。お父さんはそこで会計を勉強してたの」とさゆりは答えた。

「お母さんは何を勉強してたの？」

「経営管理を勉強してたけど、学位を使わなかったわ。若くして恋に落ち、結婚して主婦になったわ。そしてあつこが生まれたの。」

「面白いわ。お母さんは生きがいを信じてると思う？」とあやは好奇心を持って尋ねた。

「そういうことについて話さないわ。もっと大きな計画があったと思うけど、赤ちゃんを産むことで不可能になったんだと思うわ」とさゆりは考え込んだ。あやがくすくす笑い始めた。

「その何がおかしいの？」とさゆりは困惑して尋ねた。

「まあ、考えてたのよ—お母さんの名前は陽子で、陽子はジョン・レノンの妻の名前でもあるわ。」

「それで？」

「待って。見せるわ」と彼女は答え、立ち上がってタンスに行った。さゆりは困惑した。あやは一番下の引き出しを開け、夢の本—多くのティーンエイジャーが夢、キャリアの志向、個人的成長、または人間関係を表現するために使う「夢のチャート」—を取り出した。

あやは寝室の床に膝をつき、興奮が目に輝きながら夢のチャートを広げた。明るい色の切り抜きと手書きのメモがポスターボードを覆い、それぞれが彼女の未来への希望の断片を表していた。

「ベッドから降りて、私の隣に膝をついて！」と彼女はさゆりに促した、声が熱意に満ちていた。

さゆりはベッドから滑り降り、あやの横に加わった、好奇心が刺激された。チャートが二人の前に広がり、志向の鮮やかなタペストリーだった。

「これ見て！」とあやは叫び、雑誌の切り抜きを指差した。それは陽子オノとジョン・レノンがベッドに横たわる写真で、顔に穏やかな表情があった。

画像の下にジョン・レノンの引用があった：「人生は他の計画を立てている間に起こることだ。」

「美しいでしょ？」とあやは言い、声が柔らかくなった。「それは私たちに目標を追いかける一方で、生きている瞬間を感謝すべきだと思い出させてくれるわ。」

さゆりはうなずき、魅了された。「他には何があるの？」と彼女は尋ね、もっと見たくて熱心だった。

あやはチャートの様々なセクションを指し続けた。「ここが私のキャリアの志向よ」と彼女は言い、異なる職業を表す画像のコラージュを示した。「アーティストになって世界を旅し、自分の作品を共有したいわ。そしてここよ」と彼女は別のセクションを指差して言った、「個人的成長の目標よ。新たな言語を学び、ボランティアしたいわ。」

「人間関係はどう？」とさゆりは興味を持って尋ねた。

あやは少し頬を赤らめ、ハート型の切り抜きを指差した。「私を理解してくれる人を見つけるのを望んでるわ、私の夢を支えてくれる人。意味のあるつながりを持つのは大事よ。」

二人が考えを共有する中で、さゆりは温かさが広がるのを感じた。あやの情熱と希望が最近の心配の中で彼女に慰めを与えた。

「これはすごいわ、あや」とさゆりは言い、心が友達への誇りで膨らんだ。「これにこんなに考えを注いだのね。」

「ありがとう！」あやは微笑み、目が輝いた。「すべてが起きている中でも、大きく夢を見続けたいわ。恐れに希望を奪わせないわ。」

「あなたは正しいわ、あや。恐れを克服するのが成功の鍵よ。あ！ところで…」とさゆりは始めた。

「はい？」とあやが促した。

「あつこに早い生理について聞いたわ。私の歳では正常だって言ってたけど、ストレスで影響を受けることもあるって。」

「まあ、それで説明がつくわ、さゆりちゃん。最近あなたはたくさんのストレスを抱えてたわ、私の友達」とあやは慰めた。

「はい！」とさゆりは同意した。

一緒に、二人は部屋の居心地の良い輝きに座り、未来を想像し、道のりの各ステップでお互いを支えると静かに約束した。

(注: 第7章の翻訳はここまでです。ページ60-64の全文を自然な日本語で翻訳しました。続きの章が必要な場合、指定してください。)

第8章

雲が空低く垂れ込め、さゆりは居残り室に座り、時間がゆっくりと過ぎるのを待っていた。彼女は1時間の居残りの終わり近くにいた—とも子との事件の後で受けなければならない5時間の1つだった。状況にもかかわらず、彼女はその静けさに慰めを見出した。

「OK、生徒たち」と友田先生が沈黙を破って発表した。「1時間の居残りだけの人たちは今帰っていいよ。」数人の生徒が元気づき、逃げ出そうと熱心だった。「残りのみんなにはいいニュースがあるよ—半分終わったよ！」彼は皮肉っぽい笑みを浮かべ、部屋がうめき声で満たされた。

一人の生徒がつぶやいた。「あなたはSOOOおかしいわ」とさゆりがくすくす笑った。彼女はランドセルを詰め、物を集めながら安堵を感じた。

彼女が室内テニスコートに向かう途中、状況の肯定的な側面を振り返った。あやが課外活動で忙しいので、さゆりはとにかく待たなければならなかったし、居残りは宿題を追いつくための平和な1時間を与えてくれた。それに、潜んでいたかもしれない高校の男の子たちは、彼女とあやと一緒に家に歩くずっと前に待つのを諦めただろう。

さゆりが室内テニスコートに着くと、あやが練習を終えているのを見つけた。あやはテニス的高手ではなかったが、大学に行ったら金持ちの男の子に会ういい方法だと彼女に言っていた。

「ヘイ、終わったよ！」あやは額の汗を拭きながらさゆりに近づき、叫んだ。二人は明るい笑みを交わし、あやとさゆりはロッカールームに行った。あやはシャワーを浴びず、すぐに一緒に家に向かって歩き始めた。

「ところで」とさゆりは言った。「私の母方の祖父母がクリスマスにうちに来るの。あなたに会ってもらえたらいいな。」

「それはいいわ」とあやは興味で目を輝かせて答えた。「こうしよう—クリスマスランチの後、あなたが少しうちに来て、それから私があなたのところに行くの。ただ挨拶して、もしかしたらプレゼントを交換するかも。」

「うん、好きよ」とさゆりは言ったが、少し心配が忍び込んだ。「でも今年はみんな手作りのプレゼントよ。理由はわかると思うけど。」

あやは彼女を見て微笑んだ。「私にとってはプレゼントじゃないわ。すべて家族についてよ。プレゼントはいいけど、一生もう一つも買わなくていいならかなり幸せよ。どれ

だけお金を節約できるか考えて！」彼女は笑い、さゆりは友達の精神の温かさを感じた。

交差点に近づくと、さゆりが嫌がらせを受けた場所で、本能的な警戒心が彼女を洗った。角の街灯の基部に4本のタバコの吸い殻が散らばっているのに気づき、あの日の寒気を思い起こさせた。彼女は高校の男の子がタバコを吸っていたのを思い出し、不安の波が彼女を襲ったが、あやには何も言わなかった。二人は家に向かって歩き続け、足音が同期し、二人の絆が共有の経験と友情の約束によって固められた—彼らの世界に迫る影の中でも。

「あや...」とさゆりは始めた。

「うん？」

「今日の午後うちに来てくれる？ みんなに折り紙のプレゼントを作るんだけど、手伝ってほしいの。細かいところでつまずくし、あなたが専門家だって知ってるわ。」

「専門家！ お願いよ！」彼女はさゆりに目を転がした。「私はとても平均的よ。あなたが下手なだけ！」彼女は親友をからかいながらくすくす笑った。「もちろん、さゆりちゃん、少し後で来るわ。OK、ここがあなたの家よ。じゃあね。」

「ありがとう、あや。後でね。バイ！」

さゆりの寝室のライトに取り付けられた星のプロジェクターが、女の子たちが座る床にカラフルな紙のシートに囲まれて踊るような幾何学的な光のパッチを投げかけていた。二人は折り紙のプロジェクトに深く没頭し、注意深く折り曲げて折り目をつけていた。さゆりはより簡単なデザイン—鶴とハート—to集中し、あやはより複雑な蓮の花に取り組んだ。部屋は笑い声と紙のざわめきで満たされていた。

「金曜日は冬休み前の最終日よ。嬉しいわ」とさゆりはため息をつき、手がハートを器用に折っていた。「学校は時々私には多すぎるわ。遅くまで寝るのを楽しみにしてる。」

「ハハ！ あなたはそうしたいわね、さゆりちゃん。あなたはママの朝食を手伝うために起きるわよ。遅く寝て罪悪感を感じるわ」とあやは宣言し、からかうような笑みを顔に浮かべた。

さゆりはくすくす笑い、目を転がした。「あなたは私をよく知りすぎよ、あや。はなが...死んだ後で本当に友達になったのは残念よ。」

はなの言及であやの顔に影が差した。「うん、あなたはいい友達よ、さゆり。あなたははなを思い起こさせるわ。」

「どうしてそう言うの？」とさゆりは興味を引かれて尋ねた。

あやは止まり、表情が思慮深かった。「彼女は見せかけほど自信がなかったわ。はなはあなたと同じ性格だったけど、ストレスを違う方法で扱っていたわ。彼女は激しくパーティーをしていたの。あなたはそんなことできないと思うわ。あるいはしたいと思わないわ。」

さゆりはこれを考え、はなの記憶で心が重くなった。「まあ、知ってるわ、あや？」と彼女は声に決意の火花を込めて言った。

「何？」

「大晦日に出かけることに決めたわ。ただ私とあなたで」とさゆりは宣言し、目が興奮で輝いた。

「本気？」とあやは信じられないように尋ね、手が折り途中で止まった。

「本気よ。時間よ。あなたは私のことを正しいわ。私は一生良すぎたわ、いつも他人を心配して—決して—一番の自分を世話しないわ！」さゆりは主張し、信念で声が高くなった。

あやの顔が広い笑みに変わった。「この新しいさゆりが好きよ。自信があり断定的。あなたは行け、ガール！」

二人は笑い、音が雰囲気軽くした。さゆりは古い皮膚を脱ぎ捨てるように自由の感覚を感じた。

「約束しよう」とあやは提案し、目がいたずらで輝いた。「何が起きても、その夜一緒にいるわ。思い出に残るようにするわ！」

「合意！」さゆりは返事し、心が冒険の考えで駆け巡った。「どんなトラブルに巻き込まれるか見たくて待ちきれないわ。」

新たなエネルギーで、二人は折り紙に戻り、各折りが計画への小さなステップを表していた。さゆりが鶴を作りながら、コンフォートゾーンから踏み出す考えで興奮のラッシュを感じた。

「考えてみて」とあやは遊び心のある声で言った。「可愛い男の子に会うかもよ！」

さゆりは笑い、頭を振った。「まず楽しむことに集中しよう。男の子は後で来るわ！」

「正しい！まず楽しむ！」あやは同意し、居心地の良い部屋で笑いが響き、二人は折り続け、未来の夢が心を満たした。

「それで、はなとたくさんパーティーしたの？」とさゆりは尋ねた。

「あまりよ。私たちはたくさん一緒にいたけど、私の両親は彼女の両親ほど寛容じゃないわ。それに、悪い習慣に陥るのを警戒してるわ。勉強を優先しなくちゃ。両親を失望させたくないわ。」

「私もよ。でも学校はストレスよ。なぜ教科書を読んで試験を書くだけじゃダメなの？家で勉強してすべてのドラマを避けられるわ。もっと良い生徒になると思うわ」とさゆりは考え込んだ。

「うん、それはあなたの性格に合うわ。あなたは少し孤独者よね？」

「私はとても孤独者よ、うん。でも孤独者でも少なくとも一人の友達が必要よ、ただ話すためでも。私はあなたにトラブルを共有するたびに軽くなるわ、あや。あなたはいい聞き手よ—それが私が需要よ、ただ聞いて難しい時を支えてくれる非判断的な人。」

「あなたはハグが欲しいって言ってるの？」あやは冗談めかして、暗いムードを軽くしようとした。

「前に言ったわ、姉さん！あなたはハグ配給よ。一日一つ！」さゆりは合わせて遊んだ。

「まあ、それはただ悪いわ。あなたにとって—私じゃなくて」とあやは微笑んだ。「ここにあなたの蓮の花よ。注意してたことを願うわ、来年手伝わないから」とあやはからかった。

「ハグしても？」さゆりは遊び心で言った。

「んんん。OK！でもまずハグ、それから折り！」

「合意！」さゆりは同意し、手のひらに唾を吐いてあやに差し出した。

「あなたは早く学ぶわ」とあやは笑った。「わかった。行かなくちゃ。明日ね。自分が出るわ。折りを終えなさい。遅い人！」

「バイ、あや。明日ね。手伝ってくれてありがとう！」

（注: 第8章の翻訳はここまでです。ページ65-68の全文を自然な日本語で翻訳しました。続きの章が必要な場合、指定してください。）

第9章

こたつのテーブルからの温もりが小さな居間を包み込み、さゆりと家族が周りに集まった。寿司の皿、湯気の立つ味噌汁の椀、新鮮な果物の盛り合わせが低いテーブルを飾っていた。バックグラウンドで柔らかなジャズが流れ、活発なおしゃべりに対する心地よい対位法となっていた。

さゆりの二人の姉、あつことけいこがあぐらをかいて座り、プレゼントを慎重に開けていた。あつこの目は、美しく製本された本のセットを明らかにすると輝き、けいこはおじいさんが選んだ変わった靴下にくすくす笑った。和夫は義理の両親に上質な日本酒の瓶をプレゼントし、琥珀色の液体が柔らかな光に輝いていた。おじいさんとおばあさんは、経験の線が刻まれた顔で、優雅にうなずいて贈り物を受け取り、目が語りかけない生涯の物語を伝えていた。

「おばあさん、おじいさん、これをどうぞ」とさゆりは静かに言い、手作りのギフトボックスをプレゼントし、おばあさんがゆっくり開けた。

「さゆりちゃん！素敵ね！ありがとうございます！」と彼女は二つの完璧に折られた折り紙を取り出しながら言った。「私が先に選ぶわよ、いい？この蓮の花が欲しいわ。とても美しいわ。マントルピースの花の配置にぴったり合うわ。」

「いいよ、僕は鶴の方がいいよ」とおじいさんは陽気に言った。「平和、希望、そして長寿。どれだけ長く生きられるかわからないけど、ありがとう、さゆりちゃん。とても思いやりのある贈り物だわ。」

贈り物の交換が続く中、部屋に静かな満足感が広がった。さゆりは家族がトークンを交換するのを眺め、急がない仕草と、一緒にいるシンプルな喜びを反映した表情を見た。これらの瞬間、外界の喧騒が消え、伝統の温かな抱擁と家族の永続的な絆に取って代わられた。

「おばあさん、おじいさん、この特別な家族の機会に参加してくれてありがとう」と和夫が言った。「私たちは皆、あなたたちの存在に敬意を表します」と彼は続け、ソファに並んで座り、膝にトレイを置いた彼らに向かって頭を下げた。

「招待してくれてありがとう」とおじいさんが返した。

「招待なんて必要ないわよ、おじいさん。あなたはこの家族の頭よ。いつでも歓迎よ」と陽子が明確にした。

「そうね、ありがとう。クリスマスに君たちの家族に参加するのは数年ぶりだけど、私たちにとってはかなり長い旅だわ。お母さんは股関節を骨折してから昔ほど活発じゃないけど、家にじっとしているのに疲れたの。みんなに会いたくて仕方ないわ。私もよ。」

「そうね、もし今年努力しなかったら、二度と起きなかったかも」とおばあさんが口を挟んだ。

「ママ、まだ庭仕事してるの？」と陽子が尋ねた。

「ええ。お父さんが手伝わなくちゃならないけど。かがめないのよ。『フラワーディレクター』って呼んでいいかも」と彼女はけたけた笑い、夫に愛情を込めて振り向いた。

「そうよ、彼女は庭のスツールに古いノームのように座って、午後中私をこき使ってるわ」と彼はくすくす笑った。

「ちょっと！私は老けてないわ。経験豊富なの！」とおばあさんが言い返し、家族の残りが笑った。「もうテニスができないからって、私が役立たずだってわけじゃないわよ。」

「ママは素晴らしいテニス選手だったわよね。長野県杯で優勝したと思うけど？」と陽子が尋ねた。

「ほとんどよ」とおばあさんはにこにこして言った。「松田美智子に負けて2位だったわ。」

「ああ、そう！思い出したわ。軽井沢のトーナメントで優勝していたら、王女になっていたかもって一度言ってたわ。あの時は理解できなかったけど、今はわかるわ」と陽子が微笑んだ。

「すみません、お母さん、それってどういう意味？」とあつこが尋ねた。

「まあ、かわいい子、私の母は明仁と同じテニスクラブでプレーしてたのよ」と陽子が説明した。

「明仁！日本の新皇帝！」とあつこが信じられないように叫んだ。

「そうよ。私は美智子よりずっと良い脚を持っていたわ」とおばあさんは遊び心で主張し、夫に確認を求めるように振り向いた。

「そうよ、親愛なる君。君は長野で最高の脚だったわ。美智子よりずっと」と彼は微笑んで言い、手を上げて口を覆うふりをして家族の残りに大声でささやいた。「彼女がそう言わせるのよ」と彼は冗談を言った。

「じゃあ、私たちは王族だったかも」とけいこが考え込んだ。「それは楽しかったと思うわ」と彼女は考え込む顔で言った。

「すみません、私はここに座ってるわよ」とおじいさんが思い起こさせた。「君の母が私が明仁の2倍の男だって気づかなかったら、君たち誰も生まれなかったわよ」と彼は偽りの憤慨で述べた。

「そうね、おばあさん、私たちは信じてるわ」とけいこが笑った。「私は本当に王女になりたくなかったわよ。そんなにたくさんのルールを守るなんて。」

「あなたは私の王子よ、おじいさん。あなたはいつも私を王族のように扱ってくれたわ」とおばあさんは愛情を込めて言い、手を彼の上に置いた。

香ばしい料理の香りが空気に残る中、さゆりはクリスマスランチを終え、家族の笑い声が部屋を満たすのを聞きながら集まりに感謝を感じた。彼女はあやのプレゼントを届ける考えで興奮のざわめきを感じた。

「ママ」とさゆりはテーブルを片付けている母の陽子をちらりと見て言った。「あやのプレゼントを届けてきていい？」

陽子は止まり、考え深く見えた。「いいわよ、さゆり、でも長く留まらないで。おじいさんとおばあさんが数年ぶりに来てるんだから、失礼にならないように。」

「もちろん、ママ。長くならないって約束するわ」とさゆりは答え、顔に笑みが広がった。「それにあやはおじいさんとおばあさんに挨拶して家族にこんにちはって来るかもよ。」

陽子はいきなり、表情が柔らかくなった。「それならいいわ。ホリデー中に友達が家族に会うのは素敵ね。」

さゆりは母に感謝し、きれいに包まれた贈り物を掴んでドアに向かった、心臓が期待で鼓動した。外に出ると冷たい空気が彼女を迎え、空は柔らかな灰色で冬の寒さを示唆していた。あやの家に向かって歩きながら、彼女は二人の友情をどれほど大切に思っているかを考えた。最近一緒に作った思い出が彼女を温かく満たし、ホリデーの喜びを共有するのが待ちきれなかった。あやの家の玄関に着くと、彼女は軽くノックし、興奮が沸き起こった。少し後、あやの母がドアを開け、広い歓迎の笑みを浮かべた。

「さゆり！ メリークリスマス！」と彼女は叫んだ。「入って、入って！」

「ありがとう！ メリークリスマス！」とさゆりは答え、中に入り、ふわふわのピンクのマフラーを首から外した。家の温もりが彼女を包み、笑い声と皿の音が満ちていた。

「あやは部屋にいるわ」と母は廊下を指差して言った。「あなたに会えてとても喜ぶわ！」

「ここに、田中さん、これをどうぞ」とさゆりは田中さんにギフトバッグを渡した。

「ああ！ ありがとう、さゆりさん。本当にしなくていいのに」と彼女は返した。

「特別なものじゃないわ」と彼女は言い、ただ折り紙の数点だと知っていた。「今あやの部屋に行ってくるわ。ありがとう、田中さん。」

「わかったわ。じゃあね。」

「じゃあね。」

さゆりは廊下を急ぎ、友達に会うのが待ちきれなかった。あやのドアをノックすると、ドアが開き、友達がにこにこして現れた。

「さゆり！ 来てくれたの！」とあやは叫び、素早いハグに引き込んだ。「クリスマスランチはどうだった？」

「よかったわ！ でも今あなたに会えて嬉しいわ」とさゆりは答え、贈り物を差し出した。「これあなたに！」

あやの目は喜びで大きく開き、プレゼントを受け取り、指で熱心に包装を破いた。「しなくていいのに！ でもしてくれて嬉しいわ！」

中は美しく手作りのブレスレットで、繊細でカラフルだった。あやは息をのんで、光にかざした。「美しいわ！ ありがとう、さゆり！ これ作ったの？」

「気に入ってくれて嬉しいわ！」とさゆりは言い、笑みが明るくなった。「うん、私が取り組んでたプロジェクトよ。あなたにぴったりだと思ったの。」

二人が一緒にブレスレットを賞賛する中、居間から笑い声が響いた。「お客さんがいるの？」とさゆりは音の方をちらりと見て尋ねた。

「うん、父方の両親だけよ。東京に住んでるから、訪れるのはそんなに難しくないわ。おじいさんはとても面白いわ。ユーモアのセンスがいいの。おばあさんは彼のジョークが気に入らないふりをするけど、本当は好きよ。二人はとても可愛いわ。」

「挨拶に行こう！」とさゆりは提案し、目が興奮で輝いた。「あなたの家族に会いたいわ！」あやはうなずき、そんな支援的な友達がいることに感謝で心が膨らんだ。「わか

った！行こう！」二人は居間に向かい、あやのおじいさんとおばあさんが両親と笑いを共有して座っていた。

「さゆり、おばあさんとおじいさん以外はみんな知ってるわよね、私の祖父母よ。」あやは誇らしげに友達を紹介した。「みんな、これが私のいい友達のさゆりよ。一緒に学校に行ってるの。隣人でもあるわ。」

「はじめまして、さゆり！」とおじいさんとおばあさんが声を揃えて言い、笑みが広がった。

「ありがとう！お会いできてとても嬉しいわ！」とさゆりは答え、声が明るく本物だった。

「さゆりさん、ケーキと飲み物をどうぞ」とあやの母の明子田中が申し出た。

「ありがとう、田中さん、ケーキを少しだけいただくわ、ありがとう。コーラをグラスで、氷なしでお願い。」

夕方が進む中、部屋が物語、笑い、ホリデーの精神で満たされ、さゆりは深い所属感を感じた。あやがそばにいて、友情の温もりが家族とシームレスに溶け合い、このクリスマス永遠に大切に作るものにした。

あやのおじいさんは、銀色の髪と輝く目の優しい男で、女の子たちに注意を向けた。「あや、君の友達のはなが今日参加するの？」彼のトーンは陽気だったが、質問が空気に重くかかった。

はなの言及でさゆりの心が沈んだ。彼女はあやと素早い視線を交換し、あやは席で不快に身をよじった。あやの表情は驚きと緊張の混合で、質問が彼女を不意打ちにしたようだった。

「はな…」とあやは始め、声が震えた。問題を抱えた友達の思い出が洪水のように戻り、適切な言葉を見つけるのに苦労した。どうやって痛ましい真実を説明できるだろう？

「忙しいの？」とおじいさんが優しく促し、ためらいを感じ取った。

さゆりはあやの不快を和らげられることを願い、瞬間の重みを感じた。

「実は、はな…もう私たちと一緒にいないの」とさゆりは静かに言い、友達を守るリスクを取った。

あやの目は大きく開き、顔に感謝が閃いた。「うん、彼女…今年の初めに亡くなったわ」と彼女は付け加え、声が少し震えた。部屋が静かになり、お祝いの喜びが一時的に啓示によって影を落とされた。

あやのおじいさんは瞬き、ニュースを処理した。「ああ...それを聞いて残念だわ」と彼はついに言い、声が慈悲に満ちていた。「知らなかったよ。」

重い沈黙が彼らに広がり、さゆりは雰囲気の変化を感じた。彼女はあやの顔に刻まれた痛みを見、はなの思い出を喪失の現実と調和させる苦闘を見た。

「...どうやって伝えるかわからなかったわ」とあやは認め、目が輝いた。「大変な時期だったわ。」

おじいさんは手を伸ばし、あやの肩に慰めの手を置いた。「大丈夫よ、かわいい子。話したくなかったら話さなくていいわ。ただ私たちがここにいることを知ってて。」

さゆりはあやのおじいさんへの称賛の波を感じた。彼はいつも正しいことを言い、家族が感情を表現する安全な空間を提供するようだった。

あやは深呼吸をし、おじいさんの理解で明らかに安堵した。「ありがとう」と彼女はささやき、小さな笑みが悲しみを破った。「時々彼女が恋しいわよ？」

「想像できるだけだわ」と彼は優しく返した。「はなはあなたにとってとても特別だったに違いないわ。」

「そうよ」とあやは言い、声が安定した。「一緒に素晴らしい時間を過ごしたわ。」

さゆりは手を伸ばし、あやの手を握り、黙って支援を提供した。「そして私たちはいつも彼女を覚えてるわ」とさゆりは付け加え、二人が共有する喪失で心が痛んだ。

「絶対よ」とあやのおじいさんが同意した。「それらの思い出を保持するのは大事よ。それらは私たちの愛する人を心の中で生かしておくわ。」

彼らが居心地の良い居間で一緒に座る中、家族と友情の温もりに包まれ、さゆりは統一感を感じた。彼らははなを失ったかも知れないが、彼女に対する愛は残り、彼女の不在でも成長し続ける方法で彼らの人生を絡み合わせた。

「もっとお酒、おじいさん？」と明子は死から会話を逸らすように尋ねた。

「はい！」と彼は受け入れ、グラスを差し出し、長く苦しむ妻の厳しい視線を無視した。

さゆりはあやのよく潤ったおじいさんが古いジョークを言おうとしてパンチラインを間違えたのを笑った。

老いる美しさはそれだわ、とさゆりは自分に思い、誰も訂正しようとしないうわ、と彼女はにやりとし、自分が老いるのを見られるか疑問に思った。ゆっくりでしわだらけの老

人がどう見えるかを見ると、彼女はその段階に到達したいかさえ疑わしかった。60歳は死ぬいい時期だわ、と彼女は決めた。

「さゆり！ ハローー！」

それはあやだった。さゆりは瞑想的なトランスから抜け出し、恐怖で部屋の全員が自分を見ていることに気づいた。

「ごめんなさい。何か言った？」と彼女は控えめに尋ね、スポットライトに捉えられたウサギのように見えた。

「私の祖母が中学校を楽しんでるか聞いてたわよ。」

「すみません！ 歓迎を長引かせすぎてママが私たちを待ってると思ってたわ」と彼女は嘘をついた。それからあやのおばあさんに向き、「おばあさん、学校はとても好きよ、ありがとう」と嘘を重ねた。

「お会いできて素晴らしかったわ。でも母があやと私を待ってるわ。おそらくここに電話して私がどこにいるか聞くとこよ。本当に行かなくちゃ。ごめんなさい。」

「ばか言わないで、かわいい子」と明子は優しく言った。「クリスマス週末に私たちと時間を共有してくれて本当に感謝よ。あやとあなたは今行って。参加してくれてありがとう。じゃあね。」

さゆりは祖父母に敬意を表して頭を下げ、「ありがとうございます！」

「気をつけて！」と返事が来た。

「ああ！ 戻ったの！」と陽子がさゆりとあやが居間に入ると叫んだ。「ようこそ、あや。また会えて嬉しいわ。座って。何か食べ物取ってあげる？」

「ありがとう、お母さん。また会えて嬉しいわ。本当に食べたり飲んだりできないと思うわ。ただ水のグラスをお願い、ありがとう。」

「わかったわ、今持ってくるわ。」

「あや、これが私の祖父母よ」とさゆりはおばあさんとおじいさんが座っている方向を見て言った。

「こんにちは、おばあさん、こんにちは、おじいさん」とあやは軽くお辞儀して挨拶した。

「こんにちは、あやさん」と彼らは微笑んで返した。「あなたたちは学校で一緒？」とおじいさんが尋ねた。

「はい！」とあやが返した。「さゆりは私の親友よ。近くに住んでるわ」とあやはさゆりに向き、ウィンクした。

「これをどうぞ」とあやはおばあさんにギフトバッグを渡した。

「ありがとうございます」と彼女はあやからバッグを受け取りながら言った。「今開けていい？」

「はい！」とあやがうなずいた。

彼女はバッグに手を入れ、ギフト包装された抹茶の箱を取り出した。「ああ！まさに必要だったわ！」と彼女はにこにこして叫んだ。「とても思いやりのあるわ、あやさん。ありがとうございます」と彼女は繰り返した。

「気に入ってくれて嬉しいわ、おばあさん」とあやは微笑んで言った。

（注: 第9章の翻訳はここまでです。ページ69-75の全文を自然な日本語で翻訳しました。続きの章が必要な場合、指定してください。）

第10章

渋谷の賑やかな通りはエネルギーに満ち、さゆりは群衆の中を歩き、心臓が希望と不安で激しく鼓動していた。彼女は午前中いっぱいをアルバイト探しに費やし、次の2週間働くことを決意していた。家族は経済的な支援を必要としており、彼女自身のためにも少し貯金したかった—特に、大晦日にあやとクラブに行くための可愛い服を買うために。

店やレストランを通り過ぎる中、彼女の気分は徐々に沈み始めた。各店に入るごとに、すでにポジションが埋まっていたり、そもそも募集していなかったりした。ホリデーシーズンの興奮は両刃の剣のように感じられた；お祝いのライトと陽気な飾り付けは、彼女自身の増大する絶望を思い起こさせるだけだった。

「これは悪いアイデアだったかも」と彼女は自分に呟き、肩を落とした。午後遅くの太陽が舗装に長い影を投げかけ、彼女の衰える希望を映していた。諦めかけていたちょうどその時、通りを横切ったKFCのフランチャイズ店が見えた、馴染みの赤と白の看板が灰色の建物に際立っていた。深呼吸をし、さゆりは通りを渡ってドアを押し開けた。フライドチキンの香りが彼女に向かって漂い、食事を楽しむ客たちの笑い声と話し声が混じっていた。彼女はカウンターに近づき、緊張した。

「すみません」と彼女はレジの店員に言い、店員はフレンドリーな笑顔で顔を上げた。「アルバイトの募集はありますか？」

店員はうなずき、マネージャーを呼んだ、中年の女性で温かな態度だった。「何かお手伝いできる？」マネージャーは親しげなトーンで尋ねた。

さゆりは姿勢を正し、自信を持って聞こえるようにした。「次の2週間だけのアルバイトを探しています。募集ありますか？」

マネージャーの目が輝いた。「実は、タイミングが完璧よ！ 私たちのダイニングエリアのメンテナンス担当者がちょうど両親と休暇で出かけて、代わりが必要な。2週間だけ働くなら、みんなにとって理想的よ。」

さゆりの心が躍った。「本当ですか？ それは素晴らしい！」

マネージャーは微笑んだ。「素晴らしいわ！ 主にテーブルの掃除とダイニングエリアの維持だけど、楽しい環境よ。それで大丈夫？」

「もちろんです」とさゆりは答え、熱意が溢れ出した。

「完璧！ 書類をいくつか記入して、案内するわ」とマネージャーは言い、さゆりに従うようジェスチャーした。レストランの中を歩きながら、さゆりは安堵の波を感じた。

この仕事は家族を助けるだけでなく、大晦日の可愛い服を買うための少しのお金を稼ぐチャンスを与えてくれる。

信じられないわ、と彼女は思い、顔に笑みが広がった。もしかしたら今年はいい終わり方をするかも、ホリデーシーズンの先にある可能性に熱狂しながら考えた。

「今日だけ書類を記入して、明日から始めてもいいですか？ すぐに始めたいけど、本当に母親に確認すべきだと思うんです。彼女は私を心配するんです」とさゆりは仕事の説明を受けた後でマネージャーに尋ねた。

「もちろん。わかるわ。私の母も同じよ。夜勤は大丈夫だから、違いはないわ。でも正直に言うと—明日朝のシフトに来なかったら、ポジションを開けておけないわ。ビジネスが優先よ。わかった？」

「はい！」

「いいわ。私たちは午前10時に開店だけど、9時までに来て開店準備を手伝って。あなたの大体のサイズはわかるわ。明日前にスタッフの制服を準備しておくわ。質問ある？」

「一つだけ。給料はいくらで、日払いですか、それとも週払い？」

「あなたのポジションの時給は800円よ。フルタイムならもっとだけど。スタッフは毎週金曜日に現金で支払われるわ。」

「それは素晴らしいです」とさゆりは熱心に言った。「すみません、もう一つ思い浮かんだ質問。ダブルシフトは許可されますか？」

「まあ、通常スタッフにダブルシフトをさせる必要はないわ、スタッフが仕事に来なかった時以外。でも約束はできないわ。でもあなたを待機リストに入れておくわ。」

「わかりました」と彼女は言い、感謝で頭を軽く下げた。「ありがとうございます！」

さゆりは自宅の玄関を勢いよく開け、興奮を抑えきれなかった。自家製の食事の匂いが空気に漂い、彼女は母親にニュースを共有するのが待ちきれなかった。

「ママ！ 仕事見つけたわ！」彼女は興奮で声を上げて呼んだ。

陽子はキッチンから現れ、食器拭きで手を拭いた。「本当？ それは素晴らしいわ、さゆり！ どこで？」

「渋谷駅近くのKFCよ！学校の休み中に働くわ」とさゆりは説明し、目が輝いた。「日勤だけだけど、スタッフが足りなかったらダブルシフトしなくちゃかも。」

陽子の表情が懸念に変わった。「ダブルシフト？学校の勉強の上にそれができるの？」

「できるわ、ママ！たった2週間だけよ、本当に手伝いたいわ」とさゆりは真剣に答え、決意が明らかだった。「私がいい生徒だって知ってるわ。空き時間に勉強を頑張るって約束するわ。」

少しの躊躇の後、陽子はうなずき、渋々笑みが広がった。「わかったわ、うまくやれると思うなら応援するわ。ただ自分を大事にね、OK？」

「するわ！ありがとう、ママ！」さゆりは叫び、安堵と喜びの波を感じた。「あやに電話して伝えていい？」

「もちろんよ、さゆりちゃん。」

「ありがとう、ママ！」

さゆりは家の固定電話を取り、あやの番号をダイヤルし、期待が胸に膨らんだ。数回の呼び出し音の後、あやの陽気な声が受話器から聞こえた。

「田中宅です。何かお手伝いできますか？」あやは明るく遊び心のあるトーンで答えた。

「あや！さゆりよ！」彼女は叫び、熱意を抑えきれなかった。「聞いて！KFCで仕事見つけたわ！」

短い沈黙の後、あやの興奮が爆発した。「まさか！本気？すごいわ！」

「うん！すごく興奮してる。学校の休み中に働くわ、日勤だけだけど、時々ダブルシフトかも」とさゆりは説明し、喜びの声が溢れた。

「それはクールよ、さゆり！あなたならできるって知ってたわ！」あやは答え、励ましがさゆりを温かく満たした。「でも休み中に一緒に遊べないのは寂しいわ。でもあなたが働く必要があるのはわかるわ。」

「ありがとう、あや！あなたは最高よ！」さゆりは言い、心が飛ぶように高まった。「次の数週間あなたがいなくて寂しいけど、あなたのことを思うわ」とさゆりは真剣に述べた。「でも新年はまだあるわ。」

「完全に。私の時間は勉強して中学校の最後の学期の準備に費やすわ。私たちはまだ大晦日があるわ」とあやは提案した。

「はい！計画を始めなくちゃ。」

彼女たちは大晦日の外出に焦点を移した。あやの目は興奮で輝いた。「だから、大晦日は公式には月曜日だけだけど、土曜日は十分近いわ。クラブに行くベストタイミングよ！」

「どこに行くべき？」とさゆりは興味を引かれて尋ねた。

あやは少し考えた。「めぐみ知ってる？私たちのクラスのあの女の子？彼女が妹が渋谷の新しい場所、CAVEに行ったって言ってたわ。聞いたことある？」

さゆりは頭を振った。「いいえ、ないわ。そこでどう？」

「もちろん！どこでもいいわ」とあやは言った。

「でもどうやって入るの？私たち未成年よ」とさゆりは心配した。

「んん。それはトリッキーかも」とあやは考え込んだ。「でも可愛くドレスアップすればそれほど厳しくないって聞いたわ！」

さゆりの目が輝いた。「OK！いつも可愛くドレスアップしてパーティーに行きたかったわ。すごく嬉しいわ！金曜日の5時に仕事が終わったら、金曜日の夕方に服を買いにいくべきだと思うわ。週給が出るわ。服を買うのに3時間あるわ。でもお金をあまり使いたくないわ。まだママを手伝うために渡さなくちゃ。OK？」

「それはいいアイデアよ！」あやは同意した。「でも明日私の家に来て、私の服をいくつか試着してみて。何か気に入るものがなかったら、金曜日の夕方に買い物に行くわ。」

さゆりは微笑み、あやの支援に感謝した。「それは素晴らしい計画よ！あなたの服を試着するのが待ちきれないわ。」

彼女たちがおしゃべりと計画を続ける中、大晦日の冒険への興奮が高まった。さゆりは新しい仕事とバランスを取りながら、親友との貴重な瞬間を楽しめることを知り、喜びのラッシュを感じた。彼女は先にあるお祝いを熱心に待った。

さゆりはあやの部屋の鏡の前に立ち、床に散らばったカラフルな服の海に囲まれていた。大晦日の興奮が感じられ、彼女はあやのコレクションを漁り、完璧な服を見つける決意だった。

「OK、最初よ！」あやは発表し、襟に可愛い白いリボンが付いた鮮やかな赤のミニドレスを掲げた。「これはパーティーを叫んでるわ！」

さゆりはそれを着て、鏡の前でくるりと回った。ドレスは彼女の曲線を抱きしめ、裾で広がった。「どう思う？」と彼女は遊び心でスピンしながら尋ねた。

あやの目が輝いた。「可愛いわ！でもクラブには少しフォーマルすぎると思うわ。もっと楽しいものが要るわ！」

うなずき、さゆりは明るい黄色のクロップトップにハイウエストのデニムショーツを着替えた。トップはフリルの袖が遊び心を加えていた。「これはどう？」

あやは興奮して手を叩いた。「はい！とても可愛いわ！でももう少し華やかさを加えられるかも。アクセサリーある？」

さゆりはあやのジュエリーの小さな箱を漁り、チャンキーなビーズのネックレスを取り出した。それを着けて鏡を再び見た。「今はどう？」

「完璧！」あやはにこにこした。「パーティーの女王様よ！ただショーツを何かもっとお祝いっぽいものに変えるかも。」

さゆりは遊び心でため息をつき、ショーツを光沢のあるシルバーのミニスカートに変えた、光の下でキラキラ輝く。「これは間違いなくもっとお祝いっぽいわ」と彼女はウエストバンドを調整しながら言った。

「今話してるわ！」あやは歓声を上げた。「そのトップとスカートのコンボで、あなたは注目の的よ！可愛いタイツと私のプラットフォームシューズを加えるだけ。」さゆりはプラットフォームを履き、少しよろめいた。「これすごく高いわ！自分の足につまずきそう！」

「ただそれで歩く練習よ！」あやはくすくす笑って答えた。「慣れるわ。OK、次の服！」

次に、さゆりは遊び心のあるパステルピンクのオーバーオールドレスに白いタートルネックを下に着てみた。「これは少しカジュアルすぎるわ」と彼女は眉をひそめて自分を見て言った。

あやは頭を傾け、考えた。「超可愛いけど、クラブではもっと目立つものが欲しいと思うわ。もっと大胆なものかも？」

「いい指摘よ」とさゆりは同意し、素早く着替えた。レースのタンクトップの上に黒いレザージャケットを着て、チェックのスカートで広がった。服はエッジーで楽しげだった。

「今それよ！」あやは叫び、手を叩いた。「ロックスターみたい！間違いなく注目を集めるわ。」

さゆりはにこにこし、自信を感じた。「大好き！これかも！」

「間違いなく！大胆なメイクを加えるだけで、ダンスフロアを支配する準備よ」とあやは提案し、目が興奮で輝いた。

さゆりが自分の姿を賞賛する中、彼女は外出の夜への期待のラッシュを感じた。彼女はあやに向き、顔に笑みが広がった。「これ全部試させてくれてありがとう！大晦日が楽しみ！」

「私もよ！最高の時間になるわ」とあやは答え、熱意が伝染した。「今、メイクとヘアをこれらの服に合わせる計画を立てよう！」

笑いとおしゃべりで、二人の友達は計画に飛び込み、お祝いの精神が先の夜への想像を燃やした。

（注: 第10章の翻訳はここまでです。ページ76-82の全文を自然な日本語で翻訳しました。続きの章が必要な場合、指定してください。）

第11章

渋谷のネオンライトが鮮やかに輝き、さゆりとあやが賑やかな通りに足を踏み入れ、夜を迎える準備ができていた。空気は爽やかで、二人が若者文化の中心であるセンター街に向かう中で興奮に満ちていた。

「あや、知ってる？ 夜に両親なしで外出したの初めてよ。少し怖いけど、とても自由を感じる！ これに慣れちゃうかも。」

「落ち着いて、姉さん！」あやが笑った。「初めてはいつもいい感じよ。でも慣れないで。私たちはまず高校を卒業しなくちゃ。ガマン。」

「うん、あやの言う通りよ。少し興奮しすぎかも。」

「まあ、今夜の計画は興奮よ、私の友達。でも新年が始まるし、それから勉強に集中しなくちゃ。今夜を今年のすべての努力へのご褒美だと思って。」

「いいえ。私はむしろストレスを発散する方法だと思うわ。ストレスの多い年だったわ。あやなしじゃ乗り越えられなかった。ありがとう、あや。」さゆりは言って、友達の方を向き、今夜とてもかわいいと思った。あやはオーバーサイズのミルクパステルベビーブルーのセーターを着ていて、気まぐれな赤いハートで飾られていた。少しクロップドで、ハイウエストのボトムを見せるのに理想的だった。

赤と黒のハイウエストのチェックミニスカートが楽しく若々しいタッチを加え、スカートの長さはダンスにぴったりだった。あやの分厚い白いプラットフォームスニーカーはどうかかわらなかった。あやの髪はカラフルなスクランチャーでサイドポニーテールに結ばれ、大きなフープイヤリングと数層のビーズネックレスが余分な魅力を加え、遊び心のあるチャームブレスレットとともに。暖かくするために、彼女は大好きなバンド、B'zのパッチで飾られたクロップドデニムジャケットを着ていた。

「生涯の友達！」あやが叫び、さゆりに衝動的なハグをした。

「ヘイ！ ハグは控えめに！」さゆりが遊び心で抗議した。

「見て、みんなの人たち！」さゆりが叫び、驚きの目で大きく開いた。二人は歩行者専用の通りを散策し、小さな店とカフェがエネルギーで賑わっていた。ストリートパフォーマーが通行人を楽しませ、活気ある雰囲気を加えていた。

「いい場所を見つけて人々を見よう」とあやが提案し、さゆりをベンチに引き寄せた。二人は座り、周りのエクレクティックなファッションスタイルを観察しながらくすくす笑った。オーバーサイズのジャケットとカラフルな髪のティーンたちのグループが通り過ぎ、もう一つのグループが最新の日本のストリートウェアを着ていた。

「あの男の子見て！彼のパンツすごくバギーで、パラシュートみたい！」さゆりが笑い、控えめに指差した。

Page 84:

84

「そうよね？あの女の子のプラットフォームシューズ、私の腰くらいの高さよ！」あやが目を輝かせて返した。二人は半時間ほど冗談を言いながらおしゃべりし、シーンの活気あるエネルギーに浸った。

「あや、私の服かわいいと思う？」さゆりが声に少し疑念を忍ばせて尋ねた。

「もちろん、さゆり！私の服着てるんだから！教えてあげるわ。プリクラを見つけて自分で確かめてみて。OK？」

「OK！楽しそう！近くにあるはずよ。探しに行こう。」

あやとさゆりは渋谷の賑やかな通りを散策し、完璧なプリクラブースを探す中で興奮が感じられた。ネオンライトが顔を照らし、笑い声が空気に満ちていた。

「あそこよ！」さゆりが叫び、可愛いオーバーサイズのステッカーのカラフルなポスターで飾られた明るく飾られたプリクラショップを指差した。二人は急いで中に入り、甘いお菓子の馴染みの香りと陽気な音楽の音が迎えた。二人がブースに入ると、くすくす笑い、どうやって動かすかを考えた。スクリーンが明るくなり、背景を選ぶよう促した。

「キラキラのハートで行こう！」あやが目を輝かせて提案した。

「完璧！」さゆりが同意し、ボタンを押した。二人は最初のポーズを取った、ぴったりくっついてピースサインをフラッシュした。「1、2、3！」

カメラがクリックし、二人の遊び心のある表情を捉えた。「次は何かバカなことしよう！」あやが言い、舌を出して変な顔をした。さゆりは笑いが爆発し、あやのポーズを真似しようとした。「我慢できない！」彼女がきゃあきゃあ言い、カメラが二人の楽しさを捉えながらくすくす笑いが崩れた。

「OK、今真剣な顔よ！」あやが劇的に言い、モデルのようにポーズを取ろうとした。さゆりが加わり、頬を膨らませて腕を組んだ。カメラが再びクリックし、二人のばかげた「真剣な」表情を保存した。他にいくつかのポーズの後——一つはオーバーサイズのサ

ングラスをかけて、もう一つは想像上のマイクを持ったふり—写真セッションが終わった。二人は壁に寄りかかり、笑いから息を切らした。

「これらがどうなるか待ちきれない！」さゆりが頬を赤らめて喜びで言った。

「私も！すごくかわいく見えるわ！」あやが興奮が溢れ出て返した。

写真がようやく現れると、二人は喜びにきゃあきゃあ言い、各ショットが前のよりばかっていた。

Page 85:

85

「これ見て！私たちドークみたい！」さゆりが言って、二人が誇張した表情の写真を持ち上げた。

「ドークだけど愛らしい！」あやがにこにこして返した。「ステッカーで飾ろう！」

新たな創造性の爆発で、二人は次の数分をカラフルなステッカーとキャプションを追加して過ごし、思い出を最もかわいい方法で封じた。

ブースを出ると、友情と笑いの温もりが空気に満ち、渋谷の夜をさらに特別にした。

「私はとてもかわいいわよね？」さゆりが写真を注意深く見ながら考え込んだ。

「それは修辭的な質問だと思うわ、バカ」と彼女が笑った。

「ああ、わかる！鏡よ鏡、壁にかかった鏡...！」あやが嘲った。

「私がよく知っていた恥ずかしがり屋の静かなさゆりに何が起きたの？」あやが劇的に目を転がして言った。

「今夜、私はシンデレラよ！」さゆりが宣言し、くるりと回った、あやのために喜びでスピンし、スカートがカラフルな渦を巻いて広がった。各回転で、生地が彼女の周りを踊り、一瞬持ち上がって下の鮮やかな緑のレギンスを露わにした。明るいタイツがスカートと美しく対比し、動きに遊び心のあるフレアを加えた。

ちょうど喜びの瞬間に没頭した時、さゆりの足があやから借りたプラットフォームシューズの端に引っかかった。驚きの息をのんで、彼女は少しつまずき、バランスが揺れた。スピンのぐるぐらのピルエットに変わり、足場を回復しようとした時、唇から笑いが泡立ち、ほぼ失敗したにもかかわらず。あやが心配と楽しみの混じった顔で前へ急ぎ、友達を捉える準備をし、さゆりがくすくす笑い、瞬間が興奮と友情の楽しいブレンドに変わった。

その後、二人は渋谷の人気のゲームセンターの一つに向かい、明るいライトとアーケードマシンの音が迎えた。すぐに、二人はPac-Manのクラシックゲームで互いに挑戦し、高スコアを競いながら笑いが反響した。

「捕まえるわよ！」さゆりが挑戦し、指がボタンを飛んだ。

「無理よ、シンデレラ！」あやが宣言し、彼女のPacmanが最後のブリンキーを食べた。「ハイスコア！わーい！」

「運が良かったわ」とさゆりが偽りの不機嫌な顔で言った。「待ってて。次はあなたがトーストよ。」

「あれ楽しかったけど、CAVEに入ろうとする前に燃料補給が必要よ」とあやが腕時計をちらりと見て言った。「お腹すいた！」

Page 86:

86

二人は近くの居心地の良いラーメン屋に入り、麺のボウルから上がる温かい蒸気が口を湿らせた。味噌ラーメンの蒸気立つボウルを2つ注文した後、二人は麺を幸せにすすり、囃む間に物語を共有し笑った。

「これはすごくおいしい！もっとここに来るべきよ」とさゆりが食事を味わいながら言った。

「でも指なめずらいおいしさ？」あやが笑った。

「パートタイムの仕事が終わったら、鶏肉は二度と食べないと思うわ」とさゆりが微笑んだ。

「ラーメンは今夜の大冒険のための完璧な燃料よ」とあやがにこにこして口を拭きながら返した。

お腹がいっぱいになり、二人は渋谷の通りを散策し続けた。

「これをやろう！」あやが興奮が声に泡立ち、通りを過ぎるカラオケバーで陽気な歌声が通りに溢れ出るのを言った。「中に入ろう！」

「本当に？」さゆりが尋ね、歌わなくていいと静かに祈った。

「来てよ。楽しいわ！」あやが主張した。ここで誰もあなたを知らないわ。日本中で誰も。しかもおそらく二度と戻らないわ。だから例外を作って、シンデレラ。お願い！」

さゆりはあやの言葉を消化し、姿勢を正し、あごを空に突き出して返した。「あやの言う通りよ。今夜は私の夜よ！」

中に入り、二人は個室を掴み、歌本をめくった。「最初に何歌う？」さゆりがオプションをスキャンしながら尋ねた。

「懐かしいものをしよう！クイーンのI Want to Break Freeはどう？」あやがにこにこして提案した。

二人は交互に歌詞をベルトアウトし、声が笑い与时折の音外れの音と混じった。「私たち素晴らしいわ！」さゆりがマイクを手にポーズを決め劇的に宣言した。

数曲の後、二人はようやくCAVEに向かう時間だと決めた。「これに準備できた？」あやがいたずらで目を輝かせて尋ねた。

「準備万端よ！入れてくれるか見よう」とさゆりが返し、心臓が期待で速く鼓動した。

賑やかな渋谷の通りに戻り、二人は前方の夜のスリルを感じ、友情がこれまで以上に強く、クラブの冒険に飛び込む準備ができていた—未成年だが、夢、笑い、決意に満ちて。

Page 87:

87

CAVEナイトクラブのネオンライトが鮮やかな色で脈打つ中、あやとさゆりが列に立ち、興奮と緊張が二人の間で渦巻いていた。音楽がバックグラウンドでドンドン鳴り、中で待つものの魅力的な味だった。

入り口に近づくと、黒いスーツの巨大なドアマンが腕を組んで無表情で二人の上にそびえ立ち、存在だけでさゆりの心臓を速くさせた。スリルと不安の混じり。

「ヘイ、君たち女の子は何歳？」ドアマンが声を上げて尋ねた。

「20よ！」あやが自信を持って宣言し、メイクが特徴を強調し、より成熟した外見を与えていた。ドアマンは目を細めたがうなずき、答えを受け入れたようだった。

しかしさゆりは彼の視線の重みを感じた。彼女はそわそわし、自信が失せた。「えっと、私は...私は...」彼女がどもったが、言葉が正しく出なかった。ドアマンが眉を上げ、すでに彼女の躊躇を感じていた。

「20じゃないよね？」彼が頭を振りながら言った。「入れないよ。」

さゆりの心が沈んだ。あやが話し始めた、「でも…」彼女が始め、ドアマンの表情は固かった。あやはさゆりを見て、二人の興奮が風船のようにしぼんだ。一緒に二人は振り向いて歩き去り、失望が足取りを重くした。

ちょうどその時、近くに停まった滑らかな黒いリムジンから40歳くらいの男が出てきた。彼はシャープにドレスアップし、自信のオーラを放っていた。彼はさゆりの沈んだ表情と女の子たちとドアマンの会話に気づいた。

「ヘイ、彼女たちは私と一緒によ」と彼が前へ出て言った。ドアマンは彼をちらりと見て、女の子たちに戻り、不確かだった。

渡辺健—二人はまだ知らないが—注意を引くオーラを持っていた。彼の目はさゆりに留まり、彼女はかわいい服で特に可愛く見え、大きな茶色の目が恥ずかしさと好奇心の混じりで大きく開いていた。ドアマンはためらい、それから脇にどいた。

「はい！親分！」

健は微笑み、直接さゆりを見て。「心配しないで、大丈夫よ。入って。」

彼は二人が従うようジェスチャーし、二人は狭い通路を並んでB1ダンスフロアに向かい、あやが静かに後ろをタグ付けした。一度洞窟のような空間に入ると、ドンドンする音楽が二者を包み、雰囲気エネルギーで賑わっていた。あやの目は活気ある群衆を取り入れ、興奮で輝いた。健は二者をクラブの奥深くに導き、すぐにVIPセクションに向かう言い訳をし、あやとさゆりをダンスフロアに残した。

「あれ本当だった？」さゆりがまだぼんやりして尋ねた。

Page 88:

88

「彼超クール！」あやが興奮で顔を赤らめて叫んだ。「ダンスしよう！」

草島拓也、新しい若いDJが次のトラックをドロップすると、あやはリズムに没頭し、腰を振り、手を頭上に上げ、それから言った、「ヘイ！入場料全部節約したわ！飲み物取ろう！」

しかしさゆりは責任の重みを感じた。「飲めないわ」と頭を振りながら言った。「明日仕事あるわ。」

「一飲みだけ傷つかないわ！」あやが主張し、すでにアルコールの効果を感じていた。
「楽しくなるよ、約束する！」

「いいえあや。私はコークにこだわるわ。」

「パーティーポーパー！」あやがからかい、彼女のサワーカクテルを大きく一口飲む直前だった。

夜が進む中、音楽が二者の周りを脈打ち、二人は一緒にダンスフロアでブギーした。真夜中少し前、健が戻り、目がさゆりを探した。

彼は魅力的な笑みで彼女に近づいた。「ダンスしたい？」彼が滑らかに尋ねた。さゆりはためらった。彼女は緊張し、ぎこちなく感じたが、彼の視線が心を震わせた。あやをちらりと見て、あやは今ほろ酔いで、手を振って「行け！」と言うようだった。

深呼吸し、さゆりはうなずいた。「OK」と彼女が不安げに返した。二人がダンスする中、健が自己紹介した。

「私は渡辺健。会えて嬉しいよ。」

「さゆり」と彼女が返し、声がささやき以上ではなかった。彼女は彼の視線の下で恥ずかしかったが、彼の自信に引き込まれずにはいらなかった。

「素敵な笑顔だね」と彼が言い、彼女のエゴをブーストした。さゆりは頬を赤らめ、年齢差にもかかわらず感謝した。彼は魅力的で金持ちっぽく、彼女を特別に感じさせた。数回のダンスの後、健が飲み物を買うのを申し出た。「私とVIPセクションに来て」と彼が提案した。あやの目は興奮で輝き、ほろ酔いの勇気が輝いた。

「さゆり、行こう！」あやが懇願した。

「本当にすぐ家に帰らなくちゃ」とさゆりが腕時計をちらりと見て言った。「明日仕事あるし、両親に約束した...」

「少しの間だけ！一飲みできるわ！」あやが主張し、熱意が伝染した。さゆりはため息をつき、責任の引きを感じたが、瞬間のスリルも。「OK、でも本当に30分で帰らなくちゃ。」

Page 89:

89

あやはにこにこし、VIPセクションに向かって導いた。でも近づくにつれ、さゆりが凍りついた。

「どうしたの？」あやが突然の静止に気づいて尋ねた。

「私は...彼を知ってる」とさゆりが心臓を速くしてどもった。彼女はVIPセクションに座る男を指差した。「彼は私の家に来た借金取りの一人よ！」

あやは眉をひそめ、彼女を安心させようとした。「おそらくあなたを認識しないわ。このようにドレスアップして全然違うわ。」

「いいえ、できない」とさゆりが声が震えて言った。パニックが彼女を襲い、どう反応するか確かでなく後退した。

「ここで待って！すぐ戻るわ」とあやが飲み物から少し不明瞭な声で言った。彼女はさゆりの肩を握り、VIPエリアに向かった。

さゆりはあやが歩き去るのを見て、失われ孤独を感じた。腕時計をちらりと見て—すでに真夜中を過ぎていた。クラブはライトと音で生きていたが、彼女は泡の中にいるように感じ、すべてから別れていた。そこに立っている間、彼女は健があやをダンスフロアに導くの見、体のリズムで音楽に動くのを見た。さゆりの心が沈み、友達がどれだけ遠くに行っているか気づいた。あやが笑い、健に寄りかかるのを見、瞬間の無頓着な喜びがさゆりの不安と鋭く対比した。

深呼吸し、さゆりは去らなければならないことを知った。それは彼女のシンデレラの瞬間だった。彼女は心臓をドキドキさせてダンスフロアのあやに近づいた。「あや、帰る時間よ！」彼女が音楽にかき消されそうな声で呼んだ。

あやが振り向き、表情が少し混乱した。「でも楽しんでるわ！」彼女が抗議し、少し揺れた。

「おねがい、帰らなくちゃ。明日仕事あるわ」とさゆりが主張し、トーンは固いが懇願した。

「もう少しだけ？」あやがほろ酔いの興奮で目を輝かせて尋ねた。

「いいえ、今よ！」さゆりが忍耐が薄れて言った。

(注: 第11章の翻訳はここまでです。ページ83-89の全文を自然な日本語で翻訳しました。続きの章が必要な場合、指定してください。)

第12章

さゆりは客が立ち上がって去るやいなやテーブルを片付け始め、揚げた鶏肉の匂いが空気に満ちていた。日曜日はいつも忙しく、4人家族が最近空いたテーブルに近づいていた。

「こんにちは。KFCへようこそ。お客様。テーブルを準備するのに数秒お待ちいただけますか」と彼女は父親に丁寧言い、素早くテーブルを拭き、調味料を決められた順序で並べ直した。彼女の心はあやに戻っていた。

馴染みの環境にもかかわらず、彼女は胸に異常な重さを感じた。上方の明るい蛍光灯が厳しく感じ、客たちの笑い声が遠く聞こえた。前夜の興奮が消え、失望の鈍い痛みに取って代わられた。

「すみません！」彼女は叫び、テーブル掃除を終えて黄色のコンボモップバケットで布をすすごうと振り向いた時に、ぼんやりと父親にぶつかった。

「許してください、お客様！ 本当に申し訳ありません！大丈夫ですか？」

苛立った父親は落ち着いて我慢する努力を明らかにし、ただ「心配しないで」と言い、強引な笑みを顔に浮かべて妻と2人の子供と座った。

さゆりさん、仕事に集中しなくちゃ。クビになるわよ、と彼女は自分を叱った。しかし無駄だった。あやの裏切りが刺さり、シフトを終える間、出来事を何度も頭の中で再生した。状況をどう扱うかわからなかった。あやは彼女の親友だった。あやがいつも約束したようにそばにいてくれると確信していたが、今、信頼はなくなっていた。

どうしてあのように私を捨てられたの？ さゆりは親友に失望して考えた。

二人はCAVEのような場所では特に一緒にいることを約束していた。しかしあやは瞬間に流され、さゆりを一人で混沌を切り抜けさせた。捨てられたと感じ、さゆりは心が沈み、次の空いたテーブルに半心半意でモップバケットを押した。

ちょうどその時、ドア上方のベルが鳴り、考えを破った。さゆりは顔を上げて凍りついた。あやが寂しげで明らかに二日酔いの様子で、目が少し充血していた。彼女は罪悪感のある表情でよろよろ入ってきた。

「ヘイ、さゆり」とあやがつぶやき、声がかすれながら近づいた。さゆりのお腹がねじれた。

「ハイ」とさゆりは返し、トーンを中立に保とうとした。彼女は目を合わせず、数枚のナプキンで忙しくした。

あやはそわそわし、手でカウンターを握った。「本当に前夜のことでごめん。あのよう
に置いておくつもりじゃなかったわ。」

さゆりは正しい言葉を探すのに苦労した。傷は深く、怒鳴りたくなかった。「楽しかった
よね？」と彼女は言い、目に届かない笑みを強引に浮かべた。「それが大事よ。」

あやは明らかに緊張を感じて顔をしかめた。「いいえ！ あなたと一緒にいるべきだった
わ！ 私がしたことは間違ってる。本当に申し訳ないわ、さゆりちゃん！」と彼女は
懇願し、洗っていない髪を手でかき回し、本当に後悔しているように見えた。さゆりは
唇を噛み、感情の波と戦った。

「ただ...一緒にいる約束だったわ。本当に一人ぼっちだった。」彼女の声が少しひび割
れ、意図したより多くを明かした。

「わかるわ」とあやは言い、表情が柔らかくなった。「あなたのためにそこにいるべき
だったわ。本当にごめん。埋め合わせできる？ シフトの後で一緒にいる？」

さゆりは傷がまだ新鮮でためらった。「わからないわ、あや。ただ...またあのよう
に感じたくないわ。このことを処理するのに数日必要だと思うわ。」

「わかるわ」とあやは返し、声が誠実だった。「本当にわかってるわ。失敗したわ。で
もお願い、埋め合わせさせて。あなたがいなくて寂しいわ。」

さゆりは友達を見て、あやの目の誠実さが心を引いた。少しの後、彼女はため息をつき
、苛立ちの一部を解放した。

「1日か2日待って、OK？ あなたを友達として失いたくないわ。私の唯一の友達よ。前
夜に裏切られたと感じたわ。また信頼できるか疑問に思うわ」と彼女は本当のことを言
い、あやの返事に欺瞞の兆候を探して深く目を見つめた。

「約束するわ」とあやは言い、安堵が明らかだった。「埋め合わせするわ、誓うわ。」

そこに立っている間、緊張が緩み始め、さゆりは希望のきらめきを感じた。あやは本気
に見えた。おそらく修復できるかも。

「わかったけど、あなたひどく見えるわ」と彼女は軽くからかい、小さな笑みが破れた。
あやは優しく笑い、普段の陽気さが少し戻った。

「うん、間違いなく感じるわ。次は飲み物を控えるべきかも」とあやは後悔して言った
。

「少しだけね」とさゆりは返し、胸に温かさを感じた。二人はたくさん処理すべきことがあることを知っていたが、今のところ、友情を修復し始めることができた。

「数日離れるのはあなたにいいかも、あや。バッテリーを充電する必要があると思うわ。そして...あなたの目は出血してるわよ」と彼女は微笑んだ。

「あ！わかるわ！だから失敗したからといって、いつでも私を侮辱するフリーパスがあると思うのね」と彼女はさゆりをからかい、関係を修復する決意があることを知って安堵の笑みを顔に浮かべた。

「はい、もちろん！少なくとも3ヶ月の無料侮辱が銀行にあると思うわ」とさゆりは撃ち返した。「見てあや、ここに来て謝ってくれて嬉しいわけど、本当に忙しいわ。準備できたら電話するわ—OK？それから話そう。」

「OK。問題ないわ。働きすぎないで！火曜日ね！」

「じゃあね！またね！」

さゆりはKFCでの長い日勤から疲れて両親の家に踏み入り、鶏肉の匂いがまだ服に残っていた。しかし入ると空気の緊張が彼女を襲った。両親の声が議論で上がり、心が沈んだ。

「...どうしてそんなに借りたの、私に言わずに？」母親の声は鋭く、不信に満ちていた。

「管理できると思ったわ！」父親のかずおが返し、トーンは必死だった。「心配しなかったよ、陽子。ただ一時的な後退だと思ったわ。」さゆりの息が喉に詰まり、靴を静かに脱いで入り口ホールに立ち、見えないところで隠れた。彼女は言葉を捉えようと耳を澄まし、両親の喧嘩の音に心が沈んだ。

「一時的な後退？ヤクザの借金取りに直面してるのよ！それが何を意味するかわかってる？」陽子の声が震え、怒りと恐れ of 混じり。「銀行で対峙したの？何考えてたの？」

「選択肢がなかったわ！」かずおの声がひび割れた。「手が届かなくなる前に返せると思ったわ。関わらせたくないわ」と本物の後悔のように見えるトーンで満ちていた。

「関わらせない？すでに家族全員を巻き込んだわ！」陽子は返し、傷が明らかだった。「どれだけ借りたの、かずお？お金はどこに行ったの？」

長い間があり、さゆりは胃に結び目がきつく締まるのを感じた。彼女は父親から放射される恥を感じた。「私は...家族のためだったわ」と彼はついに吐き出し、声が不安定だった。「10年昇進してないし、今3人の女の子が学校に...」

「かずお...」陽子が始め、さゆりは母親が本当に怒っている時にだけ父親を名前で呼ぶことを知っていた。「私たちはすべてでパートナーのはずよ。そんなに恥ずかしくて私と財務を議論できなかったの？ それとも何か隠してるの？」

「何を言おうとしてるの？ 私を何かで非難してるの？！」

「最近家計予算で宝石の現金伝票に気づいたわ」と陽子の声は低かったが、さゆりは下の怒りを聞いた。「奇妙なのは、あなたから宝石を受け取ったことがないわ。」

彼女が話す間、さゆりはダイニングルームのすぐ外のホールに立ち、緊張したドラマの観客のように感じ、映画で見た容疑者が警察に尋問されるようなものだった。母親が答えを探して前傾する姿が、真実を掘り下げる探偵を思い起こさせた。かずおの姿勢は曲がり、防御的で、嘘の網に捕らわれた男を映していた。

「説明できる...」彼が始め、しかし陽子は遮った、「かずお、あなたを愛してるし気にかけてるわ、知ってるわよね。愛にどんな力があるの、許し以外に？」

彼は驚いたようで、目が大きく開いた。「あなた...私を愛してる？ すべてを終えて？」

「はい」と彼女は返し、声は固かった。「間違いのあるあなたを愛してるわ。いつもよ。でも傷つかないふりし続けることはできないわ。」

かずおの表情がショックから罪悪感に変わった。彼は髪を手でかき回し、感情と苦闘しているのが見えた。「あなたを傷つけたくなかったわ、陽子。ただ起きたわ。考えなかった—」

「考えるのは十分じゃないわ、かずお」と彼女は言い、声が柔らかくなった。「難しい時でも正直さが必要よ。私はそれを値するわ。」

彼は下を向き、恥が顔を洗った。「本当にごめん。私は愚かだったわ。」

陽子はすべてにもかかわらず愛した男に心が痛み、近づいた。「感じ方を変えられないわ。でも一緒に進む方法を見つけなくちゃ。」

かずおは視線を合わせ、目が後悔で満ちていた。「もっと良くするわ、約束する。あなたを失いたくないわ。」

「あなたはそうするわ、宝石を買った女を失わないなら。私は十分明確にしたわ？」

「はい！」彼は返し、頭を下げ、妻の目を見られなかった。

彼らの間で語られない真実の重みが掛かる中、陽子は希望のきらめきを感じた。簡単じゃないが、おそらく愛が暗闇を導けるかも。

さゆりは耳を傾けながら目に涙が刺し、圧倒的な無力感を感じた。彼女はいつも父親の強さを賞賛していたが、今彼の声の恐れを聞き、恥の重さを聞いた。

「今借金取りが何と言ったか教えて」と陽子は静かに言い、夫の前腕に手を置いた。

「彼らは最後通牒を与えたわ」と彼は空虚なトーンで続けた。「払え、さもなくば...結果に直面せよ。」

かずおはついに顔を上げ、陽子の視線を合わせた。「負担をかけたくなかったわ。あなたを守りたかった—これすべてから。」彼の声は低く、ほぼ懇願的だったが、それは陽子の煮えくり返る怒りを燃料にしただけだった。

「守る？ 正反対をしたわ！」陽子は返し、声は怒りと絶望の混じり。「私たち全員を危険に置いたわ。払えなかったら何が起きると思うの？」

さゆりの心が速く打った。結果？ それは何を意味するの？ 彼女は地面が崩れるように感じ、知っていた世界が混沌に傾くように感じた。彼女は家族を多少普通だと思っていたが、今悪夢に閉じ込められたように感じた。

陽子の声が柔らかくなったが、さゆりはまだ緊張を聞けた。「かずお、私に相談すべきだったわ。一緒に解決できたわ。私の家族がお金があるの知ってるわ、助けを求められたのに...」

「いいえ！」かずおは声にパニックの気配を込めて遮った。「約束したわ、陽子。決して彼らに戻らないって約束したわ。あの位置にあなたを置けないわ！」

さゆりは状況の深さを気づき、心が速く打った。母親は富から来ていたが、愛のために結婚し、よりシンプルな人生を選んでいた。さゆりはいつも母親の選択を尊敬していたが、今その決定が彼らを引き裂くように感じた。議論のこもった音だけが満ちた沈黙の数瞬の後、さゆりは吐き気の波を感じた。これ以上聞けなかった。彼女は静かに振り向き、ホールをつま先で歩いて部屋に向かい、心に新しい知識の重さを抱えていた。

部屋で、彼女はドアを静かに閉め、ベッドに座り、壁をぼんやり見つめた。家族の状況の現実が肩に重く沈んだ。彼女は助けたい、何か—何でも—したいという圧倒的な衝動を感じた。3月末の卒業で、彼女はおそらく仕事を見つけられることを知っていた、KFCかも知れず、そしてそれ以降学校をドロップアウトすることを決意した。

「ローンを払うのを助けるわ」と彼女は自分にささやき、心に決意のきらめきがあった。しかし深くでは、父親をヤクザから守るのに十分でないかも知れないことを知っていた。

その間、陽子はリビングに立ち、心が会話の処理で速く打った。彼女はかずおへの愛と自分の家族の富の長く埋められた記憶の間で引き裂かれた感じだった。彼女はその人生に戻らないと自分に約束していたが、今夫が危険だった。彼女は夫を愛していた。彼女を彼に引きつけたものが何かを正確に特定できたことはなかったが、それが愛の本質—すべての形とサイズで来て、本質的に説明不能だった。

彼女が彼の浮気を疑ったのは初めてではなかったが、欺かれ裏切られたと感じるからといって家族を壊さないと決意していた。夫が不誠実だからといって家族単位を壊すのは彼女の利己的だと思った。彼女は彼がいい男だと知っていた。はい、彼は飲みすぎて仕事で惨めだったが、両方の面で失敗したにもかかわらず、いつもいい夫と父親になろうとした。陽子はストレスが主に責められることを知っていた。

かずおはストレスを扱うことができなかった。陽子はいつもかずおが扱うのがストレスすぎる状況を扱う人だった。彼女は弱い男と結婚した。それでも彼女は彼を愛していた。そしてそれが、陽子が思う真の愛のすべて—欠点にもかかわらず誰かを愛することだった。

深呼吸をし、彼女は決定した。彼女はすべての恥にもかかわらず母親に手を伸ばす。彼女は家族を守らなければならなかった。陽子の指は母親の番号をダイヤルする時震え、決定の重みが心に重く押した。過去が彼女の人生に忍び寄り、彼女は家族の絆が引き込む馴染みの緊張を感じた。

夜が進む中、さゆりはベッドに横たわり、天井を見つめ、心が心配で重かった。最後の週は感情的にも肉体的にも消耗的で、彼女がしたいのは寝ることだけだった。しかし睡眠が逃げた。彼女はあやに打ち明けられればと思ったが、この暗闇で友達に負担をかけたくなかった。代わりに、彼女は頭を下げ、より懸命に働き、家族を支えるために力のすべてをすることを決意した。

さゆりがあやの家に向かう時すでに暗く、心が各ステップで軽くなった。KFCでの長い日の後、彼女は友達とリラックスできるのが嬉しかったが、彼らの友情を適切に癒せるかまだ少し不安だった。馴染みの玄関ドアに近づき、彼女は髪を滑らかにし、バッグを調整する瞬間を取り、見栄えよくしたかった。あやの母親、あきこが温かい笑みでドアを開けた。

「さゆり！ 会えて嬉しいわ！」彼女は叫び、脇にどいて彼女を入れた。甘い何かの香りがホールに漂い、さゆりのお腹を鳴らした。

「ありがとう、田中さん」とさゆりは入りながら軽くお辞儀して言った。「ここは素晴らしい匂いがするわ。」

「ありがとう」と彼女は返し、さゆりを居心地の良いリビングに導いた。「ただ今どら焼きを焼いたわ。少しどう？」

「あ、はい、お願いします！」さゆりは申し出に目が輝いた。甘いあんこの詰まったふわふわのパンケーキは彼女のお気に入りの一つだった。あきこは皿に一つ置き、さゆりに渡し、彼女がどら焼きを一口食べ、温かい甘さを味わうのを見た。

「いつものように素晴らしいわ、田中さん。」

あきこは満足の笑みで見ている。

「気に入ってくれて嬉しいわ。そしてそれに合うお茶はどう？」

返事を待たず、彼女は立ち、キッチンに向かった。さゆりは拒否しない方がいいことを知っていた。「それは素敵です！」彼女は後ろから呼び、ホスピタリティの温かさが彼女を洗うのを感じた。

ちょうどその時、あやが部屋に入った。「こんにちは。あなたかと思ったわ」と彼女は中立のトーンで言い、内側の感情の渦にもかかわらず。さゆりの存在はいつも慰めをもたらしたが、今嵐の雲が迫るように感じた。あやの心は裏切りの記憶が洪水のように戻り—親友への約束を破った方法。

二人の目が合い、周りの世界が消えるようだった。あやの表情は不安と希望の混じりだったが、さゆりは表面の下で煮えくり返る怒りと失望を振り払えなかった。

「ヘイ、あや」とさゆりは試探的に言い、声がささやき以上ではなかった。

あやは腕を組み、視線が固くなった。「ヘイ。」一語が重く、彼らの壊れた友情の重さを負っていた。

二人が決闘のカウガールのように向き合う中、あきこが湯気の立つ緑茶を優雅に注ぎ、繊細なカップとティーポットを持って戻った。「どうぞ、女士たち」と彼女は言い、カップを前に置いた。「楽しんで。」

「ありがとう！」さゆりは返し、笑みを強引に浮かべた。彼女は一口飲み、土のような風味が落ち着いた。

さゆりはあやのママが意図的にムードを軽くしようとしているかただ丁寧か確かでなかったが、さゆりを座らせ、すぐに友達の母親から期待されるすべての質問をし始めた、「それで、さゆり、KFCで働くのを楽しんでる？ シフトはどう？ お昼は何食べるの？」など。

少しの後、あきこはキッチンを片付けるために自分を言い訳し、少女たちを会話に残した。「知ってるわ」とあやは言い、トーンが突然真剣になった、「CAVEで起きたことをたくさん考えてるわ。」

さゆりの心が一瞬沈み、CAVEでの夜の記憶が頭をよぎった。「うん、私も」と彼女は静かに言った。「私たち大丈夫でいたいけれど、信頼の問題に取り組まなくちゃ。ただ信頼できない親友は持てないわ。」

「部屋で話そう」とあやは静かに言い、あきこの前で汚い洗濯物を晒したくなく、彼女は数メートル離れて皿を洗っていた。さゆりはうなずき、表情は本気で、あやの寝室に付いていった。

二人はあやのベッドに座った、伝統的なふとんで、畳の上に敷かれた。彼女の敷き布団のカバーはカラフルなパターンと好きなアニメキャラの画像で飾られ、一端に柔らかく平らな枕が置かれ、睡眠中の快適を提供した。

人気バンドのポスターが寝室の壁に貼られ—象徴的なJ-PopグループSMAP、ロックバンドX Japanとトレンドイなアイドルシンガーの小さなポスターがいくつか、明るい笑みを閃かせ、ファッショナブルな服を着ていた。ポスターはあやの音楽とポップカルチャーへの愛を表現した鮮やかなコラージュを作った。

あやは神経質に動き、さゆりから受け取ったブレスレットをいじりながら指を下を見た。「話せる？」

「はい、もちろん。私たちは話す必要があるわ」とさゆりは返した。

「わかるわ！ 本当にごめん」とあやは懇願し、声が震えた。「あなたを傷つけたくなかったわ。愚かなことをした—友情より楽しみを選ぶなんて。お酒を責めないわ。飲みすぎる選択をした—誰も強制しなかったわ。言えるのはごめんさゆり。自分の中に許す力を見つけられる？」

さゆりの怒りが燃え上がったが、下に共感の痛みを感じた。彼女と一緒に笑った時間、秘密を共有し、互いを支えたことを思い出した。

「失望させたわ、あや。でも、あなたが言うように、それは過去だと思うわ。お酒について本当にコメントできないわ、酔ったことがないから。人をどう感じさせるかわからないわ。でもそれが父親に何をするかは知ってるわ。」

「それはどういう意味？」とあやが尋ねた。

「母親と議論させるわ。あれが起きるのが嫌い。」

「うん、お酒は適度に取りすぎだと気づき始めているわ」とあやは恥ずかしげに顔をしかめて言った。

それに続く沈黙が二人の間に重く掛かった。さゆりはあやの顔に刻まれた後悔を見たが、少し遅すぎるように感じた。彼女の一部は手を伸ばし、亀裂を修復したかったが、もう一部はさらなる痛みから自分を守るよう叫んだ。

信頼を再構築するのに時間がかかるが、私たちは一緒にこれ乗り越えられると思うわ。」

あやの心はさゆりの誠実さが彼女を洗う温かさを感じ、膨らんだ。裏切り以来初めて、希望のきらめきが内側でちらついた。

「あなたを友達として失いたくないわ」とあやは告白し、声が本気だった。「あなたは私にとって大事すぎるわ。」

あやの目に涙が刺し、さゆりの言葉を取り入れながら。笑いの記憶、共有の夢、そして彼らが築いた絆が戻り、失ったものを取り戻す激しい渴望を点火した。「あなたがいないくて寂しいわ、さゆり」と彼女は告白し、声が震えた。「本当に。」

さゆりは近づき、顔に脆弱性が刻まれた。「じゃあ、やり直そう。」

「もっと良くするわ。信頼を稼ぐために懸命に働くわ」とあやは言い、二度目のチャンスに感謝した。

その瞬間、さゆりは自分の中の変化を感じた—あやの後悔とより良くする決意を抱きしめる決定。彼女は深呼吸し、再び傷つくリスクに自分を固め、癒しの希望を抱く決意をした。

「わかった」と彼女は静かに言い、小さな笑みが破れた。「試そう。」

ふとんに座っている間、一度彼らを分けた緊張が溶け始めていた。さゆりは友情の温かさがゆっくり戻るのを感じ、癒しの道があやの言葉の誠実さで照らされた。その瞬間、彼女は痛みにもかかわらず、彼らの絆は戦う価値があることに気づいた。

手を伸ばし、亀裂を修復するが、もう一部はさらなる痛みから自分を守るよう叫んだ。

「また信頼できるかわからないわ」とさゆりはついに言い、声がささやき以上ではなく、言葉が舌に苦く味だった。あやの顔が落ち、彼女はうなずき、涙が頬をこぼれた。「わかるわ。ただ...正しくするチャンスをくれ。何でもするわ。」

さゆりは矛盾する感情のラッシュを感じた。彼女は友達を慰め、すべてが大丈夫だと言うのを望んだが、傷はまだ新鮮すぎた。代わりに、彼女は言った、「あつこが最後のボーイフレンドが浮気した時に、許しは精神衛生にいいと言ってたわ。負のサイクルを破るわ。だから、あや—もう一度チャンスを与えるわ。あなたを友達として持つのが好きで、すべての関係に浮き沈みがあると思うわ。」

言葉が空気に掛かり、あやは感情のラッシュが彼女を洪水のように感じた—驚き、安堵、そして圧倒的な希望。「許すの？」彼女は繰り返し、不信がトーンを色づけた。「すべてを終えて？」

「はい！」さゆりは返し、声が今より安定した。「はい、あなたは私を傷つけたわ、再構築するのに時間がかかるわ。でも私たちは一緒にこれを乗り越えられると思うわ。」

あやの心はさゆりの誠実さが彼女を洗う温かさを感じ、膨らんだ。裏切り以来初めて、希望のきらめきが内側でちらついた。

「あなたを友達として失いたくないわ」とあやは告白し、声が本気だった。「あなたは私にとって大事すぎるわ。」

あやの目に涙が刺し、さゆりの言葉を取り入れながら。笑いの記憶、共有の夢、そして彼らが築いた絆が戻り、失ったものを取り戻す激しい渴望を点火した。「あなたがいないくて寂しいわ、さゆり」と彼女は告白し、声が震えた。「本当に。」

さゆりは近づき、顔に脆弱性が刻まれた。「じゃあ、やり直そう。」

「もっと良くするわ。信頼を稼ぐために懸命に働くわ」とあやは言い、二度目のチャンスに感謝した。

その瞬間、さゆりは自分の中の変化を感じた—あやの後悔とより良くする決意を抱きしめる決定。彼女は深呼吸し、再び傷つくリスクに自分を固め、癒しの希望を抱く決意をした。

「わかった」と彼女は静かに言い、小さな笑みが破れた。「試そう。」

ふとんに座っている間、一度彼らを分けた緊張が溶け始めていた。さゆりは友情の温かさがゆっくり戻るのを感じ、癒しの道があやの言葉の誠実さで照らされた。その瞬間、彼女は痛みにもかかわらず、彼らの絆は戦う価値があることに気づいた。

（注: 第12章の翻訳はここまでです。ページ90-98の全文を自然な日本語で翻訳しました。続きの章が必要な場合、指定してください。）

第13章

学校の集会ホールは生徒たちの話し声でざわめき、さゆりはあやの隣に座っていた。心は彼女たちを取り巻く噂の重みで重かった。1月の冷たい空気が彼女の不安を増幅させるようだった。彼女は冬休みが少し平和をもたらすことを望んでいたが、学校に戻った瞬間、とも子の残酷なささやきがその幻想を打ち砕いた。

校長が演壇に近づくと、さゆりの考えは数週間前の屈辱的な出来事に漂った。バスケットボールをとも子の顔に投げつけたのはその時は満足だったが、謝罪はとも子にさらに弾薬を与えただけだった。さゆりは休戦を期待していたが、とも子は彼女が作り出す混沌に生きがいを感じるようだった。

「おはよう、生徒たち」と校長の声が騒音を切り裂き、注意を要求した。さゆりは集中しようとしたが、心は彼女とあやを厳しく不親切に描く噂に戻り続けた。

とも子はいやとさゆりが渡辺健とメナージュ・ア・トロワをしたという噂を広めていた。目尻から彼女はいやが少し身じろぎし、口元に笑みが浮かぶのに気づいた。さゆりは彼女に向き、好奇心を刺激された。「何がおかしいの？」彼女は声を低く抑えようとしてささやいた。

あやは近づき、表情がいたずらっぽかった。「ただ待ってて見て」と彼女は返し、目に興奮の輝きがあった。さゆりは不安と興味の混じりを感じた。あやはいつも二人の中で大胆な方だったが、何を計画しているの？

通常の発表を済ませた後、校長は喉を鳴らし、部屋が静かになった。「そして最後に、三井とも子、集会の直後に私の事務所に来なさい。」

ホールにさざなみのようにつぶやきが広がった。さゆりはあやをちらりと見た、あやは今本格的な笑みを抑えようと戦っていた。「何をしたの？」さゆりは眉をひそめて尋ねた。

「とも子に小さなサプライズが待ってるかも」とあやは謎めいて返し、目にいたずらが輝いた。

さゆりのお腹は不安と期待の混じりでねじれた。あやはいつも創造的だったが、挑発された時は衝動的になることがあった。

「本当にいいアイデアだと思うの？」

あやは肩をすくめ、自信が揺らがなかった。「時には自分の方法で反撃しなくちゃ。それにあなたがこんなにいじめられるのを見てられないわ。」さゆりは感謝と懸念の波を感じた。「感謝するわ、本当に、でも...」

「信じて」とあやが遮り、声が固かった。「これで彼女は二度と噂を広める前に考えるわ。覚えてて、これはあなたのことだけじゃないわ。私はあなたと同じように自分自身のためにも立ち上がってるわ。」

教室に向かう間、さゆりは恐れと興奮の泡立つ感覚を感じた。とも子との戦いは終わっていなかったが、あやがそばにすることで希望のちらつきを感じた。一緒に、彼らはどんな挑戦が待っていても向き合うだろう。

「ただ注意して約束して」とさゆりは声が柔らかくなり言った。

「いつもよ」とあやは返し、顔に安心させる笑みが広がった。「そして物事が南に行ったら、私が扱うわ。」

教室に向かう間、さゆりは内側で泡立つ恐れと興奮の混じりを感じた。とも子との戦いは終わっていなかったが、あやがそばにすることで希望のちらつきを感じた。一緒に、彼らはどんな挑戦が待っていても向き合うだろう。

第14章

日本信用銀行の蛍光灯が市川和夫の上にちらちらと輝き、彼は机に座ってぼんやりと書類の山を見つめていた。ページの数字がぼやけ、各ミスが彼のストレスの重さを増幅させていた。経済不況が銀行を厳しく打撃し、課長としてパフォーマンスのプレッシャーは激化するばかりだった。ちょうどその時、彼の上司である部長がオフィスから出てきて、苛立ちの嵐のような顔をしていた。

「市川！ 私のオフィスへ、今すぐ！」彼は吠えた。

和夫は固く喉を飲み込み、胃が不安でねじれた。彼はゆっくり立ち上がり、死刑執行への行進のように感じた。部長のオフィスへの道は彼の処刑への行進のように感じた。オフィスの中に入ると、部長は後ろでドアをボタンと閉めた。

「君に何が起きているんだ？」彼は机に寄りかかり、声が上がって要求した。「君は不注意なミスをして、チーム全体に影響を与えている！ 君に期待しているんだぞ！」

「最善を尽くしています」と和夫は返し、声はささやき以上ではなかった。彼は激しい視線の下で小さく感じた。「現在の状況で多くのプレッシャーが―」

「言い訳だ！」部長はぴしゃりと言った。「言い訳は聞きたくない。改善しろ、さもなければ仕事は長く続かないぞ！」

和夫はうなずき、屈辱の熱が彼を洗った。彼がオフィスを出ると、同僚たちの目が彼に注がれ、彼らのささやきが影のように後ろを追った。ストレスは息苦しく、彼を閉じ込める悪循環だった。

時計が6時を打つと、和夫は遅くまで残ることに決め、考えから逃れるために仕事に埋もれることを望んだ。しかし分が経つにつれ、彼の心はヤクザとの迫る会合に漂った。彼の妻、陽子は借金を払うためにしぶしぶ両親に助けを求めていたが、彼女はヤクザの関与を巧みに省いていた。彼は今夜お金を届ける必要があることを知っていた。それすべてが圧倒的だった。

ようやく退勤すると、夜の空気が肌に鋭く感じた。まっすぐ家に帰る代わりに、彼は渋谷のパチンコ店に向かって歩き、気を紛らわせる必死の必要を感じた。店内に入ると、明るいうライトと音の騒々しさが彼を包み、一時的に心配を洗い流した。彼は自動販売機からサッポロを取り、冷たいビールが彼のすり切れた神経の薬となり、空の台を探した。

彼が台をプレイする間、彼は一時的な安堵を感じた。ゲームのスリルが彼を蝕む不安を一時的に沈めた。ここだけが平和を持てる場所だわ、と彼は考え、緊張が彼から流れ出るのを感じた。しかし分が時間になるにつれ、彼の決定はぼやけ始めた。彼は時間—そしてお金を—見失った。

和夫は渋谷の薄暗いパチンコ店からつまずきながら出て、ネオンライトが顔に色のカレイドスコープを投げかけた。パチンコ台の音と酔った笑い声が後ろで響いたが、彼が集中できるのは彼にのしかかる借金の重さだけだった。彼の頭は飲んだ酒から少し回っていたが、彼は義務に直面する必要があることを知っていた。

震える手で、彼は腕を上げ、縁石からタクシーを呼んだ。馴染みの黄色と緑の車両が止まり、ライトのサインが利用可能を示していた。運転手は好奇心と注意の混じりで彼を目で追ったが、和夫が後部座席に登り、ドアが鈍い音で閉まった。

「クラブ樁」と彼は舌足らずに言い、酔った状態にもかかわらず自信を装った。運転手はうなずき、彼らは賑やかな通りから離れ、渋谷の活気ある混沌を織り交ぜて進んだ。街のライトが和夫が後ろに寄りかかる中、筋のようにぼやけた。

乗車は長く短く感じ、外部の街の脈打つエネルギーが彼の内側の混乱と鋭く対比した。彼はクラブ樁で彼を待つヤクザを考え、借金の重さが暗い雲のように影を落とした。彼らが到着すると、タクシーはクラブの前に止まり、ファサードが点滅するネオンライトの下で温かく輝いていた。

和夫は財布をいじくり、運転手に支払うために現金を滑り出させ、歩道に降り立った。彼は自分を集めるために一瞬を取り、ジャケットを滑らかにし、先の出会いに精神的に準備した。クラブ樁の入り口が彼を誘い、二度と会わない世界へのゲートウェイだった。

深呼吸をし、彼はドアを押し開け、柔らかな音楽と話し声が彼を洗った。雰囲気は高価な香水の香りとホステスの笑い声で濃厚だった。和夫は肩を直し、中に入ってヤクザに直面し、借金を清算するプロセスを開始し、これが彼の人生のコントロールを取り戻す重要なステップだと知っていた。

和夫は家に向かうタクシーの後部座席に座り、消耗を感じた。アルコールが感覚を鈍くし、彼は落ち着きの藪の中にいるように感じた；ストレスと緊張が厳しく禁じられた場所。

「ここに着きました」と運転手が発表した。

パニックの波が彼の繭を破り、彼は陽子に自分の行動を説明する方法を見つけなければならないことに気づいた。家に入ると、ドアが大きくきしみ、彼は少しつまずき、騒ぎを起こした。

「ただいま！」彼は舌足らずで過度に陽気な声で発表した。彼は周りを見回し、家が静かであることに気づいた。女の子たちは眠っており、両親の人生の混乱を幸せに知らなかった。

陽子は薄暗いリビングで彼を不安げに待っていた。彼女は夕方を歩き回って過ごし、状況の重さが彼女にのしかかっていた。和夫が入るのを見ると、安堵の波が彼女を洗ったが、それは彼の状態を取り入れた時、すぐに懸念に影を落とされた。

「和夫！」彼女は叫び、席から立ち上がった。「あなた酔ってるわ！」

「少し飲んだだけよ、陽子。大したことない！」彼は笑ったが、音は空虚で、彼女は彼の顔に刻まれた心配の影を見た。

「お金を払ったの？」彼女は尋ね、声は安定していたが緊急感が込められていた。

彼は止まり、笑いが目から消えた。「払ったよ...一部だけど...複雑だわ。少し時間が必要かも」と彼はつぶやき、彼女の視線を避けた。

陽子の心が沈んだ。「一部ってどういう意味？ 彼女は近づき、絶望が声に忍び込んだ。「和夫、彼らは永遠に待たないわよ！」

彼はソファに崩れ落ち、彼の行動の重さが彼にのしかかった。「落ち着け。お金を少し払ったよ」と彼は言って、こめかみをこすり、状況の現実をマッサージで追い払おうとした。

和夫の告白が陽子を強く打った。彼女が愛した男はストレスと恥に溺れ、彼女は無力に感じた。「お金を賭けたの？」彼女は押し、声はささやき以上ではなかった。

「少しだけ」と彼は返し、トーンは防御的だった。

陽子は怒りと失望の波が彼女の中に湧き上がるのを感じた。「私たちにとって、女の子たちにとってこれが何を意味するかわからないわ。あなたは私たち全員を危険に置いたわ。払えなかったら何が起きると思うの？」

「知ってる！」彼は突然叫び、苛立ちが溢れ出した。「でも直面できない！ すべてをまとめようとしてるけど、ただ...多すぎる！」

陽子は深呼吸し、自分を安定させようとした。彼女はいつも彼らのシンプルな人生を信じていたが、今その夢が滑り落ちるように感じた。「一緒にこれに直面する必要があるわ、和夫。一人じゃできないわ。」

彼は彼女を見て、恥が目に見えた。「ごめん、陽子。扱えると思ったわ。」陽子の目に涙があふれ、彼女は平静を保とうと戦った。「自分の行動に責任を取る必要があるわ。私たちは

すべてを恐れて生き続けることはできないわ。お金をどれだけ払ったの？ ほとんどだったと教えて。」

「まあ...半分以上だわ。心配しないで、扱うわ」と彼は瞼を開けようと戦いながら舌足らずに言った。

陽子は夫の失敗を母親に助けを求めて顔を失ったことを彼に言おうとしたが、夫が朝何も覚えていない可能性が高いことに気づき、ただため息をつき、彼をベッドに助け始めた。

陽子の努力のこもった音が家の薄い壁を通り抜け、さゆりを眠りから引き出した。彼女は薄暗い光で瞬き、夢の残骸が彼女が音を登録するにつれ消えた—柔らかく緊張したうめき声、続いて父親の体がドア枠にぶつかる鈍い音。

ぼんやりと混乱し、さゆりは一瞬じっと横たわり、耳を澄ました。母親の声、低く緊張したものが、夜の重い沈黙と混じった。それは彼らの家であまりにも一般的になった馴染みの音だった。和夫は家にいたが、いるべき方法ではなかった。

騒音が続く中—母親のこもった呼び声、足のすり足音—さゆりは胸に緊急の痛みを感じた。彼女はベッドから滑り降り、冷たい床が背筋に震えを送った。静かに彼女は寝室のドアを開け、薄暗い廊下を覗いた。

陽子は夫を上げるのに苦労し、彼の死重が彼女をほぼ圧倒していた。さゆりの心はシーンが展開するのを見て痛んだ。彼女は母親の顔の緊張を見、深く刻まれた心配と絶望の線を見た。それは多くのことを語る表情で、陽子が一人で負う負担の沈黙の証だった。

二度考えず、さゆりは部屋から出て、母親に近づいた。母親は彼女の存在に一瞬驚いた。言葉は交換されなかった；空気の重さがそれらを不要にした。代わりに、さゆりの決意が行動で輝いた。

「ママ、手伝うわ」と彼女は柔らかく言い、父親の腕の下に優しく滑り込んだ。一緒に彼らを上げ、各々がその重さに耐え、寝室に向かって進んだ。各々が彼の体重を負っていたが、静かに協力した。

彼らがようやく和夫をベッドに導くと、さゆりは後ろに下がり、母親がカバーを調整するのを見、各々が布の柔らかなざわめきと重く不均等な呼吸だけが残った静かな部屋の疲労と不均等な呼吸を観察した。

さゆりは内側で決意の波が上がるのを感じた。彼女は両親を助け、痛みと負担を取り除きたかったが、不確かさが彼女を蝕んだ。彼女は何ができるの？ 彼女はただの少女、まだ自分の人生を航行し、青年の無垢さと大人の厳しい現実の間に捕らえられていた。母親が部屋を去ろうと振り向くと、さゆりは手を伸ばし、陽子の腕に優しく触れた。「ママ、大丈夫？」質問が空気に掛かり、懸念の脆弱な糸だった。

陽子は視線を合わせ、誇りと悲しみの混じりが目に見えた。「大丈夫よ、さゆり。ただ疲れただけ」と彼女は返し、感じるより安定した声だった。しかしさゆりはファサードを見抜けた。「手伝いたいわ」と彼女はささやき、言葉は真剣さで満ちていた。「何でもするわ。」

陽子の表情が柔らかくなり、さゆりを短く強く抱きしめた。「あなたはすでに助けているわ、私の優しい子。ただここにいるだけですべてよ。」

薄暗い光で一緒に立っている間、さゆりは希望のちらつきを感じた。彼女はそこで家族を高め、皆が負う負担を軽くする方法を見つけることを決意した。もし答えがまだなかったとしても、彼女は両親が一人で苦闘するのを許さないだろう。

(注: 第14章の翻訳はここまでです。ページ101-105の全文を自然な日本語で翻訳しました。続きの章が必要な場合、指定してください。)

第15章

教室は昼休みの生徒たちの話し声でざわめき、詰められた弁当箱の匂いが空気に満ちていた。さゆりは机に座り、昼食を慎重に開けていた。彼女の弁当は色とりどりで、さまざまな食べ物が入っていた：ふわふわの白ご飯を小さなハート形に成形したもの、鮮やかな漬物、そしてテリヤキチキンの数切れがソースで光沢を放っていた。隣で、あやは自分の弁当を開け、寿司の巻物、小さなサラダ、そして甘い日本の卵焼きである玉子焼きのスライスを露わにした。

「わあ、あなたの昼食すごいわ」とさゆりはあやの食べ物を少し羨ましげに眺めながら言った。

「ありがとう！ ママが今日は張り切ったわ」とあやはにこにこして寿司を一口かじりながら返した。味が口の中で爆発し、彼女はその瞬間を味わい、昼食の心地よい馴染みの感覚を感謝した。食べながら、さゆりの心は彼女の計画で一杯だった。彼女は何日もそのアイデアを頭の中で転がしていたが、それを実現するためにはあやの助けが必要だった。家族の状況の負担が彼女の肩に重くのしかかり、行動する緊急性を感じていた。

「あや」と彼女は始め、声は安定していたが不安が混じっていた。「何か聞いていい？」

「もちろん、何？」あやは弁当から顔を上げ、好奇心を込めて返した。

さゆりは深呼吸し、言葉を慎重に選んだ。「CAVEであなたとあの男の間で何が起きたか本当に聞いたことがないわ。詮索したくないわ。あなたが話したければ話してくれたはず。でも...彼とまだ連絡取ってる？」

あやの表情が少し変わり、驚きと熟考の混じりだった。「渡辺健のこと？ 実際、酔いすぎてあまり覚えてないわ。ぼんやりよ。でも彼と寝てないわ、心配なら。」

さゆりに安堵が広がったが、彼女は続けていた。「じゃあ、彼のこと覚えてるの？」

「うん、名前は覚えてるわ。明らかにヤクザのメンバーよ」とあやは少し軽いトーンで返したが、まだ慎重だった。「ペントハウスに招待されたわ、渋谷グランベルホテルよ。もちろん、行かなかったわ。」

ホテルの言及でさゆりの心臓が速く打った。グランベルは贅沢さで知られ、富豪と権力者が集まる場所だった。「うまく別れたの？」彼女は声が中立を保とうとして尋ねた。

「うん、そうだと思うわ」とあやは少し肩をすくめて言った。「すべてとてもカジュアルだったわ。彼は十分いい人に見えたけど、そんな集団に関わりたくなかったわ。」

深呼吸し、さゆりは依頼の基盤を築くことにした。「お願いがあるの、あや。グランベルホテルと一緒に来てほしいわ。」

あやは眉を上げ、明らかに興味を引かれた。「どうしてそこに行きたいの？ 聞こえが...激しいわ。」

さゆりはためらい、正直になりたい欲求とあまり多くを明かす恐れの間で苦闘した。「渡辺健に適切な紹介が必要なの。彼が父の借金に影響力があるか見てみたいわ。」

あやの目が懸念で広がった。「ヤクザのメンバーに頼むの？ 本当にいいアイデアだと思う？」

「リスクがあるのは知ってるけど、何かするしかないわ。家族が悪い状況で、これが唯一の選択肢だと思うの」とさゆりは声が安定していたが、内側で混乱していた。彼女は学校を辞めることについて真実を避け、代わりに家族の財政危機の絶望に焦点を当てた。あやは友達の顔を研究し、言葉の背後の緊急性を感知した。

「OK、でも彼が助けたくなかったら？」

「何か考えつくわ」とさゆりは返し、友達の自信に微笑んだ。

沈黙の瞬間が過ぎた後、あやはため息をつき、決意が柔らかくなった。とも子をトラブルに巻き込むことでスコアを均等にしたにもかかわらず、あやはまだ彼らの「友情勘定」が均衡していないと感じていた。裏切りは一つのばかげたイタズラより価値があった。

「わかったわ、紹介するわ。でも注意しなくちゃ。私たちは危ないことに巻き込まれたくないわ。」

「ありがとう、あや」とさゆりは感謝で心が膨らみ言った。「私にとって大事よ。」

ベルが鳴り、昼休みの終わりを合図し、教室は生徒たちが次の授業の準備で騒がしくなった。さゆりは内側で目的意識が燃えるのを感じた。彼女には計画があり、あやの助けで少なくとも家族に迫る影に直面するチャンスがある。弁当箱を詰めながら、あやは懸念と友情の混じりでさゆりを見た。

「ただ約束して、注意してね。これはただのゲームじゃないわ。」

「約束するわ」とさゆりは返し、声が固かった。「無謀なことはしないわ。」

決意を定め、二人の友達はその授業に向かい、決定の重みが空気に掛かったが、さゆりの心に希望の炎が燃え始めた。彼女は人生を担当する準備ができていた、いかなる挑戦が待っていても。

さゆりはグランベルホテルの豪華なロビーに緊張して足を踏み入れ、磨かれた木と高価な香水の匂いが空気に濃厚だった。

「こっちよ」とあやは大理石の受付デスクを見つけ、さゆりの肘を器用に導きながら言った。さゆりとあやは並んで歩き、不安な期待で肩が触れ合いながら優雅に着飾った女性がデスクの後ろに座しているところに近づいた。

さゆりは繊細なレースの縁取りの柔らかな白いブラウスを着ており、ハイウエストのチェック柄スカートにきれいにインしていた。彼女の仕立てられたネイビーのブレザーは洗練さを加え、磨かれた黒いローファーが大理石の床に柔らかくクリックと音を立てていた。小さなハンドバッグを握り、指がストラップをいじっていた。

あやはより鮮やかな雰囲気放っていた。ゆったりとした明るい赤のタートルネックが彼女のダークなハイウエストのズボンと美しく対比し、クロップドのレザージャケットが少しエッジを加えていた。チャンキーなヒールのアングルブーツが自信のある歩幅を加え、クロスボディバッグがヒップで軽く揺れていた。

受付デスクに着くと、雰囲気が変わった。ロビーはゲストで賑わっていたが、磨かれた大理石と優雅な装飾がそれを穏やかに感じさせた。さゆりの脳は受付に近づくにつれ凍りつき、戦うか逃げるかの間で選択できず、ただ恐れで麻痺した。あなたならできる！がまん！彼女は自分に言い、心の中でこれからに備えて鋼のように固めた。

「彼が私たちを覚えてなかったら？」さゆりがパニックになり始めた。あやは近づき、彼女の態度が大胆で断定的だった。「私が扱うわ。ただ少し後ろに立って甘く微笑んで。」

さゆりとあやが受付デスクに立っている間、ホテルのロビーの柔らかなざわめきが彼らを囲んだ。優雅な受付係、なめらかなお団子ヘアと仕立てられた制服の女性が温かな笑みで顔を上げた。

「こんにちは、女士たち。渋谷グランベルホテルへようこそ。お手伝いできることは？」

あやは前へ踏み出し、自信が輝いた。「こんにちは！ 渡辺健の友達よ」と彼女はカジュアルなトーンで言った。「たまたま近くにいてこんにちはと言いたかったの。彼はいる？」

受付係の笑みが残ったが、目に好奇心のきらめきが閃いた。「私の名前を聞いていい？」

「あや」と彼女は素早く返し、さゆりに安心を求めるようにちらりと見た。「これが私の友達、さゆりよ。」

「ありがとう、あや。すぐに確認するわ。少し待って。」受付係は電話を拾い、指をボタンの上に置いた。少女たちは彼女が電話に話すのを不安げに見、電話の向こう側で何が起きているか想像した。「渡辺さん？ こんにちは。ここに二人の若い女性がいます。一人が友達でこんにちはと言いたいそうです。」少女たちは彼女が電話に話すのを不安げに見、「わかりました。伝えます。」

彼女は電話を置き、二人の方に向き、「渡辺さんがすぐに降りてきます。お待ちの間、ラウンジエリアでお座りください。」

「どうもありがとう！」あやは興奮が沸き起こり言った。さゆりは安堵と不安の混じりを感じ、プラッシュな座席エリアに向かいながら。彼女たちが座った時、あやは近づき、彼女の声はささやきだった。「ほら？ 簡単！ 彼が来たら自分らしくして。」さゆりはうなずいたが、心は速く打った。

少し後、ロビーのドアが開き、さゆりの心が震えた。健が悠々と入ってくるのを見、存在が命令的だがリラックスしていた。あやは彼女の手を握り、さゆりは深呼吸し、何が来ても備えた。

「なんてサプライズ！」彼は温かな笑みで挨拶し、目に興味が輝いた。「二人の美しい女士たちにまた会えるとは思わなかった。」

「ここに来てとても大胆だったこと謝ります」とあやは簡単に罪人の役割を演じて始めた。「私の友達、さゆりを覚えてるかわからないけど？」

「もちろん！ あの大きな茶色の目を誰が忘れられる？」彼は滑らかに言い、さゆりに微笑んだ。

「えっと、渡辺さん、彼女があなたに言うことがあるわ。とても興味深いと思うわ」とあやは自信を持って発表した。

「それはそう？ 興味深いわ。上がって私のスイートで全部話してくれないか？」彼は招待した。

「ロビーで待ってるわ？」あやは提案し、潜在的な害から友達を守るのと友達のスタイルを邪魔しない欲求の間で引き裂かれた。さゆりはうなずき、あやが離れるにつれ心が速く打った。あやは今健と一人だった。

さゆりはプライベートエレベーターから出るときに畏敬の念を感じた。渡辺健の渋谷グランベルホテルのペントハウススイートは現代的な優雅さと伝統的な日本の美学の息をのむブレンドで、洗練さと快適さを反映していた。広々とした玄関はミニマリストのアートピースと温かな木のアクセントで飾られ、磨かれたオークの丸いテーブルに新鮮な花の花瓶が色を加え、穏やかな雰囲気彩りを添えていた。

彼らは広大なリビングエリアを通り抜け、自然光に浴びていた。床から天井までの窓のおかげで、東京のスカイラインが素晴らしい景色を提供していた。柔らかなトーンのオーバーサイズのソファが低いコーヒーテーブルを中心に配置され、会話を誘う空間を作っていた。柔らかなエリアラグが座席を固定し、壁に味わい深いアートワークと装飾的なランタンが日本の文化を注入していた。

「この道よ」と健は開いた手で示し、暗い木の滑らかなダイニングテーブルが優雅に上からぶら下がる現代的なシャンデリアで照らされたダイニングエリアを通り抜けた。

「ここよ」と彼はオフィスのドアに着くと話し、さゆりが最初に入るよう招いた。

カラーミー印象的、彼女は思い、大きな書斎を調査し、滑らかなデスク、本でいっぱいの本棚、そして快適な椅子が備えられていた。何て素敵な場所！彼女は思い、都市の混沌の中でこの静かな避難所に惹かれた。

「座って」と彼はプラッシュなアームチェアを示した。さゆりは豪華な生地に沈み、彼女のスカートの裾をいじくりながら。「ここで待ってて。」

さゆりは贅沢な生地に沈み、彼女の指がスカートの裾を緊張してねじりながら。健は彼女の向かいに座り、態度が真剣になった。

「あなたが感じるほど重要だと思うことが何でここに来る必要があるの？」

さゆりの心が震えた。「本当に迷惑をかけて申し訳ないわ、渡辺さん！今帰ります！」立ち上がって行く。

「わあ！座って！」健は主張し、顔が笑みに緩んだ。「OK。あなたがここにいるから、何でも話して。OK？」

さゆりは父の借金の話とCAVEナイトクラブで借金取りの一人をどう認識したかを話す間恥ずかしかった。

「父の名前は何？」彼はさゆりが終わると尋ねた。

「市川和夫さん」と彼女は控えめに返した。

「OK。ただ少し電話するわ」と彼は命令し、固定電話を拾ってダイヤルした。

「たくや、市川和夫がまだどれだけ借りてるか知りたいわ。今！」受話器を強く置き。さゆりはこの強力で危険な男に感銘を受け威圧された。

さゆりはプラッシュチェアーに快適に座り、手を膝に組み、胃の神経の震えを落ち着かせようとした。磨かれた木の豊かな香りが角の鉢植えの盆栽の新鮮な緑のヒントと混じっていた。さゆりは好奇心を持って見、彼が立ち上がり、低いテーブルに展示された滑らかなミニマリストのティーセットに優雅に近づいた。セットは美しい現代デザインと伝統的な職人技の融合で、繊細な磁器のカップと深い土のようなティーポットだった。彼は練習された容易さで緑茶を準備し、儀式はほとんど瞑想的だった。

「少しどう？」彼は肩越しに振り返って尋ね、温かな笑みがさゆりの心を震わせた。

「はい、お願いします」と彼女は返し、声はささやき以上ではなかった。

健は湯気の立つ緑茶を二つのカップに注ぎ、液体は鮮やかな翡翠の色だった。彼がカップを持って戻る時、蒸気が上へ渦を巻き、空気に心地よい香りを満たした。

「どうぞ」と彼は言い、彼女の前にカップを置いた、トーンは優しかった。「気に入るといいわ。」

さゆりは指を温かなカップに巻き、慎重に一口飲んだ。お茶は滑らかで少し甘く、彼女を落ち着かせた完璧なバランスだった。

返事の電話を待つ間、雰囲気は語られない緊張で満ちていた。健は後ろに寄り、彼女を強い視線で見ている。

「あなたのような忠誠心の種類は賞賛に値するわ。人生で遠くへ連れて行くわ。」

彼らは快適な沈黙で瞬間座り、カップの柔らかなチリンという音だけが静けさを破った。さゆりは健を盗み見し、心は先の挑戦と彼を取り巻く謎で一杯だった。

ちょうどその時、健のデスクの電話が鳴り、瞬間を破った。彼は前へ傾き、落ち着いた自信で拾った。「渡辺」と彼は答え、熱心に聞きながら態度がビジネスライクに変わった。さゆりは彼を見、温かく招待的なホストからコントロールする命令的な人物へどう簡単に移行するかを注視した。短い会話の後、彼は電話を置き、さゆりを見て、少し笑みが戻った。

「それはいいニュースよ。あなたのお父さんがすでに借金の半分以上を払ったようだわ。」

彼が話す間、さゆりは決意の波を感じ、彼の存在に励まされた。外の世界は威圧的かも知れないが、この瞬間、お茶の温かさと健の励ましの言葉で、彼女は先にあるものを向き合うより自信を感じた。

「私はこうするわ。こんなに決意した若い女子高生が私に近づいてお願いするのを見たことがないわ。あなたの勇気が私を感銘させたわ。だからあなたと取引するわ」と彼は言い、机に肘を置き、指を組み合わせて一顔に楽しげな表情で。さゆりは針の上のようだった。

彼は何を言おうとしてるの？ 彼女は心配した。彼女の胃はウナギの軍隊が戦っているように感じ、息を止めていることに気づいた。

「あなたが助けてくれれば—メッセージを届け、用事を実行—家族の借金を払うのを助けられるわ」と彼は説明し、声は絹のように滑らかだった。「あなたがコントロールを取る方法よ。」

彼女は眉をひそめ、彼の言葉の重さを沈ませた。「どんな用事？」

「主にシンプルなもの。パッケージを拾い、重要な文書を届け、軽い監視かも」と彼は返し、視線が安定していた。

「でも知ってるべきよ、リスクが伴うわ」と健は続けた。

「リスク？」さゆりは繰り返し、心臓がドキドキした。含意は威圧的だったが、家族の負担を軽減する考えは魅力的だった。

健は少し前傾し、彼の魅力は否定できなかった。「私は嘘をつかないわ、さゆり。この世界は安全じゃないわ。でもあなたに可能性を見てるわ。あなたは決意があり、遠くへ行くとするわ。」

さゆりは彼の褒め言葉で頬が熱くなり、年齢差にもかかわらず—彼は少なくとも25歳年上—彼の自信と力に惹かれずにはいられなかった。

「保証が必要わ」と彼女はついに言い、声が安定した。「これをするなら、父の借金が清算されたと言い、将来の支払いを拒否しなくちゃ。」

健の表情が柔らかくなり、彼はゆっくりうなずいた。「それに同意できるわ。私の言葉よ。」

安堵が彼女を洗い、合意のスリルと混じった。彼らは緑茶を共有し、温かな蒸気が彼らの間で渦を巻き、彼が彼女に励ましの褒め言葉を織り交ぜながら話した。

「あなたはただの女子高生じゃないわ」と彼は賞賛のヒントを込めて言った。「戦士の精神を持ってるわ。人生で遠くへ連れて行くわ。ガマン。」

さゆりは膝を見て心臓が震え、もう一度頬が熱くなった。彼らの間の化学は否定できなかったが、心の中で障壁が大きく迫っていた。

お茶が終わると、健は立ち上がり、手を差し出した。握手は長く、彼の握りは固いが優しく、彼女の背筋に震えを送った。「学校の後、明日のホテルロビーに来て、山田なでしこ」と健は言い、優雅さ、優雅さ、そして謙虚さのような美德を体現する伝統的な日本の女性の理想像を指す褒め言葉を使った。

「は-はい！」彼女は震え、息を止めながら引き抜いた。彼が彼女をエレベーターにエスコートする時、「たくやが受付であなたに会うわ。到着したら受付で彼を呼んで。彼が指示を与えるわ。OK？」

「はい！」彼女は同意し、頭を下げた。

ペントハウスエレベーターから出ると、ロビーは人生で賑わっていたが、彼女の心は健と彼らの会話で一杯だった。彼女はあやを見つけ、あやは待ちわびていた。

「何が起きたの？ 何て言ったの？」あやは質問で彼女を砲撃し、東京の賑やかな通りに出て。

さゆりはためらい、どれだけ明かすか選んだ。「彼...家族を助けるのを申し出たわ。彼のために用事をするわ。」

あやの目が広がった。「用事？ どんなの？ 危険？」

さゆりは唇を噛み、不安と期待の混じりを感じた。「ただ物を届けるの。彼は父の借金をクリアするって言ったわ。」

「ヤクザがあなたを助けてる？ これは大きいわ、さゆり！」あやは興奮と懸念の混じりで叫んだ。「でもこれについて確か？ トラブルに巻き込まれたら？」

「知ってるわ」とさゆりは返し、決定の重みが肩にのしかかった。「でも何かするわ。家族が苦しむのをただ座って見てられないわ。」あやは彼女を見て、賞賛と懸念の混じりで目が輝いた。

「ただ注意してね。あなたが踏み込む世界がどんなかわからないわ。」

「するわ」とさゆりは約束し、彼女の決定の重みが肩にのしかかった。

「彼は私をやまと撫子って呼んだわ」とさゆりは言った。

「日本の伝統的な娘」とあやは言った。「それは褒め言葉だと思うわ、さゆり」とあやは微笑んだ。「彼はあなたを気に入ってるようね。」

さゆりは頬を赤らめた。「彼は私よりずっと年上よ。二度とそんなことは起きないと思うわ。」

「まあ、一部の人は年齢はただの数字だと言うわ」とあやはコメントした。

「彼はハンサムで全部だけど、私は父の借金を払うことにしか興味ないわ—それ以外は何もないわ」とさゆりは疑わしい誠実さで言った。

「あなたが言う通りよ、私の友達」とあやはからかいながら言った。

家に向かいながら、東京の通りは人生で賑わっていたが、さゆりが考えられるのは彼女が選んだ道と彼女の中に炎を点火した謎めいた男だけだった。<|control12|>### 第15章

教室は昼休みの生徒たちの話し声でざわめき、詰められた弁当箱の匂いが空気に満ちていた。さゆりは机に座り、昼食を慎重に開けていた。彼女の弁当は色とりどりで、さまざまな食べ物が入っていた：ふわふわの白ご飯を小さなハート形に成形したもの、鮮やかな漬物、そしてテリヤキチキンの数切れがソースで光沢を放っていた。隣で、あやは自分の弁当を開け、寿司の巻物、小さなサラダ、そして甘い日本の卵焼きである玉子焼きのスライスを露わにした。

「わあ、あなたの昼食すごいわ」とさゆりはあやの食べ物を少し羨ましげに眺めながら言った。

「ありがとう！ ママが今日は張り切ったわ」とあやはにこにこして寿司を一口かじりながら返した。味が口の中で爆発し、彼女はその瞬間を味わい、昼食の心地よい馴染みの感覚を感謝した。食べながら、さゆりの心は彼女の計画で一杯だった。彼女は何日もそのアイデアを頭の中で転がしていたが、それを実現するためにはあやの助けが必要だった。家族の状況の負担が彼女の肩に重くのしかかり、行動する緊急性を感じていた。

「あや」と彼女は始め、声は安定していたが不安が混じっていた。「何か聞いていい？」

「もちろん、何？」あやは弁当から顔を上げ、好奇心を込めて返した。

さゆりは深呼吸し、言葉を慎重に選んだ。「CAVEであなたとあの男の間で何が起きたか本当に聞いたことがないわ。詮索したくないわ。あなたが話したければ話してくれたはず。でも...彼とまだ連絡取ってる？」

あやの表情が少し変わり、驚きと熟考の混じりだった。「渡辺健のこと？ 実際、酔いすぎてあまり覚えてないわ。ぼんやりよ。でも彼と寝てないわ、心配なら。」

さゆりに安堵が広がったが、彼女は続けていた。「じゃあ、彼のこと覚えてるの？」

「うん、名前は覚えてるわ。明らかにヤクザのメンバーよ」とあやは少し軽いトーンで返したが、まだ慎重だった。「penthouseに招待されたわ、渋谷グランドホテルよ。もちろん、行かなかったわ。」

ホテルの言及でさゆりの心臓が速く打った。グランドホテルは贅沢さで知られ、富豪と権力者が集まる場所だった。「うまく別れたの？」彼女は声が中立を保とうとして尋ねた。

「うん、そうだと思うわ」とあやは少し肩をすくめて言った。「すべてとてもカジュアルだったわ。彼は十分いい人に見えたけど、そんな集団に関わりたくなかったわ。」

深呼吸し、さゆりは依頼の基盤を築くことにした。「お願いがあるの、あや。グランドホテルと一緒に来てほしいわ。」

あやは眉を上げ、明らかに興味を引かれた。「どうしてそこに行きたいの？ 聞こえが...激しいわ。」

さゆりはためらい、正直になりたい欲求とあまり多くを明かす恐れの間で苦闘した。「渡辺健に適切な紹介が必要なの。彼が父の借金に影響力があるか見てみたいわ。」

あやの目が懸念で広がった。「ヤクザのメンバーに頼むの？ 本当にいいアイデアだと思う？」

「リスクがあるのは知ってるけど、何かするしかないわ。家族が悪い状況で、これが唯一の選択肢だと思うの」とさゆりは声が安定していたが、内側で混乱していた。彼女は学校を辞めることについて真実を避け、代わりに家族の財政危機の絶望に焦点を当てた。あやは友達の顔を研究し、言葉の背後の緊急性を感知した。

「OK、でも彼が助けたくなかったら？」

「何か考えつくわ」とさゆりは返し、友達の自信に微笑んだ。

沈黙の瞬間が過ぎた後、あやはため息をつき、決意が柔らかくなった。とも子をトラブルに巻き込むことでスコアを均等にしたにもかかわらず、あやはまだ彼らの「友情勘定」が均衡していないと感じていた。裏切りは一つのばかげたイタズラより価値があった。

。

「わかったわ、紹介するわ。でも注意しなくちゃ。私たちは危ないことに巻き込まれたくないわ。」

「ありがとう、あや」とさゆりは感謝で心が膨らみ言った。「私にとって大事よ。」

ベルが鳴り、昼休みの終わりを合図し、教室は生徒たちが次の授業の準備で騒がしくなった。さゆりは内側で目的意識が燃えるのを感じた。彼女には計画があり、あやの助けで少なくとも家族に迫る影に直面するチャンスがある。弁当箱を詰めながら、あやは懸念と友情の混じりでさゆりを見た。

「ただ約束して、注意してね。これはただのゲームじゃないわ。」

「約束するわ」とさゆりは返し、声が固かった。「無謀なことはしないわ。」

決意を定め、二人の友達は次の授業に向かい、決定の重みが空気に掛かったが、さゆりの心に希望の炎が燃え始めた。彼女は人生を担当する準備ができていた、いかなる挑戦が待っていても。

さゆりはグランベルホテルの豪華なロビーに緊張して足を踏み入れ、磨かれた木と高価な香水の匂いが空気に濃厚だった。

「こっちよ」とあやは大理石の受付デスクを見つけ、さゆりの肘を器用に導きながら言った。さゆりとあやは並んで歩き、不安な期待で肩が触れ合いながら優雅に着飾った女性がデスクの後ろに座しているところに近づいた。

さゆりは繊細なレースの縁取りの柔らかな白いブラウスを着ており、ハイウエストのチェック柄スカートにきれいにインしていた。彼女の仕立てられたネイビーのブレザーは洗練さを加え、磨かれた黒いローファーが大理石の床に柔らかくクリックと音を立てていた。小さなハンドバッグを握り、指がストラップをいじっていた。

あやはより鮮やかな雰囲気放っていた。ゆったりとした明るい赤のタートルネックが彼女のダークなハイウエストのズボンと美しく対比し、クロップドのレザージャケットが少しエッジを加えていた。チャンキーなヒールのアンクルブーツが自信のある歩幅を加え、クロスボディバッグがヒップで軽く揺れていた。

受付デスクに着くと、雰囲気が変わった。ロビーはゲストで賑わっていたが、磨かれた大理石と優雅な装飾がそれを穏やかに感じさせた。さゆりの脳は受付に近づくにつれ凍りつき、戦うか逃げるかの間で選択できず、ただ恐れで麻痺した。あなたならできる！がまん！彼女は自分に言い、心の中でこれからに備えて鋼のように固めた。

「彼が私たちを覚えてなかったら？」さゆりがパニックになり始めた。あやは近づき、彼女の態度が大胆で断定的だった。「私が扱うわ。ただ少し後ろに立って甘く微笑んで。」

さゆりとあやが受付デスクに立っている間、ホテルのロビーの柔らかなざわめきが彼らを囲んだ。優雅な受付係、なめらかなお団子ヘアと仕立てられた制服の女性が温かな笑みで顔を上げた。

「こんにちは、女士たち。渋谷グランベルホテルへようこそ。お手伝いできることは？」

あやは前へ踏み出し、自信が輝いた。「こんにちは！ 渡辺健の友達よ」と彼女はカジュアルなトーンで言った。「たまたま近くにいてこんにちはと言いたかったの。彼はいる？」

受付係の笑みが残ったが、目に好奇心のきらめきが閃いた。「私の名前を聞いていい？」

「あや」と彼女は素早く返し、さゆりに安心を求めるようにちらりと見た。「これが私の友達、さゆりよ。」

「ありがとう、あや。すぐに確認するわ。少し待って。」受付係は電話を拾い、指をボタンの上に置いた。少女たちは彼女が電話に話すのを不安げに見、「わかりました。伝えます。」

彼女は電話を置き、二人の方に向き、「渡辺さんがすぐに降りてきます。お待ちの間、ラウンジエリアでお座りください。」

「どうもありがとう！」あやは興奮が沸き起こり言った。さゆりは安堵と不安の混じりを感じ、プラッシュな座席エリアに向かいながら。彼女たちが座った時、あやは近づき、彼女の声はささやきだった。「ほら？ 簡単！ 彼が来たら自分らしくして。」さゆりはうなずいたが、心は速く打った。

少し後、ロビーのドアが開き、さゆりの心が震えた。健が悠々と入ってくるのを見、存在が命令的だがリラックスしていた。あやは彼女の手を握り、さゆりは深呼吸し、何が来ても備えた。

「なんてサプライズ！」彼は温かな笑みで挨拶し、目に興味が輝いた。「二人の美しい女士たちにまた会えるとは思わなかった。」

「ここに来てとても大胆だったこと謝ります」とあやは簡単に罪人の役割を演じて始めた。「私の友達、さゆりを覚えてるかわからないけど？」

「もちろん！ あの大きな茶色の目を誰が忘れられる？」彼は滑らかに言い、さゆりに微笑んだ。

「えっと、渡辺さん、彼女があなたに言うことがあるわ。とても興味深いと思うわ」とあやは自信を持って発表した。

「それはそう？ 興味深いわ。上がって私のスイートで全部話してくれないか？」彼は招待した。

「ロビーで待ってるわ？」あやは提案し、潜在的な害から友達を守るのと友達のスタイルを邪魔しない欲求の間で引き裂かれた。さゆりはうなずき、あやが離れるにつれ心が速く打った。あやは今健と一人だった。

さゆりはプライベートエレベーターから出るときに畏敬の念を感じた。渡辺健の渋谷グランベルホテルのペントハウススイートは現代的な優雅さと伝統的な日本の美学の息をのむブレンドで、洗練さと快適さを反映していた。広々とした玄関はミニマリストのアートピースと温かな木のアクセントで飾られ、磨かれたオークの丸いテーブルに新鮮な花の花瓶が色を加え、穏やかな雰囲気彩りを添えていた。

彼らは広大なリビングエリアを通り抜け、自然光に浴びていた。床から天井までの窓のおかげで、東京のスカイラインが素晴らしい景色を提供していた。柔らかなトーンのオーバーサイズのソファが低いコーヒーテーブルを中心に配置され、会話を誘う空間を作っていた。柔らかなエリアラグが座席を固定し、壁に味わい深いアートワークと装飾的なランタンが日本の文化を注入していた。

「この道よ」と健は開いた手で示し、暗い木の滑らかなダイニングテーブルが優雅に上からぶら下がる現代的なシャンデリアで照らされたダイニングエリアを通り抜けた。

「ここよ」と彼はオフィスのドアに着くと話し、さゆりが最初に入るよう招いた。

カラーミー印象的、彼女は思い、大きな書斎を調査し、滑らかなデスク、本でいっぱいの本棚、そして快適な椅子が備えられていた。何て素敵な場所！ 彼女は思い、都市の混沌の中でこの静かな避難所に惹かれた。

「座って」と彼はプラッシュなアームチェアを示した。さゆりは豪華な生地に沈み、彼女のスカートの裾をいじくりながら。「ここで待ってて。」

さゆりは贅沢な生地に沈み、彼女の指がスカートの裾を緊張してねじりながら。健は彼女の向かいに座り、態度が真剣になった。

「あなたが感じるほど重要だと思うことが何でここに来る必要があるの？」

さゆりの心が震えた。「本当に迷惑をかけて申し訳ないわ、渡辺さん！ 今帰ります！」立ち上がって行く。

「わあ！ 座って！」健は主張し、顔が笑みに緩んだ。「OK。あなたがここにいるから、何でも話して。OK？」

さゆりは父の借金の話とCAVEナイトクラブで借金取りの一人をどう認識したかを話す間恥ずかしかった。

「父の名前は何？」彼はさゆりが終わると尋ねた。

「市川和夫さん」と彼女は控えめに返した。

「OK。ただし電話するわ」と彼は命令し、固定電話を拾ってダイヤルした。

「たくや、市川和夫がまだどれだけ借りてるか知りたいわ。今！」受話器を強く置き。さゆりはこの強力で危険な男に感銘を受け威圧された。

さゆりはブラッシュチェアーに快適に座り、手を膝に組み、胃の神経の震えを落ち着かせようとした。磨かれた木の豊かな香りが角の鉢植えの盆栽の新鮮な緑のヒントと混じっていた。さゆりは好奇心を持って見、彼が立ち上がり、低いテーブルに展示された滑らかなミニマリスタのティーセットに優雅に近づいた。セットは美しい現代デザインと伝統的な職人技の融合で、繊細な磁器のカップと深い土のようなティーポットだった。彼は練習された容易さで緑茶を準備し、儀式はほとんど瞑想的だった。

「少しどう？」彼は肩越しに振り返って尋ね、温かな笑みがさゆりの心を震わせた。

「はい、お願いします」と彼女は返し、声はささやき以上ではなかった。

健は湯気の立つ緑茶を二つのカップに注ぎ、液体は鮮やかな翡翠の色だった。彼がカップを持って戻る時、蒸気が上へ渦を巻き、空気に心地よい香りを満たした。

「どうぞ」と彼は言い、彼女の前にカップを置いた、トーンは優しくかった。「気に入るといいわ。」

さゆりは指を温かなカップに巻き、慎重に一口飲んだ。お茶は滑らかで少し甘く、彼女を落ち着かせた完璧なバランスだった。

返事の電話を待つ間、雰囲気は語られない緊張で満ちていた。健は後ろに寄り、彼女を強い視線で見ている。

「あなたのような忠誠心の種類は賞賛に値するわ。人生で遠くへ連れて行くわ。」

彼らは快適な沈黙で瞬間座り、カップの柔らかなチリンという音だけが静けさを破った。さゆりは健を盗み見し、心は先の挑戦と彼を取り巻く謎で一杯だった。

ちょうどその時、健のデスクの電話が鳴り、瞬間を破った。彼は前へ傾き、落ち着いた自信で拾った。「渡辺」と彼は答え、熱心に聞きながら態度がビジネスライクに変わった。さゆりは彼を見、温かく招待的なホストからコントロールする命令的な人物へどう簡単に移行するかを注視した。短い会話の後、彼は電話を置き、さゆりを見て、少し笑みが戻った。

「それはいいニュースよ。あなたのお父さんがすでに借金の半分以上を払ったようだよ。」

彼が話す間、さゆりは決意の波を感じ、彼の存在に励まされた。外の世界は威圧的かも知れないが、この瞬間、お茶の温かさと健の励ましの言葉で、彼女は先にあるものを向き合うより自信を感じた。

「私はこうするわ。こんなに決意した若い女子高生が私に近づいてお願いするのを見たことがないわ。あなたの勇気が私を感銘させたわ。だからあなたと取引するわ」と彼は言い、机に肘を置き、指を組み合わせて一顔に楽しげな表情で。さゆりは針の上のようだった。

彼は何を言おうとしてるの？ 彼女は心配した。彼女の胃はウナギの軍隊が戦っているように感じ、息を止めていることに気づいた。

「あなたが助けてくれれば—メッセージを届け、用事を実行—家族の借金を払うのを助けられるわ」と彼は説明し、声は絹のように滑らかだった。「あなたがコントロールを取る方法よ。」

彼女は眉をひそめ、彼の言葉の重さを沈ませた。「どんな用事？」

「主にシンプルなもの。パッケージを拾い、重要な文書を届け、軽い監視かも」と彼は返し、視線が安定していた。

「でも知ってるべきよ、リスクが伴うわ」と健は続けた。

「リスク？」さゆりは繰り返し、心臓がドキドキした。含意は威圧的だったが、家族の負担を軽減する考えは魅力的だった。

健は少し前傾し、彼の魅力は否定できなかった。「私は嘘をつかないわ、さゆり。この世界は安全じゃないわ。でもあなたに可能性を見てるわ。あなたは決意があり、遠くへ行くとするわ。」

さゆりは彼の褒め言葉で頬が熱くなり、年齢差にもかかわらず―彼は少なくとも25歳年上―彼の自信と力に惹かれずにはいられなかった。

「保証が必要わ」と彼女はついに言い、声が安定した。「これをするなら、父の借金が清算されたと言い、将来の支払いを拒否しなくちゃ。」

健の表情が柔らかくなり、彼はゆっくりうなずいた。「それに同意できるわ。私の言葉よ。」

安堵が彼女を洗い、合意のスリルと混じった。彼らは緑茶を共有し、温かな蒸気が彼らの間で渦を巻き、彼が彼女に励ましの褒め言葉を織り交ぜながら話した。

「あなたはただの女子高生じゃないわ」と彼は賞賛のヒントを込めて言った。「戦士の精神を持ってるわ。人生で遠くへ連れて行くわ。ガマン。」

さゆりは膝を見て心臓が震え、もう一度頬が熱くなった。彼らの間の化学は否定できなかったが、心の中で障壁が大きく迫っていた。

お茶が終わると、健は立ち上がり、手を差し出した。握手は長く、彼の握りは固いが優しく、彼女の背筋に震えを送った。「学校の後、明日のホテルロビーに来て、やまとなでしこ」と健は言い、優雅さ、優雅さ、そして謙虚さのような美德を体現する伝統的な日本の女性の理想像を指す褒め言葉を使った。

「は-はい！」彼女は震え、息を止めながら引き抜いた。彼が彼女をエレベーターにエスコートする時、「たくやが受付であなたに会うわ。到着したら受付で彼を呼んで。彼が指示を与えるわ。OK？」

「はい！」彼女は同意し、頭を下げた。

ペントハウスエレベーターから出ると、ロビーは人生で賑わっていたが、彼女の心は健と彼らの会話で一杯だった。彼女はあやを見つけ、あやは待ちわびていた。

「何が起きたの？ 何て言ったの？」あやは質問で彼女を砲撃し、東京の賑やかな通りに出て。

さゆりはためらい、どれだけ明かすか選んだ。「彼...家族を助けるのを申し出たわ。彼のために用事をするわ。」

あやの目が広がった。「用事？ どんなの？ 危険？」

さゆりは唇を噛み、不安と期待の混じりを感じた。「ただ物を届けるの。彼は父の借金をクリアするって言ったわ。」

「ヤクザがあなたを助けてる？ これは大きいわ、さゆり！」あやは興奮と懸念の混じりで叫んだ。「でもこれについて確か？ トラブルに巻き込まれたら？」

「知ってるわ」とさゆりは返し、決定の重みが肩にのしかかった。「でも何かするわ。家族が苦しむのをただ座って見てられないわ。」あやは彼女を見て、賞賛と懸念の混じりで目が輝いた。

「ただ注意してね。あなたが踏み込む世界がどんなかわからないわ。」

「するわ」とさゆりは約束し、彼女の決定の重みが肩にのしかかった。

「彼は私をやまと撫子って呼んだわ」とさゆりは言った。

「日本の伝統的な娘」とあやは言った。「それは褒め言葉だと思うわ、さゆり」とあやは微笑んだ。「彼はあなたを気に入ってるようね。」

さゆりは頬を赤らめた。「彼は私よりずっと年上よ。二度とそんなことは起きないと思うわ。」

「まあ、一部の人は年齢はただの数字だと言うわ」とあやはコメントした。

「彼はハンサムで全部だけど、私は父の借金を払うことにしか興味ないわ—それ以外は何もないわ」とさゆりは疑わしい誠実さで言った。

「あなたが言う通りよ、私の友達」とあやはからかいながら言った。

家に向かいながら、東京の通りは人生で賑わっていたが、さゆりが考えられるのは彼女が選んだ道と彼女の中に炎を点火した謎めいた男だけだった。

(注: 第15章の翻訳はここまでです。ページ106-114の全文を自然な日本語で翻訳しました。続きの章が必要な場合、指定してください。)

第16章

さゆりはブレザーを調整し、神経と興奮の混じった感情が体を駆け巡っていた。一日の学校の後、彼女は今ヤクザの仕事の馴染みのない世界に身を置いていた。彼女の保護された生活とは対照的だった。

渋谷の賑やかな通りを歩くのは、自分の部屋に家にいる代わりに奇妙に感じた。それは爽快で威圧的だった。彼女は学校にスマートな服の着替えを持って行き、アーケードのトイレで素早く着替え、グランベルホテルのロビーでたくやに会う前にした。

さゆりはたくやが30代前半だと推定した。彼は6フィート少し下くらいの身長で、細身で運動的な体格で、力と敏捷性を示唆していた。彼の真っ黒な髪はポマードで少し光り、後ろに滑らかに梳かされていた。彼の特徴は鋭く、顕著な顎のラインと高い頬骨があった。彼女が彼の濃い茶色の目を見ると、知性と危険のヒントが見えた。

左の眉に沿って微妙な傷跡があり、彼の過去の経験の証で、荒々しい魅力を与えていたが、彼の態度は落ち着いて断定的だった。この段階で、彼女は彼が組織の舎弟であることを知らなかったが、すぐに彼と彼の階級の他の人々が演じる複雑な役割を知ることになる。今、彼は彼女の横を歩き、彼の存在が彼女の新しい役割の重さを思い出させた。彼はシャープな黒いスーツを着ており、目が練習された警戒で周囲をスキャンしていた。彼は歩きながらさゆりにミッションを説明した。

「覚えておいて、さゆり」と彼は低い声で言った。「あなたは銀行の会長に手紙を届けるの。これがスムーズにいくのが重要よ。」

さゆりは頷き、心臓が喉で鼓動した。「彼が質問したらどうするの？」

「脚本に忠実に。あなたはメッセンジャー、それ以上じゃない。」たくやのトーンは固いが親切ではなかった。「私はここロビーで待ってる。手紙を届け、パッケージを待って、それなしで戻ってこないで。」

「はい！」彼女は神経質に返した。

彼らは滑らかな現代的な銀行の建物に着き、ガラスのファサードが都市の活気を反射していた。さゆりは涼しい内部に踏み入り、ヒールが磨かれた床にクリックと音を立てた。ロビーは専門家たちで賑わい、彼らの声が柔らかな器楽音楽の背景に対して低くハム音を立てていた。たくやは彼女が進むようジェスチャーした。「私はここにいる」と彼は言い、表情は真剣だった。「あなたならできる。」

深呼吸をし、さゆりは肩を正し、会長の階のボタンを押し、エレベーターに向かった。彼女はエンベロープをしっかりと手に持ち、都市の音が消えるにつれ一瞬の孤立を感じた。ドアが開くと、彼女は現代的なアートで飾られた滑らかな廊下に踏み入れた。彼女は会長のオフィスに向かい、声が彼女を驚かせた。「午後よろしいですか、お嬢さん。今日はどうお手伝いできますか？」

さゆりは驚いて振り向き、声の出所を探した。炭色のズボンスーツの女性が廊下の凹みに巧みに隠された受付で座っていた。さゆりは彼女が50歳近いと思うが、プロフェッショナルなアップドゥの髪と控えめなメイクで判断しにくかった。

素早く自分を落ち着かせ、彼女は自信を持って受付デスクに向かい、「午後よろしいですか。松本会長に緊急の手紙があります。手渡しで届けるよう指示されています」と言った。

秘書はさゆりを信じられないように見つめた、まるでこの若い女子高生が誰だと思っているの、ここを自分のように歩き回るなんて、しかし彼女の表情はプロフェッショナルで少し警戒的だった。

秘書はさゆりの目を見つめ、威圧しようとして厳しく言った、「申し訳ありませんが、私に預けてください。松本さんは今日アポイントメントで忙しいです。」

さゆりは失望のちらつきを感じたが、たくやが与えた脚本を思い出した。「実は、手渡しでこの手紙を届けるよう指示されています。とても重要です。渡辺健からよ。」

渡辺健の名前の言及で、秘書の態度が変わった。彼女は椅子に後ろにもたれ、興味を引かれた。「渡辺健？」彼女は繰り返し、声にパニックのヒントが混じった。「確か？」

「はい」とさゆりは返し、自信が膨らんだ。「彼が個人的に届けるよう頼んだわ。」

秘書はこれを一瞬考え、壁の時計をちらりと見た。短い間を置いた後、彼女は頷いた。「まあ、渡辺さんからなら例外を作れます。お座りください」と彼女は申し出、さゆりに神経質に微笑んだ。さゆりに安堵が広がり、彼女は前へ踏み入り、心臓が興奮と不安の混じりで鼓動した。

「ありがとうございます」と彼女は熱心に言った。

秘書が受付で座り直し、電話を取った。「はい！」彼女は答えた、会長のラインだと知っていた。

数秒後、彼女は急いで会長のオフィスに入り、小さなジュエリーボックスを持って戻ってきた。

「ちょっと待って。これをギフトバッグに入れてあげる」と彼女は文房具の棚を開けながら言った。「どうぞ」と彼女はさゆりにギフトバッグを渡しながらか言った。

「ありがとう」とさゆりは返し、安堵と誇りの混じりを感じた。オフィスを出ると、秘書は彼女に小さな笑みを差し出し、彼女の成功の沈黙の承認だった。さゆりは興奮のラッシュを感じた；彼女は最初のハードルをうまく乗り越え、一瞬、ヤクザの世界が少し威圧的ではなく感じた。彼女がオフィスから出ると、彼女は少しオフな感覚を振り払えなかった。ロビーに戻ると、彼女は待っているかも知れないたくやを見つけ、彼の表情は読み取れなかった。

「パッケージ取った？」彼はトーンが中立的に尋ねた。

「はい！」彼女は誇りと不安の混じりを感じて返した。「これ」と彼女はギフトバッグを渡しながらか言った。

「中は何？」彼女は彼の目に深刻さを見てささやいた。

たくやの表情が少し暗くなった。「命令に従うことの重要性の思い出だけよ。」

さゆりの背筋に寒気が走ったが、彼女はその感覚を押しやった。

「今行ける？」

「まだよ。まず内容を確認しなくちゃ。」彼は彼女をロビーの静かな角に導き、覗き見る目から離れた。

畏怖で、さゆりはギフトバッグからジュエリーボックスを取り出し、慎重に開けた、細長い物体が血まみれのハンカチに包まれているのを明らかにした。彼女がゆっくり解くと、心臓が速く打った。これは何？ 彼女は自分に思った。

たくやの表情は読み取れず、彼は会長の新鮮に切断された小指の先を明らかにした。

「これは教訓よ」と彼は彼女の心を読めるように言った、「命令に従わない人々のために。」

さゆりの目が広がり、気づきが彼女を打った。「どういう意味？」

「指詰め」と彼は返し、声が低い。「忠誠心が試される時に何が起きるかの思い出よ。」

パニックが彼女の中に湧き上がったが、彼女はそれを新鮮に示すのをよく知っていた。たくやはボックスを閉め、ギフトバッグに戻し、彼の態度は落ち着きに戻った。

「今行こう。」

彼らが銀行から出ると、さゆりは恐怖と決意の混じりを感じた。この世界は彼女が想像したより暗かったが、彼女は今それの中にいて、後戻りはなかった。

健のホテルに戻り、たくやとさゆりはロビーに入った。

「今日はそれだけよ」とたくやは言い、ジャケットのポケットに手を入れ、厚めの封筒を取り出して彼女に渡した。「これを持って。」

「見なくちゃ？」さゆりはたくやの厳しい顔を上目で見ながら困惑して尋ねた。

「お金が好きなら」と彼はにやりとして返した。

「でも借金を払うために働いてると思ったわ」と彼女は声にパニックが上がり言った。

「そうよ。ボスはあなたが素敵な服を買うのを望んでるわ。あなたがいる女子高生のよう見えたくないわ。心配しないで、それは借金の一部じゃないわ。仕事の特典だと考えて。」

さゆりは言葉を失った。彼女は素早く封筒をバッグに入れ、適切な返事を探した。しかし諦めた。

「何と言えればいいかわからないわ」と彼女は告白した。

たくやは彼女にウインクをし、「今日はよくやったわ。明日は1時間遅く来ていいわ。

「買い物に行って。それは命令よ」と彼は笑って彼女を手で追い払った。

(注: 第16章の翻訳はここまでです。ページ115-119の全文を自然な日本語で翻訳しました。続きの章が必要な場合、指定してください。)

第17章

興奮した話し声が部屋に満ち、生徒たちが席に着いていた。さゆりは座り、過去数日の出来事がまだ頭の中でざわめいていた。雰囲気は馴染みのあるものだったが、彼女は自分の人生を遠くから観察しているような断絶感を感じていた。

ホームルームの担任である松本先生がクラスの前に立ち、点呼を始める声が安定していた。「青木」と彼女は呼び、生徒たちは「います！」の合唱で応えた。名前のリズムが背景で響いていたが、さゆりは集中しにくかった。新しい責任の考えが彼女の心に大きなのしかかり、ヤクザのための秘密の仕事の重さが彼女を押しつぶしていた。

「市川さゆり」と松本先生は出席簿から顔を上げ、少しトーンを変えて言った。さゆりは手を上げ、「います」と返事した、声はささやき以上ではなかった。

点呼が続く間、さゆりは松本先生の目に何かちらつくものを気づいた—おそらく懸念や好奇心だったが、それはすぐに消えた。点呼が終わると、教室は生徒たちが週末の計画を議論するざわめきに満ちた。

「クラス、静かに」と松本先生は指示し、声は固いが優しくかった。生徒たちは静まり、彼女はその日の授業を説明し始めた。しかしさゆりの考えは再び漂い、彼女の行動の含意と家族にのしかかる借金で頭がいっぱいだった。

授業が終わると、ベルが鳴り、ホームルームの終わりを合図した。生徒たちがぞろぞろ出ていく中、松本先生はさゆりをクラスの前に呼んだ。「さゆり、少しここに来て。」

さゆりは机に近づき、心臓が少し速く打った。「はい、松本先生？」

先生は誰も聞いていないか確認してから近づいた。「これをあげるわ。」彼女は折りたたまれたメモをさゆりの手に滑り込ませた。「今日の学校が終わる前にこれを一人で読んで。重要よ。そして誰にも言わないで。」

さゆりは興味と不安の混じった震えを感じた。「わかりました」と返事し、指示通り一人で読むためにポケットにメモをしまった。「すべて大丈夫ですか？」

松本先生は優しく微笑んだが、目に緊張の兆しがあった。「ただいくつか共有したい助言よ。後でわかるわ。覚えてて、誰にも言わないで。」

もちろん、さゆりは瞬間を察し、去った。好奇心が彼女をかじり、席に戻る間、松本先生が秘密で何を議論したいのかを考えた。

最後のベルが鳴り、学校の日終わりを合図し、さゆりは物を集め、賑やかな廊下に踏み入れた。生徒たちが廊下を埋め、笑い声と話し声が響いていたが、彼女の心は別のところにあった。あやを待つ学校の門に向かい、考えはメモに占められていた。

外に出ると、彼女は冬の枝にまだしがみついている桜の木の列の近くの静かな隅を見つけた。空気は爽やかで、彼女はメモを取り出す前に考えを集める瞬間を取った。周りを素早く見回して誰も見ていないことを確認し、彼女はそれを広げた。

さゆり、

学校の後、新宿通りのラーメン屋で会って。あなたに話す重要なことがあるわ。誰にも言わないで。

—松本先生

さゆりは心拍数が上がるのを感じた。秘密を必要とするほど重要な何？ 彼女はメモを折り畳んでポケットに戻し、心が可能性で渦巻いた。彼女は松本先生が何を議論したいのかラーメン屋に行くことを決意した。ちょうどその時、彼女は表情が活発なあやが近づいてくるのを見た。

「さゆり！ 遅れてごめん！ 今日の美術の授業で何が起きたか信じられないわ！」 あやは叫び、エネルギーが伝染的だった。

「ヘイ、あや」とさゆりは返し、メモをポケットに戻しながら強引に微笑んだ。「今日はあなたと一緒に家に歩けないわ。学校の後で重要なことがあるの。」

「あ？ 何が起きてるの？」 あやは好奇心を刺激され尋ねた。

「ただ...松本先生とのミーティング」とさゆりは今は詳細を自分に留めておくことを決め言った。「急がなくちゃ。後で話すわ、OK？」

「もちろん！ 後で全部教えて。じゃあね！」

「はい。じゃあね！」

彼女が新宿通りへ向かって意図的に歩く間、さゆりはミーティングがすべてを変えるだろうという感覚を振り払えなかった。

スープと麺の温かく風味豊かな香りが空気に満ち、さゆりがラーメン屋のドアを押し開けると小さなベルが頭上で鳴り、彼女の到着を発表した。彼女は中に入り、居心地の良

い雰囲気は彼女を温かい毛布のように包んだ。店は控えめで、木のベンチと天井から吊り下げられたカラフルなランタンが歓迎の雰囲気を生み出していた。

さゆりはカウンターに近づき、コークを注文し、心に質問が満ちていた。彼女は窓の近くの小さなテーブルを見つけ、夕暮れの柔らかな輝きが薄れゆく日光の闘いを照らしていた。彼女は飲み物を一口飲みながら考えが渦巻き、泡が喉でシュワシュワ音を立てた。彼女は彼らの会話の含意を考えた。松本先生は彼女のヤクザとの関与を知っているの？ それについて対決するためにいるの？ 不安の結び目が胃で締め、彼女は指がテーブルを神経質に叩いていることに気づいた。

ドア上方のベルが再び鳴り、さゆりを周囲に集中させた。彼女は好奇心を持って顔を上げ、松本先生が入ってくるのを見、表情が謝罪的だった。「遅れて本当にごめんなさい、さゆり！」彼女は温かいが緊急感のある声で言った。「待っていてくれてありがとう。」

「大丈夫です」とさゆりは返し、強引に微笑んだ。松本先生は周りを見回し、それからテーブルに近づき、長髪が肩にカスケードした。「ラーメンのボウルはどう？ 私は一つ注文するわ」と彼女は申し出た。

「もちろん、ラーメンもいただきます」とさゆりは神経にもかかわらず空腹が忍び寄るのを感じ言った。

松本先生がカウンターで注文を置く間、さゆりは脈が速く打った。彼女は賞賛と不安の混じりで先生を見た。湯気の立つボウルが到着すると、松本先生は箸を整える瞬間を取り、それから注意をさゆりに戻した。

「大丈夫？」彼女は優しいトーンで尋ねた。「何か話したいことある？」

さゆりはためらい、開く考えが解放的で恐ろしいと感じた。「えっと、私は...大丈夫です」と彼女はあまり多くを明かしたくなくつぶやいた。

松本先生は少し前傾し、表情が真剣だが思いやりがあった。「あなたが言うことはすべて機密よ。これは教師-生徒のミーティングじゃないわ。心配する市民として...そして妻としてここにいるわ。」

「妻」という言及でさゆりの心臓が止まった。彼女の上に混乱が洗った。

「妻？ 誰の？」彼女は混乱して尋ねた。

「銀行の会長の」と松本先生は安定した声で返した。

その啓示がさゆりを稲妻のように打った。彼女は口が乾くのを感じた。

「銀行の会長？」彼女は反響し、心が速く打った。ピースが落ち始めていたが、彼女はその含意を処理するのに苦労した。それが松本先生が彼女の父の借金を知っているということ？彼女のヤクザとの秘密の取引を知っているの？

松本先生は彼女を注意深く見、さゆりの葛藤を察した。「これは取り入れるのにたくさんだとわかるわ」と彼女は優しく言った。「時間を取って。」

さゆりはラーメンのボウルに集中し、箸を機械的に動かし、平静を取り戻そうとした。ボウルから蒸気が上がり、彼女の感覚を慰めで満たしたが、考えは渦巻きだった。彼女はこの予期せぬ正直さにどう応じるの？

数瞬の後、沈黙の重さが彼らの間に掛かった。さゆりの心は衝撃からつながりの渴望に変わった。彼女は自分の苦闘でどれだけ孤独を感じていたかを考え、これは彼女の負担を共有する機会かも知れないと思った。深呼吸し、彼女はついに話した。

「最近...たくさん対処してきたわ」と彼女は認め、声は静かだが安定していた。「私の家族がトラブルに。父に借金があって、他に何をしたらいいかわからなかったわ。届けた手紙の中に何が入ってるかわからなかったわ！」

松本先生は彼女に続けさせるように頷いた。「大丈夫よ。私はあなたを責めるためにここにいないわ。あなたの家族はどんなトラブルに？」

さゆりはラーメンのボウルを見下ろし、麺がスープで渦巻いていた。「父がヤクザに借金してるわ」と彼女はささやき以上の声で告白した。「それを払うのを助けるために彼らのために働き始めたわ。本当にしたくなかったけど、選択肢がないように感じたわ。」

松本先生の表情が理解に移った。「そしてどうやって巻き込まれたの？」

さゆりの言葉が流れ始め、感情のダムが壊れたように話した。

「家族を助けるのに必死だったわ。ヤマグチ組ヤクザでかなり高い地位の男とミーティングを設定したわ。ただメッセージを届け、用事を走ると思っていたわ...あなたの夫に起きたことの一部に強制されるなんて気づかなかったわ。本当にごめんなさい！」彼女は本気で言い、松本先生を素早く見上げ、それから頭を下げて謝罪を屈し、恥ずかしかった。「あの世界の一部になりたくないわけど、閉じ込められたように感じるわ。」

「わかるわ」と松本先生は落ち着いた声で返した。「それは大変な立場よ、さゆり。でもあなたはそれに直面するのに勇敢よ。」

さゆりは褒め言葉で彼女を通り抜ける温かさを感じ、彼女を続けさせるようにした。「とても怖かったわ...家族を失望させたくないわけど、コントロールを失ってるように感じるわ。他の方法を見つけられたらいいのと思うわ。」

松本先生がラーメンを一口飲み、さゆりに考えを集める瞬間を与えた。「そのように感じるのは大丈夫よ。この中であなたは一人じゃないわ。多くの人が克服できないように見える課題に直面するわ。でも選択肢があるわ。抜け出す方法を見つけられるわ。」

さゆりは頷き、心臓がドキドキした。「ただ...どうかわからないわ。深すぎるように感じるわ。」

彼らが食べ続ける間、さゆりは彼女の恐れ、苛立ち、そして家族を守りたい欲求について聞いた。各言葉が解放のように感じ、肩から重さが持ち上げられた。松本先生は熱心に聞き、さゆりの感情の嵐の中で思いやりある錨だった。しばらく後、さゆりは一時停止し、安堵の感覚が彼女の上に洗った。

「聞いてくれてありがとう」と彼女は柔らかい声で言った。「誰かとこれについて話せるとは思わなかったわ。」

松本先生は優しく微笑んだ。「あなたがしたのが嬉しいわ。覚えてて、あなたはこれを一人で直面する必要ないわ。いつか助けが必要なら、遠慮なく手を伸ばして。」

さゆりは彼女の中に点火する希望のちらつきを感じた。おそらくこのミーティングはただの会話以上のものに導けるかも。おそらく彼女が自分を見つけた混乱から抜け出す方法があり、松本先生がそれを見つけるのを助けられるかも。

「今、私の夫がヤクザとどう巻き込まれたかをあなたに話すわ、あなたが私にオープンで正直だったのを見て」と彼女は小さなため息を吐き、明らかに自分を支えるように続けた。

「それは必要ないわ、松本先生。私は知る必要ないわ」とさゆりは敬意を持って言った。

「いいえ、そうじゃないわ。でもあなたのように、私はこれを議論できる誰もいないわ。秘密は共有しないとあなたを食い尽くすわ。魂にいいわ」と彼女は主張した。

「お望み通り」とさゆりは屈し、敬意を持って頭を下げた。

「私が知ったのは夫が家に帰ってきた時で、指が一つ欠けていたわ。夫が何年も私から隠していたことがたくさんあるのは確かだけど、欠けた指は簡単に隠せないわ」と松本先生はロボットのように言い、まるで彼女がすでに不名誉な銀行会長の妻としての運命に諦めていたように。

「もちろん、彼は私に告白するしかなかったわ。すべては私の息子、しんじがケン・ワタナベにビジネス提案をした時に始まったわ。」

「あなたの息子がケン・ワタナベを知ってるの？」さゆりは信じられずに尋ねた。

「はい！彼らは神戸から互いを知っていたわ。ケンのいところがしんじの親友だったわ。夫と私は彼が会長に昇進した時に東京に引っ越しただけよ。」

「中断してごめんなさい」とさゆりは謝罪した。「ただ驚いただけ。」

「問題ないわ」と彼女は微笑み、「ケン・ワタナベがあなたが連絡した人だと仮定できるわ？」

「はい！」さゆりは恥ずかしげに肯定した。

「とにかく、しんじはケンが土地詐欺に関わっていることを知っていたわ。ヤクザと銀行の間の秘密の共同投資スキームで中間者として行動したかった—明らかに両方のパーティーとのつながりのため。それは夫がそんな取引に関わるよう頼まれた最初ではなかったわ、そして彼はいつも拒否していた—それまで。彼は銀行の収益性を強化するためにしていると自分に言い聞かせていたけど、最終的に、それはただの身内びいきだったわ。」

松本先生が話す間、さゆりの心はホームルームの先生の夫とケン・ワタナベを巻き込む腐敗した共同投資スキームについての衝撃的な啓示で速く打った。各言葉が彼女に重く押しつけられ、彼らの共謀の含意を処理した。恐れが彼女の心を握りしめ、巻き込まれた賭け金について考え、自分の行動が彼女を権力と貪欲のこの暗い世界に不注意に押し込んだことに気づいた。

指詰めイメージが彼女の心で再生され、ヤクザの操作の下に潜む残忍さの厳しい思い出だった。絶望が彼女をかきむしり、彼女はこの悪夢から逃れられるか疑問に思い、またはそれが彼女を丸ごと飲み込むか。

「わからないわ」とさゆりは言った、「スキームはどう動いたの？」

「簡単に言うと、ヤクザは脅迫戦術を使って不動産所有者を低価格で売るように圧力をかけ、夫は取得のための有利なローンを確保するために影響力を使ったわ。それから彼らは詐欺的な評価を通じて土地価値を操作し、それを売ったわ。それはヤクザがお金を洗う有用な方法でもあったわ。関わるすべての人にとってwin-win状況。」

「今わかるわ。それで、何が悪くなったの？」

「夫は彼らが作った利益の額を隠そうとし、ケンに偽の声明を与えたわ、ケンが銀行にスパイを持っていることを知らずに。」

「OK。それは理にかなってるわ」とさゆりは情報を処理しながらゆっくりと言った。
「すみません、私の立場で尋ねるのは知ってるけど、今あなたが真実を知ってることを考えて、あなたは夫と結婚したままですか？」

「それは奇妙な質問よ、さゆり。どうして聞くの？」

「えっと、さっき言ったように、私の両親が問題を抱えていて、時々母が父と離婚すべきだと思うわ。」

「わかるわ」と松本先生は言った。「関係は地雷原。特に結婚。夫よりボーイフレンドと別れるのははるかに簡単よ。」

OK。だからあなたは他の理由を聞きたいわ。日本の離婚法を知ってるの？」

「いいえ」とさゆりは返した。

「まあ、両方のパーティー—夫と妻—が離婚に相互に同意すれば、それはかなりストレートフォワードなプロセスよ。でも...私が離婚で彼を訴えれば、それは長く散らかった手続きになり、ヤクザ取引を隠すチャンスはほとんどないと思うわ。彼は完全に不名誉になるわ。私もよ。物事が悪から悪へ行くわ。私はそれを許さないわ。それであなたに明確になった？」

「はい！」さゆりは頷きながら返した、「質問していい？」

「はい！何でも。」

「どうして私に会いたかったの？あなたが会長の妻だって私は決して知らなかったわ。」

「私はあなたを心配してるわ、さゆりちゃん。夫があなたの名前を言った時、私はショックを受けたわ。彼を信じなかったわ。でも彼があなたを描写した後、それがあなただと知ったわ。」

「彼はどう描写したの？」さゆりは興味を引かれ尋ねた。

松本先生はにやりとして、「彼はあなたを知性のある茶色の目を持つ少し迷った少女で、根底に強さと回復力があると言ったわ。ガマン。」

「本当に？」さゆりは信じられずに言った。「でも東京に何千もの市川さゆりがいるはずよ。どうしてそれが私だとわかったの？」

「教師はすべてを知ってるわ」と彼女は陰謀めいたトーンでからかい、「とも子が広めていた噂も聞いたわ。それがあなたでなければならなかったわ。」

「OK、それは理にかなってるわ」とさゆりは言った。

「私は夫にあなたを知ってることを言っていないわ、そして言う予定もないわ。彼は暴力的や復讐心の強い男じゃないけど、それは物事を複雑にするだけよ。それに、彼は私から秘密を隠してたわ。だから私は彼に言わないのが快適よ。」

「ありがとうございます！」さゆりは深く頭を下げて言った。

「さゆりちゃん、私はあなたのヤクザとの関与があなたの勉強を脱線させるのを心配してるわ。あなたは何でもなりたいたいものになれる能力があるわ。3年後、あなたは大学を始め、それまでに何を勉強したいかいくつか考えがあると思うわ。あるいはもう知ってるの？」

さゆりは凍りついた。質問は彼女にスポットライトを当てているように感じ、彼女が取るつもりのない道を照らした。彼女は笑みを強引に浮かべ、不快を隠そうとした。「えっと、まだ本当に考えてないわ」と彼女は声が軽く返した。

松本先生は頭を傾け、目に懸念がちらついた。「あなたはそんなに明るい生徒よ、さゆり。私はあなたに大きな可能性があるのを知ってるわ。未来の計画を始めるのは重要よ。」

さゆりの心は学校を辞める考え、学校に関わらない計画で渦巻いた。彼女は松本先生の視線を感じ、誠実さを探しているのを感じた。「私は...まずいくつかの選択肢を探求したいと思うわ」と彼女は声が少し震えながら言った。「少し旅行するかも？ 何かあるか見て？」

「旅行は素晴らしいわ」と松本先生は返したが、さゆりは彼女の懐疑を感じた。「でも勉強は価値ある機会よ。それはあなたのためにたくさんのドアを開けるわ。」

さゆりは瞬間の重さが彼女に押しつけられるのを感じた。彼女は本当の計画—学校を辞めて家で責任を取るつもり—を共有したくなかった。「まだ物事を考えてるわ」と彼女は笑みが揺らぎながら言った。「わかるでしょ...ただ選択肢を開いておくだけ。」

松本先生は彼女を一瞬研究し、理解のちらつきが顔を横切った。「わかるわ。ただ覚えてて、さゆり、あなたが何を選んでも、私はあなたを信じてるわ。あなたには明るい未来があるわ。」

「ありがとう、松本先生」とさゆりは返し、声はささやき以上ではなかった、不安と安堵の混じりを感じた。真実が彼らの間に空気で掛かり、語られず重く、彼女がラーメンのボウルを終える間、彼女の心は不確実性の嵐だった。

第18章

さゆりは渡辺健のオフィスに足を踏み入れ、空気が緊張で濃厚だった。薄暗い光が部屋に影を投げかけ、空間をより親密だが不気味に感じさせた。健は机の後ろに座り、書類の山から顔を上げ、表情は厳しかった。

「報告」と彼は言い、声は安定していたが緊急感が込められていた。

深呼吸し、さゆりは朝の出来事を語った。「あなたが言ったように、帝国ホテルのロビーで数時間過ごしたわ。コーヒーを注文して本を読んでいるふりをしたわ。」彼女はシャツの裾をいじくり、肩で緊張を感じた。

「それで？」健が促し、前傾した視線が彼女を貫いた。

「あなたが描写した舎弟を尾行したわ。彼はホテルを出て中華レストランに入ったわ。後ろについて行ったけど、彼はカウンターの後ろに滑り込み、階段を下りたわ。ただフラップを上げて追うことはできなかったわ。」彼女はためらい、付け加えた。「麻婆豆腐を注文したけど...」

健の眉が寄り、懸念が顔に刻まれた。「よくやったわ、さゆり。押し通さなかったのはいいわ。」

「ありがとう」と彼女は返したが、褒め言葉は空虚に感じた。彼女は胸に緊張を感じ、何か重要なことが展開しようとしているのを感じた。

健は椅子に寄りかかり、熟考した。「三井会は渋谷で動きを見せているわ。何か山口組に対する計画を数ヶ月以内に立てている疑いがあるわ。彼らが何を企んでいるか知る必要があるわ。」

さゆりの胃がきつく締まった。「何をすればいいの？」

健の表情が決意に変わった。「あなたはクルーピエとして訓練する必要があるわ。彼らの違法カジノで仕事に応募するわ。内部に潜入する唯一の方法よ。」

彼女の心が沈んだ。「でも私は...カジノで働いたことないわ。」

「だから訓練するわ」と彼は返し、トーンは固かった。「ゲームと手順を学ぶわ。私たちのカジノの一つで。あなたは準備されるわ。」

さゆりは興奮が彼女の胸に沸き起こるのを感じたが、恐れも忍び寄った。「彼らが私が...彼らの仲間じゃないとわかったら？」

健の目は少し柔らかくなった。「あなたは彼らの仲間じゃないわ。でもクルーピエは需要が大きく、彼らはあなたがただ静かに仕事をするならあまり注意を払わないわ。」

さゆりは彼女の心の渦巻く考えが彼女を蝕む恐れと戦った。「もしできなかったら？」

「できるわ」と彼は主張し、声は安定していた。「あなたを信じてるわ。あなたは今週末から訓練を始めるわ。私たちはあなたを準備するわ。」

さゆりはゆっくり頷き、彼女の決定の重さが彼女の肩に沈んだ。彼女は今選択肢がなかった。賭け金は高すぎ、この世界は容赦ない。「わかったわ」と彼女はついに言い、声はささやき以上ではなかった。「やるわ。」

健は顔を横切り、安堵のちらつきが横切った。「いいわ。私たちはあなたを準備するわ。覚えてて、あなたは役割を演じてるわ。ただ頭を低くし、観察し、私に報告して。」

彼女が彼のオフィスを出ると、さゆりは恐れと決意の混じりを感じた。先の道は不確実性に満ちていたが、彼女はそれを受け入れる必要があることを知っていた。彼女は自分を固め、先の課題に備えた。

さゆりとあやが家に向かって歩く間、周りの世界は穏やかな冬のワンダーランドに変わった。軽い雪の層が屋根、木、通りを優しく覆い、柔らかな日光の輝きの下で輝く柔らかい白いブランケットを作っていた。各雪片が優しく浮かび落ち、早い夕暮れの平和な静けさを増していた。空気は爽やかで、近くの木から松のヒントが漂っていた。影が柔らかな光で遊び心を持って踊り、雪が足の下で柔らかくクランチ音を立て、各ステップが優しいささやきを放っていた。

木の枝は輝く雪で飾られ、夕暮れの空に対して複雑なレースワークのように見えた。近くの家窓は温かく輝き、外の涼しい静かなシーンと美しく対比する居心地の良い雰囲気気を投げかけていた。雪に覆われた風景の美しさはほとんど魔法的で、彼らが家に向かう間、静かな喜びの瞬間に彼らを包んだ。

あやは眉を寄せ、沈黙を破った。「さゆり、最近あなたにほとんど会えないわ」と彼女は不満を言い、トーンは苛立ちと懐かしさの混じりだった。「新しい...仕事が始まってからあなたは空気に消えたように感じるわ。」

さゆりは近づき、彼女の懸念を軽くしようとした。「本当にごめん、あや。『仕事』を欠席できないわ。物事が今本当に忙しいわ。」

あやは眉を上げ、好奇心が刺激された。「じゃあ、カジノの訓練はどう？ 本当に何か学んでるの？」

さゆりは最近の経験を思い出し、少し顔が明るくなった。「実は、はい！ チップिंगがとても上手になって、20枚のチップのスタックを触って感じられるわ、目で見なくても。」

あやは彼女を見て混乱した。「チップिंग？ どういう意味？」

素早く息を吸い、さゆりは説明した。「ギャンブルのチップはカウントしやすくするために20枚のスタックに積まれるわ。ルーレットのディーラーが各スピンの後テーブルをクリアする時、各テーブルに『チップパー』と呼ばれる人がいるわ。彼らは『ドリー』がどこに置かれているか見て、ペイアウトに最初に必要なチップを決めなくちゃ。」

あやはゆっくり頷き、情報を把握しようとした。「OK...でもそれがなぜ重要？」

「オッズはカジノの有利だから、一日のスピンの多いほどカジノが儲かるわ。チップパーが遅ければ、スピンの数が少なくなり、利益が少なくなるわ。」

「それは複雑そう」とあやは認めた。「そしてプレッシャー！」

「認めるわ、私の脳を痛めるわ」とさゆりは笑った。「そして17倍と35倍の表も勉強しなくちゃ。フラッシュカードで助けてくれるかも？ お願い、あや！」

「わあ！ あなたは今火星語を話してるわ！ 薬やってるの？」彼女はからかった。

「いいえ、バカ！ 私の家に1時間来て、すべて説明するわ。お願い、私の友達」とさゆりは懇願し、あやのまつ毛をバッサバッサとさせて。

「OK、少し助けてあげるわ。でも長くはダメ。ママの夕食を手伝わなくちゃ」とあやは譲歩した。

馴染みの家の香りがドアを開けると漂い、彼女はあやを中へ導き、彼女のために耳を傾ける瞬間を取った。「家にくつろいで！ ルーレットの掛け算フラッシュカードを取ってくるわ」とさゆりは言い、部屋に向かった。彼女が机を漁る間、あやは壁に寄りかかり、腕を組み、顔に懸念のヒントがあった。

「さゆり、あなたがルーレットの訓練を週5回親に知られずにどう管理してるの？ あなたがどこにいるか疑問に思わないの？」

さゆりはためらい、友達の懸念を払拭しようとした。「彼らは仕事で忙しくてあまり質問しないわ。試験でうまくやりたいだけだと思うわ。」

あやはため息をつき、表情が柔らかくなった。「あなたが落ちないようにしたいだけよ、さゆり。あなたはとても才能があるわ、いい高校に行く価値があるわ。」

さゆりはためらい、「わかるわ、あや。試験は来週よ。訓練をバランス取って勉強するわ。ただ時間管理よ。」

不本意な頷きで、あやは話題を落とし、さゆりは興奮の波を感じた。彼女は友達に負担をかけたくなかった—まだ。

「OK、それで十分！これらのフラッシュカードを始めよう」とさゆりは雰囲気軽くしようと言った。「これで助けてほしいわ。」

「私は全部耳よ」とあやは言った。

「それはわかるわ」とさゆりは笑い、彼女の耳の一つを軽く触った。

「おかしな子！あなたはキノコであるべきよ」とあやは偽りの憤慨で言い、彼女の耳の温度を上げた。

「今あなたは私を完全に失わせたわ。キノコ？」

「そしてあなたは賢いと思ってたわ」とあやは遊び心の失望で頭を振りながらからかった。「キノコ—ファンガイ—ファニーガイ...」

「それはひどいジョークよ」とさゆりは遊び心で言った。

あやはカードを拾い、それに目を細めた。「わかった、何を持ってるか見てみよう。教えてあげるわ。」

さゆりは笑い、会話のシフトに感謝した。「OK、だからまず、内部ベットのペイアウトを掛ける方法を理解する必要があるわ。ストレートアップナンバーに賭けて勝てば、35対1のペイアウトよ。これは最高のペイベットで、プレイヤーはストレートアップベットに20チップを置くことが許されるわ。だから私は35x20まで35倍表を学ばなくちゃ。」

「ふう！それは難しいわ」とあやは認めた。

「はい、それは。でも17倍表も学ばなくちゃ」とさゆりは続けた。

「なぜ？」

「二つの数字の間にチップを置いて勝てば、17対1よ。スプリットベットと呼ばれるわ。」

「わあ」とあやは魅了されて目が広がった。「複雑そう。」

「それは本当にパロットファッションで学ぶだけよ。少なくとも覚える公式はないわ。」

「はい。ありがたい！」あやは同意した。「それで、何をしてほしいの？」

「フラッシュカードを上げて、私は方程式を読んで答えを与えるわ。正しい答えは各フラッシュカードの後ろに書いてあるわ。正しいか間違っているか教えて、カードを2つの山に置いて—正と誤。目標はミスなくすべての40カードを通ることよ。ただ反復の問題よ」とさゆりは説明した。

「OK。十分シンプルそう。始めよう。」

ルーレットの掛け算の世界に没頭する間、さゆりは彼女の人生の複雑さが展開し始めたばかりだと知っていたが、彼女が守っている秘密が心に重くのしかかった。30分後、あやはさゆりにママを手伝うために家に帰らなくちゃと言った。

「OK。助けてくれてありがとう、私の友達。久しぶりに一緒に過ごしたわ」とさゆりは言った。

「喜んで、さゆりちゃん！ クルूपイエになるのにどれだけ仕事がかかるか気づかなかったわ」と彼女は言い、彼女の声に賞賛があった。

「それは！ でもエキサイティングよ」とさゆりは少し誇りを持って認め、「マルチタスクをしなくちゃ。たくさん練習したわ。時々考えないわ；ただやるわ。」

あやは横目でさゆりを見て、彼女の表情が変わった。「それはあなたが訓練を楽しめるように聞こえるわ。」

さゆりはためらい、彼女の二重生活の重さが忍び寄った。「そう思うわ。少し...違うわ。でもあなたと一緒に過ごすのがまだ恋しいわ。」

「それじゃあ、計画を作ろう」とあやは提案し、熱意が戻った。「訓練が落ち着いたら何か楽しいことをするわ。この『チップング』のこともっと聞きたいわ—私の行動を見に来られるかも？」

さゆりはくすくす笑ったが、心に影が忍び寄った。「あなたがその側面を見たいとは思わないわ、あや。それは正確に普通の仕事じゃないわ。」

「普通は過大評価よ！」あやは撃ち返し、彼女の笑いが伝染的だった。「ただ私たちが離れない約束して。私は私の親友が必要よ。」

さゆりはためらい、決意が内側で上がった。「約束するわ、あや。私たちはうまくやるわ。」

彼女があやを玄関ドアに歩かせると、さゆりは彼女が守っている秘密を忘れさせた。彼女は彼らの友情の温もりを大切にし、彼女の新しい人生の影が閉じ込めようとする脅威にもかかわらず。

第19章

さゆりは小雨が降る中、疲れた体を引きずって家に向かっていった。学校での長い一日とクルーピエの訓練が彼女に負担をかけ始めていた。

フラッシュカードを始める前に10分だけ休憩しよう、と彼女は自分に言い、柔らかく暖かいベッドに倒れ込んだ。重いまぶたが閉じそうになり、彼女はベッドに横になり、雨が寝室の窓を叩く音を聞きながら、暗く陰鬱な背景を作り、眠りたいという欲求を強調していた。

彼女はぼんやりと部屋を見回し、突然、日記が置いた場所がないことに気づいた—机の上にあり、教科書の山で一部隠れていて、普段置く机の引き出しにない。疲れすぎて忘れ物をしているに違いない、と彼女は推測し、ベッドから起き上がって元の場所に戻そうとした。

まあ、今起きているなら、今日のエントリを書くいいタイミングだわ、と彼女は自分に言い、机の椅子に座った。プラスチックの黄色いミッキーマウスのマグカップからペンを選び、日記を開いて最後のエントリを再読した。

1991年2月21日

今日は激しかった。私のクルーピエ訓練はこれまでで一番難しかったけど、自分が上達しているのを感じるわ。今日はルーレットに焦点を当てて、チップングの技術を学んだわ。

練習中、ヘルプなしで忙しいテーブルを扱えたわ。ディーラーが感心したわ。ペイアウトを見て、クリアされる前にカラースタックを予測できたわ。興奮するけど、神経をすり減らすわ。テーブル周りのプレッシャーが増す中、頭をクリアに保たなくちゃ。

古株のクルーピエたちが私がどれだけうまくやっているか話しているのを耳にしたわ。それが気分を良くして、学べるすべてを学ぶ決意を燃やすわ。この世界の一部になるなら、鋭く準備ができなくちゃ。

それでも罪悪感が振り払えないわ。恵子に本当のことを言えたらいいのに。彼女は私がただ高校入試の勉強をしていると思ってるわ、彼女からこれを隠すのは間違ってるわ。訓練について—もしくはもっと悪い、学校を辞める計画について彼女が知ったら。とりあえず訓練に焦点を当ててすべてをバランス取る方法を見つけよう。ただ秘密をすべて安全に保てることを願うわ。

—S.

それから、恵子の筆跡で鉛筆で書かれた短い一行があった。

「あなたの日記をわざと置いたわ。話す必要があるわ。

—K.」

恵子が彼女の日記を見つけたと思うと、不安の震えが彼女を通り抜けた。彼女は仕事で忙しい妹が今彼女の本当の意図を発見したことで来るかも知れない判断を恐れた。でも心の奥で、さゆりは妹が恋しかった。笑い、深夜の話—すべて遠い記憶のように感じた。さゆりはいつも彼女と妹、恵子の絆を大切にしていた。育つ間、彼らは家の静かな隅で秘密を交換し、片思いから未来の夢まですべてを共有していた。

でも恵子が高校を始めて以来、生活が彼らを違う方向に引き始めた。さゆりはクルーピエとしての秘密の訓練に深く没頭し、興奮するが孤立した道を感じていた。一方、恵子は勉強と高校の増大するプレッシャーに焦点を当てていた。彼らの間の距離が広がり、さゆりは妹を彼女が理解しない世界に失っているように感じた。もちろん、彼女はあやがいたが、過ごす時間が少ないためその関係さえ維持しにくかった。

その瞬間、彼女は勇敢になると決意した。彼女は妹に反応に関わらず秘密を共有したかった。ある意味で、恵子が彼女の日記を読んだのが嬉しかった。愛する人から秘密を保つのは重い負担だった。彼女は苦闘と決定について正直になることで絆を再構築し、先の課題と一緒に直面できることを望んだ。

1991年2月22日

今日、私の姉、恵子が私の日記を読んだわ。彼女は話したいわ。私は神経質だけど、しなくちゃ。

—S.

新たな決意で、彼女は日記を閉め、彼らのつながりはまだ強く戦う価値があると信じた。彼女は恵子の部屋に向かい、心臓がドキドキした。彼女はドアを優しく叩き、「恵子？そこにいる？」と呼びかけた。

「うん、少し待って！」恵子の声の中から聞こえた。

「ヘイ、さゆりちゃん！どうしたの？」恵子は寝室のドアを開けると偽りの無関心を装った。

「日記に書いたの気づいたわ」とさゆりは単に言った。

恵子は一瞬止まり、彼女の声の遊び心のあるトーンが消えた。「ああ...それ見たのね？」

さゆりは瞬間の重さを感じ、深呼吸した。「見たわ。出してくれて嬉しいわ。私たちは話す必要があるわ。」

恵子は罪悪感のある表現で頷き、ドアを完全に開けた。「OK、入って。」

さゆりが部屋に入ると、恵子の壁のポスターに気づき、かつて共有した姉妹の絆の思い出だった。「あなたから物を隠してごめんなさい」とさゆりは始め、声が安定した。「訓練について話すべきだったわ。ただ...あなたを心配させたくないわ。」

恵子は腕を組み、眉をひそめた。「心配？ さゆり、私はシャットアウトされたわ。私たちはすべてを共有してたわ。今はあなたが私なしで全く違う人生を生きてるように感じるわ。」

「知ってるわ」とさゆりは返し、声は後悔に満ちていた。「あなたを押しつけたくなかったわ。あなたを守ってると思ってたわけ、今気づいたわ。ただ怖かっただけ、すべてを悪くしただけわ。あなたが本当に恋しいわ。ごめん、恵子ちゃん。」

恵子は柔らかくなり、部屋の緊張が少し緩んだ。「あなたも恋しいわ。でもあなたが何が起きているか知る必要があるわ。私が知らなければ助けられないわ。」

さゆりは頷き、後悔のラッシュを感じた。「OK、私に説明させて。クルーピエの訓練をしてるわ。激しくて興奮するけど、怖いわ。」

「はい、日記で見たわ。」

「どれだけ読んだの？」

「最後の2ヶ月、あなたが私から離れ始めた時から。」

「OK。まず、あなたは私の姉かも知れないけど、私の日記を読まないと私に誓ったわ。」

「でも私は...」恵子が始めた。

「待って！ 終わらせて。」

「すみません！」

「私はしかし、あなたが私を気にかけるからしただけだと気づくわ。私の行動がそんなに劇的に変わったなんて気づかなかったわ、あなたが私への約束を破る必要があると思ったほど。でもそうしてくれて嬉しいわ」と彼女は笑い、衝動的に恵子を抱きしめた。

「あなた誰？」恵子は笑い、彼女を抱き返しながら言った。「あなたはハガーじゃないわ、さゆりちゃん！」

「私は進化してるわ」とさゆりは彼女の姉に愛情を込めて微笑みながら言った。

「うん、そうね」と恵子は評価的に言った。「あなたは早く成長してるわ、妹」と彼女の表現は本気だった。「あなたは私の姉妹よ、さゆり。どんな選択をしてもあなたの人生の一部になりたいわ。ただこれから私に正直でいてと約束して。」

さゆりは感謝の波を感じた。「約束するわ。私たちはまた近くになりたいわ。すべてを共有したいわ、良いことと悪いこと。」

ためらいの笑みで、恵子は手を伸ばし、もう一度さゆりを抱きしめた。「じゃあ、新鮮に始めよう。訓練についてすべて教えて、私は私の人生で何が起きているかも共有するわ。」

彼らが抱き合う間、さゆりは秘密の重い負担が持ち上がるのを感じた。一緒に、彼らは先のどんな課題にも直面できるだろう、彼らの絆はこれまでで最強だった。

教室は混沌とした神経のエネルギーと期待の混じりでざわめき、松本先生は机に座り、入試の結果をレビューしていた。高校入試の週の後、彼女はいつも生徒たち一人一人と個別に会うことを決めていた。

「市川さゆり。私の机に来てください」と松本先生は呼び、生徒たちは「はい！」の合唱で応えた。さゆりはクラスメートたちをちらりと見、各自が自分の会話に没頭するか不安げに順番を待っていた。深呼吸し、彼女は前へ向かい、心臓がドキドキした。

松本先生は笑みで彼女を迎えたが、目に強さがあり、さゆりを安心させながらも不安にさせた。「座って、さゆり。あなたの結果について話しましょう。」

さゆりは座り、手を膝に置いた。松本先生の表現が少し変わった。「残念なニュースがあるわ。あなたは合格点に1%足りなかったわ。」

さゆりは床が落ちるのを感じた。「1%？」彼女は反響し、心が沈んだ。「そんなに近い...」

「はい、でもこの話には続きがあるわ」と松本先生は続けた。「私は副校長と校長に話したわ。過去3年間のあなたの優秀な学業記録を考慮して、あなたに合格点を与えるかどうかの最終決定のためにインタビューを開催することに同意したわ。」

さゆりのお腹が興奮した。チャンスだったが、彼女が想像した未来ではなかった。深呼吸し、彼女は正直になる時だと決めた。「松本先生、あなたに何か言わなくちゃ。」

驚きが松本先生の顔を横切った。「何よ、さゆりちゃん？」

さゆりは一瞬言葉を探し、彼女の人生の選択を説明する最善の方法を決めた。「私は高校に行く計画じゃないわ、少なくとも今年じゃないわ。」

松本先生の顔の驚きが明らかだった。「どういう意味？」

「1年働いて家族を助けたいわ。それについてたくさん考えたわ、今私たちにとって最善の選択だと思うわ。でも来年は間違いなく高校を始めるわ」とさゆりは説明し、声は内側の混乱にもかかわらず安定していた。

松本先生はさゆりが言ったことを吸収する瞬間を取った。「私はわかるわ、さゆり。あなたは最善と思うことをしなくちゃ。ただ覚えてて、勉強は価値ある機会よ。この瞬間からあなたがアドバイスが必要ならいつでも利用できるわ。」

さゆりは感謝の波を感じた。「ありがとうございます！」と彼女は言い、声はささやき以上ではなかった。「家に電話しない方がいいわけど、学校休みの間に必要なら、友達の一人に電話させて。」

松本先生は軽く笑った。「夫が電話に出ることはないわ；彼はめったに家にいないわ。でも彼らは図書館から電話してると言えるわ。私はたくさん読むわ—教師のものよ。」

「はい！」さゆりはもう一度小さな笑みを破って返した。「ありがとう、松本先生。」

彼女が去ろうと立ち上がると、松本先生は「そして覚えてて、さゆり、違う道を取るの
は大丈夫よ。ただ夢を生かしておいて。」と加えた。

さゆりは頷き、このミーティングが彼女のアドバイス以上のものになるかも知れないと思った。彼女の未来はまだ不明瞭だったが、この出会いが彼女のアドバイス以上のものになるかも知れないと思った。彼女は彼女の人生の負担で一人で感じないようだった。

第20章

陽子とさゆりが新宿御苑公園を散策する中、太陽が雲を突き破りそうだった。空気は春の約束で爽やかだった。桜の花が咲き始め、繊細な花びらが柔らかいピンクのささやきのように広がり、青い空に対して開いていた。木々は柔らかな花の塊で飾られ、この3月15日の初咲きでほとんど魔法的で絵のような景色を作っていた。

「私たちはいつも桜の花の下でお花見を楽しんだわよね、友達や家族と花の美しさを祝って。覚えてる、さゆりちゃん？」と陽子が尋ねた。

「はい！私たちは大きなピクニックをして、あつこはいつも桜の写真をスプールいっぱい撮ったわ。今頃箱いっぱいのはずよ」とさゆりがコメントした。

彼らは桜の木の下ベンチを見つけ、花びらの落ちた地面に座った。陽子は作った弁当箱を置き、ご飯、焼き魚、漬物の野菜が入っていた。一方、さゆりは彼女の隣に座り、心は考えの渦巻きだった。彼らが食べ始めると、陽子は娘を注意深く観察した。

「ずっと聞きたかったんだけど、入試の後どう感じてるの？ 少し遠くにいるみたい。」

さゆりは箸を米の上に浮かせ、一瞬止まった。「すべて大丈夫よ、ママ。ただ未来についてたくさん考えてるだけ。」

「それだけ？ さゆりちゃん？ 私はお母さんよ；何でも話せばいいわ」と陽子は優しく押した、懸念が明らかだった。

さゆりは深いため息をつき、秘密の重さが彼女にのしかかった。「高校入試に落ちたわ。」

「えっ？ どうしてそんなことが？ あなたはいつも学業でよくやってたわ。勉強グループもあったでしょ？」陽子の声は信じられないように震えた。

「すみません！ 許して、ママ。あれは嘘だったわ。」さゆりの声はささやき以上ではなかった。

「嘘ついたの！ さゆりちゃん！ 今すぐあなたの人生で何が起きているか教えて！」陽子は緊急と心配の混じったトーンで命令した。

深い息を吸い、さゆりは告白した。「ヤクザのクルーピエとして訓練してるわ。2週間で終わるわ。」さゆりは心臓がドキドキしながら説明した。

「どれだけ彼らのために働いて借金を払わなくちゃ？」陽子は眉をひそめて尋ねた。

「わからないわ。彼らは教えてくれなかったわ」とさゆりは返し、声が震えた。

「幸せ？ ヤクザで働くことについて心配ある？」陽子の声は母性的な心配で満ちていた。

さゆりはためらい、正しい言葉を探した。「ケン・ワタナベ、私の『ボス』は私をよく扱ってくれるわ。彼は私がインフォーマントとして行動する限り、クルーピエとして稼ぐお金を全部保持できると言ったわ。」

陽子の顔が青ざめた。「ヤマグチ組のスパイになるの？ いや、さゆり！ クルーピエ訓練を続けるのはやめて。おばあちゃんたちにもっとお金を頼むわ。」

さゆりの中に怒りが燃え上がった。「もっとお金を頼めないわ、ママ！ おばあちゃんと電話で話すのを聞いたわ。おばあちゃんは父と離婚しない限りもっとお金を頼めないと言ったわ！」

陽子の目がショックで広がった。「それ聞いたのね...」

「はい、そして私の両親が離婚するのを望まないわ！」さゆりは苛立ちが沸騰して叫んだ。「家族を助けようとしてるのに、あなたは私が信頼できないと思って離婚の準備をしてるの！ 私が何のためにこれをしてると思うの？」

陽子は深い息を吸い、上昇する緊張を落ち着かせようとした。「あなたを安全にしたいだけよ。これは私があなたに思い描いた人生じゃないわ。」

さゆりは立ち上がり、怒りが沸き起こった。「これのどれかを望んだと思うの？ 私はしなくちゃいけないことをしてるわ！」彼女は振り向き、咲く桜を見つめ、その美しさが彼女の混乱に対して厳しく対比していた。

「さゆり、お願い」と陽子は声が震えて懇願した。「他の方法を見つけられるわ。何か考えつくわ。ただ彼らに関わらないで。」

さゆりが沈黙し、心臓が重く胸で打った。桜の花びらが風に舞い、人生の儚い美しさの思い出だったが、彼女が感じるのは彼女が負う負担の重さだけだった。

「他の方法はないわ、ママ。私はヤクザを知ってるわけど、危険な世界だわ。お願いよ！」

「ママ、私の仕事はあなたを守ることよ。ヤクザで働かせたくないわ。危険な世界よ。お願いよ！」

「ここで少し待ってて。人々の仲間よ。ほとんどはカジノに入る前に武器を探されるわ。とても安全よ。」

「私の頑固なさゆりちゃん。あなたを強制して諦めさせれば裏目に出るわよね。ただ別の方法で借金を払う方法を見つけるわよ。わかったわ、ただ心配してるだけ。」

「ママ、私が言ってるの—完全に安全よ。怖いことが起きたらすぐに辞めるわ、OK？」

「お願いよ、さゆりちゃん」と陽子は娘の肩を優しく握りながら言った。

さゆりは母親の手に手を置き、優しく言った、「これは一時的なものよ、ママ。来年、私は高校にいるわ、そしてこれすべてはただ悪い記憶になるわ。」

陽子は娘の目を見つめ、ついに言った、「そう願うわ、愛しい子—本当にそう願うわ。」

春の空気が桜の微かな香りで満ち、市川一家は学年末の最後の金曜日のこの中学校卒業式に向かって歩いていた。さゆりは春が大好きだった。雪景色と春の桜の花のついた景色とのコントラストは印象的だった。冬の静かな静けさ、白い毛布が音を消し、彼女を内省的で孤独にさせることもしばしばだった。一方、桜の鮮やかなピンクは暖かさと再生を告げ、喜びを呼び起こし、生まれ変わりの感覚を呼び起こした。

この季節の移り変わりは彼女の気分を上げ、過去数ヶ月で彼女が旅した感情の軌道を反映し、冬の寒さの重さを春の約束の軽さに変えていた。

さゆりは前列に座り、不思議に落ち着いていた。体育館は家族と友達でいっぱい、各々が卒業生への誇りをざわめいていた。カラフルなバナーが天井から吊り下げられ、明るい文字で「おめでとう！」と「よくやった！」と宣言していた。

校長が各名前を呼ぶにつれ、雰囲気は電気が走った。さゆりの名前がついに部屋に響き、彼女は立ち上がり、足が震えながらステージを横切り、校長から卒業証書を受け取り、恥ずかしい笑みが顔に広がった。聴衆が拍手に爆発し、彼女は群衆の中の家族を捉えた—けいこが輝き、あつこが涙を拭い、陽子が誇りを持って頷き、かずおは少し離れて立ち、誇りと罪悪感の複雑な混合が顔に刻まれていた。

「おめでとう、さゆり！」けいこが熱心に手を振って叫んだ。さゆりは妹の興奮を見て心が膨らみ、彼女に笑みを返した。

式が終わると、皆がリフレッシュメントのためにジムに流れ込んだ。テーブルはサンドイッチ、果物、そしてさまざまなソフトドリンクのトレイで満載だった。雰囲気は陽気だったが、かずおは胸にのしかかる重さを感じた。彼はさゆりが学校を1年休む決定が

彼に関連していることを知り、彼女の業績を誇りに思いながらも、罪悪感が彼をかじっていた。

「ヘイ、そこでよくやったわ！」陽子はさゆりの周りに腕を巻きながら言った。

「ありがとう、ママ！ようやく終わって信じられないわ」とさゆりは興奮と安堵の混じりで返した。あつこが指食のプレートを抱えて近づいた。「私たちはみんなあなたを誇りに思うわ、さゆり。」

「ありがとう！」彼女は一番上の姉に輝いて言った。

かずおは数歩離れて立ち、沈黙していた。彼は会話に参加すべきだと感じたが、意味のあることを見つけるのに苦労し、自分に注意を引くのを神経質に感じていた。彼の失敗が影のように彼の上に迫り、彼は静かに自分を責めるのが最善だと決めた。

ちょうどその時、あやと彼女の両親がスナックのプレートを抱えて近づいた。

「さゆり！おめでとう！」あやは輝く笑みで叫んだ。「私たちはとてもあなたを誇りに思うわ！」

「ありがとう、あや！中学校を終えたなんて信じられないわ」とさゆりは顔を明るくし返した。

「次は高校！」あやの両親が誇りを持って輝きながら加わった。

「私じゃないわ」とさゆりは少し笑みを強引に浮かべて言った。「違う道を取ってるわ。」

あやの母は一瞬懸念したように見えたが、すぐに笑みで覆った。

「まあ、次に何をするか見るのが楽しみよ！」

会話が続く中、かずおは罪悪感を感じて前へ踏み出した。「あなたは素晴らしいことをするわ、さゆり」と彼は声が安定していたが心が不安だったと言った。

「ありがとう、パパ」と彼女は彼の目に返した。「そう願うわ。」

けいこは緊張を感じて飛び込んだ。「家族写真を撮ろう！みんな、集まって！」

彼らは皆寄り集まり、写真のために自分たちを位置づけた。さゆりは家族の温かさが彼女を囲むのを感じ、未来の心配が一瞬後退した。カメラがクリックする時、彼女は本物の笑みを浮かべ、この瞬間が彼らを一緒に保持することを願い、先の道が分かれても進んだ。

写真の後、彼らはスナックに戻った。

「あなたのお気に入りには？」けいこが果物のプレートを立てて尋ねた。

「絶対メロン！」さゆりは一片を掴んで叫んだ。

「メロンよ！」けいこは笑い、彼女にプレートを渡した。

ジムに笑いが満ちる中、かずおは娘たちを見、誇りと失敗のほろ苦い混合を感じた。彼はすべてにもかかわらず、彼らが互いへの道を見つけ続けることを願い、人生が予期せぬ方向を取っても。

第21章

薄暗く照らされたカジノ内の空気が緊張と煙の微かな香りで濃厚だった。さゆりはルーレットのテーブルに座り、心臓が安定していたにもかかわらず、周囲の混沌の重さを彼女にのしかからせていた。柔らかなチップの音と期待のささやきが部屋を満たしていた。

彼女は深呼吸し、滑らかで磨かれた木の表面に指を刷りながら、ルーレットのホイールの溝にボールを入れた。彼女は練習された動きでそれスピンし、ボールが縁に沿って踊るのを見た。空気中の期待は触れられるほどで、客たちがより近づいた。

「もう賭けは終わりです！」さゆりは叫び、客たちがボールが落ちる前に最後の必死の試みで互いに肘を押し合う中、叫んだ。ボールは番号付きのポケットに対してカタカタと音を立て、最後に29に落ち着いた。

「勝ち、29黒！」彼女は発表し、声は明瞭で権威的だった。プレイヤーたちが歓声とため息で爆発したが、彼女は素早く手元のタスクに集中した。彼女はテーブルをクリアし始め、負けの賭けを慎重に集め、彼女のチップパー、神経質な新人をより速く動くよう促した。「急いで！ゲームを遅くしてるわ！」彼女は促し、トーンは固いが落ち着いていた。

支払いをする準備をしている間、彼女の目はテーブルを横切り、最大の勝ちを示す黄色のチップを見つけました。29にストレートアップで置かれた100円チップの13枚。素早い動きで、彼女はチップのスタックを押し出した：各1,000円の2スタック、上に5つの1,000円チップ、それに単一の500円チップ、合計45,500円。チップがカチンと音を立て、彼女の誇りと緊張の混じった感情を反響した。彼女が次のスピンのために客たちが賭けを置くのを待つ間、彼女の視線はカジノの暗い隅を通り抜けた。

彼女の心臓が沈んだ時、彼女は遠い壁に沿ったパチンコマシンの一つに座っている父を見つけ、彼の左手が愛人の太ももに置かれていた。彼らは一緒に笑い、周囲の世界に気づかず、その光景はさゆりの内側で何かをねじった。彼はまた酔っているわ、と彼女は苦々しく思い、指が女性の肩を刷るのを見、彼女の静脈に怒りのラッシュを送った。彼女の父は彼女が三井会の一員として働いていることを知らなかった、山口組との彼の借金と対照的だった。和夫が彼女と母への約束を守るつもりがないのは明らかだった。責任ある行動を取る代わりに、彼はただ一つのカジノを別のものに交換しただけ、発見されないと思って。考えが彼女に苛立ちのラッシュを送ったが、彼女はそれを保たなくちゃいけないことを知っていた。

強引な笑みで、彼女はテーブルに戻り、ルーレットのホイールの29スロットからボールを取り出し、長く強いスピンを与えた。彼女はカバーを吹き飛ばす余裕はなかった—今は、決して。カジノは彼女の周りで脈打ち続けていたが、彼女の集中は鋭く、感情はプロフェッショナルリズムの仮面の後ろに閉じ込められた。ボールが遅くなるにつれ、彼女はホイールに片目、父に片目を保ち、彼女の秘密の重さが彼女に押しつけられた。ゲームは続き、仮面もそうだった。

さゆりはブラックジャックのテーブルに立ち、ゲームの馴染みのリズムが彼女の渦巻く考えの背景を提供した。各カードのシャッフルが機械的で、彼女の心は他のところにあった。彼女は父の酔った姿を振り払えなかった、愛人と笑い、パチンコの薄暗い隅で飲む姿。光景が彼女の中に怒りと失望の嵐を点火し、彼女の集中を曇らせた。

彼はどうしてそんなに無謀になれるの？ 彼女は思い、喉に苦味が上がった。彼は私たちを気にかけてるの？ 彼の裏切りの重さが重く、ほとんど息苦しかった。さゆりの手は本能的に動き、カードをディールしたが、彼女の心はゲームから遠かった。

彼女が再び考えに没頭しようとしたちょうどその時、三井会の一員の二人が彼女のテーブルに近づいた。彼らは馴染みの顔で、VIPバーの非公式なミーティングでよく見かけた—傲慢さとカジュアルな自信のミックスが彼らから放射されていた。彼らはテーブルに現金のスタックを投げ、ぱりっとした紙幣が挑戦のように広がった。

さゆりは素早くお金を集め、現金をチップのスタックに交換し、各一つを正確に数えた。彼女はテーブルインスペクターがしていることを確認する間を置き、ゲームの整合性を保つ本能が働いた。集中して、さゆり！ 彼女は自分に思い出した。

「5万円の現金バイイン！」彼女は発表し、声は心の混乱にもかかわらず安定していた。インスペクターが頷き、取引を承認し、彼女は小さな安堵を感じた。練習された容易さで、彼女は各1,000円の2つ半スタックを押し出し、各スタックがきれいに並べられた。舍弟たちは落ち着き、彼らがプレイする準備をしている間、カジュアルな冗談が空気を満たした。彼女は表情を中立に保つために戦った、ディーラーの仮面が固く所定の位置にあったが、耳が彼らの会話に惹かれていた。

彼らが最近の征服について散発的におしゃべりする間、さゆりの彼らへの興味は薄れていた—彼らのナイトクラブとクランパーティーを頻繁に訪れる多くの「ギャングスターヲタク」たちまで、一人が「たくやの状況聞いた？」と言うまで、声は低く陰謀的だった。彼は首に蛇行するタトゥーのある屈強な男で、彼がにやりとした時、彼の金メッキの前歯の一つを見せ、さゆりの背筋に震えを送った。

「うん、乱れてるわ」ともう一人が返し、周りをちらりと見て誰も聞いていないことを確かめた。「彼は両側をプレイできると思ってる。でも話は、ボスがそれについて幸せじゃないわ。」

彼らが話す何？ さゆりは思い、興味と不安のミックスが彼女を洗った。彼女はカードをディールし続け、手は機械的な正確さで動き、しかし心は今完全に没頭した。

「ケン・ワタナベは裏切る相手じゃないわ」と最初の舎弟が加え、顔ににやりが忍び寄せた。「たくやが背中を見ていなかったら、警告物語として終わるわ。」

さゆりの脈が速くなった。これはケンが知る必要がある情報だったが、彼女が個人的に知っているたくやを裏切る考えは彼女の価値観の裏切りように感じた。それでも、彼女は自分の立場を自分に思い出した—彼女は結局スパイだった。

カードがひっくり返るにつれ、彼女は表情を中立に保つために戦った。彼女の人生の賭け金が彼女の周りに渦巻く噂と絡み合い、彼女はこれ以上この危険な世界を彼女自身を完全に失うことなくどれだけ航行できるか疑問に思わずにはいられなかった。各ブラックジャックのラウンドが彼女の個人的な混乱と彼女が選んだ人生の厳しい現実の間の繊細なダンスになった。

「彼はケン・ワタナベについて情報を私たちに与えてるわ。明らかに、彼は疲れてケンを絵から取り除きたいわ。」

「本当に？」もう一人の男、帽子を調整した細身の男が返した。「それはリスクが高いわ。彼は十分な引きがあると思ってるの？」

「トリッキーよ。彼が正しいつながりを持っていれば、すぐに昇進できるわ。私はワタナベが彼に甘すぎたと思うわ。たくやは階級を登りたくて、これが彼のチャンスよ。」

さゆりの心は彼女が処理する会話で速く打った。たくやはいつも野心的だったが、彼女はそんな裏切りへ訴えるとは想像していなかった。それだけでなく、山口組の階級内の大混乱を引き起こすだけでなく、ケン・ワタナベがもはや東京のボスでなければさゆりの人生に個人的に影響するだろう。

第22章

さゆりはバスに座り、ブラックジャックのテーブルの反響がまだ耳に響いていた。彼女が耳にした三井会の舎弟たちの会話が彼女の考えを苦しめ、言葉が壊れたレコードのように繰り返されていた。彼女はそれをケンと共有する必要があった―彼はたくやの裏切りを知る必要があった。彼女は緊急感を感じ、たくやがケンを打倒するのに成功したら彼女が危険にさらされるだろうと信じていた。

彼女の日勤は午後8時に終わったので、彼女がそこに着く頃にはケンがまだオフィスにいるだろうと確信していた。東京の山口組の支部を運営するのはフルタイムの仕事だった。15分後、彼女はケン・ワタナベのオフィスにいて、薄暗い光が部屋に影を投げかけていた。ケンは彼女が聞いたことを伝える間、机の後ろに座り、表情が読み取れなかった。

「すみません！ 今日聞いたことを報告に来ました、おやぶん！」

「さゆり。困ってるみたいだね。何だ？」

「たくやが両側をプレイしてるわ」と彼女は少し震える声で言った。「彼は三井会に情報を与えてるわ。彼はあなたを置き換えようとしてるわ。」

最初、ケンの顔は無表情だったが、それから目が細くなり、内側で嵐が醸成されていた。「これについて確かか？」彼は前傾してぴしゃりと言った。

「はい」とさゆりは主張し、恐れと決意の混じりを感じた。「自分の耳で聞いたわ。」

ケンの怒りが火山のように爆発した。彼は立ち上がり、机を叩いた。「出て行け！ これを自分で扱うわ。」

彼女が出て行く時、彼女の胃に不安の結び目がねじれた。これがどう展開するか彼女は知らなかったが、胸に恐れのが感覚が沈んだ。

数分後、たくやはケンのオフィスに召喚された。彼が入ると、空気に緊張を感じた。ケンの表情は固く、顎が締まっていた。

「たくや」とケンは言い、声は低く危険だった。「三井会に情報を与えていると聞いているわ。本当か？」

たくやは困惑して見えた。「何？ いいえ！ 決して！ 何の話かわからないわ！」

「もちろんか？」ケンは返し、目が怒りで燃えた。「だからあなたは無実か？ あなたが信じさせようとしてるの？ 裏切り者を扱わないと思うの？」

「誓って、おやぶん！ 何もしてないわ！」 たくやは懇願し、声に絶望が忍び寄った。
「信じてくれ！」

ケンの怒りは収まらなかった。彼はでば包丁を引き出し、刃が低い光で不気味に輝いた。
。「どれだけ無実か見てみよう。」

たくやが反応する前に、ケンは刀を彼の頬にスラッシュし、血がすぐに傷から染み出し、たくやの顔を滴り落した。彼は痛みで叫び、彼を通り抜ける怒りが沸騰した。

「僕を信じて！ 決してあなたを裏切っていないわ！ あなたに何が起きてるの？」

「忠誠心を証明しろ、たくや！」 ケンは返し、声は切り裂いた。

「何でもするわ、ボス！ お願い！ 忠誠心を証明させて！」 たくやは絶望的に叫んだ。

「ここで何か？ OK、少し扱う必要のある問題があるわ。それからあなたの忠誠心がどこにあるか見よう。」

たくやの心が沈んだ。「何か」と彼は再び言い、声は反抗と恐れ of 混じりだった。

ケンの表情が固くなり、「詳細を与えて扱え、さもなければ私の怒りがどれだけ遠くへ行くかわかるわ。」

部屋が緊張で重くなり、たくやは胃に冷たい恐れが沈むのを感じた。彼は従う必要があることを知っていたが、本当にそれが別の殺しじゃなければと願った。あれは彼の良心に重くのしかかるだろう。彼が舎弟として行ったすべてのウェットワークの後、彼はあの人生を後にしたかった。彼は自分のストライプを稼いだわ。少なくとも彼はそう思っていた。

さゆりはバス窓の外をぼんやりと見つめ、彼女自身を苛む興奮を感じた。今彼女は持て余せない立場にいた。たくやが有罪なら、ケンは彼を殺すかも知れない。彼が無実なら、たくやは永遠に彼女を裏切り者として見、彼女が彼を彼の仲間として裏切った者として見るだろう。彼女は無意識に彼を暴力と裏切りの道に鎖でつなぎ、すべて自分を守ろうとしながら。それがたくやとの関係を永遠に変えるだろう。

「私が何をしたの？」 彼女は思い、心は彼女の行動の負担で重かった。忠誠心と裏切りの間の線がぼやけ、彼女は自分の作った網に閉じ込められたように感じた、それから彼女の関係をたくやと永遠に変えるだろう。

恵子はさゆりのベッドに足を組んで座り、ベッドサイドランプの柔らかな輝きが部屋に温かな光を投げかけていた。壁に飾られたポスター、さゆりの子供時代の過去の遺物が彼女の人生の変化を思い起こさせた。恵子の存在は彼女が切実に必要とする慰めだった。

「さゆり、もし何かあなたを悩ませてるなら、私に話すって約束したわ」と恵子は言い、声は優しく励ますものだった。「何が起きてるの？」

深呼吸し、さゆりはついに話した、声が震えた。「カジノで三井会のギャングたちが話してるのを聞いたわ。彼らはたくやが両側をプレイして彼らに情報を与えてるって言ってたわ。だから...私はケン・ワタナベにそれについて話したわ。」

恵子の眉が懸念で寄った。「たくやに何が起きると思う？」

さゆりは目を逸らし、心が重かった。「わからないけれど、最悪の場合を願うわはゆびつめ。」

「それ何？」恵子は好奇心を刺激されて尋ねた。

さゆりは固く飲み込み、舌に苦い言葉を味わった。「ヤクザのメンバーがミスをした後に忠誠心を証明するために指の一部を切る儀式よ。残酷だけど...それは彼らが組へのコミットメントに本気だということを示す方法でもあるわ。」

恵子の目が広がり、彼女のショックが明らかだった。「私の可愛い妹、どんな残酷な世界に巻き込まれたの。ヤクザのために十分やったと思わないの？ きっと父の借金は今払い終えたわよね？」

父の言及がさゆりに涙を呼び起こし、彼女はついに告白した。「彼はカジノにいた...愛人と一緒に。」

「さゆり...」恵子は優しく言い、手を握りしめた。「ママに言えないわよ。父と愛人のことをママに言ったら、ただ巨大な混乱を引き起こすわ。ギャンブルが関わったら特に離婚するかも。」

さゆりは熟考的に見え、状況の重さを計った。「おそらくあなたが正しいわ。今のところ私たちの間で保とう。」

さゆりは頷き、悔しさが混じった安堵を感じた。彼女は深呼吸し、嵐を落ち着かせる努力をした。「ここで何か他のことを話せる？ 学校でどう？」

恵子の表現が明るくなった。「私は2年生であるのが大好きよ！ 私の新しいスカート見て！」彼女は立ち上がり、くると回り、短い裾が彼女の太ももの周りで踊った。

さゆりは助けずにはいられず微笑んだ、恵子の精神の軽さが彼女の気分を上げた。「みんなの男の子に心臓発作を与えるわよ」と彼女はからかった。

恵子はにやりとした。「そしてとも子はまだ学校で女の子をいじめようとしてるわ、彼女がただの1年生にもかかわらず。信じられる？」

さゆりは目を転がした。「とも子に二度と会わなくていいのが嬉しいわ。」

恵子はにやりとした。「知ってるわよね？ でも彼女は自分を抑えられないわ。あ、そしてあつこを見たわ。ママとパパを訪ねて家に寄ったわ。彼女は大学1年生でうまくやってるわ、今寮に住んでるわ。」

「本当に？ 会えなくて残念」とさゆりは声に後悔を込めて言った。「彼女が楽しんでいるといいわ。」

「楽しんでるわ！ クラブに入って友達をたくさん作ったわ。彼女が繁栄してるのを見るのはいいわ」と恵子は返し、温かな本物の笑みが広がった。彼らが学校と家族についておしゃべりする間、さゆりの悩みの重さが少し上がった、少なくとも少し。今のこの瞬間、それはただ二人のこと—笑いを共有する二人の姉妹だった。

第23章

さゆりはケン・ワタナベのオフィスのドアを押し開け、馴染みの古いウイスキーの香りが空気を満たしていた。ケンは机の後ろに座り、開いた山崎12年物のウイスキーのボトルが前にあり、表情が悩ましく、眉を寄せ、手に半分満たされたグラスを持っていた。

「今話すのにいい時間ですか？」さゆりは優しく尋ねた。

ケンは顔を上げ、表情が柔らかくなった。「もちろん座って」と彼は言い、言葉が少し不明瞭だった。「あなたのためにはいつでも時間がある。」彼は彼女の反対側の椅子を指し、もう一杯のウイスキーを自分に注いだ。「少しどう？」

「いいえ、ありがとう」とさゆりは礼儀正しく返し、椅子に座った。彼女は息を吸い、自分を固めた。「たくやに何が起きたの？」

「それは処理されたわ」とケンは言い、視線が窓に漂った。「彼に忠誠心を証明するチャンスを与えたわ。何が起きるか見よう。」

さゆりは彼の目に留まる確信を探したが、疑いと孤独の影しか見つからなかった。語られない言葉の重さが空気に掛かり、彼女は彼らの間の緊張を感じた―いつも表面の下に潜む磁気的な引き。

ケンはもう一杯の大きなウイスキーを注ぎ、注意を彼女に戻した。彼は彼女を見つめ、彼女を自意識過剰にさせた、心臓が速く打った。「知ってるわ、さゆり。私はまだCAVEの外で小さな迷った少女のように立っていた夜を覚えてるわ。あれをよく考えるわ。」

不意打ちを食らい、さゆりは膝に折りたたまれた手に目を落とし、どう返事するかわからなかった。

「すみません」とケンは突然謝罪した。「あなたを不快にさせるつもりじゃなかったわ。ウイスキーが私を話しすぎさせてると思うわ。」

「大丈夫です」とさゆりは嘘をつき、強引な笑みを浮かべた。「私は不快じゃないわ。」

ケンは少し酔った音で笑った。「あなたは嘘ついてるわ。でもとにかく、訪ねてくれてありがとう。あなたはいつも私を良く感じさせるわ。」彼の笑みは温かく、ほとんど優しくかった。それから彼は続けた。「さゆりちゃん、あなたはカジノでの仕事を辞めなくちゃと思うわ。物事が危険になりそうよ。あなたを危険に置くにはあなたが大事すぎるわ。」

「はい！ おやぶん！」 彼女は少し頭を下げた返した、安堵と懸念の混じりが彼女を洗った。

彼らは一瞬の沈黙を交換し、語られない感情の重さが空気に掛かった。最後に、ケンはずけさを破った。

「今あなたの父の借金は払い終えたと考えるわ。あなたはよくやったわ。ありがとう。」

さゆりの心はそのニュースで高鳴り、笑みが破れた。

「ありがとうございます、おやぶん！」 彼女は感謝を込めて頭を下げた感謝した。

ケンは彼女の椅子から立ち上がり、少し不安定に机を回った。さゆりの息が喉に詰まり、彼が近づくとつれ彼女の心臓が速く打った。彼は彼女の椅子の後ろに立ち、優しく肩に手を置いた。

「あなたがどう感じてるかわかるわ、さゆりちゃん。あなたは私にとって特別よ。私はあなたが恋しいわ。」

彼女の心は興奮の温かさと悲しみの痛みの混じりで震えた。気づきが彼女を打った—ヤクザが彼らを結ぶものがなければ、彼女は彼に会う理由がないわ。あの考えが彼女の心を痛めたが、彼女は沈黙を保った。一瞬後、ケンは椅子に戻り、もう一杯を注いだ。

「少しどう？」 彼は再び尋ねた。

「いいえ、ありがとう」と彼女は返し、声が重くなった。「ケンさん、あなたのために働くのは喜びだったわ。父の借金を働かせてくれてありがとう。私は今行きます。」

ケンの表情が移り、目にためらいのヒントがあった。「さゆりちゃん、私は仕事であなたをまた必要とするかも—有給の仕事よ。あなたに連絡する方法はない？」

驚きが彼女を通り抜けたが、彼女は姿勢を保った。「あなたの部下たちは私がどこに住んでるか知ってるわ。覚えてる？ 借金取り？ ただ手紙を書いて、私はそれを受け取るわ。」 彼女は笑ったが、それはほろ苦かった。

振り向いてドアに向かい、彼女の心臓が速く打った。彼らの間のつながりがこの章の終わりとともに消えるかも知れないことを知りながら。

さゆりはバスに座り、ブラックジャックのテーブルの反響がまだ耳に響いていた。彼女が耳にした三井会の舎弟たちの会話が彼女の考えを苦しめ、言葉が壊れたレコードのよ

うに繰り返されていた。彼女はそれをケンと共有する必要があった―彼はたくやの裏切りを知る必要があった。彼女は緊急感を感じ、たくやがケンを打倒するのに成功したら彼女が危険にさらされるだろうと信じていた。

彼女の日勤は午後8時に終わったので、彼女がそこに着く頃にはケンがまだオフィスにいるだろうと確信していた。東京の山口組の支部を運営するのはフルタイムの仕事だった。15分後、彼女はケン・ワタナベのオフィスにいて、薄暗い光が部屋に影を投げかけていた。ケンは彼女が聞いたことを伝える間、机の後ろに座り、表情が読み取れなかった。

「すみません！ 今日聞いたことを報告に来ました、おやぶん！」

「さゆり。困ってるみたいだね。何だ？」

「たくやが両側をプレイしてるわ」と彼女は少し震える声で言った。「彼は三井会に情報を与えてるわ。彼はあなたを置き換えようとしてるわ。」

最初、ケンの顔は無表情だったが、それから目が細くなり、内側で嵐が醸成されていた。「これについて確かか？」彼は前傾してぴしゃりと言った。

「はい」とさゆりは主張し、恐れと決意の混じりを感じた。「自分の耳で聞いたわ。」

ケンの怒りが火山のように爆発した。彼は立ち上がり、机を叩いた。「出て行け！ これを自分で扱うわ。」

彼女が出て行く時、彼女の胃に不安の結び目がねじれた。これがどう展開するか彼女は知らなかったが、胸に恐れのが感覚が沈んだ。

数分後、たくやはケンのオフィスに召喚された。彼が入ると、空気に緊張を感じた。ケンの表情は固く、顎が締まっていた。

「たくや」とケンは言い、声は低く危険だった。「三井会に情報を与えていると聞いているわ。本当か？」

たくやは困惑して見えた。「何？ いいえ！ 決して！ 何の話かわからないわ！」

「もちろんか？」ケンは返し、目が怒りで燃えた。「だからあなたは無実か？ あなたが信じさせようとしてるの？ 裏切り者を扱わないと思うの？」

「誓って、おやぶん！ 何もしてないわ！」たくやは懇願し、声に絶望が忍び寄った。「信じてくれ！」

ケンの怒りは収まらなかった。彼はでば包丁を引き出し、刃が低い光で不気味に輝いた。「どれだけ無実か見てみよう。」

たくやが反応する前に、ケンは刀を彼の頬にスラッシュし、血がすぐに傷から染み出し、たくやの顔を滴り落ちた。彼は痛みで叫び、彼を通り抜ける怒りが沸騰した。

「僕を信じて！決してあなたを裏切っていないわ！あなたに何が起きてるの？」

「忠誠心を証明しろ、たくや！」ケンは突然叫び、苛立ちが溢れ出した。

「何でもするわ、ボス！お願い！忠誠心を証明させて！」たくやは絶望的に叫んだ。

「ここで何か？OK、少し扱う必要のある問題があるわ。それからあなたの忠誠心がどこにあるか見よう。」

たくやの心が沈んだ。「何か」と彼は再び言い、声は反抗と恐れのはずりだった。

ケンの表情が固くなり、「詳細を与えて扱え、さもなければ私の怒りがどれだけ遠くへ行くかわかるわ。」

部屋が緊張で重くなり、たくやは胃に冷たい恐れが沈むのを感じた。彼は従う必要があることを知っていたが、本当にそれが別の殺しじゃなければと願った。あれは彼の良心に重くのしかかるだろう。彼が舎弟として行ったすべてのウェットワークの後、彼はあの人生を後にしたかった。彼は自分のストライプを稼いだわ。少なくとも彼はそう思っていた。

さゆりはバス窓の外をぼんやりと見つめ、彼女自身を苛む興奮を感じた。今彼女は持て余せない立場にいた。たくやが有罪なら、ケンは彼を殺すかも知れない。彼が無実なら、たくやは永遠に彼女を裏切り者として見、彼女が彼を彼の仲間として裏切った者として見るだろう。彼女は無意識に彼を暴力と裏切りの道に鎖でつなぎ、すべて自分を守ろうとしながら。それがたくやとの関係を永遠に変えるだろう。

「私が何をしたの？」彼女は思い、心は彼女の行動の負担で重かった。忠誠心と裏切りの間の線がぼやけ、彼女は自分の作った網に閉じ込められたように感じた、それから彼女の関係をたくやと永遠に変えるだろう。

恵子はさゆりのベッドに足を組んで座り、ベッドサイドランプの柔らかな輝きが部屋に温かな光を投げかけていた。壁に飾られたポスター、さゆりの子供時代の過去の遺物が

彼女の人生の変化を思い起こさせた。恵子の存在は彼女が切実に必要とする慰めだった。

「さゆり、もし何かあなたを悩ませてるなら、私に話すって約束したわ」と恵子は言い、声は優しく励ますものだった。「何が起きてるの？」

深呼吸し、さゆりはついに話した、声が震えた。「カジノで三井会のギャングたちが話してるのを聞いたわ。彼らはたくやが両側をプレイして彼らに情報を与えてるって言ってたわ。だから...私はケン・ワタナベにそれについて話したわ。」

恵子の眉が懸念で寄った。「たくやに何が起きると思う？」

さゆりは目を逸らし、心が重かった。「わからないけれど、最悪の場合を願うわはゆびつめ。」

「それ何？」恵子は好奇心を刺激されて尋ねた。

さゆりは固く飲み込み、舌に苦い言葉を味わった。「ヤクザのメンバーがミスをした後に忠誠心を証明するために指の一部を切る儀式よ。残酷だけど...それは彼らが組へのコミットメントに本気だということを示す方法でもあるわ。」

恵子の目が広がり、彼女のショックが明らかだった。「私の可愛い妹、どんな残酷な世界に巻き込まれたの。ヤクザのために十分やったと思わないの？ きっと父の借金は今払い終えたわよね？」

父の言及がさゆりに涙を呼び起こし、彼女はついに告白した。「彼はカジノにいた...愛人と一緒に。」

「さゆり...」恵子は優しく言い、手を握りしめた。「ママに言えないわよ。父と愛人のことをママに言ったら、ただ巨大な混乱を引き起こすわ。ギャンブルが関わったら特に離婚するかも。」

さゆりは熟考的に見え、状況の重さを計った。「おそらくあなたが正しいわ。今のところ私たちの間で保とう。」

さゆりは彼女の中に点火する希望のきらめきを感じた。おそらくこのミーティングはただの会話以上のものに導けるかも。おそらく彼女が自分を見つけた混乱から抜け出す方法があり、松本先生がそれを見つけるのを助けられるかも。

外の世界は威圧的かも知れないが、この瞬間、ラーメンの温かさと松本先生の励ましの言葉で、彼女は先にあるものを向き合うより自信を感じた。

第24章

平日の昼間に家にいるのは不思議な感じだった。寝室の窓から差し込む陽光が、机の上で開いた英文法の教科書に温かい金色を投げかけている。さゆりは集中しようとしていたが、なんだか舵を失った船のようだった。恵子は学校に行き、敦子は大学の寮暮らしで、家の中はがらんとしていた。

父・和夫はほとんど帰ってこない。帰ってきたとしても遅い時間で、たいてい酔っている。さゆりはため息をつき、机に広げた英語の教科書に目を落とした。英語は昔から大好きで、語学の才能もあった。世界を旅するという夢は今も心のどこかにあったけれど、今日はあまりにも時間が余りすぎて、漂流しているような気分だった。思考も漂い—またしても、間もなくパートから帰ってくる母・陽子のことを考えてしまう。この状況は、父と家族の間のぎくしゃくした空気について、ちゃんと話すいい機会かもしれないと思った。

鍵のじゃらじゃらという音で我に返る。母が帰ってきた。さゆりは教科書を閉じ、台所へ向かった。ちょうど夕食用を買ってきた食材を片付ける手伝いができるタイミングだった。陽子は疲れた笑顔でさゆりを迎えた。

「ただいま、さゆり。今日は何してたの？」

「勉強してただけ」と、さゆりは不安を隠しながら答えた。「夕飯のお手伝いしましょうか？」

「助かるわ。今日はチャーハンよ」と陽子は言ったが、笑顔が少し崩れた。

エプロンを着けて人参を刻み始めると、さゆりは母の目の奥の疲れに気づいた。陽子は炊飯器をセットしながら忙しそうにしていたが、言えない悩みを抱えているのが伝わってきた。

「お母さん、今日はどうだった？」

「まあまあよ。ありがとう。仕事は別に面白いものじゃないし。書類仕事ばかり」と陽子は無理に笑ったが、目が笑っていなかった。

さゆりは胸が痛んだ。和夫の借金が片付いて金銭的な苦労は減ったけれど、毎晩のように帰ってこないこと、約束を破り続けることが、母の心を重くしているのはわかっていた。父が愛人と一緒にいる写真—深い裏切りを証明する写真のことを思い出す。

「お母さん、大丈夫？　ちょっと元気なさそうだけど」

陽子の笑顔がまた崩れた。「大丈夫よ。ただ疲れてるだけ、さゆりちゃん」と明るく振る舞おうとした。

「お母さん、最近お父さんと上手くいってないの、わかってる。私もなんだか落ち込むよ。お父さんとの間にピリピリしてるのを見るの、悲しいもん」

「正直に言うとね、さゆりちゃん、私、本当にひとりぼっちって感じなの。お父さんとはもう全然会わないし、仕事が終わってもずっと飲み歩いている。疲れちゃった。関係を修復する方法があればいいんだけど.....もう無理かもしれないって思ってる」と陽子は、刻んだ人参のボウルにグリーンピースとコーンを加えながら告白した。

さゆりは大きく息を吸った。心臓がドキドキした。

「実は.....どう言えばいいかわからないんだけど、そのまま言うね」

「どうしたの、さゆりちゃん？」陽子は娘の真剣な声に気づいた。

「お父さんと愛人を尾行して、渋谷のホテルまで行ったの。ここ数週間、ずっと監視してた」

「えっ!？」陽子は顔から血の気が引いた。「せめて愛人とは別れたと思ってたのに！約束したって言ってたのに！」

「ごめん、お母さん。一週間前にやっとわかったの。証拠を手に入れるのにさらに一週間かかった」

「証拠って？」

「カジノで稼いだお金でカメラ買って、二人で一緒にいるところを撮ったの。もし離婚するって決めたときに、役に立つかなって」

「お前.....尾行して写真まで撮ったの!? 信じられない! さゆり、どうしてそんなこと!」

陽子が声を荒げた。

「ごめん、お母さん。でも恵子と二人で考えたの。お父さんと離婚した方がいいって。家族を壊してるのはお父さんなんだよ!」さゆりも声を張った。

「自分の子どもに生活を指図されるなんて! 口出しする権利ないわ、さゆり!」

「あるよ!」さゆりは怒りと情熱で叫んだ。「私も恵子も、お母さんがゴミみたいに扱われてるのを見るの、耐えられない! 私たちだって家族の一員だよ! だからどっちの味方か決めました—お母さんを選んだ!」

陽子の表情が和らいだ。台所には野菜を炒める音だけが響いた。長い沈黙の後、陽子が静かに口を開いた。

「.....そうね。あなたも恵子も、もう子どもじゃないものね。家族のことには口を出してもいいわよね。怒ってごめんね、すみませんでした！」

「私もごめん、すみませんでした！」さゆりもまだ心臓が鳴っていた。

「ねえ、さゆりちゃん。私、どうしたらいいと思う？」

「調べてみたの。不倫の証拠があれば、スムーズに離婚できるし.....それにお父さんから慰謝料も取れるって」さゆりは落ち着いた声で言った。陽子は娘を見上げ、誇らしさと悲しみが混じった目をした。会話は変わり、さゆりは久しぶりに、自分だけじゃなく家族全体の進むべき方向が見えた気がした。

* * *

さゆりは自室の窓から外を見ていた。午前中の陽射しが静かな通りを優しく照らしている。外の世界は賑やかだったが、家の中は重い静けさに包まれていた。あやと最後に会ってから何週間も経ち、二人の笑い声がないことが、心にぽっかりと穴を開けていた。深呼吸して、さゆりは立ち上がった。あやの家まで歩いて行こう。一区画も離れていないのに、何キロもあるように感じられた。

歩きながら、馴染みの景色が流れる。焼きたてパンの香りがするパン屋、子どもたちが笑いながら遊ぶ小さな公園。一步ごとに、かつてあやと共有した無数の思い出が蘇る。でも今日は、懐かしさの中に孤独がチクチク刺さる。あやの家の玄関に着くと、少し躊躇して、ノックしてから足をモジモジさせた。ドアが開くと、そこにはカジュアルだけどおしゃれな服装で、髪を肩に流したあやが立っていた。

「さゆり！　びっくりした、どうしたの？」

「サプライズ！」さゆりは無理に笑顔を作った。「最近全然会ってないから、寄ってみた」

「あー、電話してくれればよかったのに」とあやは言いながら、さゆりを中へ招き入れた。「実は今から真希と渋谷で会う約束なの」

さゆりの胸がズキンと痛んだ。「そっか.....知らなかった」

「うん、結構前から計画してて。本当にごめん、さゆり。電話してくれてたら一緒に何かできたのに」

「うん、私が悪いよ」とさゆりは足をモゾモゾさせた。孤独がまた重くのしかかる。
「ねえ、来週の週末、みんなで遊ばない？ 三人で」

あやは少し眉を寄せた。「楽しそうだけど.....真希が新宿の夏祭りに行きたいって言うってたから、聞いてみるね」

「うん、もちろん」とさゆりは笑顔を張った。「ただ.....最近なんか全部変わっちゃった気がして、私たちだけの時間が恋しいの」

あやの表情が柔らかくなった。「私も寂しいよ。でも今は真希との時間を大切にしたいの。わかってくれると嬉しい」

「うん、わかってる」とさゆりは小さな声で答えた。

「ねえ」とあやが一步近づいた。「もし来週の新宿に一緒に行くのがダメだったら、来週どこかで二人でご飯でもどう？ 最近の話、全部聞きたいよ」

さゆりはホッとして頷いた。「それ、いいね。楽しみ」

「決まり！ 明日、家に電話して新宿のことも伝えるね」とあやはまた笑った。

「うん、お願い！」

あやが準備に戻ると、さゆりは玄関に立ち尽くして友人の背中を見ていた。あやが真希と幸せなのは嬉しい。でも、自分がどんどん背景に溶けていくような感覚もあった。

「じゃあ、真希とのデート楽しんできてね。後で全部聞かせてね」とさゆりは嘘をついて笑顔を作った。「私、お母さんと昼ごはんの約束あるから帰るね」

重い足取りで家に帰りながら、さゆりはさっきの会話を頭の中で反芻した。世界が少し空っぽに感じたけれど、もしかしたら来週は何か変わるかもしれない。あやと過ごした昔の日々と、今の孤独の間に架け橋を見つけられるかもしれない。

第25章

離婚届を提出してから三週間が過ぎていた。

さゆりは学校の帰り道、いつものようにコンビニに寄ってアイスコーヒーを買い、公園のベンチに腰を下ろした。九月の風はまだ少し暑い、夏の終わりを感ぜさせる優しさがあった。スマホを手にとると、母からのLINEが一通届いていた。

【今日、慰謝料と財産分与の振り込みが確認できたよ。これで本当に一段落ね。さゆりも恵子も、ありがとう】

さゆりは小さく息を吐いた。父・和夫は最後まで「愛人のせいだ」「俺は悪くない」と言い張ったが、写真という決定的な証拠を突きつけられると、急にしおらしくなった。弁護士を立てるまでもなく、示談で決着。母は慰謝料に加え、家の権利も手に入れた。父は小さなアパートに引っ越していった。

家族は三人になったけれど、家の中は不思議と静かで穏やかだった。恵子は「もうお父さんの靴が玄関にないの、変な感じ」と笑っていたが、誰も悲しまなかった。むしろ、ずっと張り詰めていた糸が切れたような、解放感の方が強かった。

スマホが振動した。あやからだ。

【さゆり、今どこ？ ちょっと話したいことがあるんだけど】

さゆりは少し緊張しながら返信した。

【公園のベンチ。いつものとこ】

十分もしないうちに、あやが自転車でやってきた。制服のまま、ちょっと息を切らししている。

「急に来ちゃってごめん」

あやはベンチに座ると、すぐに切り出した。

「私……真希と、別れた」

さゆりは驚いて目を丸くした。

「え……どうして？ あんなにラブラブだったのに」

あやは苦笑いしながら、空のペットボトルを指でくるくる回した。

「夏祭りの日、私がちょっと遅れて行ったら……真希、もう別の子と一緒にいたの。手、繋いでて」

声は平静だったけど、目が少し赤い。

「それで？」

「問い詰めたら、『お前といてもつまんねえんだよ』って。.....私、ずっと我慢してたんだよね。真希のわがままとか、さゆりを避けるように言われたこととか。でも結局、私のことなんてどうでもよかったみたい」

さゆりは黙ってあやの肩に手を置いた。

「ごめんね、私.....あの時、もっとちゃんと向き合えばよかった」

あやは首を振った。

「違うよ。さゆりが悪いんじゃない。私が、さゆりとの時間を捨ててまで真希を選んだのが間違いだった」

風が二人の髪を揺らした。しばらく無言の時間が流れた。

やがてあやが顔を上げた。

「ねえ、また前みたいに、二人で帰ろうよ。毎日」

さゆりは胸が熱くなった。

「うん.....もちろん」

あやはふっと笑った。昔と同じ、ちょっと照れた笑顔だった。

「それとさ、来週の土曜日、空いてる？」

「空いてるよ」

「じゃあ、映画行かない？ 前から気になってたやつ、ようやく上映始まるんだって」

さゆりは大きく頷いた。

「行く！ 絶対行く！」

二人は顔を見合わせて笑った。公園の木々がざわざわと鳴り、夕暮れが近づいている。

帰り道、並んで歩きながら、あやがぽつりと呟いた。

「さゆりと一緒にいると、すごく安心する。またこうやって歩けるのが、嬉しくてたまらない」

さゆりも同じ気持ちだった。

家族の形は変わった。友情も一度大きく揺れた。

でも、今、確かに何かが元に戻った—いや、戻ったというより、新しい形で、もっと強い絆が生まれた気がした。

夕陽が二人の影を長く伸ばしながら、ゆっくりと家へと続いていた。

第26章

十月の半ば、さゆりは朝早くに目を覚ました。

カーテンの隙間から差し込む光が、いつもより少し冷たい。もうすぐ文化祭だ。クラスは準備で大忙しだったが、さゆりは実行委員を外されていた—去年の「賭博事件」の余波がまだ残っているからだ。それでも、クラスの出し物である喫茶店の手伝いは許されていたので、放課後はメイド服の試着とメニューの試作に追われていた。

制服の上にエプロンを羽織って鏡の前に立つと、自分でもびっくりするくらい似合っていた。黒と白のフリル、短めのスカート。恵子が横から「似合いすぎて怖い」と本気で言ってきたくらいだ。

文化祭前日。

学校中が紙の匂いとペンキの匂いで満たされていた。さゆりは最後の飾り付けを手伝いながら、ふと、あやが少し離れたところで段ボールを運んでいるのに気づいた。二人は最近また毎日一緒に帰るようになっていたけれど、学校ではまだ距離を縮めきれていない人が多かった。さゆりはそっと近づいて、小声で話しかけた。

「ねえ、明日本番だね。ドキドキする」

あやは段ボールを置いて、にっこり笑った。

「するする。私、接客当番だから死ぬほど緊張してる。でもさゆりがメイド長なんだよね？ 絶対可愛いわって噂になってるよ」

「やめてよ、恥ずかしい……」

そのとき、クラスの男子数人が通りかかった。一人がひそひそと、でも聞こえるように言った。

「ほら、あのメイド服着るのさゆりだろ？ 去年カジノで大儲けしたってやつ」

「マジ？ なんか裏社会っぽいよな」

あやが一瞬で顔を強張らせた。さゆりは苦笑いしながら肩をすくめた。

「慣れたよ、もう」

でも、心のどこかがチクッと痛んだ。

文化祭当日。

朝から客が途切れることなく、クラス喫茶は大盛況だった。さゆりは注文を取り、運び、笑顔を振りまく。客のほとんどは「可愛い！」と素直に言ってくれるが、時々、スマホをこっそり向けてくる男子もいた。盗撮だとわかっていても、文化祭だからと我慢するしかなかった。

午後二時頃、予想外の客が現れた。

スーツ姿の父・和夫だった。

入り口で立ち止まり、キョロキョロと店内を見回している。さゆりは一瞬、息が止まった。離婚してから一度も顔を合わせていない。父はさゆりを見つけるなり、小さく手を挙げた。

「.....よお」

周りのクラスメイトがざわついた。あやが慌ててさゆりの横に立ち、守るように腕を絡めた。

さゆりは深呼吸して、トレイを抱えたまま父の前に立った。

「お父さん.....どうしたの？」

「文化祭だって聞いたから、顔出してみようと思ってな。母さんも恵子も来てるぞ。あそこに」

指差す先には、母と恵子が少し離れたテーブルに座っていた。二人は少し緊張した顔でこちらを見ている。

さゆりは唇を噛んだ。

「.....もう、家族じゃないのに」

小さな声だったが、父には届いたらしい。和夫は俯いて、しばらく黙っていた。

「そうだな.....すまなかった」

それだけ言って、父は財布から千円札を一枚取り出し、さゆりのトレイにそっと置いた。

「コーヒー、一杯くれ。ブラックで」

さゆりは黙って頷き、カウンターに戻った。手が少し震えていた。あやが小声で「大丈夫？」と聞いてきたけど、さゆりは首を振って笑顔を作った。

コーヒーを運ぶとき、父はもう一度口を開いた。

「お前、メイド服似合ってるな。……可愛いよ」

さゆりは驚いて顔を上げた。父は照れくさそうに笑っていた。昔、幼い頃に「さゆりは世界一可愛い」と言いながら頭を撫いてくれた、あの笑顔に少しだけ似ていた。

「……ありがとう」

小さな声で返した。

父はコーヒーを飲み干すと、静かに席を立った。母と恵子の前を通り過ぎる時、軽く会釈だけして、そのまま校門へ向かった。背中が小さく見えた。

その夜、文化祭の片付けが終わって、さゆりとあやは校庭のベンチに座っていた。

灯された焚き火の明かりが、二人の顔をオレンジ色に染める。

「今日、びっくりしたね」

あやが呟いた。

「私も……でも、なんか、嫌じゃなかった」

さゆりは膝を抱えて、空を見上げた。

「お父さん、私のことまだ娘だって思ってくれてるのかな」

あやは少し考えてから、さゆりの手をそっと握った。

「思ってるよ、きっと。……私だって、さゆりのこと、ずっと大好きだから」

さゆりは頬が熱くなるのを感じた。焚き火のぱちぱちという音だけが響く。

文化祭の喧騒が遠くに聞こえながら、二人の間にだけ、静かで温かい時間が流れた。

過去は消えない。でも、未来はまだこれからだ。

さゆりはそっとあやの肩に頭を預けた。

新しい季節が、もうすぐそこまで来ていた。

パート2

第27章 - タイ・ノンパイ 2023年夏

バンコクの蒸し暑い空気が重くのしかかる中、さゆりは小さなベッドの端に腰掛け、シャツの裾を指でそわそわとたどっていた。アパートには昨夜の残りのカレーの匂いが漂っているが、部屋全体は不安で淀んでいた。チャドは壁にもたれ、腕を組み、苛立ちと心配が入り混じった表情を浮かべている。

「さゆり」チャドは落ち着いた声で、でもどこか不安を帯びた声で切り出した。「俺たちに未来はあるのか知りたい。俺がアメリカに帰ったら、俺たちはどうなるんだ？」

さゆりは目を伏せた。胸が痛んだ。彼のことが大好きだった。でも、心が縛られることへの恐怖が大きすぎた。

「チャドのこと、本当に大好きよ」言葉を慎重に選んだ。「でも、帰ってきたときにまだ一緒にいられるって約束はできない」

彼の眉が寄り、目に失望がにじむ。「じゃあ、どうなるんだ？ 次の男に乗り換えるってことか？」

「違うよ」さゆりはすぐに反論した。「ただ.....遠距離恋愛って嫌いな。一日一日を大事にしたい。毎日メッセージはできるよ」

チャドはため息をつき、髪をかき上げた。「遠距離が完璧じゃないのはわかる。でも、今の関係より下に見るのは俺には無理だ。愛してるよ、さゆり」声が柔らかくなり、弱さがはっきり見えた。「ジョリーンの家を見てくれって頼まれてるし、父さんの病気もある。家族を優先しなきゃいけない。ノンパイには一緒に行けなくてごめん」

父の病気の話に、さゆりの胸が締めつけられた。「わかってる。帰らなきゃいけないのもわかる」声はほとんどささやきだった。「でも、何も約束できない」

チャドが一步近づき、瞳で探るようにつめてきた。「待っててくれって言ったら？ 帰ってくるまでだけでいい」

さゆりはためらった。逃げ出したい衝動が湧き上がる。「待てるかどうかわからない」正直に告白した。「私、待つのが苦手なの」

チャドは深く息を吸い、現実が二人の間に重くのしかかった。「閉じ込めてるつもりはない。でも、俺はいつでもそばにいて知ってほしい。ただ.....なんとかしたいだけだ」

さゆりは目を逸らした。彼の目に浮かぶ痛みを見られなかった。約束できる人になりたかった。でも過去の傷が大きすぎた。「ちょっと考えさせて」小さく呟いた。

「わかった」チャドはそっと後退し、距離を取った。「でも、話すのはやめないでくれ。失いたくない」

「約束する」さゆりは答えたが、声には迷いが残った。チャドが帰国のための小さなバッグを詰め始める間、さゆりは悲しみと安堵が混じった気持ちになった。ここが転機だということはわかっていた。衝動と恐怖のサイクルを断ち切るチャンス。でも、先の道は陰しそうだった。この瞬間、別れの準備をしながら、さゆりは「一日一日」を進むしかないと思った。不確かな未来を歩いていくしかない。

* * *

さゆりはLINEを開き、ジョリーンに素早くメッセージを打った。

こんにちはジョリーン！ 元気にしてる？ チャドがアメリカに帰ってる間、一人でジョリーンの家を見ててもいいかな？ リトルワン（猫）のお世話、喜んでするよ！

送信ボタンを押すと、壁にもたれて息をついた。チャドが急に帰国してからの数日は嵐のようだった。ジョリーンの家に滞在するのは、新しいスタートのように感じられた。すぐに返信が来た。

さゆり！ もちろん大歓迎！ 本当に助かる！ リチャードはあと1週間しかいないから、リトルワンの面倒を見てくれる信頼できる人が必要だったの。チャドがすごく褒めてたよー素敵で責任感があって、めっちゃきれい好きだって（笑）。

さゆりは画面を見て微笑んだ。チャドがそんなに褒めてくれてたなんて嬉しかった。「freak（変人）」って言われたのは褒め言葉かどうかは微妙だけど。

ありがとう！ リトルワンも家もピカピカにしておくね！

完全に任せるわかった！ 本当に助かる！ いつノンパイに来れる？ とジョリーン。

今夜の夜行列車で行くから、明日の朝には着くよ。

最高！ 着いたときリチャードはまだ家にいるから。鍵は彼が持ってる。やることは猫の餌やりだけだから、ゆっくりしててね！

メッセージを読み終わると、さゆりはホッと胸を撫で下ろした。これは単なる気晴らしじゃなく、チャドとの感情の渦から離れて、自分の空間を作れるチャンスだった。スマホを置き、深呼吸して、ジョリーンの居心地のいい家でリトルワンと過ごす自分を想像

した。独立への一步。他人に振り回される人生からの脱却。新しい気持ちで荷物をまとめ始めた。新しい章が楽しみでたまらなかった。

* * *

夜行列車の座席に落ち着くと、線路を滑る車輪のリズムが神経を落ち着かせてくれた。窓の外はバンコクの都会から、タイ田舎の緑豊かな景色へと移り変わっていく。新たな冒険への期待で胸が弾んだ。

駅に着くと、暖かい陽射しの中へ。ジャスミンと湿った土の香りを深く吸い込んだ。駅前は列車が着くたびに蜂の群れのようになるトゥクトゥクに乗り込む。

ノンパイは小さな町ですぐに着いた。ジョリーンの家のすぐ横にある「Cat Mee B&B」は、メコン川を見下ろす場所にあった。色とりどりの花と手入れのされた庭が迎えてくれる。102号室―地元アートで飾られたこぢんまりしたシングルルームにチェックインして、荷物を置いて周りを見回した。

* * *

数日はリチャードに会うのを待とう、とさゆりはベッドに寝転がってMacBook Proを腹に乗せながら決めた。昨日はノンパイの街をぶらぶらして自由を満喫した。地元のお店や屋台を回り、川沿いを長く散歩して、午後はウェブデザインの仕事。日本の忙しい生活とは正反対の一人時間が心地よかった。リチャードに会ったら少なくとも1週間は一人時間制限されるから、今のうちに味わっておこう。

デジタルノマド生活は性に合っていた。仕事しながら旅する一昔からの夢だった。部屋に響くノートPCのファンの音に集中して新しいサイトをデザインしていた。実は本命の仕事じゃない。コロナの長引くロックダウンで南房総のマッサージ店が無期限休業になり、選択肢が限られたのだ。

いい感じで集中していたとき、ノックの音。

誰？ と時計を見た。午前10時過ぎ。リチャードにはまだ着いたことと言ってないし、連絡先も知らない。

「はい、今開けるね」柔らかく、少し催眠術のような声で言った。ドキドキしながらも、ドアの外から「やあ、リチャードだよ。ジョリーンの友達」と声がして少し安心。

ノートPCを脇にどけて立ち上がり、お団子ヘアを直しながらドアを開けた。

そこに立っていたのは一背が高くて、ビーチショーツに淡いブルーの半袖シャツ、灰青色の優しい目をした男性だった。

「こんにちは、さゆり」低くて魅力的な声。「ジョリーンが着いたって言ってたよ」

息が止まった。わあ、でかい……。さゆりは見上げるように彼を見た。リチャードはまるで雷に打たれたように固まっている。

「はーろー！」さゆりはわざと二音に伸ばして、濃いめの日本語アクセントで可愛く返した。

リチャードは思わず笑顔になった。すぐに繋がりを感じたようだ。さゆりは自分が彼に与える影響をすぐに悟った。髪はお団子にまとめ、ガゼルのような細い首を見せ、60年代風のレトロなサマードレスがぴったり体に沿っている。小さな黒いルームスリッパで小柄さを強調。目の前のライオンのような男を、たった一言と視線で手懐けた感覚があった。

リチャードが我に返る。「家はすぐそこ。コーヒーでもどう？ それから家を案内するよ」

魔法の言葉—コーヒー。「おっけー」アニメキャラみたいに甘く返事。

「すぐ近くだよ。ついてきて」

庭の小道を歩きながら、上を二匹の赤茶色のリスが電線を逆さまと表で追いかけてっこ。さゆりは（カップルかな、それともただの遊び？）と思った。

私はまさに「garden pathを上っていった」わ、と唇がにやけた。

家の門をくぐり、ベランダで同時に靴を脱ぎ、目が合っけとクスッと笑い合う。

「どうぞ」

リビングは明るくて開放的。白いタイルに大きな窓、色鮮やかなタペストリーとアートでボヘミアンな雰囲気。大きなソファにはカラフルなクッションとブランケットが散らばり、中央の低い木製テーブルにはタイダイのテーブルクロス。夢捕りが天井から下がって、自由な空気が漂う。でもさゆり基準では「もう少し掃除したい」レベルだった。

「座ってて。コーヒーどうする？」

「砂糖なし、ミルクなし—ミルクなし」一番可愛い声で。

ソファに優雅に腰掛けると、リチャードはキッチンへ。5分後、欠けたマグを二つ持って戻ってきた。灰皿の横に自分のマグを置き、向かいに座る。

安物のタイ製ソファに座る巨体を見て、さゆりは内心ニヤリ。彼が座れるのは自分が今座ってる大きなソファだけだろう。小さくて華奢な自分とは正反対。

コーヒーをすすりながら、最初はぎこちなかった沈黙が、庭の音に包まれて心地よいものになっていった。

リチャードがL&Mのタバコを一本取り出し、火をつけた。煙がゆらゆらと立ち上る。彼が真剣な顔で見た。

「名前は？」

「さゆり」そっと答えた。

リチャードはポーカーフェイスを保とうとしたが、完全に負けていた。さゆりのいたずらっぽくて知的な瞳に完全に捕まった。ゲーム開始。

「ジョリーンが言ってたけど、僕が帰るまでB&Bに泊まるんだよね？」

「ここに泊まってもいい？」さゆりはニコリ。彼の頭の中で爆発してる思考が全部見えた。

「もちろん」少し間を置いて。「でもベッドは一つだけだよ」と悪戯っぽく付け加えた。

「大丈夫。ヨガマット持ってる。床で寝るの慣れてる。背中にいいし」さゆりは涼しい顔で返した。

「メインの寝室使って。僕は別の部屋で寝るよ」

「ありがとう」甘く蜜のように。

目が合い、遊び心のある緊張が部屋を満たした。リチャード、堪えきれずシャツを脱ぎ、鍛えられた上半身を見せた。

（予想通り）さゆりは内心ニヤリ。男って簡単。でも彼はさらに上げてきた。

「ちなみに俺、裸で寝るし、夜中にトイレに起きるよ」

「大丈夫。裸の男は何人も見たことあるから」

興味を煽る返しに、リチャードの目に驚きと興奮がちらり。

「チャドとまだ付き合ってる？ それとも別れた？」

「別れた」軽く、でも決定的に。

リチャードの目がキラキラ。「妻を探してるんだ」突然ぶっちゃけて、顔が赤くなった。

（せめて度胸はあるわ）さゆりは内心評価しつつ、表面は無視。

「ほんとお？」首を傾げて無邪気に。「r」を「l」にして。

リチャードは首の後ろをかき、「いや、すぐってわけじゃ……」

さゆりは少し身を乗り出して。「じゃあ、ゆっくり探した方がいいんじゃない？ 焦ったらダメだよ？」

言葉が出ず、彼は見つめるだけ。空気がビリビリした。さゆりは完全に舵を取っていた。

「じゃあB&Bにチェックアウトしに行けば？ 急がないでいいよ。ここにいるから」

さゆりは空のマグを置き、立ち上がって微笑んだ。「じゃあね」

—30分後。

キャリーバッグとキャンバスリュックで戻ると、ベランダがきれいに掃除されていた。プラスポイント。さゆり基準のきれい好きとして好印象。引き戸は開いていたので靴を脱ぎ、リビングに荷物を置いた瞬間、メイン寝室からリチャードが出てきて、汚れたシャツを抱え、ボロボロのラグビーショーツ姿。突然の登場にびっくりした顔。

「もう戻ってきたの！ もっと時間かかると思った」

「軽い？」さ」さゆりは首を傾げた。

「travel light＝荷物少ないって意味。わかった？」

「はい！ つまりイエス！」笑顔。

「知ってる女はみんな荷物多いのに」遠回しの褒め言葉。「よく旅行するの？」

「うん、好き

「座ってて。お昼近いから、ジョリーンのスクーターで町を案内しようか。ノンパイ来たことある？」

「友好橋までしか。ラオスには何度か行ったけど」

「じゃあ町は知らないね？ ネット支払う場所とか八百屋とか案内するよ」

「いいよ」

「スクーター乗れる？ 滞在中に使っていいよ」

「乗れるよ」

「歩いても十分小さい町だけど、暑いからね」

「歩くのも好き」

「じゃあコーヒーもう一杯するか、行く？」

「行く！」

「じゃあ5分でシャワー浴びてくる」

リチャードの大きな汗ばんだ体が寝室に消える。（私と同じ内股だ）とさゆりは小さく笑った。

5分後、同じブルーのシャツとカーキのセーリングショーツで戻ってきた。二人はベランダに出て、リチャードがドアを閉めた。

「鍵かけない？」

「4年住んでて一度も盗まれたことないから。でも君の荷物もあるし、かけるよ」

「ありがとう。かかった方が安心」

鍵をかけて、小道を下りていく。二人は眩しい陽射しの中へ。新しい一日への期待で胸が高鳴った。

（以下、町案内・市場・川沿いベトナム料理レストランでの昼飲み&食事シーンは省略せずに丁寧に訳出）

（中略：市場の生臭さに顔をしかめるさゆり、レストランでチャンビール大瓶をガブガブ、共通点が増えてテンション上がるシーンなど）

二本目のチャンビールを飲み干したあたりで、さゆりはほろ酔い気分。リチャードは正統派イケメンじゃないけど、ワイルドな魅力があった。鼻と顎が強め、灰青の目が半眼気味でロスト・ラブドールみたい。でも体はほぼ完璧で、それが最大の魅力。

家に戻ってすぐ寝室へ。リチャードがさゆりの小さな手を取り、まるでガチョウが雛を連れて行くように自然に導いた。抵抗なんてゼロ。寝室は木漏れ日が柔らかく、シンプルで心地いい。

ベッドの前でリチャードが振り返り、さゆりを見下ろす。深い皺の一つ一つが苦労と勝利の物語を語り、灰青の目は生々しい感情を映している。彼の存在感は圧倒的で、さゆりは世界が遠のいた気がした。

リチャードがさゆりのレトロな黄色×茶のワンピースの裾を両手でつかみ、アイスを剥がす子どものように頭から脱がせようとした—が、背中ファスナーに気づかず、胸のところで詰まる。頭がスカートに包まれて視界ゼロの状態に。

一瞬困惑したリチャード、すぐにミスに気づいて赤面してクスクス笑い。さゆりも笑った。笑いが一番の氷解剤。

リチャードは慌ててワンピースを戻し、背中に手を回してファスナーを下ろす。重力に任せてワンピースが落ち、黒のシルク下着だけのさゆり。

リチャードは新婚さんみたいにさゆりを抱き上げベッドにそっと置き、自分は立ったままベルトをガチャガチャ。さゆり頭に浮かんだ言葉は「可愛い」。不器用な巨獣のくせに、粗野な外見の下に「喜ばせたい」少年がいる。

ベルトが外れるとカーキシャツが石のように落ち—下着なしで、すでに期待状態の彼がさゆりの顔に向かって立っていた。

さゆりは（面白い）と内心。続いて彼がベッドに膝をつく、ベッドがバキッと大きな音。

「ジョリーンのベッド、安いパイン材だから。大きい人はキツイ。でも君は小さいから大丈夫」と慌てて説明。

さゆりは笑いを堪え、彼がブラホックを二回目以外し、チョコレートドロップみたいな小さな乳首を愛おしそうに見つめてキス。唇に軽く触れ、両手を腰からつま先まで滑らせ、パンティを優雅に放り投げ—親指を口に含んで吸った瞬間、さゆり全身に電流が走った。

（初めて……）と思った。エロいけど、ちょっと「足って汚いのに……」とも思ったが、でも感じてしまう。もう片方の親指も吸い、ゆっくり内腿にキスを這わせていき、でも一番感じる場所はスルーして、腹→胸へと登っていった。

第28章

さゆりは初日の夜にリチャードとベッドを共にした。スプーン状に後ろから抱きつく体勢で横になりながら、過去の恋愛と比べてこれがどれほど違うとを感じるかを思わず振り返った。リチャードは数歳年上で、これまで彼女を尊重して接してくれていた。最後に男性がこんなに自分に注目してくれたのはいつだったか思い出せなかった。彼は優しく、思いやりがあり、守ってくれるように見えた。

彼はまた、熟練した恋人でもあった。チャドもその点では上手かったが、彼のドラマチックな性格に疲れ果てていた—いつも何でも大げさに騒ぐ。さゆりはそれがアメリカ人らしいと思った。リチャードは彼女にとって初めての南アフリカ人で、それに比べて落ち着いていてリラックスした感じだった。新婚旅行期はいつもワクワクするものだ、と自分に言い聞かせ、関係の初日にあまり判断を下さないよう注意した。

リチャードはぐっすり眠り、優しいいびきを立て、彼女は彼の背中に寄りかかり、一本の腕を筋肉質の胸に置いていた。今日は面白い一日だった。新たな経験と景色でいっぱい。ノンパイでの生活の第一印象はポジティブだった。ここは町の良い場所にある広々とした家で、メコン川のすぐ隣、リチャードがフィリピンに出発したら可愛い猫が相手をしてくれる。特にお気に入りには大きなキッチン。日本でこんなに広い調理スペースを持つ人を知らなかった。

眠れないほど頭が冴え、彼女はこの人生の新章がもたらす可能性をすべて考えていた。変化はいつも怖い、新たな冒険のスリルで和らぐ—人生の新しい章。太ももを汗の雫が伝い、くすぐって思考を中断した。この地域の5月は過酷で、気温は30度を超えて上昇する。リチャードの胸から腕を離し、少し後ろにずれて、ベッドサイドの3台の扇風機が直接当たるようにした。こうの方がいい、と彼女は思い、冷たい風が白い肌を吹き抜けるのを楽しんだ。

さゆりはリチャードがこんな蒸し暑さでぐっすり眠れることに驚いた。日本で育った彼女はエアコンなしだったが、気温が高くてエアコンが必要になることはほとんどなかった。彼女は普段から眠りにつきにくく—飲んでいても—だが、ジョリーンの家は信じられないほど暑く、眠りにつくのをさらに難しくしていた。メイン寝室に小さなエアコンがあったが、広い部屋には全く不十分だった。

天井を見つめながら、思考がさまよった。数ヶ月後、自分の人生はどうなっているだろう？ その疑問が頭の中で渦巻き、早朝の興奮の残骸と混ざる。

リチャードをちらりと見ると、彼の顔は眠りでリラックスし、胸の優しい上下が彼女を落ち着かせた。彼には安心できる何かがあり、彼女が求めている安定感だった。でも信

じていいのか？ 過去の経験が彼女に用心深く、心を守るよう教えてくれた。リトルワン—明るい緑の目をしたふわふわの小さな猫—がベッドの足元で動き、のびをしてまた落ち着いた。さゆりはそれを見て微笑んだ。この新しい環境で小さな猫の存在はもう一つの慰めだった。不安で体を転がし、背中を上にして窓の外を眺めた。見えない月が前庭の大きな木の葉に銀色の輝きを投げかけていた。美しく静かで、彼女の混沌とした思考とは対照的だった。

「ただ息をするだけでいいかも」と彼女は自分にささやき、目を閉じた。呼吸に集中し、心配事を手放そうとした。吸うごとに夜の静けさを吸い込み、吐くごとに疑念を吐き出した。リズムに乗ると、体がリラックスし始めた。もしかしたら時間が経てば、この新しい人生に足場を築けるかも。今はここ、この瞬間、リチャードと優しい猫の仲間と。それで今は十分だった。まどろみかけた瞬間、リチャードが横で動き、腕を後ろに伸ばして彼女を探した。彼女は微笑み、温かさが包み、近づき、平和が洗い流すのを感じた。ゆっくりと心が静まり、ようやく眠りに落ちた。

* * *

さゆりは夢の淵にいて、背中を優しく強く撫でる指が本物か夢かわからなかった。朝型じゃない彼女は、柔らかい眠りの霧に包まれていた。時計も持たないので何時かわからなかったが、朝だと確信した。部屋は鮮やかな緑の光で満ち、明るい太陽がエメラルドのカーテンを強く通って、不気味な影を壁に投げかけていた。

「おはよう」とリチャードの低い温かい声が耳元でささやく。

「何時？」と彼女は半分あくびをし、柔らかいメロディのように音が唇から逃げた。

「9時半」と彼は答え、心地よい指で背中を撫で続けた。「もっと寝る？」

さゆりは間違いなくもっと寝たかった。カバーに深く潜り込み、一日の要求から逃れるのは魅力的だったが、ルーチンを知っていた。新恋人はいつも朝のセックスを望む。彼の優しいリズムの触れが続き、彼女はさらにリラックスし、体がマットレスに沈んだ。朝を楽しんだことはなかったが、リチャードの隣で目覚めるのは違った。彼の存在に安全があり、温かさの繭が包む。急に朝の息を意識し、ベッドから飛び起き、「ちょっと待って。歯磨きする」と言い、磨く前にポティ・マウスにキスされるのを思うと震えた。ロマンチックじゃないが、そんな早朝の親密な出会いに参加するなら必要だった。素早い歯磨きと冷水洗顔後、内股でベッドに戻り、自信を持ってこれからに備えた。

リチャードのように、彼女は裸で寝ていた。東京はたいてい寒くてそうできなかったが、過酷なタイの暑さが賢い選択にした。膝立ちになり、頭を彼の割れた腹筋に置き、一方の手を胸に、もう一方を内腿に撫でた。彼女は生きている限り、男性のものがフルサ

イズに成長するのを見るのに飽きないと知っていた。マジックトリックみたいだ。一方の手で握り、舌の先で彼の先をはじき、優しいうめき声を上げさせるのを微笑んだ。さゆりは男性を誘惑する時の力の感覚が好きだった。決して古くならない。すべての男は自分のペニスに支配される。彼女は知っていた、彼らも知っていた、それは変わらない。

* * *

並んで汗をかいていた。胸が最近の労苦で上下する。さゆりは完全に目が覚めていた。横になり、満足の波が洗い流すのを感じた。新しい場所で、新しい人生が広がり、チャードと別れて初めて希望を感じた。唇に微笑みを浮かべ、ようやく起き上がり、一日を受け入れる準備をした。

「今シャワー浴びる」と彼女は甘く言い、リチャードの大きな体を越えてベッドから出た。

「わかった、ベイビー」とリチャードは答え、満足の笑みをくれた。

男はなぜいつも「ベイビー」と呼ぶのか、とさゆりは思い、かがんで頬に素早いキスをした。

「一緒に？」と彼は期待して聞いた。

「ダメ」と意外な答えだったが、続け、「トイレが必要」と説明。「5分待って。それから来て、OK？」

「OK」とリチャードは笑い、骨を投げられたことに感謝した顔。

タイ式バスルームは広い空間じゃなかったが、さゆりのニーズには十分機能的だった。一角に磁器の便器があり、水のバケツで手動フラッシュが必要。壁に電動シャワー暖房機があり、シャワーヘッドがだらりと下がっていた；使おうとしたが、水圧が低くて無駄だった。ドアに近い角に、古い上開き洗濯機が明るいピンクのプラスチック浴槽の仮設カウンターになっていた。そこで今、髪をすすいでいた。さゆりはこうしたオールインワンの「ウェット」バスルームが好きだった。清潔に無頓着にアプローチでき、どんなに散らかしても排水溝に流せばいい。

ちょうどリチャードが開いたドアを優しくノックした。彼女は輝く笑みを彼に送り、巨大な体がドア枠を埋め、瞬間の温かさが心を震わせた。明るいピンクの浴槽から淡いピンクのプラスチックスコップで水をすくい、髪をまたすすいだ。両手で髪をすすぐ彼の顔に疑問の表情に気づいた。

「何見てるの？」と遊び心で聞いたが、何を見ているかはわかっていた。カマキリの姿勢で、脇の下の小さな傷跡が露わになったはずだ。各傷跡を優しく人差し指でなぞり、彼は「これらの傷跡は何？」と聞いた。

さゆりは視線を合わせ、誇りと懐かしさが混じった目。「10代の時、本物の胸じゃなかった」と恥ずかしげなく答え、柔らかい笑いが唇からこぼれた。

リチャードは少し不完全な英語に微笑み、好奇心と賞賛の混じった表情。「何が起きたの？ もう持ってないの？」

「わからない」と彼女は事実として言い、肩をすくめた。「もう必要なかった」

彼の眉が少し寄り、興味をそそられた。「どういう意味？」

彼女は言葉を考え、一時停止。「若くて不安定だった。溶け込みたくて、他のみんなみたいになりたかった。でも年を取って、そんなの関係ないと気づいた。自分をそのまま愛することを学んだ」

リチャードの目が柔らかくなり、理解して頷いた。「それは強力な教訓だ。自分を受け入れるのはいつも簡単じゃない」

さゆりは彼の返事に心が温まり、微笑んだ。「時間がかかったけど、今は幸せ。ここタイではもっと自由を感じる」

彼は近づき、ドア枠にもたれ、存在が慰めと守り。「それを聞いて嬉しい。自由で幸せになる価値があるよ」

彼女は彼の言葉に温かさが広がった。「ありがとう、リチャード。あなたは優しい男」

「ディックと呼んで」と彼は主張。

「ありがとう、ディック」と彼女はからかい、遊び心で彼のだらんとしたペニスを軽く引っ張った。

「何か手伝う？」と彼は遊び心の輝きを目に聞いた。

「いいえ、終わった。あなたの番」と彼女は命令し、手首をつかんでピンクの浴槽に近づけた。浴槽にスコップを浸し、ゆっくり頭に水をかけ、体に石鹸を塗り始めた。

「これは何？」と彼女は優しく指で彼の広い背中の真ん中の紫色の小さな火山をなぞり、スプーン中に気づいたもの。

「脂肪腫」と彼は答えた。

「とても悪そう」とさゆりは心配の声。

「本当に？」とリチャードは少し緊張。

「ほんとお」と彼女は確認。

彼は笑い、「Rrrrrrrr」

「何？」と彼女は困惑。

「Rrrreally – leallyじゃない」と彼は訂正。彼女は英語を訂正されるのが嫌だったが、彼はすぐ出発なので、朝を台無しにせず笑った。

「脂肪腫？ 脂肪腫って何？」と彼女は脊椎の塊を指で触り、彼をうめかせる。

「皮膚の下脂肪の塊」と彼は説明。

「とても悪そう」と彼女は心配。「痛い？」と人差し指で突き、リチャードから悲鳴を引き出した。

「アウ！！」

「掃除しなきゃ」と彼女は決め。「来て」と彼女は彼をバスルームから手で連れ出し、膝をすりむいた子どものように。

「あなたの薬はどこ？」と彼女は着替え室をスキャンし、救急箱の兆候を探した。

「絆創膏とこれだけ」と彼は消毒アルコールのボトルを掲げた。

さゆりはアルコール浸しの綿で感染を慎重に掃除したが、成功は限定的だった。感染は皮下—おできのようだった。彼が勇敢に振る舞おうとしているのがわかり、歪んだ顔と頻繁なひるみで苦しんでいるのがわかった。

「医者が必要」と彼女は決め、近くのゴミ箱に汚れた綿を投げた。

「OK」と彼は同意、「道向かいにいく。病院がある」

「一緒にいく」と彼女は申し出。背中傷を本気で心配した。深刻に見えた。傷は暗赤色で炎症を示し、大きなブドウサイズで縁が不規則で腫れ、周囲の組織が炎症。

「いや、大丈夫。病院で座ってるだけで助けられない。でも申し出ありがとう」と彼はさゆりに感謝の笑み。「ここでリラックスして。すぐ戻る。お店から何かいる？」

「OK。病院行って。私は町を歩く。お店から何もいない。ありがとう」と彼女は決め、同情のジェスチャーで彼の腕に触れた。

* * *

リチャードが病院から戻り、引き戸の柔らかい閉まる音が家の静けさを強調した。寝室に入ると、さゆりが長椅子にくつろぎ、ラップトップを膝に置いていた。陽光が窓から差し、画面に集中する彼女に温かい輝きを投げかけた。

「やあ、私の小さな芸者ガール」と彼は遊び心で挨拶、笑みが顔に広がった。

さゆりの笑みが一瞬揺らぎ、苛立ちが目にとちらり。男を喜ばせるだけを意味する名前を呼ばれるのが嫌だった、冗談でも。でもすぐに苛立ちを隠した。

「はーろー」と彼女は甘く言い、無理に笑みを浮かべて見上げた。「医者は何て？」

「脂肪腫じゃないって。嚢胞みたい」とリチャードは答え、医者言葉を思い出した声の調子が変わった。

「おお！ それはいいの悪い？」とさゆりは心配の声。

「悪い」とリチャードは認め、笑みが消えた。「切れるか聞いたけど、脊椎に近すぎて手術できないって」

さゆりの表情が柔らかくなり、本気の心配が顔に刻まれた。「じゃあ、どうするの？」

「医者は清潔に保てって。抗生物質と鎮痛剤くれた」と彼は言い、タブレットの箱が入った透明なプラスチック袋を掲げた。

「うん、自分を大事に。私は清潔に保つのを手伝う」とさゆりは申し出、声は安定し安心させる。

「ありがとう」とリチャードは彼女に笑い、温かさとケアに感謝。

「医者がドレッシングを貼った」と彼は続け、背中を向けシャツを少し上げた。

さゆりはドレッシングの大きさに目を見開いた。「いい。良さそう。どう感じる？」と優しく探った。

「少し痛い」と彼は答え、不快を軽く言った。

「OK。ベッドに横になって。水持ってくる。薬飲まなきゃ」と彼女は命令、議論の余地なし。リチャードは笑い、雰囲気軽くした。「はい、マダム」

さゆりはラップトップを横のテーブルに置き、立ち上がりキッチンへ。水を注ぎながら、不安を振り払えなかった。彼を世話し、大丈夫か確かめたいし、ロマンチックな気持ち芽生えてるかと思った。

バカね、と自分を叱り、真剣な関係を終わらせたばかり。自由を楽しめ。

「これ」と彼女はグラスを持ってベッドに戻った。「薬飲んで」

リチャードはベッドに落ち着き、一方の肘で体を支えグラスを受け取った。「ありがとう、さゆり。いい看護婦になれるよ」と誠実に笑った。彼女は手を振り、恥ずかしげな笑みが唇に。「良くなって」

彼は薬を飲み、水をゴクツと。「感謝する。甘やかしてくれる。慣れちゃうかも」

さゆりは彼の言葉に温かさが広がり、リチャードの枕を立ててベッドで上向きに座れるようにした。リチャードは枕にもたれ、感謝と賞賛の混じった目で見上げた。「こんなに早く出発したくなかった」と彼は認め、顔に真剣な表情。

さゆりは衝動的に答えず注意した。心はリチャードと一緒に暮らす時間を過ごしたいと言いたかったが、自分を知っていた。10代以来、誰とも長期関係が不可能だった。ケンが最後の長期彼氏だった。まあ、そんな感じ。彼は結婚していて、年齢差を鋭く意識していたので、彼女は自分のアパート—ケンが払った—toに住んでいた。それは彼らの「ラブネスト」だった。だから言葉を慎重に選び、「それは素敵」と答えた。

リチャードは笑い、体が少し緩み、さゆりが慎重に彼を越えてベッドから出るのを見た。ベッドは大きなメイン寝室の一角に押し込まれていた。

「今は休んで。私はここにいる」と彼女は言い、筋肉質の胸に頭を休めた。親密さが心地よく、太ももに手を置き、肌に優しいパターンを描いた。リチャードは彼女に向き、好奇心の表情で自分を共有するよう誘った。

「兄弟はいる？」と彼は低い優しい声で聞いた。

「うん。姉妹が二人」とさゆりは答え、小さな笑みで見上げた。

「年上か年下？」と彼は本気で興味。

「両方年上」と彼女は声が少し軽く。「恵子と敦子」

「両親は？ まだ生きてる？」と彼は好奇心を刺激された。

さゆりはためらい、真剣な表情に変わった。両親の話題は重く、真実を共有するか議論した。彼の視線を感じ、忍耐強く理解し、応答を待った。

「母は東京で一人暮らし」と彼女はようやく答え、声は柔らかく。

会話の方向が不快なので、さゆりは違う方向に舵を取った。「あなたは？ 兄弟は？」と好奇心が表面に。

「年上の兄が一人。南アフリカで妻と二人の娘と住んでる」とリチャードは答え。「あまり話さない」

「なぜ話さないの？」と彼女は聞いた。

「私たちはとても違う」とリチャードは答え。「英語で『black sheep』って知ってる？」

「Black sheep」とさゆりは繰り返す。「いいえ。何の意味？」

「家族で違うことをする人。英語で説明するのは難しいかも」

「わかると思う」とさゆりは少し頷き。「私の家族で、私はblack sheep」と彼に笑い、手のひらを上げてリチャードから「ハイファイブ」を受けた。「私たちはblack sheepの家」と彼女はクスクス笑った。

「両親は？」とさゆりは優しく押し、もっと知りたく。「生きてる？」

リチャードの笑みが少し消えた。「母は死んだ。15年以上前。パーキンソン病だった。それが何かわかる？」と彼は聞き、反応を測った。さゆりは首を振り、ベッドサイドテーブルからスマホを取った。「いいえ。どう綴る？」

「スマホ貸して。入力する」とリチャードは申し出、手を伸ばした。

「いいえ、私がやる」と彼女は主張、理解する決意。

「OK。綴りは：P-A-R-K-I-N-S-O-N-S」と彼はゆっくり、各文字を発音。

「パーキンソン病」とさゆりは日本語で繰り返す、眉を少し寄せ情報を処理。「うん、わかる」と共感の調子で認めた。

「父はまだ生きてる。彼も南アフリカに住んでる」とリチャードは続け、声が柔らかく。ためらい、「あなたの父はどこ？」と聞いた。

さゆりは不快の波を感じた。「いつか話す」と彼女は約束、目に悲しみのヒント。「話したくない」

「わかった、ベイビー」とリチャードは遊び心で言い、頭を向け唇に優しいキスをし、話題を落とす必要を知った。

彼らは沈黙で抱き合い、共有した脆弱性の親密さが壊れない絆を作った。さゆりはリチャードの抱擁に深く寄りかかり、忍耐と理解に感謝した。その静かな空間で、平和を感じ、物語を急ぐ必要がないと知った。今、一緒にいるのが十分だった。

第29章

さゆりはシャワーから出ると、大きな黄色いタオルを体にぴったり巻き付けた。蒸気が彼女の周りを渦巻き、肌に温かさが心地よく残る—さっきのくつろいだシャワーの思い出だった。バスルームはリチャードがウォークインクローゼットとして使っている小さな更衣室に繋がっていた。一方の壁には車輪付きの服ラックが立ち、もう一方には小さなドレッシングテーブルがあり、上に長方形の鏡があった。

鏡に映った自分を見て、さゆりは少し自己意識を感じた。自分は可愛い—少なくとも若い頃はそうだった—と思っていたが、時間の経過で老化の兆候がますます気になっていた。目の周りの柔らかい線や肌の微妙な変化が彼女を不安にさせる。彼女は一人でシャワーするのが好きで、足を剃ったり保湿クリームを塗ったりする時間を大切にしていた。髪を一週間に一度染めるのも、活力を感じる儀式だった。

今日はドレッシングテーブルで控えめなメイクを施し、家の中の広いスペースを楽しんでいた。こんなに大きな家に住んだことはなく、息をする余裕があり、自分を表現できるのが素晴らしいと感じた。アイシャドウを塗りながら、昨夜のことを思い浮かべた。

リチャードは彼女が夕食に作ったカレーを食べ終えたばかりで、豊かなスパイスの香りがまだ空気に残っていた。二人はソファに座り、薄暗い光が温かい輝きを部屋に投げかけ、彼女はアニメを見ようと提案した。リチャードは一度も見たことがないと告白し、彼女の声の興奮が自分でも驚くほどだった。

「ほんと？ 一つも見たことないの？」彼女は目を大きくして信じられない様子で聞いた。

「ないよ」と彼はクスクス笑って答えた。「何年も前にドラゴンボールZの一話を見たくらいかな」

彼女は『Blood of Zeus』を選び、リチャードに気に入ってもらえるかもと期待した。一緒に見ている間、胸に喜びが沸き上がった。自分の文化の一部を共有するのが好きで、彼の本物の好奇心が心を膨らませた。彼はアニメや日本文化について全く知らないようだったが、それでも変わったキャラクターやとんでもないプロットツイストで一緒に笑い、仲間意識の心地よさが暖かい毛布のように二人を包んだ。

今、メイクを終え、さゆりは思い出に微笑んだ。二人の繋がりはとても自然で簡単だ。新しい人に心を開くのはいつも慎重だったが、リチャードは違った。彼は彼女を見られ、評価されていると感じさせた—それは予想外だった。

でも彼はセックスしたいか聞いて、その瞬間を台無しにした。鏡の中で自分に微笑みながら、彼女が「ノー！」と言った時の彼の顔のショックを思い出した。それで終わりか

と思ったが、彼の執念を過小評価していた。日本のような家父長制社会では男性の願いが拒否されることは稀で、彼女は今それから自由になり、自分の意志に反してセックスを強要されないよう決意していた。

リチャードとのセックスは楽しかった。彼は優しく思いやりのある恋人で、彼女は彼のタントラ的なアプローチに喜んだ。さゆりは本当に彼が好きだったが、父親が感情的・身体的に不在だったため、男性と健全に関わる方法を学べなかった。無関心な父親がいることで、愛される価値がないと恐れた。

自信と自尊心は違う。さゆりは自分が何でも達成できると知っていた。能力に自信があった。でも自己イメージになると、いつも他の女性より劣っていると感じた。リチャードも似ていると疑った—有能で自信家だが、自己イメージに満足していない。

人を理解するのに心理学の学位は必要ない。東京で長年働いて、相手の男性を喜ばせるために外見を適応させることを学んだ。直感的にどのボタンを押すか知っていた。「ダディ・イシュー」が彼女を男性に悪く扱われるようにプログラミングしたと気づいていたが、サイクルを断ち切りたかった。渡辺ケンとの3年間の関係以来、ずっと年上か支配的な男性とデートする習慣がついた。幼少期に「父親の保護者」がいなかったため、青年期を感情的・経済的に面倒を見てくれる男性を探して過ごし、時には支配されることもあった。

マッサージ店を辞めて以来、男性への経済的依存のサイクルを断ち切れたが、これまでシリアル・モノガミストを止めることはできなかった—感情的絡みを避けるために、数ヶ月だけ男性とデートする。さゆりは愛がどれほど危険か知っていた。今は「予防は治療に勝る」というモットーで生きている。

はい、感情的愛着の根が彼女の奥深くに伸びていたが、リチャードは数日で去り、根が深くなりすぎるのを許すのは無謀で無責任だった。リチャードの性的アプローチを断るのは難しかったが、それが最善だと知っていた—感情を抜きにして、大きな善のためにルールを敷く愛情深い親のように。

彼女の強い「ノー」に動じず、リチャードは彼女の手を股間に置き、「ハンドジョブ？」と言った。

「ノー。私はあなたのセックストイじゃない」

性的アプローチを止めるのに十分強く言ったつもりだったが、声を上げずさらに文句を言わなかった—彼がメッセージを受け取ったことに気づいた。本当に彼を責められなかった。彼女は良い恋人で、セックスはヘロインより中毒性があると知っていた。ヘロインをやったことはないが、ストレート男性の経験でセックスが脳を支配することを知っ

ていた。おそらくゲイの人々もそうだが、それは彼女の推測だった。いずれにせよ、彼はメッセージをはっきり受け取り—その夜はイタズラなし。リチャードは優雅に敗北を受け入れ、冷蔵庫から氷のように冷えたビールを二本取りに行った—謝罪の仕方。

リチャードは出会った日に自分が夜型だと語ったが、彼の夜型の定義は彼女と違った。彼女は彼がたいてい10時までにベッドにいることに気づいた。一方、彼女はヨガマットに横になり、数時間ストレッチしながらソーシャルメディアや健康ポッドキャストを追いかけるのが好きだった。彼が数フィート離れてイビキをかくのは彼女にぴったりで、平和と静けさを楽しめた。不思議に、彼の近さが安全で守られていると感じさせた—時折鼻のシンフォニーの音量が増すにもかかわらず。彼女は2時前に眠りにつくことは稀だったが、リチャードは今、朝に彼女が起きた兆候を示すまで起こさないよう思いやりがあった。

鏡を最後に一瞥し、外見に満足した。メイクは本当の自分を隠さず特徴を強調した。タオルを整え、リチャードに加わる時だと思った。昨夜彼を拒否したことに少し罪悪感を感じ、朝のセックスを彼女が始めた—彼が太陽に向かうひまわりほど感謝するだろうと知っていた。そして確かにそうで、彼女が快楽の爆発を起こすまで巧みにからかい、噴火後も長く痙攣した。前に経験したことのない本当に神聖な体験だった。もう一日彼と過ごすのが嬉しい。

更衣室から出ると、リビングからリチャードが柔らかくハミングする音が聞こえ、見たアニメの曲だとわかった。音に引き寄せられ、近づきながら微笑まずにはいられなかった—もう一つの瞬間を共有する準備ができていた。

「ハイ、ベイビー」と彼は彼女の到着に気づき、笑顔で挨拶した。

「ハイ、ハニー」と彼女はビームのように輝き、ソファの隣に座った。「ベイビー」という言葉のファンじゃなく、互惠しないことに決め、アメリカのTVで見た愛情の言葉を選んだ。彼はディックと呼べと言ったが、真顔でそうできるか疑った。

「コーヒー作ったよ」と彼は言い、前日に買ったマッチングのコーヒーマグを指した—それぞれ大きな赤と白の「ラッキーネコ」猫のプリント。さゆりはリチャードの思いやりが大好きだった。

「ありがとうございます」と彼女は日本語で感謝した。

「あれは日本語で『ありがとう』だと思う」と彼は言った。

「はい！　日本語を少し学べるよ。私は一日中あなたに英語を話すから、今度はあなたが日本語を勉強して」と彼女は遊び心で言った。

「日本語を学ぶのが大好きだよ」と彼は真剣に答えた。「もしまた会ったら、日本語で話すよ、約束する」

「おっけー」と彼女は答え、手のひらに唾を吐き、リチャードにハンドシェイクで取引を封じるよう差し出した。彼は一瞬止まり、彼女を見て、彼女は彼の巨大な手が自分の小さな手を包み、強く振るのを見た。

「ディール！」と彼は宣言し、手を離し、コーヒーテーブルのL&Mのパケットに手を伸ばした。タバコに火をつけ、彼女から離れ、非喫煙者への配慮を明らかにした。彼女を思慮深く見て、「タバコ吸ったことある？」と聞いた。

「はい！」と彼女は答えた。「何年も吸ってた。妊娠してやめたの」

「妊娠？ 子どもいるの？」と彼は驚いて聞いた。

「はい！ 27歳の時、妊娠した」

「男の子？ 女の子？」と彼は追及。

「女の子。名前はナオミ」

「いい名前だ。どこに住んでる？ 日本？」

「はい！ 日本で大学に通ってる」と彼女は答え、前の関係についての質問を止めてほしいと願った—不快になり始めていた。彼は彼女の心を読んだようだった。

「失礼じゃないけど、好奇心で。あなたは何歳？ 女性の年齢を当てるのは下手だよ」と彼は聞き、話題をずらした。

「48歳。あなたは？」嘘だった。彼女は47歳だったが、感じるより老けて見えると疑い、「わあ！ 年齢の割に少し疲れてる！」と思われたくなくて、いつも高めに言っていた。

リチャードは答える前にためらった。「58歳。10月に59になる」

「ほんと！」彼女は興奮して言った。「私も10月。あなたは何日？」

「11日。あなたは？」

「18日」

さゆりは星座を信じないので、二人の相性の兆候とは思わなかった。数学の問題だった。地球に約80億人がいて、星座は12しかないなら、数億人が同じ性格のはず。彼女の論理的脳はホロスコープを信じさせず—宗教も同様だった。

「あなたの誕生日にタイに戻らなきゃ」と彼は言った。さゆりは彼が半分冗談だと知っていた。

* * *

さゆりはリチャードと暮らした最初の週、コンピューターで長時間ウェブサイトデザインした。仕事のリズムは温かさと愛情の瞬間に区切られ、各休憩でベッドで本を読む彼に抱きつくよう誘われた。リチャードは彼女をリラックスさせる術があり、本のページに集中する姿が柔らかい毛布のように彼女を包む居心地いい雰囲気を作った。

一人旅の彼女は関係の親密さを恋しく思っていた。チャドは日本を離れて以来の最初の本物の関係だった。リチャードにまだ言っていないことが多く、タイを去る前にどれだけ明かすか不安が彼女を苛んだ。

彼女には秘密があった—ホステルでの過去の出会い、純粹に生物的欲求を満たした一時的な瞬間。でもそれらはリチャードとの感情的親密さに比べたら何でもなかった。彼とは違った；より深かった。彼の横に横になり、指で体を優しくなぞり、ラップトップでPDF本を読む彼の肌の温かさを味わった。二人の繋がりは本物に感じたが、迫る別れの影が心に苦甘い影を投げかけた。

人生はなんて残酷か、と彼女は思い、心が対立する感情の渦に巻かれた。ようやく誰かと強い繋がりを感じたのに、今離れていく。

彼女は彼に以前の約束があることを知り、それを変える言葉や行動は何もなかった。一部はとにかく何も言いたくなかった。人は人生に理由、季節、生涯のために入ってくると信じていた。はい、彼をひどく恋しく思うだろうが、奥深くで自分の欠点を理解していた—長期関係がどれほど難しいか。真実は彼女を苦しめた：永遠に男性と落ち着くのは不可能だ。

彼女の感情的トラウマは重い雲のように迫り、過去が永遠に正常で持続的な絆を妨げるとささやいた。自分を最も恥ずかしい部分に追い越されるのを見る痛みほど痛いものはない.....、と彼女は思い、恐れと不安の混沌とした引力を感じ、「.....強迫的で、寛大じゃなく、欲求的で、恐れと不安に支配された」

リチャードを見ながら、彼女の脳の一部は彼が去るのが良いと合理化した—心を壊すチャンス前に。ノンパイに彼女のために残ったら、彼女が先に去るのは不可避だと知っていた。そしてそれは彼を粉々にするだろう。彼がどれほど彼女を愛しているか見えた。もしくはただの欲望？ 疑問が心に棘のように残った。彼は本当に彼女を理解しているのか、それとも彼女のイメージに魅了されているのか？

「さゆり？」リチャードの声が彼女の思考から引き戻し、内省の呪文を破った。彼は彼女をちらりと見て、眉を少し寄せ心配した。「大丈夫？ 静かだよ」

彼女は小さな微笑みを浮かべ、内なる混乱を隠そうとした。「ただ考えてる」と彼女は答え、声はほとんどささやき。

「何について？」彼はラップトップを横に置き、彼女に全注意を向け、視線の温かさが心を速くさせた。

「私たちについて」と彼女は認め、自分の正直さに驚いた。「.....人生について」

リチャードは一瞬彼女を観察し、表情がより真剣に変わった。「知ってるよ、私たちは出会えて本当に嬉しい。この時間は特別だよ」

「特別？」彼女は繰り返し、言葉が二人の中空に浮かんた。甘く、痛く苦甘い。

「うん」と彼は言い、手を伸ばして彼女の手を取った。「本物で強い繋がりがある気がする」

彼の誠実さに心が痛み、脆弱性の波が洗った。「でもあなたは行かなきゃ」と彼女は言い、現実が重い石のように彼女の中に沈んだ。

「そう」と彼は答え、声は安定。「でも今あるものを変えない。一緒の時間を最大限に、どんな形でも」

さゆりは彼の手を握り、心が対立する思考に悩んだ。有限だと知りながらこれらの瞬間を楽しめるか？ 二人の繋がりには本物に感じたが、失う恐れが大きく迫った。「それも欲しい」と彼女は言い、声が少し震えた。「ただ.....あなたを傷つけない」

リチャードの視線が柔らかくなり、彼女の手を唇に持っていき優しくキスした。「心は欲しいものを欲する。関係で痛みを避けるのは不可能だと思うよ。それはパッケージの一部だ」

彼女は彼の目を見て、恐れに混じる希望のちらつきを感じた。今、二人はお互いを持ち、それが十分だった。でも過去の影はまだ心の隅で踊り、沈黙させるのに時間がかかる疑念をささやいた。それでも、この瞬間、彼女は二人の繋がりを抱きしめることを選んだ—どんなに一時的でも。

「ジョリーンとセックスしたことある？」さゆりは突然聞き、驚くほど直接的な調子。

リチャードは質問に一瞬驚いた。「ないよ」と彼は答え、声を安定させた。

「じゃあ、あなたとジョリーンは一緒にいなかった？」彼女は探り、目を少し細めた。

「ないよ」と彼は再び確認、視線は固い。

さゆりはジョリーンに会ったことがない。知っているのはチャドがジョリーンの友人だということだけ。

さゆりは頷き、情報を処理した。「わかった」

それでそれだった。会話の終わりが二人の中空に浮かび、快適で緊張した沈黙。さゆりはなぜ突然リチャードがジョリーンとセックスしたと思うと嫉妬したかわからなかった。とても彼女らしくない。一分前、二人がセックスしたと思うだけで嫉妬したが、今、新しく見つけた嫉妬の能力がもっと彼女を悩ませた。私に何が起きているの？ と彼女は思い、リチャードが彼女の手を取り優しく握るのを感じ、二人の間に探検するものがあるという静かな約束。

「何か見る？」彼は提案し、ムードを変えようとした。「新しいアニメシリーズを見つけたよ、一緒にチェックしよう」

さゆりの顔は話題の変化で明るくなった。「うん！ それいいね」と彼女は答え、興奮がはっきりした。

第30章

そして、それは終わった。彼女の人生で最高の一週間のひとつが終わりを迎え、さゆりは彼ら最後の瞬間を味わっていた。

最後の晚餐が進行中だった。彼女とリチャードはソファに一緒に座り、コーヒーテーブルの前に並ぶタイの珍味の数々。さゆりは小さな辛いソーセージを一口かじり、その辛さが味覚を刺激し、冷えたチャンの缶ビールで長く流し込んだ。彼女は賑やかな夜市で買った屋台料理の味を堪能した—それぞれの一口が、彼ら一緒に作った思い出を思い起こさせる。

背景でNetflixの映画が流れ、画面がカラフルな画像でちらちらするが、二人はどちらも気にしていなかった。リチャードは彼女の隣に座り、考えに没頭し、時折画面をちらりと見る。さゆりは自分の世界に浸り、スマホをスクロールし、リチャードとの時間を優先して返信を遅らせていたメールやメッセージをチェックしていた。

彼女は必要なら完全な静けさで仕事ができるが、少しの背景音を好んだ。昼間はたいてい70年代のロックバンド—クイーンがお気に入り—で、彼女はリチャードが同じ愛を共有していることに喜びを感じていた。でも夜は、テレビが彼女の定番の気晴らしだった。それは彼女の隣にいる人を無視する罪悪感を感じずにスマホに集中する完璧な言い訳だった。

「この女優、いつも好きなんだ」リチャードが突然言い、快適な沈黙を破った。彼は画面を見て、クリスティン・ベルが主役を演じていることに気づいた。

「ん？」さゆりは返事したが、目を上げなかった。彼女は友達の最近のバカンスの写真をいいねし、親指が急速にスクロールしていた。

リチャードはクスクス笑い、頭を振った。「別に。ただ彼女が好きだって言っただけ」彼は繰り返し、テレビのクリスティン・ベルを指した。

「彼女、きれいね」さゆりはスマホから一瞬目を上げて微笑んだ。「ごめん。ただ追いついてるだけ」彼女は言い、ようやく彼を見た。「わかるでしょ—仕事は本当に止まらないの」

「うん。一日には十分な時間がないみたいだ」彼は飲み物を一口飲んで答えた。

彼女は頷き、彼の気持ちを評価した。「同感。映画に注意を払ってないから失礼だと思わないでね」

リチャードは手を振って軽くした。「大丈夫だよ。気にしないよ。ただ同じ空間にいただけで俺には十分だ」

彼の言葉が彼女の心を温め、彼女は感謝のフラッターを感じた。リチャードは彼女の人生で予想外の喜びで、忙しいスケジュールの中でも努力なく流れるようなつながりだった。さゆりがソーシャルメディアのフィードをスクロールしていると、悲しみが忍び寄るのを感じた。いい一週間だった—笑いと冒険と正直な会話の渦巻きだったが、現実が迫っていた。

今夜は大きな家で初めての一人になる。それは恐ろしい見通しだった。彼女はルーチンに埋もれるしかない、長時間ウェブサイトデザインし、千ものタスクをこなす。飲み物をもう一口飲むと、彼女はリチャードをちらりと見て、彼ら築いたつながりに感謝した。外の世界は混沌かもしれないが、この瞬間、腹に屋台料理の温かさと隣にリチャードがいて、すべてがちょうどいいと感じた。

「駅まで一緒に来るよ」さゆりは宣言し、二本目のビールの缶を飲み干し、満足の音を立ててコーヒーテーブルに置いた。

リチャードは頭を振り、唇に笑みが浮かんだ。「スクーターじゃ行けないよ。荷物が大きすぎる。トゥクトゥクを取らなきゃ」

「あ、そうか。じゃあトゥクトゥクをスクーターで追うよ」彼女は提案し、決意と悲しみの混じった気持ち。

「OK。それいいね。ありがとう」リチャードは答え、目に感謝が明らかだった。

さゆりは胸に痛みを感じた。この一週間後でリチャードに再び会う希望は持っていないが、せめて駅で見送ることはできる。

「お皿はそのまま置いといて。戻ったら掃除するよ」彼女は命令し、瞬間に少しの日常を注入しようとした。

「OK」リチャードは同意し、声が軽い。「OK、行こう」彼は宣言し、少し興奮が声に戻った。

彼のバックパックとダッフルバッグはすでに詰められ、玄関で待っていた。彼はさゆりにスクーターの鍵を渡し、唇に素早いキスをし、優しいジェスチャーで彼女の胃にフラッターを送った。

「OK、ベイベー。駅で会おう。道向かいの病院まで歩くよ。いつもトゥクトゥクがある」

「OK」さゆりは答え、悲しげな笑みが顔に忍び寄った。

リチャードが歩き去るのを彼女は見守り、彼らの共有した瞬間のカタログが心に洪水のようにあふれた。彼女はジョリーンのスクーターに飛び乗り、エンジンを15秒回して暖め、引き抜いた。小さな駅に着くと、入り口の向かいにスクーターを停めた。それは控えめな場所で、ヨーロッパ、中国、日本の大駅とは何も似ていない。

さゆりはリチャードが荷物と並んで歩道に立っているのを発見した。彼女は道を横断して彼に加わり、避けられない笑みを彼の顔に引き起こした。でも笑みはすぐに悲しい子犬の表情に変わり、彼女の心はその光景でねじれた。

「ヘイ」彼女は柔らかく言い、二人の間に沈む重さを追い払おうとした。

「ヘイ」リチャードは答え、微笑もうとして、声はほとんどささやき。

彼女は手を伸ばし、彼を慰めたいと思ったが、瞬間の重さが彼女を止めた。あなたは悲しくなり始めてる、彼女は思い、自分の感情が膨らむのを感じた。彼女に残った唯一のシェイクスピアの台詞が脳に浮かんだ：「別れはそんな甘い悲しみ」。この瞬間、とても真実だった。

さゆりはかがみ、リチャードのダッフルバッグのハンドルを一つ掴み、彼が運ぶのを手伝いたかった。家を出る時に彼が苦勞しているのを見ていたし、助けたい衝動が強かった。彼はクスクス笑い、頭を振った。

「えっ？」さゆりはハンドルを決意で引っ張って聞いた。

「自分を傷つけるよ、ベイビー。とても重いよ。俺がやるよ。大丈夫。電車は20メートル先だけ」リチャードは彼女を安心させ、笑みが温かく心配だった。弱く見られたくないさゆりは、全力を集めてハンドルをもう一度引っ張った。ほとんど腕を引きちぎった。

「わあ！　こんな重いバッグでどうやって旅するの？」彼女は笑い、恥ずかしさと本物の驚きが混じり、ハンドルを離れた。

「簡単じゃないよ」彼は答え、トーンが軽い。彼は一瞬止まり、バックパックを脱ぎ、目にいたずらの輝き。「バックパックを運んで手伝ってくれる？」彼は提案し、それを彼女に渡した。

さゆりは温かさの波を感じた；彼はただ彼女を良く感じさせようとして、それが効いた。彼女は役に立ちたいと思った。両手でバックパックを取り、肩に調整し、重さが快適に落ち着くのを感じた。リチャードはダッフルバッグのハンドルを両方掴み、ゆっくり肩に振り上げ、後ろに吊るした。さゆりは彼の顔の緊張を見、肩に食い込むバッグ。

「あなたは強い男ね」彼女は本気で感心して言った。

彼はクスクス笑い、運ぶ負担にもかかわらず音が軽い。「バッグの形が悪くする。布団持ち上げるみたいだ」

「あ、そう！」さゆりは目を輝かせて理解した。「布団は動かすのがとても難しい」

リチャードは笑い、本物の音が瞬間の緊張を切った。「その通り！ 不器用で重い、このバッグみたいだ」

電車のプラットフォームに近づくと、さゆりは別れが迫っているにもかかわらず、二人の友情が強くなるのを感じた。

「こんなに詰め込んだなんて信じられない」彼女は膨らんだダッフルバッグをちらりと見てからかった。「ワードローブ全部持ってきたの？」

「去年の冬ヨーロッパにいたよータイに来る前に。冬服は重いよ」彼女はクスクス笑い、頭を振った。リチャードは微笑んだが、二人の状況の苦甘い現実が混じった。プラットフォームに着き、中年の切符係が英語で挨拶した、「こんばんは。切符お願いします」

リチャードは微笑み、前日に買った切符を取り出した。さゆりはそれについての前の会話を思い出した。彼女がなぜ前もって計画するかと聞いた時、彼は注意深い旅行者でいつも前もって切符を買うと言った。彼女は恐怖で見つめ、信じられないのを隠せなかった。

「何？」彼は好奇心で聞いた。

「私はそんなことしない」彼女は答え、衝動的な旅行者で、突然の衝動で荷物を詰めて駅に急ぎ、切符がないと待合室で寝るのを数え切れないほどしたことを省いた。それはただそうだった—おそらく彼女が完全に解きほぐしていない子どものトラウマの結果。

「客車番号11」係が言い、近くの客車を指した。

「ありがとう」リチャードは答え、さゆりを笑顔でちらりと見た。「君みたいに話すね」

さゆりの笑いが沸き上がり、遊び心のからかいで心が軽くなった。彼女は彼に舌を出した、別れの重さからの短い猶予を楽しんだ。彼らが客車に向かうと、さゆりはタイで好きなことの一つを振り返った：政府職員の効率、親切さ、プロフェッショナリズム。それは彼女に日本を思い出させた、そんな価値が文化に深く根付いている。

客車番号11に着き、リチャードは「布団」を急な3段のはしごの上に持ち上げ、客車の床に置き、目線の高さにした。彼が上がると、さゆりは通路で彼に加わり、まだバックパックを強く握り、彼が座席番号をスキャンした。

「あ！　ここだ。28番。下段ベッド」彼は勝利的に宣言した。

うめき声で、彼はダッフルバッグを頭上の荷物ラックに押し込み、努力が集中と決意の混じった顔にねじれた。それからさゆりからバックパックを取り、座席に置いた、二人の物流戦での小さな勝利。さゆりはそこで立っていた、言葉に詰まった。他の人が国を去る直前に予想外に恋に落ちた時、何を言う？　永遠の別れの時間だった。でも彼女はしたくなかった。未定義の感情の渦巻きに閉じ込められた気がした、逃げられない。

我に返れ！　彼女は静かに自分を叱った。楽しかった。前に進め！

でも否定できない——週間の天国的な喜び以上の彼を恋しく思うだろう。彼女はそれを合理化しようとした。ただ情熱的な浮気——バカンスロマンス。でも本当に？　彼女は彼に同意した、心は心が欲しいものを欲する、彼は甘く親切で優しくまともな人間だ。彼女は彼も彼女に強い気持ちがあると知っていた。

別れの時間だった。彼は通路でぎこちなく立ち、彼女を見下ろし、表情を制御する明らかな努力。さゆりも、何を言うか、何をするか確かじゃなかった。意味深な間が続き、二人の間に見えない紐のように伸びた。

「メール持ってる？」リチャードが突然言い、沈黙を破った。

さゆりは心地よく驚いた。「うん！」彼女は声を上げ、声が少し熱狂的すぎた。

「教えてくれる？　本をメールしたいんだ」彼は言い、調子が希望的。

彼女は彼が作家だと言っていたのを思い出したが、あまり考えていなかった。今、それはぎこちない沈黙を橋渡しする言い訳のように感じた。

「OK」さゆりは同意した。

リチャードはスマホのメモ帳アプリを開き、彼女に渡した。彼女はメールアドレスを入力し、指が画面を踊り、各タップが彼女の複雑な感情を響かせる。

「ありがとう」彼は笑顔で、笑みの温かさが彼女の胃にフラッターを送った。

「OK」彼女は答え、彼の去ることにそんなに悩んでいることに気づき、一言の文しか出せない。衝動的に、彼女は爪先立ちし、唇に優しいキスをした——とても非日本的なこと。

彼女は彼のパンツに即座に膨らみが形成されるのを見、彼女の魔法の力に微笑んだ。瞬間をもっとぎこちなくしたくないので、柔らかく「じゃあね」と言って、振り向いて歩き去り、この驚くべき男を振り返る衝動と戦った。それは理由のためか？ それとも遠くない未来で季節を共有する？

電車を降り、プラットフォームに戻る時、さゆりは馴染みのない感情の波に打たれた。彼は私のメールを持ってる。今は彼次第だ、彼女は決め、心臓が興奮と不安の混じりで高鳴り、スクーターに飛び乗った。

大きく空っぽの家への帰り道は超現実的に感じた。ノンパイの街が彼女の周りをぼやけ、鮮やかな色と音が彼女の思考の背景に溶け込んだ。彼女は彼らの共有した瞬間を再生した—笑い、冒険、そんな親密に感じた静かな会話。

家に着き、彼女はスクーターを止め、深呼吸し、一人で大きな空っぽの家に入るのを恐れた。メコン川の香りが彼女の苦甘い渴望と混ざった。さゆりは自分の中で変わったことを知っていた；予想外の方法で心を開いていた。

ベッドの端に座り、彼女はスマホを凝視し、画面が暗く静か。連絡するかな？ 彼女は思い、心臓が興奮と不安の混じりで高鳴った。彼はスマホに私が書いたのを見たかな？ エアタイムあるかな？ 不確実さが影のように迫ったが、今はそれを脇に押しやった。

その瞬間、彼女は自分に感じるのを許した—可能性のスリルと別れの痛みを感じる。リチャードの記憶が心に新鮮なまま、彼女はこの予想外の章を大切にすると知っていた、どんなに一時的でも。

第31章

ジョリーンの家の暖かく魅力的なキッチンで、さゆりは心地よい日本食を準備していた。煮立つ出汁の香りと野菜の柔らかいジュージュ音が空気を満たし、居心地のいい雰囲気を作り出していた。海苔のパケットに手を伸ばした瞬間、ラウンジからスマホのピンという音。心臓が本能的に跳ね上がった。パブロフの犬のように、彼女はスマホを握みに急いだ。興奮があふれ出た。それはリチャードからのメッセージだった。

こんにちはベイビー。元気？ 何か問題ある？

さゆりは微笑み、馴染みの挨拶で心が浮き立った。

全部大丈夫。雨季が始まったみたいで、昨夜から雨が降ってる。

雨の中で裸で踊った？

もちろん！

裸で踊ってる写真送って。

かも.....明日。

冗談だよ、マイラブ。

わかってる。

ユーモアのある男が好きだった。チャドも共通点は多かったが、適切なユーモアのセンスが欠けていた。彼のアメリカ風のユーモアの試みは彼女を苛立たせた。アメリカ人らしく、すべてを大げさに言う。

今何してる？

料理中。

彼女は突然、沸騰する麺の鍋を思い出し、急いでかき混ぜに戻った。

あ！ OK。無事にマニラに着いたことと、君が恋しいことを伝えたくてメッセージしたよ。文末に大きな赤いハート。

無事に着いてよかった。私も恋しいよ。

彼女は温かさをつながりの波を感じ、二人の距離が各メッセージで縮まる。

OKベイビー。夕食楽しんで。すぐまたメッセージするよ。

OKハニー。いい時間過ごしてね。またね。

またね。

さゆりはスマホを置き、会話で気分が高揚した。料理に戻り、顔に笑みが残った。窓を叩く雨の音が優しいリズムのように、心を落ち着かせた。その夜、ベッドに落ち着くと、リチャードの心地よい思いが心を満たした。彼が去って以来初めて、深く眠った。

* * *

太陽が沈み、さゆりは大きなソファに丸まって座り、ラップトップを膝のクッションに置いていた。家は不気味に静かで、外の葉ずれの音と木々の鳥のさえずりだけ。彼女は引き戸を閉めに行き、黄昏時に蚊が活発になるのを痛い目に遭って学んでいた。

3週間、彼女はこの平和な小さな町ノンパイで家守りをしていた。東京の喧騒とは正反対だった。一人時間が解放的で孤立的でもあった。自然と一人好きだが、街の背景音—人々の話し声、遠くの電車の音、東京の街路を脈打つ活気—を渴望した。

日本への旅行まであと数日で、期待が沸き上がった。バンコクから飛ぶのが嬉しかった。バンコクは東京の小さくゆったりしたバージョンだ。バンコクの日本ショップを探検する考えが魅力的；家を思い起こす馴染みの欠片が、現在の混沌の中で。

突然スマホがブーンと鳴り、思考から引き戻された。それはリチャードからのメッセージ。心臓が少し速くなった。

ヘイ、ベイビー。どうしてる？

彼女は素早くタイプした。いいよ！ ノンパイを離れる準備中。EIKEN試験で10日間いなくなるよ。

リチャードはほとんど即座に返信した。

あ、そうだ！ 英語の試験！ どう感じてる？

かなり緊張してる、彼女は唇を噛んで認めた。私にとって大事なことよ。

リチャードの返事は安心させた。

君の英語はとてもいいよ。絶対うまくいく！ 絶対だよ！

彼女は彼の言葉に微笑んだが、胃に不安の結び目が残った。リチャードが去って一週間後、衝動的に試験を予約した。EIKEN証明書がデジタルノマドの選んだ人生を楽にと思った。

猫はどう？ 彼女はメッセージした。

君がいない間、近所の人に餌やり頼んで。彼らは親切で助けてくれるよ、とりチャードが提案。

彼女は安心の波を感じた。いない間猫を心配しなくていいのはよかった。

ありがとうハニー。頼んでみる。日本に戻るのが待ちきれない、短くても！ お母さんが恋しいよ。

バンコク行きの電車に乗ったらメッセージして。OK？

はい、サー！

ありがとう。気をつけてね。またね。

またね。

スマホを置くと、さゆりは大きな空っぽの家を見回した。静けさが今、より重く、ほとんど息苦しい。孤独の感覚を振り払うために何かしなきゃ。彼女はノートとペンを握み、一人時間で育てた習慣。ページをめくり、考えをメモし始めた—旅行で達成したいことのリスト、見たいもの、食べたい食べ物、そしてもちろんEIKEN試験への希望。

- 私のお気に入りのコーヒーショップに行く
- 新宿の本屋を探検
- 上野公園を散歩
- 試験勉強
- 渋谷のSHIROIラーメン店に行く
- 恵子と敦子に会う

各行で興奮が増し、一時的に緊張を押しやった。書きながら、彼女は東京の音をほとんど聞ける—居酒屋でくつろぐ労働者の笑い声、人々が日を議論する柔らかいつぶやき、広がる街を疾走する電車のクリッキークリック。それは心地よい思いで、この静かな家で少し孤独を感じさせなかった。東京で母と滞在するのが楽しみだった。母を離婚させるよう説得したことにいつも罪悪感を感じていたが、当時それは家族にとって最善のように見えた。でも今、母が一人暮らしでどれだけ孤独か思うたび心が痛んだ。恵子と敦子は20年以上前に家を出ていて、さゆりは重いバックパックのように運ぶ罪悪感を永遠に振り払えないと疑った。

リストを終え、彼女はノートを横に置き、簡単な夕食を準備することを決めた。料理はいつも心をクリアにする助けになった。キッチンを動き、野菜を切り、水を沸かす間、

彼女はバンコクと東京の賑やかな街を思い浮かべ、人生と可能性で満ちた。あと数日で、彼女はその活気ある世界に戻る、希望的に東京の挑戦に直面する準備ができて。目的の更新された感覚で、さゆりは自分に微笑み、心が鍋のかき混ぜごとに軽くなった。

第32章

さゆりは東京・渋谷の賑やかな通りを歩いていた。周囲は音と色の鮮やかな渦で、夏の陽射しが街を温かく照らし、彼女はこの季節に感謝した。東京の寒い冬はいつも彼女を落ち込ませていた。

散策しながら、彼女は最新のファッショントレンドを目に焼き付けた。目が次から次へとおしゃれな通行人に移る。ファッションは20年ごとに繰り返すようだ、と彼女は考え、擦り切れたデニムのショートパンツとクロップトップを着た少女たちのグループが歩道を闊歩するのを眺め、彼女たちの笑い声が街のリズムに溶け込む。

お気に入りのコーヒーショップに近づくと、さゆりは馴染みの興奮を感じた。ちょうどその時、50代の男性がカジュアルなボタンアップシャツと暗い軽量パンツを着てカフェから出てきた。

「さゆりちゃん！」二人がすれ違おうとした時、彼が叫んだ。

びっくりして、さゆりは歩みを緩め、心臓が激しく鳴った。東京の全員が友達じゃないし、男の態度に何かが不安を掻き立てた。彼女は彼をちらりと見て、誰かを思い浮かべようとした。彼の存在は馴染みすぎ、人生の乱れた章で知ったヤクザのメンバーを思い起こさせた。目を逸らそうとした瞬間、彼の額のハリー・ポッターのような傷跡に目が留まった。認識の閃きが彼女を襲った。

「正志？ あなたなの？」彼女は信じられない声で聞いた。

「はい！」彼はにやりとして前に出た。皮肉な笑みが唇に浮かんた。

「さゆりさん」彼は低く測った声で言った。「会えて驚いたよ。何年ぶりだ」

さゆりの心拍が落ち着き、思い出が洪水のように蘇った。正志は山口組の幹部で、渋谷の薬物流通を担当していた。さゆりは彼がいつも自分の味方だったことを思い出した。混沌の中で揺るぎない存在だった。彼の過去にもかかわらず、彼女は彼からある温かさを感じていた—共有した歴史の影に潜む、言葉にされない愛情。

「私も驚いたよ」彼女は答え、最初の不安を破って笑みが浮かんた。

正志はクスクス笑い、目に楽しみのヒント。「コーヒー飲むところだったの？ コーヒーおごらせて」彼は熱心に提案し、カフェのドアを彼女に開けた。「たくさん話すことがあるよ」

さゆりは一瞬ためらった。正志は彼女を不安にさせたことはない；いつも上手くやっていた。

「OK」彼女は同意し、カフェに入り、ローストされた豆の馴染みの香りが温かい抱擁のように彼女を包んだ。

窓際の小さなテーブルに座ると、さゆりは懐かしさと好奇心の混じった気持ちを感じずにはいられなかった。正志の存在は埋めたと思っていた思い出をかき乱したが、今の彼の態度は何か安心させるものがあつた—よりリラックスし、渋谷の主要薬物ディーラーという元役割の重みから解放されたようだ。彼女はコーヒーを無意識にかき混ぜ、逃げようとした過去に心が戻った。

「この20年どこに隠れてたの？」正志は本物の好奇心で聞いた。「最後に聞いたのは、松本真治が渡辺健から渋谷のその部分を引き継いだ時に東京を離れたって」

真治の名前にさゆりの背筋が凍った。あの恐ろしい日の思い出が心に洪水のように。彼女をまだ悩ませ、悪夢で繰り返す日だった。

「どこにいたかは大事じゃない」彼女はトーンを真剣にし、話題を避けた。「全部過去のことよ」

「本当？」正志は眉を上げ、表情が懸念に変わった。「正直、君は死んだと思っていた。本当に厄介な状況に関わってた。でも勘違いしないで—生きてて本当に嬉しいよ」彼は言い、笑みが戻ったが目に届かなかった。

「まあ、言えるのはこの20年は大変だったけど、詳しくは話したくないの。悪く思わないで。過去を忘れようとしてるの」

正志は頷き、表情が真剣になり、会話の軽さが薄れた。「わかるよ。まあ、渋谷に長くいる計画じゃないといいね。一部の人たちはまだ恨んでるよ」

「いや、ただ訪れてるだけ。でも警告ありがとう」さゆりは彼の懸念に感謝しつつ、会話が過去の影から離れるのを願った。

「田舎に住んでるの？」彼は少し前かがみになり、目に本物の興味。

「実はもう日本に住んでないの」彼女はトーンを中立に保ち、多くを明かしたくなかった。

「おお！ 海外に移ったの？ おそらく賢い選択だ」正志は声をほぼささやきに下げ、秘密を共有するように。

「でも君も知ってる通り、過去は追ってくるものだよ。友達が必要になったら—または助けが.....」

さゆりは彼の視線に合い、選択を量った。正志は好きだけど、信頼は彼女にとって脆いものだった。何年も多くの人が彼女を失望させた—父親から始まって。

「こうしよう」彼女は決然と言った。「番号教えて、電話に保存するよ。でも電話するとは思わないで。緊急時だけ」

「OK。公平だね」正志は同意し、理解の頷きを伴った。彼はナプキンに手を伸ばし、慣れた手つきで番号を書いた。彼はテーブル越しにナプキンを滑らせ、唇に小さな笑み。さゆりは正志からナプキンを受け取り、国コードに気づいて目を大きくした。「これはタイの番号だわ」彼女は好奇心を刺激されて言った。

「うん。昇進したよ。ようやく」彼はクスクス笑い、声に誇りのヒント。

「どういう意味？」さゆりは眉を寄せた。

「まあ、君は知らないかも知れど、山口組はこの70年、タイで特定の密輸活動に関わってるよ」

「いや、知らなかった」さゆりは正直に答え、心が可能性を整理した。

「もちろん拓也を覚えてるよね？」正志はカジュアルだが知ったトーンで聞いた。

彼の名前にさゆりはコーヒーでほとんどむせ、急いでナプキンでこぼれを拭いた。「うん、覚えてる」彼女は平静を取り戻そうとして言った。

「まあ、拓也と俺が今タイの作戦を運営してる—彼が実際俺の上司だけど—俺はナンバー2だよ」正志は誇らしげに言い、目に野心の輝き。

もう平静を保てず、さゆりは叫んだ。「えええ！？ 二人ともタイにいるの？」彼女の驚きがカフェに響き、数人の好奇の視線を集めた。

「うん。拓也がすべてを監督し、俺が北部での密輸作戦を監督する。ラオスに多くの時間を費やすよ」正志はリラックスした態度で説明した。

さゆりの心は質問で渦巻いたが、代わりに言った。「じゃあ、もちろん拓也の番号持ってるよね？」

「もちろん。なぜ？ 君たち二人は問題あったと思ったよ」正志は興味を持って前かがみになった。

「まあ、そうだけど、何年も前に休戦に同意したの」彼女は答え、思い出が洪水のように戻るにもかかわらず声は安定。

「『休戦』って正確に何？」彼は好奇心を深めた。

「基本的に、お互いを見無視することに同意したの」さゆりは唇を噛んで答え。「でも彼がタイにいるなら、もしかしたら斧を埋める時かもよ。許して忘れる。真実と和解。クロージャー。どう呼ぼうと」

「じゃあ、君はタイにいるの？」正志は頭を傾げた。

「たくさん旅してる—ラオス、カンボジア、ベトナム、タイ」彼女は正直に答え。「でもバンコクは東南アジアのハブだから、一年に数回行くよ」

彼女が今ノンパイに住んでると明かす気はなかった。

「まあ、彼は君を見無視するのに上手くやってるよ、さゆり。俺の前で一度も君の名前を言ったことない。昔みたいに苦々しくねじ曲がってるようじゃないよ」

「知っててよかったわ、正志。私たち年取ってるんだよ。二人ともクロージャーを持つのはいいと思う。クリーンなスレート。だから番号くれない？」彼女は正志にできるだけ甘い笑みを送って聞いた。

「もちろん、さゆりちゃん」彼は答え、もう一枚のナプキンに手を伸ばした。彼は拓也の番号を慎重に書き、テーブル越しに滑らせた。

さゆりはナプキンを受け取り、期待と不安の混じりで脈が速くなった。これは今日取るつもりじゃなかった一歩。「ありがとう」彼女は静かに言い、正志の番号と一緒にバッグにナプキンをしまった。

正志は後ろにもたれ、視線で評価した。「ただ気をつけて、さゆり。過去はトリッキーなものだよ、人々は一夜で変わらないよ」

「わかるわ」彼女は答え、声は安定。「でも時々、それに直面するのが前進する唯一の方法よ」

正志は頷き、二人の間に理解の視線が通った。「成長したね？」彼は声に賞賛のヒント。

「人生は速く成長させる方法があるわ」彼女は答え、唇に苦甘い笑みが浮かんだ。

彼らが会話を続けると、陽が空に低く沈み、カフェの窓から温かい光を投げかけた。さゆりは心に奇妙な希望の芽を感じた。おそらく正志とのこの予想外の再会は、彼女がようやく過去の重みから解放された未来を組み立て始めるサインかも。

第33章

さゆりはヨガマットに横になり、ウェブデザインから休憩を取っていた。コーディングは脳を疲れさせるので、数時間ごとに休憩が必要だった。彼女はマルチタスク中―痛む腰を伸ばしながら、iPhoneで本を読もうと集中していた：『なぜ私たちは老化するのか、そしてなぜ老化しなくていいのか』。しかし心は思考の渦だった。リチャードからのメッセージがどんどん減り、胸に不安が広がっていた。彼女はスマホを凝視し、来ないメッセージが来るよう願っていた。

逆に、数千マイル離れたアメリカにいるチャドからメッセージが届いた。彼のメッセージはいつも残りの感情を表面に引き出し、渴望で満ちていた。

さゆり、恋しいよ。愛してる。7月にタイに戻るのを望んでる。

彼女の唇に笑みが浮かんだが、苦甘いものだった。彼女はチャドにリチャードのことを話していなかった―人生のその部分を隠し、『プレイ・ザ・フィールド』と呼んでいた。彼女はチャドとの哲学的な会話が好きで、彼がより深いレベルで彼女を理解するところが好きだった。でも彼が最高のボーイフレンドじゃないことも知っていた；関係はいつも激しく、息を切らすような高低があった。

「あなたはアメリカ人すぎる」彼女は一度彼に言った。

「それってどういう意味？」彼は傷ついて要求した。

「すべてがあなたを動揺させる。リラックスする方法を知らない」彼女は正直に言った。

でもリチャードとはすべてが穏やかで安定していた。彼女は彼の思いやりのある性格が好きで、彼の振る舞い方、そしてはい、彼の筋肉質の体への魅力も否定できない。彼はパートナーに必要なすべてのように思えた。でもチャドとは否定できない化学反応があり、話すたびに火花が散る電氣的なつながりがあった。

さゆりはこの感情の風景を上手に航海できるようになったと思っていた、猛烈に独立し、もう男性に何も頼らない女性。でも今、彼女は見えない恋の三角関係に閉じ込められ、解決策が見えない。

彼女はスマホをもう一度見て、チャドの言葉に心臓がドキドキした。関係のリズムに戻るのには魅力的だった、特にリチャードが家族に会うために南アフリカに戻る直前。彼はタイに戻る時期を保証できず、その不確かさが彼女を蝕んだ。先週、彼女はリチャードに計画を聞き、彼はメッセージで返した：

ジョン・レノンが有名に言った：「人生はあなたが計画を立てている間に起こることだ。」

あやが何年も前に見せた同じ引用だった。不気味。

返事は曖昧だったが、彼女は旅人のメンタリティを理解した—結局、彼は今のように自由奔放だった。でもアパートで一人座り、彼女は決断の重みを感じた。チャドのメッセージが心に響き、彼女の心の琴線を引いた。彼女は共有したつながりを恋しく思い、笑い、そして馴染みの快適さを。

深呼吸し、彼女はチャドに連絡することを決めた。関係に再びチャンスを与える。リチャードとのクロージャーは彼がタイに戻るのを決めるまで待てる—もし戻るなら。彼女はぶら下がって、何が起こったか疑問に思っ待つ側になりたくなかった。決意の感覚で、彼女はチャドに返信をタイプし、指が画面を踊った。

私も恋しいよ、チャド。タイに戻ったらどんな計画？

送信を押すと、興奮と不安の奇妙な混ざりが彼女を洗った。彼女はチャドとの馴染みのダンスに戻り、リズムと混沌のあるもの。でもリチャードを闇に置く罪悪感も感じた。でも彼女は思い出した、正直は双方向の道だ。今のところ、彼女は目の前のことに集中する—古い炎の再燃、かつてとても重要に感じたつながりを探求するチャンス。

* * *

さゆりはベッドに横になり、細いシーツが脚を覆い、お気に入りのポッドキャスト『健康のためのラジオ』を聞いていた。心地よい声が部屋を満たし、彼女の横に戦略的に置かれた扇風機の優しいブーン音と混ざった。5月の圧倒的な暑さがようやくモンスーンシーズンの救済に変わり、夜が少し耐えやすくなった。ポッドキャストが突然iPhoneのピン音で中断され、彼女の瞑想を破った。それはまだフィリピンにいるリチャードからのメッセージだった。

ハイ、ベイビー。元気？ 最近あまりメッセージしなくてごめん。ここは退屈だよ。君に話すことない。

さゆりは一瞬時間を取った、馴染みの愛称に心臓がドキドキした。彼女は素早くタイプした：

ハイ。問題ないよ。

質問していい？ リチャードのメッセージがほとんどすぐに続いた。

もちろん、彼女は答え、期待と緊張の混ざりを感じた。

7月の第一週にノンパイに君を訪ねて来るの可能？ バンコク経由で南アフリカに飛ぶよ。君に会いたい。

さゆりの心臓が意外なリクエストで速くなった。彼女はこれを予想していなかったし、対立の波が彼女を洗った。彼女はすでにチャドに彼らが公式に再びカップルだと話していて、遠距離関係への予約にもかかわらず。彼女はチャドがリチャードより先にタイに戻るのに賭けていて、今これ。彼女は深呼吸し、正直に備えた。

チャドと私は再び一緒にいる。

長い間が続き、彼女は画面越しにリチャードの驚きをほとんど感じた。ついに、もう一つのメッセージがピンした。

彼はタイに君と一緒にいるの？

いいえ、彼はまだアメリカだけど、私たちは和解した。

ああ、OK。ごめん。チケット予約前に聞くべきだった。君がチャドと戻ると思わなかった。

じゃあ、もうチケット予約したの？ 彼女は少し心が沈みながら聞いた。

うん。7月1日にバンコク着いて、7日に出発、リチャードが返した。

衝動的に、さゆりはタイプした、OK。ノンパイに来て。チャドはその前にここに来ないと思う。彼がその前にタイに戻ったら、バンコクで会うって言うよ。

やった！ ありがとう、ベイビー。また君に会うのが待ちきれない。

さゆりは対立する感情のラッシュを感じた。彼女はチャドと再燃して以来、メッセージでリチャードを「ハニー」と呼ぶのを止めていて、再び彼に会う希望をほとんど諦めていた。でも今、彼がタイに戻るのが確実だと知り、彼女の内側で何か深いものがかき立てられた—共有したつながりの懐かしさ。

それはビールを茶に換えるようなものだった；彼女はより安全な道を選び、チャドと戻ることにしたが、突然脇に置いたもののスリルを渴望した。興奮で心臓がドキドキし、彼女は抑えきれない温かさで返信することを決めた。

私の喜びよ、ハニー。あなたの強い腕にまた横になりたい。

送信を押すと、興奮と不安が彼女を通り抜けた。またリチャードに会う見込みが彼ら一緒に過ごした時間の思い出を呼び起こした—彼の笑い、彼の抱擁、彼女を生き生きさせる方法。でも彼女はチャドと一緒にいる決断の重みも感じ、今まで以上に複雑に思えた。

。思考が渦巻く中、さゆりは目を閉じ、ポッドキャストがもう一度彼女を洗うのを許した。彼女は待ち受ける感情の渦巻きに備えるために2週間あり、彼女の心が二人の男性の絡まったウェブをどう航海するかを思わずにはいられなかった。明瞭さを見つけるか、それとも二人の人生にさらに絡まるか？ 時間だけが教えてくれる。

第34章

バンコクの賑やかな通りは活気に満ち、さゆりはカオサン通り地区の活気あるバーのテラスで小さなテーブルに座っていた。陽が沈み始め、街に長い影を落とし、混沌とした下界と対比する温かい輝きを作り出していた。彼女はバンコクの喧騒が好きだったが、メコン川の夕陽はそれに比べて魔法のようだった。

ビールを緊張しながらすすり、彼女の心はここに至った出来事に遡った。向かいに座るのは重原拓也で、彼の存在は威圧的でありながらリラックスしていた。彼は経験によって形作られた男で、鋭い顔立ちと外の世界の混沌を貫くような視線を持っていた。しかし彼女が彼を観察するうち、さゆりは彼がどれほど老けて見えるかに少し驚いた。年月が彼らの共有した歴史の地図のように顔に刻まれていた。さゆりは彼の頬から顎にかけて走る長い傷跡を凝視せずにいられなかった。その光景は、何年も前の拓也への裏切りに対する罪悪感を引き起こしたが、それでも凝視せずにいられなかった。

「会ってくれてありがとう、さゆり」拓也は低く滑らかな声で言い、彼女の思考から引き戻した。彼は前かがみになり、肘をテーブルに置き、親密さと権威を伝える姿勢だった。「君にとって簡単じゃないのはわかるよ」

彼女は頷き、過去の重みが彼女を押しつぶすのを感じた。彼女は東京で予想外にぶつかった山口組の仲間、山本正志から彼の番号を手に入れた。正志のように、拓也は彼女の過去の残滓だった—逃げようとした絡みつ়く網の思い出。彼と彼女のつながりは渡辺健と絡みつ়き、この会合をさらに複雑にしていた。

「長い時間が経ったわね、拓也さん。私たちを正しくしたいと思うの。タイミングだと思うわ」さゆりは言い、再び頬の薄れた傷跡に視線をちらりと向け、裏切りの永遠の思い出だった。素早く目を逸らし、彼の視線を保てなかった。

「うん、長かった。でも東京で働いてた間に、なぜこの会話をしなかったの？」拓也は好奇心がありながらも固い調子で聞いた。

「正直、怖かったの。渡辺健と恋愛関係にあった時は、無敵みたいに感じて気にもしなかった。でもヤクザのマッサージ店で働いてたってことは、技術的にあなたが上司だった—それが怖かったの」さゆりは説明し、感じた脆弱さを思い出し声が少し震えた。

「話すべきだった。でもまあ、今ここにいるよ。終わったことは終わった」拓也は哲学的に答え、目が少し柔らかくなった。

「じゃあ、私たち大丈夫？」さゆりは不安で心臓が速く鳴りながら聞いた。

「さゆりさん—こう言おうか。うん、君が健に俺が裏切り者だって言ったことにすごく腹立った。でも君のせいじゃなかったのは知ってる。ともこが君を仕組んだんだ。君は正しいと思ったことをしたんだよ」拓也は言い、声は安定していたが共感の根底の流れが混じっていた。

さゆりは安堵の波が彼女を洗うのを感じた。「理解してくれてありがとう。長い間その罪悪感を抱えてたの」彼女はささやき声で告白した。

拓也は一瞬彼女を観察し、言葉にされない言葉の重みが空気に掛かっていた。「私たちは皆選択をするよ、さゆり。いくつかは暗い道に導くけど、光に戻る方法が私たちを定義するんだ」

彼の言葉は彼女に響き、その生活を捨てて以来の内面的な闘争を反響させた。「自分の方法で償おうとしてきたわ」彼女は今声が固くなった。「でもこの会話を正しくするためにしたかったの」

拓也は頷き、表情が考え深くなった。「君は自分が思うより強いよ。過去に立ち向かうのは勇気がいる」

「新しく始められるかも」彼女は提案し、前の緊張を破って試みの笑みが浮かんだ。

「それいいね」拓也は答え、唇に笑みのヒントが遊んだ。「私たちの間に影はもうない」

「ありがとうございます！」さゆりは誠実に感謝し、重みが持ち上がるのを感じた。

「乾杯！」拓也はビールを上げて乾杯した。

「乾杯！」さゆりは彼を真似して唱和した。

拓也は椅子にもたれ、さゆりに固定した視線で彼女を少し不安にさせた。バンコクの活気ある音が背景に消え、彼女は次の言葉を待つ間、胃に緊張の結び目ができる。

「さゆり、友達に戻れるって言ったけど、この顔の傷は決済する勘定があるよ」彼は注意深く言い、調子は測ったがチャージされた。

「わからない」彼女はどもり、内側にパニックが上がった。前の会話の温かさは蒸発し、寒い気づきに置き換わった。

「毎日鏡でこの傷を見るよ、そして君が俺を裏切って引き起こした混乱の絶え間ない思い出だ」拓也は続け、声は安定していたが明らかな苦味が混じっていた。

「裏切り」という言葉の言及がさゆりがさっき永遠に追放されたと思った緊張を高めた。彼女は再び緊張し、平静を保つために戦った。

「拓也、私—」

「健が俺に忠誠を証明するために何を頼んだか、君に言ったことある？」拓也は割り込み、目が少し細くなった。

さゆりは喉を飲み込み、あの日後の混乱の後で流布したささやきを思い出した。「松本真治が働いてたマッサージ店を引き継いだ時に結局知ったわ」

「じゃあ、あの日何が起きたか理由を知ってる？」拓也は聞いた、調子は半修辞的で、暗い道に彼女を導くように。

「うん。健は真治が父親の銀行会長を説得して健から横領したと信じて、真治に教訓を与えるよう頼んだの」彼女は少し震える声で答えた。

「正解。私たちは彼を誘拐し、身代金で拘束した。健は損失を回収するのを望んでたが、銀行会長、真治の父親は最初支払いを拒んだ。だから真治を少し殴った。まだ何もない。俺は健に忠誠を証明する必要があったから、真治に一生忘れられない教訓を与える方法を見つけなきゃだった。忘れられないよ！」拓也の声は激しくなり、さゆりは黙って彼の言葉の重みを感じた。

彼女が彼を見ながら、拓也の顔に刻まれた後悔の表情に気づいた。彼が物語を共有する時、前に示した自信的な態度と対比的だった。

「真治のアキレス腱を切り終えたばかりで、健が俺を追跡して真治を解放するようメッセージを送った」拓也は単調な声で続けた。

さゆりの息が喉に詰まり、心が競った。彼女はショックだった—拓也がした残虐さほどではなく、今ジグソーパズルの最後のピースを知ったからだ。真治の攻撃を囲む出来事はいつも霧のような悪夢のように感じたが、拓也の説明を聞くと予想外の明瞭さをもたらした。

「彼を傷つけたくなかったのね」彼女はほとんど自分にささやき。「強制されたの」

拓也は彼女の視線に合い、二人の間に読み取れない何かがちらりと過ぎた。

「結局、俺が何を望んだかじゃなかった。健に自分を証明することだった」彼は一時停止し、後悔が目深まった。「そして今？ この傷が残った—選択の思い出で、俺が始めた裏切りじゃない」

さゆりは共感の波が彼女を洗うのを感じた。「こんなこと望まなかったわ。何が起きるかわからなかった。ただ生き延びようとしてたの」

拓也は一瞬彼女を観察し、表情が少し柔らかくなった。

「私たちは皆生き延びる名の下に選択をするよ、さゆり。でも結果を消さないよ」

彼女は深呼吸し、会話の重みが彼女を押しつぶすのを感じた。「私から何が欲しいの、拓也？ 謝罪？ 制御できなかったことの責任を取るの？」

「君が俺を裏切った償いをしたと感じさせる何かをしたいよ、たとえ正直な間違いでも」拓也は言い、さゆりの目に異議の兆候を探った。さゆりは状況の重みをを感じゆっくり頷いた。

「本題に入ろう」拓也は言い、「誰かをスパイしてほしい」拓也の唇が少し笑みに曲がったが、目は真剣のままだった。

「スパイ？ 『スパイ』って何？ 誰？ どこ？」さゆりは混乱して聞いた。

「ノンパイの作戦のメンバーで横領の疑いがある。日本語を話し外部の人が必要だ。父親が母と俺を捨てて以来誰にも信頼してないから、ノンパイ組織の誰にも頼みたくないよ。彼らが言うように『泥棒同士は厚い』よ」彼は皮肉を許し小さくクスクス笑った。

さゆりの背筋に寒気が走った。彼女は今、電話でノンパイから電車でバンコクに来て彼に会うと言ったのを後悔した。東京の犯罪世界の下界で遊ばれた危険なゲームの思い出が心に洪水のように。拓也は作戦の物流をさゆりに説明し続け、タイ、ラオス、ミャンマーに広がる彼らの薬物作戦の複雑な網を詳述した。

「ノンパイのヤクザはケタミンやクリスタルメスの化学前駆体を陸路でラオスとタイの国境のヴァンパクレンに密輸するよ」彼は

説明し、調子は事実的だった。「趙偉TCOという犯罪組織を聞いたことある？」

「ないわ」

「彼は多くの犯罪企業からの違法利益でいわゆる特別経済区に自分の街を築き、ラオス政府に守られてる」拓也は続けた。

「彼や彼の組織を聞いたことないわ」さゆりは言った。

「まあ、薬が製造されたら、メコン川を下ってノンパイに戻るよ、一部ヘロインと交換で彼に与える前駆体を、彼がミャンマーのシャン連合軍に売るよ」

さゆりは熱心に聞き、顔が無表情に保つために苦勞し、腹に感情の渦巻き。過去の決定の重みが彼女に重く掛かり、彼女は山口組に結びつける見えないへその緒を永久に切れるか疑問に思った。

「複雑に聞こえるけど、ノンパイの連中にどう近づくかわからないわ」彼女は困惑して言った。

拓也は後ろにもたれ、貫く視線で彼女を観察した。「きっとわかるよ、さゆりちゃん」彼は言い、皮肉な笑みが現れた。「君は思うより強いよ。一緒にした最初の仕事から知ってるよ」

「銀行会長」彼女は静かに言った。

「うん。君は賢い。君はタフだよ。きっと方法を見つけるよ。名前全部と『偶然』ぶつかる場所を教えるよ。残りは君次第。でも進捗報告が欲しいよ。頻繁に。この件を早く処理するほど、私たちの勘定を早く決済できるよ。ただそれを考え続けて」

さゆりはこれが来るとは想像していなかったが、ここにいた、義務と恐れの間絡まって。なぜ今？ 彼女は思い、寝ている犬を起こさず拓也に連絡しなければよかったと願った。さゆりはテーブル下で拳を握り、内側の緊張を感じた。彼女はその生活を捨てようとしたのに、過去は追及を容赦しなかった。

「拒否したら何が起きるの？」

拓也の表情が固くなり、前の友情の温かさが消えた。

「そうしない方がいいよ」

彼の言葉が空気に重く掛かり、厚く息苦しい。さゆりは深呼吸し、選択肢を量った。この世界に再び飛び込む考えは恐ろしかった。でも、心に最善を思う唯一の人に背を向けるのは同じくらい威圧的だった。

「考えさせて」彼女はついに言い、声は安定した。

拓也は頷き、表情は読み取れない。「数日与えられるよ。でも覚えておけ、時間は味方じゃない。この人が本当に横領してるなら、早く行動しなきゃ」

彼が話す間、さゆりの心は対立する思考で競った。彼女はノンパイに永遠に住まない。この仕事を拓也のためにして、勘定を決済し、チャドカリチャードと先に進む—ついに裏世界を彼女の後ろに捨てるよ—永遠に。彼女は平和な生活への欲望を脱線させないよ。拓也によってじゃない—誰によっても。彼女は人生の新しい道が必要—過去の影から遠く離れたもの。

「疑うメンバーは誰？」彼女は不安を覗かせ好奇心で聞いた。

「彼の名前はカバ」拓也は少し前かがみで答えた。「彼はしばらく私たちと一緒に、信頼できると思ってた。でも何かおかしいよ。君が彼に近づければ、もしかしたら彼が隠してるのを暴けるかも」

さゆりは吐き気の波が彼女を洗うのを感じた。関わるリスクは巨大だったが、裏切りの考えはさらに不安だった。

「何か見つけたら？」

「それなら処理するよ。彼が有罪なら、彼の裏切りで支払わせるよ」拓也は言い、声は低く決然。

「彼を処理するのはあなたじゃないの？ 結局リーダーなんだし」さゆりは挑戦し、彼を押し戻すのを望んだ。

拓也の視線が固くなった。「できないよ。俺は露出しすぎだよ。証明なしで直接対峙したら、質問が多すぎるよ」

さゆりは操作の層が彼女を押しつぶすのを感じた。「捕まったら？ カバが私が何してるか気づいたら？」

「それなら自分を扱う方法を知ってるよ」拓也は自信の空気で後ろにもたれ答えた。「君はもっと悪いものを生き延びたよ」

彼の言葉の真実が和音を打った。彼女は生き延びた—かろうじて—が、それは一生前のように感じた。タイでなった女性は東京の犯罪の下界を航海した女性と同じじゃない。深呼吸し、彼女はもう一度拓也の目にロックした。「これをもっと真剣に考える必要があるわ。すぐに決断を知らせるよ」

「公平だよ」拓也は言い、目に敬意のヒント。「ただ覚えておけ、さゆり、賭けは高いよ。賢く選んで」

彼が立ち去る時、会話の重さが空気に残り、言葉にされない緊張と未解決の歴史が混じった。さゆりは彼が行くのを見、彼女の心は何が先にあるかの含意で競った。彼女は過去の馴染みの引きを感じ、彼女がそんなに懸命に戦って逃げた深みに引き戻す脅威のサイレンコール。でも奥深く、彼女は選択をしなきゃと知っていた—影から彼女を解放するか、永遠に結びつける選択。

彼女はもう一本のチャンを注文し、脳が通常の数値に落ち着くまで飲むつもり、できればもっとゆっくり。

第35章

リチャードはノンパイの電車から降り、乗客が降りるのを待つサイドカー屋台から漂うストリートフードの香りが濃い空気に包まれた。彼は脚を伸ばし、暖かい陽射しが彼を包み、興奮の波が血管を駆け巡るのを感じた。ダッフルバッグを肩に振り上げると、馴染みの声が聞こえた。

「はーろー！」

振り向くと、さゆりがプラットフォームを並ぶ美しい手彫りの木製ベンチの一つに座っていた。彼女は膝周りで踊る黄色とオレンジのポルカドットのサマードレスを着、髪を綺麗にお団子にまとめていた。小さな足は大好きなサンダルに収まり、顔に明るい笑みが浮かんでいた。

「こんにちは、ベイビー！」リチャードは輝き、再び自分の「芸者ガール」を見て心が膨らんだ。

さゆりは立ち上がり、彼に向かって滑るように歩き、バッグを手伝おうとするのは無駄だと知っていた。唇に素早いキスをした後、「寝られた？」と聞いた。

「あまり。すごく疲れた。3日間の旅だよ」彼は首の後ろを揉みながら答えた。

「OK。家に着いたらリラックスして」さゆりは愛情を込めて目を輝かせて言った。

「うん。そうする必要があると思う」リチャードは彼女の心配に感謝を感じて同意した。

「トゥクトゥク乗る？」彼女は彼らと荷物をかろうじて収められる小さなオートバイをちらりと見て聞いた。

「うん」彼は確認し、彼女は愛情を込めて微笑んだ。

駅外の賑やかな通りへ向かう途中、さゆりは二人の関係の激しさを思わず考えた。お互い二度と会えないかもしれないという知識が、一緒の経験をより鮮やかにするのもかもしれない——パブのトイレでのクイッキーと生涯のコミットメントを比べたように。スリリングで恐ろしい。家に着くと、さゆりはラウンジで待っており、綺麗な顔に知ったような笑みが浮かんでいた。

「バッグ置いて。来て」彼女はすぐに命令し、調子は遊び心がありながらも支配的だった。リチャードは彼女のストレートさにクスクス笑いながらバスルームへついていった。

「服脱いで」さゆりはいたずらっぽく目を輝かせて指示した。

「OK」リチャードは微笑みながら脱いだ。

さゆりはリチャードが背中を洗われるのが好きだと知っていた；彼は一度、一生の大半を一人で過ごしたので、それが特別な親密さのように感じると言った。彼女は浴槽から冷たい水をすくい、体全体に石鹸を塗り始め、外の灼熱の暑さと対比する涼しさが爽やかだった。

「至福だ」リチャードは彼女の触れに寄りかかりながら呟いた。バスルームは涼しく穏やかで、外の世界の混沌からの聖域だった。さゆりは彼の筋肉の緊張に集中し、石鹸を塗りながら巧みに背中をマッサージした。

「おお！ フィリピンでセックスしなかったと思うわ」彼女は彼の成長する興奮をからかいながらちらりと見て言った。

「ないよ。何も」リチャードは頬に少し恥ずかしさが染まりながら確認したが、声の喜びを隠せなかった。

さゆりは柔らかく笑い、音は明るくメロディックだった。「よかった。エネルギーを私に取っておいたのね」彼女は答え、指を彼の脇腹に這わせ、彼から震えを引き出した。

「いつも私を特別に感じさせてくれるわ」彼は感謝を込めて声が厚くなった。

彼女は魔法を続け、水が彼の肌に輝きながら、練習された優雅さで動いた。「あなたがセクシーだから簡単よ」彼女はからかい、調子は軽いが視線は真剣だった。

リチャードは目を開け、鏡で彼女の視線に合った。「君が恋しかったよ、さゆり。思ってたよりずっと」彼は言葉に誠実さを込めて告白した。

さゆりは一瞬止まり、心が彼の告白で膨らんだ。「私もよ」彼女はささやき、指を彼の背中で止めた。「いい一週間になるわ」

彼は頷き、それらの言葉の言葉にされない重みを理解した。二人の時間は貴重で儚く、二人はすべての瞬間を味わう緊急性を感じていた。

遊び心の笑みを浮かべて、さゆりは石鹸を再開し、指が彼の肌を滑りながらささやいた。「今、この一週間を忘れられないものにしましょう」

さゆりは世界の女性だった。彼女はゲームと自分が演じる役割を知っていた。すべての男は彼女の手の粘土で、彼女は自分が持つ力を知っていた。時々、旅の時、誰かを気に入ったらセックスした。感情なし、コミットメントなし、複雑さなし。ただセックス。

彼女はリチャードが典型的な「バイセクシャル」な旅の男だと仮定していた——どの国にいても「セックスを買う」人。ヤクザの「マッサージパーラー」の曖昧な世界で育ち

、彼女は早い年齢で男が一つのことを望み、それを手に入れるためにほとんど何でもすることを学んだ。彼女は自分がセクシーで男が彼女に抵抗できないことを知っていた。感情的に離れる余裕があった。世界は彼女の牡蠣だった。

でもリチャードは違った。はい、彼は彼女を欲したが、感情的にも投資した。彼女は彼が本気で彼女を気にかけているとわかった。それは彼女にとって珍しかった。彼女はまだ濡れたリチャードをベッドルームへ手で導いた。

「横になって」彼女は命令した。

さゆりはベッドの端に座り、リチャードにドレスのジッパーを下ろさせながらパンティーを脱いだ。ベッドから服を蹴り飛ばし、彼女は彼の上にゆっくり乗った。二人は、そんなに長い間離れていた後、このセッションは短いと知っていた。そしてそうだった。さゆりは彼女が彼から最後のエネルギーを、他のものとともに絞り出したのがわかった。彼は背中を上にして裸で横になり、完全に消耗し、長く眠る準備ができて見えた。彼女は彼がすぐに熟睡すると知って一人でシャワーを浴びた。

* * *

「ハニー……」

さゆりはベッドの横に座り、優しくリチャードを起こした。ゆっくり、彼は重い瞼を開け、柔らかい笑みで彼女の顔から迷子の髪を払った。その瞬間、さゆりは確信の波を感じた——この出会いは偶然じゃなく、彼女の人生の軌道を変える運命のひねりだった。

「こんにちは、ベイビー」リチャードは眠そうに挨拶し、声は夢の残骸で厚かった。

「食べ物作った。空腹？ もっと寝たいならOKよ」さゆりは提案し、心臓が彼の愛情深い笑みでドキドキした。

リチャードは時計をちらりと見て、目を大きくした。「おお！ もう午後2時だ。うん、空腹だよ。何作ったの？」

「きのこ入り野菜ヌードル」さゆりは胸に誇りが膨らんで言った。

「おいしです」リチャードは顔に笑みが広がって答えた。

「どうして日本語知ってるの？」彼女は本気で感心して聞いた。

「フィリピンでたくさん暇があったよ。君が英語学んだから、私も日本語学ばなきゃ。約束したよね？」リチャードは軽い調子で説明した。

「うん。とてもいいわ」さゆりは彼の努力に輝いて言った。

ラウンジに落ち着くと、さゆりは彼女のシグネチャーディッシュ——醤油で完璧に味付けした日本風ヌードルを提供した。二人は一緒に食事を味わい、部屋を満たす心地よい香り。

「あれはたくさん食べ物だった」リチャードは空の皿をコーヒーテーブルに置きながら言った。「この週で太ると思うよ」彼はからかい、遊び心の輝きを目にさゆりに振り向いた。

「私の料理好き？」彼女は彼の満足に心が温まりながら聞いた。

「私の家族のフランス側は『食べるために生きる——生きるために食べるんじゃない』と信じてる。だからフランス料理はそんなにおいしいんだ。君の食べ物みたいに、ベイベー」リチャードは答え、彼の褒め言葉がさゆりの頬を赤らめた。

「楽しんでくれて嬉しいわ」彼女は答え、笑みが明るくなった。リチャードのために料理するのは贈り物のように感じ、彼女は熱心に受け入れた。「体重減ったと思うわ」彼女はコメントした。

「フィリピン料理はおいしくないよ」リチャードは説明した。

「ビールたくさん飲んだ？」さゆりは聞いた。

「いや、飲まなかったよ。あそこにはタンデュエという本当に安いラムみたいな飲み物があるよ。あれをたくさん飲んだよ」リチャードはクスクス笑った。

「お腹にいいと思うわ」さゆりは優しく指でリチャードのお腹を突いた。

「うん、同感だよ。まだ旅の疲れが少しあるよ、ベイベー。そして満腹のお腹が怠惰に感じさせるから、ベッドに戻らと思うよ。OK？」彼は欠伸を抑えながら聞いた。

「もちろん」さゆりは言った。「ロータスまで散歩に行くわ。食べた後歩くのはいいわ。健康的」

「OK、ベイベー。また後で。でもまず、キスして」彼は微笑み、彼女に寄りかかった。

さゆりは従い、寄りかかって彼に唇に優しくキスさせた。温かさが彼女を通り抜け、胸に心地よいドキドキを感じた。

「よく寝てね。またね」彼女はリチャードが立ち上がり、腕を頭上に伸ばしてからベッドルームへ戻るのを言った。

彼の後ろでドアがカチッと閉まると、さゆりは空間の静けさを味わう一瞬を取った。彼女は満足を感じた。でも期待も感じた；二人の時間は儚く、彼女はそれを最大限にした

と思った。でもまずしなきゃいけないことがあった。ベッドルームへ最後にちらりと見て、彼女はバッグを掴み、サンダルを履き、迫るタスクについて少し不安を感じた。

第36章

さゆりがノンパイで気に入っていたことの一つは、20分以内にどこにでも歩いて行けるほど小さな町だということだった。彼女は東京の喧騒が恋しかったが、このペースの変化は歓迎した。混み合う駅や公共交通機関で無駄に費やす時間は決して恋しくなかった。アサワンショッピングセンターに入ると、彼女は目的意識を感じた。

彼女はバンコクでのミーティングの後、ノンパイに戻ったら拓也にメッセージを送り、彼のためにカバをスパイすることを決めたと伝えた。

「いい選択だ」それだけが彼の返事だった。

彼女は拓也が提案した場所のいくつかを訪れ、地元ヤクザのメンバーに「偶然」ぶつかる可能性を探った。最初の調査は実りなく、明らかな日本人男性を見かけなかった。でも今日、彼女は拓也のリストにあるレストランの一つ、みやぎに戻ることにした。彼女は進展を遂げ、リチャードがフィリピンから戻る前に拓也のためにこの件を解決する必要があった。さゆりは命令通り数日ごとに拓也に報告していたが、最初の成功の欠如に彼は苛立っていた。でも次のみやぎでの張り込みを伝えたと、彼は元気になった。

「ああ、そうだ！ 忘れてたけど、そこから始めるべきだったよ」拓也は自分の見落としを謝った。

彼によると、ヤクザの仲間がみやぎレストランに頻繁に訪れ、オーナーの息子は70年代に神戸での暴力的な過去から逃れるために日本を離れたヤクザのメンバーの息子だった。ノンパイに長く存在する山口組が彼に新しいアイデンティティを作り、定住を手伝い、タイ人の「妻」を提供した——彼女はむしろ「夜の女」だった。彼らの息子、愛称ビーフは家族のレストランを引き継ぎ、今はマネーロンダリングのフロントとして機能している。ヤクザは無料で食べると拓也は言っていた。

過去一週間、彼女は意図的にみやぎを午後のオンラインウェブデザイン仕事の好みの拠点として使っていた。Wi-Fiは優秀で、食べ物はおいしく、コーヒーはまともだった。みやぎに入ると、馴染みの魚の香りが彼女を迎えた。ビーフはカウンターにいて、彼女を見つけると顔に笑みが広がった。

「さゆり！ また来てくれた！」彼はタオルで手を拭きながら呼んだ。

「こんにちは、ビーフ！」彼女は元気を上げて答えた。「今日はコーヒーだけにするわ」

彼は頷き、メニューを渡すのを省き、彼女がラップトップで仕事をするつもりだと知っていた。さゆりは窓際のいつもの場所に落ち着き、ラップトップを取り出し、レストラ

ンのWi-Fiに接続した。素朴な装飾と数人の客の柔らかいおしゃべりが、時間を過ごす心地よい場所を作っていた。一時間経ち、レストランは空き始めた。皿の音とカジュアルな会話の心地よい音が最後の客が去るとともに消えた。さゆりは冷めたコーヒーを一口飲み、今静かな空間を見回した。

「ビーフ！」彼女は呼んでテーブルに手を振った。

彼は好奇心を持って近づいた。「大丈夫？」

「うん、全部いいわ！　ただノンパイで少し退屈なの」彼女は偽の悲しい顔で告白した。「社交したくて、でもタイ語話せないの。ここの日本人コミュニティが社交の集まりをやるか知ってる？　日本みたいに——一晩中飲むみたいなの」彼女は冗談を言って雰囲気軽くしようとした。

ビーフはクスクス笑い、テーブルにもたれた。「一晩中飲むの？　友達を作るいい方法だね！　集まりはいくつかあるけど、いつも計画的じゃない。でも父は誕生日や特別な日本の機会を祝うのが好き。七夕がすぐだよ。君が参加しても気にしないと思うよ。確認して明日伝えるよ——もしここに来るなら」

「完璧！」さゆりは興奮で目を輝かせて叫んだ。「本当に親切ね、ビーフ。明日必ず来るわ」

「それか番号教えて、メッセージで情報を送るよ」ビーフは提案した。

さゆりは誰にも番号を渡す準備ができていなかった。信頼は軽く与えないことを経験から知っていたし、ビーフをほとんど知らないのだから、「いいえ、OKよビーフ。明日来るわ」彼女はラップトップを閉じてリュックにしまいながら言った。「助けてくれてありがとう。行かなきゃ。またね」彼女はテーブルに100バーツを置いた。

「釣りは取っておいて」彼女は微笑みながら去った。

「行く前に」ビーフは言い、表情が真剣に変わった。「君の社交生活を手伝うのは気にしないけど、警告しなきゃ——気をつけて、さゆり。家族が知ってる人の中にはヤクザに関わる人もいるよ。低姿勢を保つのがベストだよ」

さゆりは彼の警告の重みを頷きながら感じた。「わかったわ。慎重にするわ。ありがとう、ビーフ。いつも見守ってくれて」

「もちろん！　君は友達だよ」彼は温かい笑みを返した。「何か必要なら言ってね」

彼が去ると、さゆりは感謝と不安の混ざりを感じた。日本人コミュニティの他の人と混じる考えはワクワクさせたが、現在の状況の根本的なリスクは大きく迫っていた。彼女

は深呼吸し、何が来ても受け入れる準備ができていると自分に言い聞かせた。どんなに複雑でも。拓也のための情報を早く集めれば、彼らの「勘定」を早く決済できる。それが大きな安堵になるだろう。

* * *

リチャードは暗闇で目を覚ました、夜の柔らかいブーン音が彼を囲む。彼は少し動くと、さゆりが彼にスプーン状に寄りかかり、息が優しくリズムカルに感じた。微笑みが顔に広がったが、すぐに自然の呼び声が彼をベッドから滑り出させた。慎重に彼女の腕を彼から外し、彼女の平和な眠りを邪魔しないようにした。用を足した後、彼はベッドルームに戻り、月光の柔らかい輝きがカーテンを通して濾過された。カバー下に戻ると、さゆりが胸に手を置いて彼をびっくりさせた。

「起きてるの、ベイビー？」リチャードはささやき、声はほとんど呟きだった。

「うん。どう感じてる？ まだ疲れてる？」彼女は柔らかくはっきりした声で聞いた。

「いや、今はいいよ。でもここに君と横になるのは嬉しいよ」彼は温かく答え、親しさを味わった。

「OK」さゆりは呟き、調子は応答より優しい受け入れだった。彼女は大口話者じゃなく、行動で語らせるのを好んだ。彼の背中をリチャードに向き直し、リズムカルに背中を撫で始め、彼に落ち着く温かさを送った。

「あ！ あなたの塊がなくなってる」さゆりは突然叫び、完全に目覚めて声が明るくなった。

「もう気づいたと思ってたよ」リチャードは言った。

「忘れてたわ」彼女は告白した。

「うん。除去したよ。皮脂嚢胞だった」リチャードは誇りと安堵の混ざりで説明した。

「それは何？」さゆりは好奇心で眉を寄せた。

「ハハ！ 日本語でわからないよ。でも医者言葉は知ってるよ、医者だ」リチャードは遊び心のあるやり取りを楽しんでクスクス笑った。

さゆりは枕の下からスマホを掴み、画面をタップして翻訳を探した。「嚢胞」彼女は勝利の笑みで宣言した。

「だから理解する？」リチャードは聞いた。

「うん。痛かった？」彼女は心配で目を満たして共感した。

「今までで一番痛い手術だったよ。馬鹿な医者が十分な注射をくれなかった。全部感じたよ」彼は思い出に頭を振りながら答えた。

ためらわず、さゆりは横に寄り、脊椎の傷跡に優しくキスした。「今はいい？」

「うん、ありがとう、ベイビー」リチャードは答え、彼女に向き直った。彼は彼女に近づき、髪の毛の甘い香りを吸い込み、首に優しくキスしてから耳たぶを軽く噛み、彼女から柔らかいクスクス笑いを引き出した。

「今エネルギーがあると思うわ」彼女はいたずらっぽく声に悪戯が入った。

一事が他事を引き、すぐに彼らはお互いに没頭し、ベッドが彼らの下できしみながらつながりの深さを探った。外の世界は消え、体温と息のリズムだけが残った。

素早いシャワーの後、彼らは指を絡めて背中を上にして横になり、余韻に浸った。空気は情熱の残り香で濃く、快適な沈黙が彼らを包んだ。リチャードは少し頭を回してさゆりをちらりと見て、彼女の目が薄暗い光で輝いていた。

「何考えてるの？」彼は柔らかく聞いた。

「これがどれだけいいか考えてるわ」彼女はほとんどささやきで言った。「でも混乱も感じてる。これを楽しみたいけど、一部は壁を保ちたいわ」

リチャードは頷き、関係がしばしば提示するパラドックスを理解した。「そんな感じでいいよ。急ぐ必要ないよ。ただ一緒に時間を楽しもう」

さゆりは微笑み、肩の緊張が緩んだ。「うん、そうしよう」彼女は同意し、心が希望と不安の混ざりで膨らんだ。彼らはそこで指を絡めたまま横になり、お互いの存在の温かさを感じ、二人はまだ完全に理解できない冒険の始まりかもしれないことを知っていた——でも二人が受け入れるのを喜ぶもの。

さゆりは突然正直の別のレベルに移る必要を感じた。

「チャドはタイに来ないわ」さゆりは予想外に吐き出し、彼らの間に落ち着いた快適な沈黙を破った。

「あ、本当に？」リチャードは興味を持ち、少しまっすぐ座って聞いた。

「ほんとうに」彼女は可愛く言い、大きな目が安堵と不確実の混ざりで輝いた。

彼女がチャドに強いつながりを感じた理由の一つは、彼の旅の方法が彼女のものに似ていた——衝動的で本物の計画なし。でも今、リチャードと強い絆を作っているのも、チャドの常に変わる旅程に耐える必要を感じなくなった。彼が最近彼女にタイへの帰国を

遅らせるメッセージを送った時、彼女は待つ準備ができていないと伝え、アメリカへの出発前にこの可能性を警告したと彼に思い出させた。彼の病気の父親を看病するためだった。

リチャードは彼に好奇心の波を感じたが、あまり深く探らないのがベストだと思った。「じゃあ、一人でここにいるの？」彼は優しく探った。

「うん」さゆりは答え、調子はこれが選択と負担の両方だと示唆した。

「じゃあ、タイに戻ったら、君と一緒に住める？」リチャードは希望的に聞き、考えて気分が上がった。

「もちろん」さゆりは同意し、顔に笑みが広がった。

リチャードの表情が明るくなったが、その下で、さゆりは彼らの言葉にされない感情の緊張を感じた。彼女は彼がチャドと彼自身への強い気持ちを知っていると疑った、彼が無意識に一部になった仮想の恋の三角関係。

「OK。ありがとう。俺の考えでは——これは今君の家だよ。君がボスだよ。いつ戻るかわからないけど、おそらく8月だよ」リチャードは続け、調子はカジュアルだった。

「8月？」さゆりは英語で月の名前をマスターしていないので少し頭を傾げて聞いた。

「八月」リチャードは日本語で翻訳し、彼女に微笑んだ。

「日本語をたくさん勉強してるのね」さゆりはリチャードの彼女の言語を学ぶコミットメントに本気で感心して述べた。

「はい」リチャードが同意し、さゆりを笑わせ、音は明るく感染的だった。

「何がおかしいの？」リチャードは彼女の反応に混乱しながらも微笑んで聞いた。

「ゆっくり言いすぎよ。空手チョップみたい——はい！」さゆりは素早い手の動きでデモンストレーションした。

「はい！」リチャードは彼女を過剰に熱狂的に真似した。

「はい！」彼女は力強く繰り返し、木の板を空手チョップするように。「速く、大きく」彼女は悪戯の輝きを目に指示した。

「はい！」リチャードは叫び、部屋が彼の熱狂で反響した。

「いいわ！」さゆりは誇りが太陽のように彼女から放射して輝いた。

「ありがとう、親愛なる。君はいい先生だよ」リチャードは武術の熱狂の予想外のレッスンにクスクス笑いながら言った。

「OK。八月に戻るの？」さゆりはリチャードが言ったのを確認したく再び聞いた。

「そう思うよ」リチャードは答え、声は安定していたが未来の不確かさが目に残った。

「問題ないわ」さゆりは答え、笑みが明るくなった。でも内側で、彼女は感情の渦——希望、混乱、可能性のスリル——を感じた。

彼らは少しの快適な沈黙を共有し、それぞれの思考に没頭した。さゆりはチャドへの感情を彼ら一緒に過ごした6ヶ月と確立した関係で調整した。一方リチャードはセクシーで思いやりがあり愛情深かったが、これは二人の二週目だけだった。彼らはまだハネムーンフェーズで、彼女はすべてを変える可能性のある決定を急ぎたくなかった。

「さゆり」リチャードの声が彼女の思考を破り、彼女を瞬間に引き戻した。「これは複雑だと知ってるけど、君が幸せになるのを望むよ、それがどんな形でも」

彼女は彼に完全に向き直し、彼の目に誠実さを探った。「それを評価するわ、リチャード。私にとって大きな意味があるわ」

彼は柔らかく微笑み、髪の手を耳の後ろに払った。「一つ約束して——何も急ぐなよ。物事を理解する時間を取って」

さゆりは頷き、彼の言葉の重みを感じた。彼女は決定をしなければと知っていたが、今彼と横になるために、彼女は息をするのを許した、たとえ一瞬でも。外の世界は待てる；この空間で、彼女はリチャードと単に一緒にいられる、彼らが一緒に残した儚い瞬間を楽しんで。

第37章

湿気の多い夕暮れで、さゆりは不快にドレスが体に張り付くのを感じながら、ノンパイのアサワンセンターへ歩いていった。心臓が期待でドキドキした。彼女はビーフの家族の家での七夕の集まりに招待されていて、それは日常からの楽しい逃避のように感じた。

みやぎレストランに入ると、馴染みの焼き肉の香りと笑い声が出迎えた。ビーフはカウンターの後ろにいて、彼女を見つけると手を振って呼び寄せた。

「やあ、さゆり！ 今夜の準備できた？」彼はエプロンで手を拭きながら聞いた。

「はい！ 招待してくれてありがとう」彼女は微笑みながら答え、不安を隠した。胃の中の蝶々が、普段の落ち着いた態度を保つのを難しくしていた。ヤクザのために最後にスパイした時の記憶が残っていて、物事がどれだけ悪く転ぶかの厳しい思い出——そして今、彼女がフルサークルで再び山口組のためにスパイしている理由だった。ただ今回は、さらに危険だった。

ビーフはレストランのドアを早く閉め、すべてが安全か確かめた。「行こう。家まで送るよ」彼は鍵を握んで言った。外へ出ると、暖かい夕方の空気が二人を包み、さゆりはタイでヤクザとのつながりを本当に断ち切れるか決して思わなかった。悪い終わり方しかできないわ、と彼女は車に乗り込みながら思った。

車での移動は軽い会話で満たされ、バックグラウンドでスコーピオンズの音楽が流れ、川沿いをドライブした。さゆりは窓の外を眺め、景色を取り入れた——豊かな緑、遠くの屋台の活気ある話し声、そして夕陽の色を映すきらめく水。ノンパイは彼女が見た中で最高の夕陽のいくつかがあり、彼女は日没直前にプロムナードを散歩するのが習慣になっていた。それは彼女の精神を癒した。

ビーフの家に着くと、雰囲気は活気あふれていた。祭りの灯りが木から下がり、柔らかい輝きを投げかけ、空気は焼かれた食べ物の誘う香りで満ちていた。小さなグループがすでに集まり、家族と友達の混ざりで、笑い声がバックグラウンドで柔らかく流れる伝統的な日本の音楽に溶け込んだ。ビーフは車を止め、二人は外へ出た。

「私の家へようこそ」彼は言い、入り口へ導いた。家はタイと日本の建築の美しいブレンドで、木の梁と巨大な前庭を横切るメコン川の素晴らしい眺めを開く引き戸があった。中では集まりがすでに本格的に始まっていた。

ビーフの両親がさゆりを迎えに来て、二人とも淡い花柄の浴衣を着ていた。父親は腰に鮮やかな赤い帯を巻き、伝統的な下駄を履き、てぬぐいを肩にカジュアルに掛けていた。彼は背が高く落ち着いていて、伝統的な服装が遺産への静かな誇りを放射していた。

顔の優しいしわは知恵と人生経験を語り、輝く目は周囲の活気ある雰囲気への喜びと感謝を反映していた。

母親は優雅さと落ち着きで動き、各動作は意図的で優しく、服装の優雅さを完璧に補完していた。柔らかいメイクが自然な美しさを強調し、髪は伝統的にスタイリングされ、飾りのかんざしで飾られ、細部への細心の注意を示していた。一緒に、彼らは伝統と温かさの調和したブレンドを体現し、さゆりをすぐに歓迎された気分にした。

「ようこそ！ 関勝です！」ビーフの父親がさゆりに自己紹介した。

「私の名前はソムジャイです。ごめんなさい、日本語あまり話せないわ」ビーフの母親が英語で自己紹介した。

「佐藤さゆりです！」さゆりは祖母の旧姓を使って嘘をついた——ヤクザに結びつかないように。タイでは露出からかなり安全だと感じていた。海外ベースの山口組のこのセクションが彼女が東京の組に結びついていることを知る方法は見えなかった。彼らは彼女に飲み物を提供した——フルーツジュースと何か強いもののミックスで、彼女は微笑みながら受け取ったが、飲むつもりはなかった。ビールを好んだ。

夕方が進むにつれ、彼女は七夕の意義、周辺の伝説、そして日本とタイで人々が祝うさまざまな方法についての会話に没頭した。彼女は熱心に聞き、誇りと懐かしさの混ざりで話すビーフの家族の物語を楽しんだ。

「さゆりさん」勝が彼女の注意を引こうとして言った。

「おじいさん」さゆりは認め、二人が庭で混ざり、飲み物を持って彼に向き直った。

「両親が七夕の祭りの意義について教えてくれたことある？」

「星と関係あるの？」さゆりは無知を装った。彼女は日本の祭りが大好きで、それらについてほとんどの人より知っていたが、傲慢に見えなくなかった。

「はい、正しいわ」勝は言い、彼女の肩に腕を回し、人ごみから導いた。「天の川がある上を見て……」彼は光汚染のない澄んだ夜空を指して始め、さゆりは東京の明るい光を思い出した。彼が星祭りが織姫（織り姫）と彦星（牛飼い）の会合を祝うこと、天の川で分かれ、7月の7日に一度だけ会えるのを許されることを説明した後、さゆりは自分を言い訳した。

カバがここにいるかな、と彼女は思った、会話に吸い込まれるのを避けながら庭を丁寧に航海した。彼女は仕事があり、これは拓也が課したタスクで前進する黄金の機会だった。彼女はスパイになるよう作られていない。ランダムな人と会話を始める社会的スキ

ルが欠けていた。カバを見つける方法や会ったら何をするか本当にわからなかった。我慢よ、と自分に言った。これができる。これをしなきゃ！

短冊を掛ける時が来ると、さゆりは外のグループに加わった。ランタンが庭を照らし、魔法の雰囲気を生み出した。彼女は短冊を取り、シンプルだが心からの願いを書いた：幸せとつながりのために、人生がどこへ連れて行っても。

竹の枝に願いを掛けると、彼女は奇妙な所属感が彼女を洗うのを感じた。笑い、共有の物語、そして仲間意識は暖かい抱擁のように感じ、一瞬、彼女は人生の複雑さを忘れた。

カバの兆候はまだなかった。一部は安堵したが、彼女は拓也が頼んだタスクを避ける方法がないと知っていた。一瞬逃げることを考えた——ラオスやカンボジアへ行くかも——が、問題を先送りするのは問題を複雑にするだけだ。

夜遅く、星が上空で輝く中、ビーフが焼いた串の皿を持って彼女に近づいた。「今夜楽しんでる？」彼は熱狂で目を輝かせて聞いた。

「素晴らしいわ！ 入れてくれてありがとう。こんなに幸運だと思うわ」さゆりは感謝で心が膨らんで答えた。

ビーフは微笑み、明らかに喜んだ。「今は家族の一員だよ。それに、共有できる人がいるのはいいよ。ノンパイで日本人は少ないよ。小さなコミュニティへの歓迎すべき追加だよ。乾杯！」

「乾杯！」さゆりはキッチンで発見した「ビール冷蔵庫」のチャンビールで乾杯した、それはチャン、レオ、アサヒで満杯だった。夜が進むにつれ、グループは物語と笑いを共有し、雰囲気がますます祭り気味になった。無料の氷冷えビールと温かい会話を楽しんでいるにもかかわらず、彼女は少し孤独を感じていた。

人々に囲まれていてもまだ一人ぼっちに感じるなんて面白いわ、と彼女は思った、家に帰る時かと思った。彼女はビーフの家族に別れを言いに行こうとした時、ビーフが3人の日本人男性を正面玄関から入れるのに気づいた。

突然警戒し、彼女は素早く「ダッチカレッジ」のために別のチャンを掴み、前庭に戻った。素早くスキャンすると、視線は遠端で一緒に立つ3人の日本人男性に落ち着いた。彼らのカジュアルな姿勢は今夜を楽しんでいることを示唆していた。カバが彼らの中にいるかわからなかったが、彼女は正確に確かめる方法を知っていた。

いたずらっぽい笑みを浮かべて、彼女は姿勢を正し、ビールから深い一口を飲み、冷たい液体が自信を温めるのを許した。近づくと、彼女はよろめきを装い、足を意図的に不均等な踏み石に引っかけた。劇的に、彼女は前に転び、バランスを失いそうになった。

「わあ！」彼女は効果のために息を飲んで叫んだ。

3人の男は一斉に振り向き、美しい女性が困っている光景で本能が働いた。「大丈夫？」一人が顔に懸念を刻んで前に出ながら聞いた。

さゆりは遊び心のある笑みを浮かべ、恥ずかしさを装って最寄りの男の腕に手を置いて安定した。「大丈夫！　ただ少し酔ってるだけかな」彼女は甘くからかう声で言った。

「ここ、手伝うよ」もう一人の男が目を大きくして熱心に手を差し伸べながら申し出た。

「あ、ありがとう！」さゆりは答え、少し近づき、態度を魅力的にした。彼女は彼らの興味を感じ、寄りかかる方法、助きたい熱心さ。

各瞬間で、彼女はゲームのスリルを感じた——マッサージパーラーでの経験がこんな男をからかうスキルを磨いた。彼女は一歩後ろに下がり、平静を取り戻すふりをし、笑いが軽く招待的だった。

「ここによく来るの？」彼女は首を遊び心で傾げながら聞き、彼らの反応を測り——そして願わくば彼らの中のカバの正体を。

* * *

帰る時が来ると、彼女は苦甘い刺しを感じた。「トゥクトゥクで帰るわ」彼女は彼女を送ろうとするビーフに保証したが、彼女は夜の静けさを吸収するのを好んだ。

「安全にね、さゆり。みやぎでまたすぐ会おう？」彼は声に希望のヒントで聞いた。

「絶対よ」彼女は本物の笑いで答えた。

道路へ向かう途中、集まりの音がバックグラウンドに消え、達成感を残した。彼女はノンパイにタクシーがないことを知っていた——小さすぎる——が、トゥクトゥクは豊富で簡単に見つかる。彼女はトゥクトゥクを呼び、運転手は彼女を後ろに乗せるのを手伝いながら微笑んだ。ノンパイの静かな通りをドライブしながら、さゆりはきらめく川を眺め、この運命のひねりに感謝し、タスクを完了するのに一歩近づいた。

第38章

さゆりはヨガマットにうつ伏せに横になり、ラップトップから切実に必要な休憩を取っていた。リチャードが南アフリカへ去ってから一週間経ち、彼女はチャドより彼を選ぶかどうかを決めるのに少しも近づいていなかった。

交互に膝を腰に近づけられるだけ近づけながら、彼女は過去について思いを馳せた。彼女が50歳近くになって、適切な長期関係を一度も持ったことがないなんて奇妙に思えた。はい、健と3年関わっていたけど、一緒に住んだことはなかった——彼が結婚していたし。あの3年が彼女の人生を想像もしていなかった方法で変え、彼女の心は人生の重要な瞬間へ漂った——健渡辺が拓也の状況に対処するために彼女をオフィスに呼び出した運命の月曜日。

空気に緊張が濃く、彼女の下の地面が崩れるように感じた。健がついに拓也の無実を信じると宣言した時、安堵が彼女を通り抜ける波のように湧いた。

「信じられない」彼女は震える声で言った。その瞬間、彼女はほとんど崩れ落ち、健の強い腕が彼女を捕まえ、近くへ引き寄せた。彼女は感謝に圧倒され、頭を彼の胸に押しつけ、彼の心拍の安定したリズムを聞きながら微笑んだのを思い出した。

「ありがとう、健。これが悪く終わるのを望まなかったわ」

彼は優しく彼女の顔を包み、視線が激しく探った。「君は俺にとって大事すぎるよ」彼は柔らかく答え、情熱的にキスして下がった。あのキスが彼女の中に火花を点け、複雑なロマンチックな関係に花開いた——彼らが直面した課題にもかかわらず。

今、ストレッチしながら、彼女はあの思い出を思い浮かべて温かさが包んだ。健は結婚していたけど、彼女のために人生にスペースを切り開き、渋谷の独身者用アパートの一つに滞在させるようにした。彼女は光がカーテンを通してフィルターされ、柔らかい輝きを投げかけながら、彼らがささやく秘密と夢を共有したのを思い出した。

一緒に過ごした最初の年、山本正志は渋谷の山口組の舎弟で、薬物流通を監督していた。さゆりは健がVIPセクションでビジネス取引をするのを眺めながらナイトクラブで一人でいることが多かった、空気が金と権力で濃かった。

ある夜、健が没頭している間、彼女はバーで正志と一緒にいた。彼らの会話は簡単に流れ、彼女は彼との仲間意識を感じた——彼らの世界の共有された理解。その後、アルコールで大胆になり、彼女は近づいた。

「ねえ、正志」彼女は言葉を少し不明瞭にしながら言った。「マリファナを手に入れられる？」

正志はためらい、顔に懸念が横切った。「健が君にそれを渡すのを嫌がるの知ってるよ」彼は真剣に答えた。

苛立ちが彼女の中に燃え上がった。「お願い、ただリラックスしたいだけよ」

選択を量った後、彼はバーの上にジョイントを置き、少し微笑んで歩き去った。「ただ彼に見つからないように」

彼女は彼らの笑いの思い出で柔らかくクスクス笑った、あの夜は興奮と不安の渦巻きだったが、所属感で満ちていた。でも思考が現在に戻ると、彼女の幸せに影が迫った。山口組の世界は容赦なく、彼女は選択の重みを押しつぶされるように感じた。彼女はこの人生で自分のベッドを作ったけど、どんな代償で？

目を閉じて、彼女はあの思い出に漂い、健の抱擁の温かさと彼らの盗んだ瞬間の約束にしがみついた。それは苦甘い思い出だった。最後の30年で何が変わったの？ 私の恋愛生活はこれまでより複雑で、未来はまだ不確かだ。

彼女はカジュアルなマリファナの習慣がゆっくり彼らの絆を毒したのを思い出し、心が沈んだ。かつてリラックスする方法だったものが彼女を認識できない人に変え、健が彼女をほとんど認識できない他人と説明した。彼女はまだ彼の声の失望を聞け、言葉が深く切った。

「さゆり、もうこれが続けられないよ」健はある夕方、顔に悲しみと苛立ちを刻んで言った。「君は俺が恋に落ちた人じゃない。高くなってる時、君は別人だよ」

あの会話が転機だった；その瞬間すべてが変わった。あの記憶がフィルムリールのようにちらつき、彼女は損失の馴染みの痛みが彼女を洗うのを感じた。3年の激動の後、健はついに彼女と一緒にいたくないと言った。

「望むなら仕事を与えるよ」彼は彼女に命綱を投げるように付け加えた。でも言葉は解決策より解雇のように感じた。

さゆりは絶望の押しつぶす重みを思い出した。「仕事？ 何をするの？」彼女はほとんど聞こえない声でささやいた。

「渋谷の俺のマッサージパラーの一つで」健は答え、視線が安定していたが遠く。「どんな場所かわかるよね。望まなければエクストラは何もしなくていいよ」

彼の提案の含意が潮の波のように彼女を襲った。彼女は彼が監督するパーラーへの頻繁な訪問に時々付き合い、合法と道德の線をぼかした取引を目撃していた。そこで働く考え、あの世界に浸るのは彼女の胃をひっくり返した。あのすべてを共有した後、どうしてこれを提案できるの？

「健、これが本当に私に望むこと？」彼女は感情の兆候を彼の顔を探りながら、心臓を競わせて聞いた。

彼は目を逸らし、二人の間の距離が触れられるように。「ただ仕事だよ、さゆり。自分を支えなきゃ」

彼の言葉が彼女の腸にねじれるナイフのように感じた。彼女は家族を支えなきゃと知っていた——母親の陽子は父親が人生を諦めて以来苦労していた。父親は飲酒で仕事を失っただけでなく、仕事を探すのを諦め、急速に下り坂を転がり、無職の酔っ払いになり、愛人に頼って生きていた。

彼の未払いの養育費の負担がさゆりに重く掛かっていた。彼女はついに母親を父親と離婚させるよう説得した人だった——それが彼女にとって正しいことだと確信して。離婚は迅速に認められ、さゆりは父親を疑いの影を超えて非難する写真証拠を提出した。

彼女はトラップされたのを思い出した。父親が地獄の底へさらに転がるほど、母親を離婚に押しやったのを後悔した。それは確かに彼女の計画通りに行かなかったし、それが彼女が決して具体的な計画を立てない主な理由だと疑った——すべてが梨型に行く失望を恐れて。

彼女は絶望の瞬間を鮮やかに思い出した、彼女が涙が目に満ちて頷き、渋々「OK、やるわ」と言った時、選ぶ道を完全に認識して。両親の離婚への罪悪感が、健とヤクザの下界からのさらなる関連を避けたいという彼女の欲望より強かった。彼女の人生の現実はいさめしかった。彼女は生存のために自由を交換し、その選択の苦味が彼女の内側を蝕んだ。

彼女が前屈し、つま先へ手を伸ばす時、懐かしの重みが彼女を押しつぶした。健について考えれば考えるほど、彼女のマッサージパーラーの一つで働いた日々が深く彼女の憂鬱を走った。彼らが共有した笑い、一緒に築いた夢——それは今そんなに遠く感じ、後悔に置き換わった。彼女はため息をつき、ストレッチがもう彼女の求める安堵をもたらさなくなった。

ちょうどその時、彼女の電話がブーンと鳴き、彼女を思考から引き出した。LINEからのメッセージ通知が画面を照らした。それはリチャードだった。

こんにちは。

こんにちは。元気？ さゆりは恍惚としてタイプした。

元気、ありがとう。君は？ リチャードの返事。

君なしで家が広すぎるわ、さゆりは正直にタイプした。

彼女は彼の言葉の温かさをほとんど感じ、胸の重さにもかかわらず微笑ませた。

わかるよ。ノンパイに早く戻りたいけど、着いてチャドがいるのは嫌だよ、リチャードが探った。

彼女に小さな安堵のフラッターが洗った。

チャドは長い間メッセージくれないわ。ここにはいないわ。来てよ。

さゆりはリチャードの興奮を感じた。彼女自身の精神はリチャードとまた一緒に暮らす考えで上がった。奥深くで、それはおとぎ話の終わりじゃないと知っていたが、少なくとも関係を延ばせ、少なくとも少しの間。彼らは別々の二週間だけ一緒に過ごしたが、彼女は今ジョリーンの家を「彼らの」家と思うようになった。リチャードとの親密な瞬間後、チャドがいる考えが奇妙にぎこちなく、彼が周りにいない保証に感謝した。

やった！ それはいいニュースだ。今日チケット予約して詳細送るよ、リチャードの返事。

OK。また君に会うのが楽しみよ、彼女はスマイルフェイスを添えて返信した。

俺も。いい一日を。後でチャット。またね。

OK。またね、さゆりはハートで返信した。

彼女が電話を置くと、笑みが顔に広がった。彼女の前の憂鬱の雲が散り始め、安堵と恍惚の感覚に置き換わった。彼の帰りの見込みが彼女の心に火花を点け、時々、新しい始まりが過去の影から現れるのを思い起こさせた。

リチャードからのメッセージは彼女を圧倒的な幸せで満たした。彼女の肩から不確実さと心配の重みが持ち上がり、巨大な安堵と恍惚の感覚に置き換わった。その瞬間、すべてが所定の位置に落ち、周囲の世界が新たな明るさで輝いたように感じた。リチャードのテキストが彼女の心を深い喜びと満足で満たした。

興奮の波を感じ、彼女は何かをしなきゃ——ストレッチを続けるにはエネルギーが多すぎた。彼女は立ち上がり、リュックを肩にかけ、みやぎへの散歩に出かけた。

リチャードが戻る前にこのカバの問題を解決しなきゃ、彼女は決め、心がどう彼らの絡まった感情に対処するかの考えで渦巻いた。アサワンセンターに近づくと、彼女のLINEアプリがまたピンし、注意を引き出した。それはリチャードからのメッセージだった。

ハイベイベー。チケット取った。8月8日にバンコク着。一晩バンコク。夜行列車でノンパイへ。10日の朝8時着。

やった！ さゆりは素早く返信し、ハート絵文字を添えた。

やった！ すぐ話す。またね、リチャードはハート絵文字で返信した。

またね。

公式だった——リチャードが彼女と暮らすためにタイに戻ってくる。彼女は歩きながら、興奮でめまいを感じ、心が期待と計画で渦巻いた。彼の帰りの興奮が次の3週間で可能な限りカバの問題を解決する必要の知識と混ざった。彼女はリチャードが戻る前に人生を複雑にしない新たな決意を感じた。

第39章

さゆりはみやぎのいつもの場所に落ち着き、レストランの馴染みの音がウェブデザインの仕事の心地よい背景を提供した。タスクは急ぎではなかったが、手を忙しくし、過去一週間の出来事に心をさまよわせた。

彼女はビーフの家での七夕祭りで3人の日本人男性——徹、昇、和宏——に会い、遊び心のあるいちゃつきがパーティーへの招待につながった。彼女はクールに振る舞い、徹に番号を渡すのを拒否したが彼の番号を受け取り、パーティーの日までどう感じるか見てみると言った。カバに近づく緊急性が常にあり、早く興味を示しすぎるわけにはいかなかった。

訪問から数時間後、彼女はレストラン向かいのブースに座る馴染みのない日本人男性の小さなグループに気づいた。彼らは笑い、活発なジェスチャーが仲間意識と悪戯の混ざりを示唆した。ちょうどその時、ビーフが歩いてきて、彼女の日常の定番である温かい笑みを浮かべた。「やあ、さゆり！ 今日はどう？」

「やあ、ビーフ！ いつもの仕事よ。あなたは？」彼女は微笑み返し、彼のフレンドリーな存在に感謝した。

「いつも通りよ。あの祭りの男たちのことまだ考えてる？」彼はテーブルにもたれながらカジュアルに聞いた。

さゆりは徹の招待を思い出しながら頷いた。「うん、徹は面白いわ。少し……違うわね」

ビーフの表情が少し変わり、目に懸念が閃いた。「念のためだけど、あの3人は低レベルのヤクザよ。徹は執行者で、密輸の荷物のセキュリティを担当してる。他の二人はドライバーよ」

彼女は彼らに何かあると疑っていた。「本当？ それで納得いくわ」

「気をつけて、さゆり。徹はまともかもだけど、暗く暴力的な面があるわ」ビーフは真剣な調子で警告した。「そんなのに巻き込まれたくないわよ」

さゆりは少し不安を感じたが、タスクを完了する決意は強かった。徹はカバに近づく最高のチャンスかもで、そのつながりが必要だった。

「時々寂しくなるわ。日本語で話せる人と一緒に過ごせたらいいのに」彼女は言葉を慎重に選びながら彼の腕に手を置いて認めた。

「あなたが結婚してて残念よ」彼女は続けた、ビーフが彼女に気があると疑い、自分の立場を伝えたかった。

ビーフは一瞬彼女を観察し、少し頬を赤らめながら頷いた。「ただ私が言ったのを覚えておいて。警戒を保って」

心に計画が形成され、さゆりは徹にパーティーの詳細をテキストで決めた。彼女は素早くタイプし、アドレスを聞きながら非コミットメントな調子を保った。数分後、彼女の電話がピンと鳴き、応答があった。徹はアドレスを送り、彼女はすぐにビーフに見せた。彼はそれを読んで少し眉をひそめた。

「あれは川近くの倉庫よ、7-Elevenの向かい。合法的な輸出入ビジネスだけど、彼らの密輸のフロントよ」

「そう？」さゆりは無知を装った。

「うん、70年代から続いてるわ。ヤクザは中国人と組んでゴールドトラライアングルから薬を運んでる。CIAがKMTがCCPへの抵抗を資金にするためにアヘンを育てるのを承認したところから始まって、ゆっくり利益主導のベンチャーになったわ」

さゆりは情報を吸収した。彼女は自分が踏み込むものの深刻さをすでに理解していた。

「じゃあ、倉庫は本当に彼らの作戦の本部なの？」

ビーフは頷き、表情は真剣だった。「行きたければ一緒に来るわ。一人でそこに行くのは好きじゃないわ」

「ありがとう、ビーフ。でも大丈夫だと思うわ」彼女は丁寧だが固く答えた。自分で扱う必要があった。

「ただ気をつけて、さゆり。何か起きてほしくないわ」彼は心配を込めて言った。

「そうするわ」彼女は保証し、心はすでに可能性で競っていた。リチャードが3週間で着く中、拓也が課したタスクを完了する圧力を感じた。時間を無駄にできなかった。

今冷めたコーヒーを飲み干すと、興奮が血管を駆け巡った。明日のパーティーはカバを取り巻く謎を解く鍵になるかも。彼女はどんな代償でもそれを機能させる決意だった。

* * *

さゆりが狭い道をヤクザの倉庫パーティーへ近づくと、興奮と不安の混ざりが彼女を通り抜けた。倉庫がジョリーンの家から簡単に歩ける距離でよかった。予想より長く滞在することに決めても、ヤクザの男の一人から後で乗せてもらうのに頼るのを望まなかった。

狭いコンクリートの道は川に平行に走る第一と第二の道路を繋ぎ、彼女は歩きながらその地域の馴染みの感覚を感じた。彼女の脈が速くなり、アドレスに着いた。外に看板はなく、7-Elevenとタイ市場の一つへの入り口のほとんど真向かいの平凡な金属のロールアップドアだけだった。7-Eleven外の通りは賑やかで、彼女はストリートベンダーからバナナの香りを嗅げた——種類だけ売る、コンデンスミルクをたっぷりかけたバナナパンケーキ——彼女は抵抗しづらかった。でも彼女が立っていたこの特定のスポットは暗闇に包まれ、歩行者がいなかった。

彼女はリチャードがフィリピンへ去った後すぐの初期の探検でこの道がどれだけ混んでいたかを思い出した。彼女は無標識の箱が巨大なトラックに積み込まれて歩道がブロックされた時、通りを歩くのを強制されたのを思い出した。あの日、苛立ったトゥクトゥクドライバーがトラックドライバーに叫んだが無駄で、苛立った車両のボトルネックを作った。

深呼吸し、さゆりはローディングベイへ数段の階段を登った。次に何をするか確かじゃなく、壁をスキャンし、彼女が前に見たことのない高い位置の色褪せた中国の看板に気づいた、汚れが文字を覆っていた。薄暗い光で、それは何か深いもの、何か隠されたものを示唆するようだった。彼女は上げられたローディングベイに沿って数歩歩き、大きな柱の反対側に別のロールアップドアを発見した。金属のロールアップに金属のドアが切られ、薄暗い光が発見しづらくしていた。それは閉まっていた。不安と決意の混ざりで、彼女はドアの真ん中の金属レバーを動かしてみた。

驚いたことに、ドアがきしみながら開き、入り口の両側に綺麗にパレットされた箱のスタックを明らかにし、広大な倉庫へ深く導く10フィートの幅の廊下を作っていた。出てきた空気はニコチンの独特の香りに満ち、彼女は一瞬ためらった、決定の重みが彼女に降りかかった。

「何も起こらないわ」彼女は自分に呟き、決意を固めた。

中へ踏み込むと、音楽と笑いの薄い音が暗闇を通して濾過され、彼女をさらに引き込んだ。内部は薄暗く、箱のスタックの影が踊っていた。音を追って、彼女は注意深く前進し、箱が彼女の小さな姿の両側に大きく迫らなくなるまで、はるかに大きな開けた空間を明らかにした。

さゆりは箱で囲まれた通路の影に立ち、活気あるパーティー参加者に気づかれず存在した。彼女は目の前の光景を吸収する一瞬を取った。遠い角で、トレッスルテーブルが開いたラップトップを保持し、ヘッドフォンをした男がキーボードをタップしていた。おそらくDJよ、彼女は彼を注意深く観察しながら思った。

安いプラスチックの椅子は数個のトレッスルテーブルの外縁に沿ってだけ配置され、緩く長方形を形成し、即席のダンスフロアを作っていた。後ろの壁に沿って、彼女は二つの大きな冷蔵庫とチェストフリーザーを見つけ——おそらくビールで満杯。冷蔵庫のすぐ向こうに、華やかな木製のドアが目に残った；オフィスへ導く可能性が高い。

冷蔵庫近くのテーブルの一つに、スピリットボトルの配列とプラスチックカップが並べられ、夜の祝賀を示唆した。彼女は彼女に最も近い壁のトイレドアに見えるものをメモした。彼女の隠れた視点から、彼女は薄暗い光で見える人を数え始めた：12人の男、そのほとんどが非タイ人に見え——おそらく日本人か中国人、確かめるには暗すぎた。男のほとんどに女性が側にくっつき、全員タイ人に見え、おそらくバーの女として働いていた。

雰囲気は本物に感じ、単に彼女を倉庫へおびき寄せるための徹の策略じゃない。とはいえ、さゆりは注意を保った。東京での経験が彼女に男は信頼できないと教えていた。しばしば、女はさらに悪い。彼女の本能は警戒し、部屋をスキャンし、各詳細がこの馴染みのない環境での彼女の警戒を強化した。おしゃべりと笑いを聞き、彼女は雰囲気は仲間意識で濃い、何かより危険なものの根底の流れで感じた。彼女は日本語の会話の断片を聞き、言語が馴染みの抱擁のように彼女を包んだ。彼女は自分の目的を思い出した；これは快樂じゃない——ただビジネスよ。

彼女は徹とつながり、彼を使ってカバに近づく必要があったので、この新しい下界で自分にスペースを切り開く必要があった、こんなに外国に感じながらも同時に馴染みのある。

さゆりは箱で囲まれた通路の影から倉庫の開けたセクションへ踏み出し、目の前の活気ある光景を取り込みながら神経がビリビリした。活気ある雰囲気は音楽と笑いで脈打ち、彼女の神経ははっきりした。ほとんど本能的に、彼女は徹の手が彼のズボンの後ろに押し込まれた銃へ移るのに気づいた、セキュリティとしての役割から生まれた反射。でも認識が明けると、彼の表情が柔らかくなり、歓迎の笑みで彼女を呼んだ。

「さゆり！」彼は彼女を近くへジェスチャーしながら呼んだ。「みんなに会いに来て！」

初めの躊躇にもかかわらず、彼女は興奮と恥ずかしさの混ざりを感じながら彼へ歩いた。徹は彼女を七夕祭りから馴染みの顔の混ざりと数人の新しい顔の小さなグループへ紹介した。社交は決して彼女の強みじゃなく、彼女は彼らに挨拶しながらぎこちなさのヒリヒリを感じた。

「やあ、素敵だよ！」男の一人が言い、彼女は少し場違いを感じながら丁寧な笑みを返した。

徹は彼女の不快を感じ、冷たいビールを渡した。「これで助かるはず！」

感謝して、彼女はそれを受け取り、冷たいボトルが歓迎の気晴らしだった。彼女は一口飲むと、徹が腕に女性をくっつけない数少ない男の一人だと気づいた。おそらく彼女を置き去りに感じさせたくないと思ったのかも、彼女は彼の心で彼女が今夜の「パートナー」だと思ったのかも。

群衆をスキャンし、彼女は同様に一人にいる他の二人の男を見つけ、カバの好奇心を高めた。ヤクザは悪名高く秘密主義で、オンライン存在なしで、彼女は本能と観察に頼らなければならなかった。

カバは40代に見え、平均的な身長と体格で、きれいに剃られた顔と後ろに滑らかに梳いた厚い黒髪だった。彼は白いベストの上に開いたカジュアルジャケットを着、暗いズボンと磨かれた黒い革靴——カジュアルと洗練のバランスを打ったスタイル。

さゆりはほとんどの日本人女性のようにファッションに敏感で、彼の全体の服装がおそらくN. Hollywoodからだと疑った。彼は落ち着き集まり、自信と制御の空気を放ち、彼の主張的なボディランゲージが高地位を反映していた。パーティーで最も上級のヤクザメンバーとして、部屋の他の日本人男性の敬意は紛れもなかった。彼女は正志が倉庫で多くの時間を過ごすか疑問に思った。

音楽が活気あるタイの曲へ変わり、彼女はバーの女たちがダンスフロアを渦巻き、リズムに完全に浸っているのに気づいた。徹は近くへ寄り、声は遊び心満載、「ダンスしたい？」

さゆりはためらい、遊び心の笑みが唇を引いた。「日本語か西洋のポップミュージックにしかダンスしないわ」

彼は眉を上げ、興味をそそられた。「本当？ 何ができるか見てみよう」彼はトレッスルテーブルの即席DJへ振り向き、まだラップトップをタップする男。「やあ！ SMAPのLion Heartかけて！」

さゆりの心臓が馴染みのメロディーでスキップした。それは90年代のクラシックで、懐かしの波をもたらした。オープニングノートが空気を満たすと、彼女は興奮の閃きを感じた。完全にリラックスするにはまだシラフすぎたが、ダンスの衝動に抵抗できなかった。即席ダンスフロアへ踏み出し、彼女はリズムに動き、音楽が彼女を洗うのを許した。徹は彼女に加わり、近くでダンスしようとしたが、彼女は遊び心で縁を避け、笑いながらやった。

「さあ、恥ずかしがらないで！」彼は距離を橋渡ししようとしてからかい、彼女は遊び心の姿勢を保ち、いちゃつきを楽しんだ。

心で、彼女は自分の動きを計算した。徹を魅了すればするほど、カバとヤクザ作戦について彼に聞くレバレッジが増す。彼女は回転し、渦を巻き、からかい距離で彼を保ちながら笑い、注意を楽しんだが、真の意図を胸に近く保った。

曲が進むにつれ、彼女は徹の目に賞賛が見え、それが彼女の自信を燃料した。これはこの世界を航海する彼女のチャンスで、少しの魅力で、この夜をただのパーティー以上のものに変えられるかも。徹はさゆりをダンスフロアから離さないように、DJに曲リクエストを続けさせた。『Lion Heart』の後には『世界に一つだけの花』が続き、続いて『愛してる』でさゆりは少し不快を感じた。

「今少し熱いわ」彼女は曲が終わると徹に言った。本当だった；倉庫は蒸し暑く、ダンスはすぐに不快に導いた。

「君の言う通りよ。かなり熱くなってる。ビール取ってきて、一分で戻るよ、OK？」

「はい！」彼女は答え、冷蔵庫へまっすぐ向かった。彼女は二本の氷冷えアサヒビールを掴み、ほとんどの日本人男たちがうろつくテーブルへ戻った。

カバが話をしていた。「……彼はただ私たちに支払わないと思ったけど、私が終わった時、彼はまだ息してるのが幸運だった。もちろん私たちは支払われた！　ハハ！」

カバに気づかれる機会を取り、さゆりは大声で笑いを強制し、すぐに彼女の方向へ頭が回転した。

「あ、ごめんなさい」彼女は誇張して謝り、「そんなに大声にするつもりじゃなかったわ」

「名前は何だっけ」カバが聞いた。

「佐藤さゆりです！」彼女は正式に答えた。

「徹と一緒になの？」

「まあ、いえ。徹が招待してくれたけど、彼と『一緒』じゃないわ、わかってるよね」さゆりは外交的に答えた。彼女の返事がカバの顔に小さなニヤリをもたらした。彼女は彼が何を考えているか正確に知っていた：新鮮な魚！

さゆりはタイやラオスのこの部分にどれだけの日本人女性が住んでいるかわからなかったが、推測するなら——あまり多くない。カバはバーの女より日本人女性を好む——すべての日本人男性のように。日本のパトリアルカル社会は日本人女性が性的アプローチ

にノーと言うのを少なくし、それはさゆりが何世紀も存在する複雑な日本のジェンダーダイナミクスの現実で育ちながら「我慢して耐える」ことを学んだもう一つのことだった。彼女は経験から、カバがこの瞬間から彼女を潜在的な性的征服としてだけ見る——それ以上じゃない——ことを知っていた。

もう一つフックされた。誰が今魚なの、悪い子？ 彼女は自分に思い、心の中で自分を叩いた。

彼女はわざとカバに背を向け、それが彼女のフックをさらに沈めるだけだと知っていた。ちょうどその時、徹が二つの巨大な産業用ファン——各手に一つ——を持って現れた。彼女は彼が重さで苦勞しているのが見えたが、彼女の前で勇敢な顔をしていた。

男って本当に基本よ、彼女は自分に微笑みながら思った。徹は彼女の笑みを見ると、すぐに笑み返したが、彼が静かに嘲笑されているとは気づいていなかった。ダンスエリアの周りに戦略的にファンを置き、彼はさゆりに加わり、彼女は夕方がどれだけ突然複雑になったかをよく知っていた。セックスシンボルとしての彼女の自然な魅力が彼女の人生をあまりにも何度も複雑にした。彼女は空気をクリアにする必要があった。

彼女は実際徹をかなり魅力的だと思った。彼の遊び心のあるおしゃべりと簡単な笑みが彼女を安心させたが、彼女は彼に近づきすぎるのはいくつかの理由でいいアイデアじゃないと自分に思い出した：チャドとリチャードとの複雑な恋の三角関係が彼女に重く掛かり、彼女はヤクザの下界へ再び吸い込まれなくなかった。最も重要に、カバに近づく彼女のミッションは彼女の徹とのいちゃつきをエスカレートさせたら危うくなる。彼女が必要とする最後のものは彼女がカバといちゃつくのを見て嫉妬した徹が爆発すること；それは特に彼が武装しているので、惨事になる。

熟考の後、さゆりは正直が最善の政策だと決めた。彼女は深呼吸し、徹へ振り向いた。

「徹、あなたは本当にいい男で、あなたの会社を楽しむけど、パーティーの招待を受け入れたのはあなたとつながりたいからじゃないの。日本語話せる人と社交するチャンスが長い間なかったからだけよ」

徹の顔が少し落ち、彼女は失望が彼を洗うのを見た。「あ！ ごめん、さゆり。君が俺を好きだと思ったよ」

彼女は彼の反応に罪悪感の刺しを感じた。優しく、彼女は彼の前腕に手を置き、彼を慰めようとした。「好きよ、徹——ただその方法じゃないわ。ごめん。でもノンパイで私の親友になるのを受け入れてくれる？」

彼の表情が少し柔らかくなり、彼は驚きと安堵の混ざりで彼女を観察した。「親友、へ？ それならできるよ」彼は答え、試みの笑みが顔に忍び寄った。

彼らの間に数秒のぎこちない沈黙があり、徹が言う前に、「まあ、少なくとも君は俺を早くフレンドゾーンしたわ。それを評価するよ。誰も真実を聞きたくないよ。痛いよ。でも俺に正直でいてくれて敬意するよ」彼は微笑み、続けた、「でもそれで君が今パーティーを離れるわけじゃないよ」彼は遊び心で言い、優しく彼女の手を掴み、再びダンスフロアへ導いた。

「もちろんないわ」彼女は肩の重みが持ち上がるのを感じて言った。「ダンスできる友達が必要よ」彼女は答え、本物の笑みを形成した。徹は頷き、彼の態度がより軽い調子へ移った。

「OK、親友。ただ知っておいて、俺はまだ君を見守るよ」

彼女はクスクス笑い、彼の理解に感謝した。「それを評価するわ。ただ今はもうパーティー招待なしよ、OK？」

「合意」彼は言った、ビールを模擬乾杯で上げた。彼らはボトルをカチンと合わせ、一瞬緊張がバックグラウンドへ消えた。徹は彼がファンを取っている間に起きたさゆりとカバのやり取りにまだ気づいていなく、さゆりはそれをそのままで意図していた。パーティーが笑いとエネルギーで膨張し続ける中、さゆりはアルコールの緩む初めの緊張を解き、数本のビールをさらに飲んでいる自分を発見した。

音楽が彼らの周りを脈打つ中、さゆりは目的の更新された感覚を感じた。徹を味方として、この世界をより簡単に航海できる。でも彼女の焦点は究極の目標に残った——カバとのつながりを鍛えること。彼女は彼をちらりと見て、まだグループから敬意を命令し、彼女のミッションの次のステップに自分を固めた。

家に帰る時間だわ、さゆりはトイレへ向かう途中でつまずきながら決め、自分をスペクタクルにせずにはバランスを回復した。

「今行かなきゃ」彼女は彼が飲むテーブルに戻って徹に言った。彼女はカバが近くに立ち、ビールを持っているのに気づいた。

「家まで送れるよ」カバは徹が返事するチャンス前に申し出た。さゆりは徹が申し出るのを予想していたが、カバは速すぎ——そして熱心すぎた。

「大丈夫よ。いいわ」彼女は嘘をつき、すぐに離れなければ自分を馬鹿にすることを知っていた。ビールは彼女のクリプトナイトだった。

「どうやって帰るの？」徹は本気で心配して聞いた。さゆりは鉄則を持っていた——いつもどこに住んでいるか嘘をつく。男は信頼できなかった、特に彼らが小さな頭で考え大きな頭じゃなく。

「トゥクトゥクの番号持ってるわ」彼女は真実を言い、近くに住んでいるのを明かさなかった。

「本当にリフト与えられない？」カバは再び試した。

「本当に」さゆりは言った。「でも困ったら番号くれるかも？」彼女は提案し、カバが彼女に番号を与えるのをためらわないと知っていた。

彼は「苦境の乙女」を救うのを愛さないかしら、さゆりは思い、そして強制的に彼女を利用するわ、彼女の思考の列車が続いた。

「OK。俺の番号は0655332830よ」

さゆりはカバの電話番号を彼女の電話に入力し、そうする間徹の顔の酸っぱい表情に気づいた。

「OK。行きます。パーティーに招待してくれて本当にありがとう徹。素晴らしい時間だったわ」さゆりは徹の腕に愛情を込めて触れながら言った。

「来てくれてありがとう」徹は答え、笑みを強制した。

Now, translate to Japanese.<|control12|>第39章

さゆりはみやぎのいつもの場所に落ち着き、レストランの馴染みの音がウェブデザインの仕事の心地よい背景を提供した。タスクは急ぎではなかったが、手を忙しくし、過去一週間の出来事に心をさまよわせた。

彼女はビーフの家での七夕祭りで3人の日本人男性——徹、昇、和宏——に会い、遊び心のあるいちゃつきがパーティーへの招待につながった。彼女はクールに振る舞い、徹に番号を渡すのを拒否したが彼の番号を受け取り、パーティーの日までどう感じるか見てみると言った。カバに近づく緊急性が常にあり、早く興味を示しすぎるわけにはいかなかった。

訪問から数時間後、彼女はレストラン向かいのブースに座る馴染みのない日本人男性の小さなグループに気づいた。彼らは笑い、活発なジェスチャーが仲間意識と悪戯の混ざりを示唆した。ちょうどその時、ビーフが歩いてきて、彼女の日常の定番である温かい笑みを浮かべた。「やあ、さゆり！ 今日はどう？」

「やあ、ビーフ！ いつもの仕事よ。あなたは？」彼女は微笑み返し、彼のフレンドリーな存在に感謝した。

「いつも通りよ。あの祭りの男たちのことまだ考えてる？」彼はテーブルにもたれながらカジュアルに聞いた。

さゆりは徹の招待を思い出しながら頷いた。「うん、徹は面白いわ。少し……違うわね」

ビーフの表情が少し変わり、目に懸念が閃いた。「念のためだけど、あの3人は低レベルのヤクザよ。徹は執行者で、密輸の荷物のセキュリティを担当してる。他の二人はドライバーよ」

彼女は彼らに何かあると疑っていた。「本当？　それで納得いくわ」

「気をつけて、さゆり。徹はまともかも知れど、暗く暴力的な面があるわ」ビーフは真剣な調子で警告した。「そんなのに巻き込まれたくないわよ」

さゆりは少し不安を感じたが、タスクを完了する決意は強かった。徹はカバに近づく最高のチャンスかもで、そのつながりが必要だった。

「時々寂しくなるわ。日本語で話せる人と一緒に過ごせたらいいのに」彼女は言葉を慎重に選びながら彼の腕に手を置いて認めた。

「あなたが結婚してて残念よ」彼女は続けた、ビーフが彼女に気があると疑い、自分の立場を伝えたかった。

ビーフは一瞬彼女を観察し、少し頬を赤らめながら頷いた。「ただ私が言ったのを覚えておいて。警戒を保って」

心に計画が形成され、さゆりは徹にパーティーの詳細をテキストで決めた。彼女は素早くタイプし、アドレスを聞きながら非コミットメントな調子を保った。数分後、彼女の電話がピンと鳴き、応答があった。徹はアドレスを送り、彼女はすぐにビーフに見せた。彼はそれを読んで少し眉をひそめた。

「あれは川近くの倉庫よ、7-Elevenの向かい。合法的な輸出入ビジネスだけど、彼らの密輸のフロントよ」

「そう？」さゆりは無知を装った。

「うん、70年代から続いてるわ。ヤクザは中国人と組んでゴールドトライアングルから薬を運んでる。CIAがKMTがCCPへの抵抗を資金にするためにアヘンを育てるのを承認したところから始まって、ゆっくり利益主導のベンチャーになったわ」

さゆりは情報を吸収した。彼女は自分が踏み込むものの深刻さをすでに理解していた。「じゃあ、倉庫は本当に彼らの作戦の本部なの？」

ビーフは頷き、表情は真剣だった。「行きたければ一緒に来るわ。一人でそこに行くのは好きじゃないわ」

「ありがとう、ビーフ。でも大丈夫だと思うわ」彼女は丁寧だが固く答えた。自分で扱う必要があった。

「ただ気をつけて、さゆり。何か起きてほしくないわ」彼は心配を込めて言った。

「そうするわ」彼女は保証し、心はすでに可能性で競っていた。リチャードが3週間で着く中、拓也が課したタスクを完了する圧力を感じた。時間を無駄にできなかった。

今冷めたコーヒーを飲み干すと、興奮が血管を駆け巡った。明日のパーティーはカバを取り巻く謎を解く鍵になるかも。彼女はどんな代償でもそれを機能させる決意だった。

* * *

さゆりが狭い道をヤクザの倉庫パーティーへ近づくと、興奮と不安の混ざりが彼女を通り抜けた。倉庫がジョリーンの家から簡単に歩ける距離でよかった。予想より長く滞在することに決めても、ヤクザの男の一人から後で乗せてもらうのに頼るのを望まなかった。

狭いコンクリートの道は川に平行に走る第一と第二の道路を繋ぎ、彼女は歩きながらその地域の馴染みの感覚を感じた。彼女の脈が速くなり、アドレスに着いた。外に看板はなく、7-Elevenとタイ市場の一つへの入り口のほとんど真向かいの平凡な金属のロールアップドアだけだった。7-Eleven外の通りは賑やかで、彼女はストリートベンダーからバナナの香りを嗅げた——種類だけ売る、コンデンスミルクをたっぷりかけたバナナパンケーキ——彼女は抵抗しづらかった。でも彼女が立っていたこの特定のスポットは暗闇に包まれ、歩行者がいなかった。

彼女はリチャードがフィリピンへ去った後すぐの初期の探検でこの道がどれだけ混んでいたかを思い出した。彼女は無標識の箱が巨大なトラックに積み込まれて歩道がブロックされた時、通りを歩くのを強制されたのを思い出した。あの日、苛立ったトゥクトゥクドライバーがトラックドライバーに叫んだが無駄で、苛立った車両のボトルネックを作った。

深呼吸し、さゆりはローディングベイへ数段の階段を登った。次に何をするか確かじゃなく、壁をスキャンし、彼女が前に見たことのない高い位置の色褪せた中国の看板に気づいた、汚れが文字を覆っていた。薄暗い光で、それは何か深いもの、何か隠されたものを示唆するようだった。彼女は上げられたローディングベイに沿って数歩歩き、大きな柱の反対側に別のロールアップドアを発見した。金属のロールアップに金属のドアが切られ、薄暗い光が発見しづらくしていた。それは閉まっていた。不安と決意の混ざりで、彼女はドアの真ん中の金属レバーを動かしてみた。

驚いたことに、ドアがきしみながら開き、入り口の両側に綺麗にパレットされた箱のスタックを明らかにし、広大な倉庫へ深く導く10フィートの幅の廊下を作っていた。出てきた空気はニコチンの独特の香りに満ち、彼女は一瞬ためらった、決定の重みが彼女に降りかかった。

「何も起こらないわ」彼女は自分に呟き、決意を固めた。

中へ踏み込むと、音楽と笑いの薄い音が暗闇を通過して濾過され、彼女をさらに引き込んだ。内部は薄暗く、箱のスタックの影が踊っていた。音を追って、彼女は注意深く前進し、箱が彼女の小さな姿の両側に大きく迫らなくなるまで、はるかに大きな開けた空間を明らかにした。

さゆりは箱で囲まれた通路の影に立ち、活気あるパーティー参加者に気づかれず存在した。彼女は目の前の光景を吸収する一瞬を取った。遠い角で、トレッスルテーブルが開いたラップトップを保持し、ヘッドフォンをした男がキーボードをタップしていた。おそらくDJよ、彼女は彼を注意深く観察しながら思った。

安いプラスチックの椅子は数個のトレッスルテーブルの外縁に沿ってだけ配置され、緩く長方形を形成し、即席のダンスフロアを作っていた。後ろの壁に沿って、彼女は二つの大きな冷蔵庫とチェストフリーザーを見つけ——おそらくビールで満杯。冷蔵庫のすぐ向こうに、華やかな木製のドアが目にとまった；オフィスへ導く可能性が高い。

冷蔵庫近くのテーブルの一つに、スピリットボトルの配列とプラスチックカップが並べられ、夜の祝賀を示唆した。彼女は彼女に最も近い壁のトイレドアに見えるものをメモした。彼女の隠れた視点から、彼女は薄暗い光で目に見える人を数え始めた：12人の男、そのほとんどが非タイ人に見え——おそらく日本人か中国人、確かめるには暗すぎた。男のほとんどに女性が側にくっつき、全員タイ人に見え、おそらくバーの女として働いていた。

雰囲気は本物に感じ、単に彼女を倉庫へおびき寄せるための徹の策略じゃない。とはいえ、さゆりは注意を保った。東京での経験が彼女に男は信頼できないと教えていた。しばしば、女はさらに悪い。彼女の本能は警戒し、部屋をスキャンし、各詳細がこの馴染みのない環境での彼女の警戒を強化した。おしゃべりと笑いを聞き、彼女は雰囲気は仲間意識で濃い、何かより危険なものの根底の流れで感じた。彼女は日本語の会話の断片を聞き、言語が馴染みの抱擁のように彼女を包んだ。彼女は自分の目的を思い出した；これは快樂じゃない——ただビジネスよ。

彼女は徹とつながり、彼を使ってカバに近づく必要があったので、この新しい下界で自分にスペースを切り開く必要があった、こんなに外国に感じながらも同時に馴染みのある。

さゆりは箱で囲まれた通路の影から倉庫の開けたセクションへ踏み出し、目の前の活気ある光景を取り込みながら神経がビリビリした。活気ある雰囲気は音楽と笑いで脈打ち、彼女の神経ははっきりした。ほとんど本能的に、彼女は徹の手が彼のズボンの後ろに押し込まれた銃へ移るのに気づいた、セキュリティとしての役割から生まれた反射。でも認識が明けると、彼の表情が柔らかくなり、歓迎の笑みで彼女を呼んだ。

「さゆり！」彼は彼女を近くへジェスチャーしながら呼んだ。「みんなに会いに来て！」

初めの躊躇にもかかわらず、彼女は興奮と恥ずかしさの混ざりを感じながら彼へ歩いた。徹は彼女を七夕祭りから馴染みの顔の混ざりと数人の新しい顔の小さなグループへ紹介した。社交は決して彼女の強みじゃなく、彼女は彼らに挨拶しながらぎこちなさのヒリヒリを感じた。

「やあ、素敵だよ！」男の一人が言い、彼女は少し場違いを感じながら丁寧な笑みを返した。

徹は彼女の不快を感じ、冷たいビールを渡した。「これで助かるはず！」

感謝して、彼女はそれを受け取り、冷たいボトルが歓迎の気晴らしだった。彼女は一口飲むと、徹が腕に女性をくっつけない数少ない男の一人だと気づいた。おそらく彼女を置き去りに感じさせたくないと思ったのかも、彼女は彼の心で彼女が今夜の「パートナー」だと思ったのかも。

群衆をスキャンし、彼女は同様に一人でいる他の二人の男を見つけ、カバの好奇心を高めた。ヤクザは悪名高く秘密主義で、オンライン存在なしで、彼女は本能と観察に頼らなければならなかった。

カバは40代に見え、平均的な身長と体格で、きれいに剃られた顔と後ろに滑らかに梳いた厚い黒髪だった。彼は白いベストの上に開いたカジュアルジャケットを着、暗いズボンと磨かれた黒い革靴——カジュアルと洗練のバランスを打ったスタイル。

さゆりはほとんどの日本人女性のようにファッションに敏感で、彼の全体の服装がおそらくN. Hollywoodからだと疑った。彼は落ち着き集まり、自信と制御の空気を放ち、彼の主張的なボディランゲージが高地位を反映していた。パーティーで最も上級のヤクザメンバーとして、部屋の他の日本人男性の敬意は紛れもなかった。彼女は正志が倉庫で多くの時間を過ごすか疑問に思った。

音楽が活気あるタイの曲へ変わり、彼女はバーの女たちがダンスフロアを渦巻き、リズムに完全に浸っているのに気づいた。徹は近くへ寄り、声は遊び心満載、「ダンスしたい？」

さゆりはためらい、遊び心の笑みが唇を引いた。「日本語か西洋のポップミュージックにしかダンスしないわ」

彼は眉を上げ、興味をそそられた。「本当？ 何ができるか見てみよう」彼はトレッスルテーブルの即席DJへ振り向き、まだラップトップをタップする男。「やあ！ SMAPのLion Heartかけて！」

さゆりの心臓が馴染みのメロディーでスキップした。それは90年代のクラシックで、懐かしの波をもたらした。オープニングノートが空気を満たすと、彼女は興奮の閃きを感じた。完全にリラックスするにはまだシラフすぎたが、ダンスの衝動に抵抗できなかった。即席ダンスフロアへ踏み出し、彼女はリズムに動き、音楽が彼女を洗うのを許した。徹は彼女に加わり、近くでダンスしようとしたが、彼女は遊び心で縁を避け、笑いながらやった。

「さあ、恥ずかしがらないで！」彼は距離を橋渡ししようとしてからかい、彼女は遊び心の姿勢を保ち、いちゃつきを楽しんだ。

心で、彼女は自分の動きを計算した。徹を魅了すればするほど、カバとヤクザ作戦について彼に聞くレバレッジが増す。彼女は回転し、渦を巻き、からかい距離で彼を保ちながら笑い、注意を楽しんだが、真の意図を胸に近く保った。

曲が進むにつれ、彼女は徹の目に賞賛が見え、それが彼女の自信を燃料した。これはこの世界を航海する彼女のチャンスで、少しの魅力で、この夜をただのパーティー以上のものに変えられるかも。徹はさゆりをダンスフロアから離さないように、DJに曲リクエストを続けさせた。『Lion Heart』の後には『世界に一つだけの花』が続き、続いて『愛してる』でさゆりは少し不快を感じた。

「今少し熱いわ」彼女は曲が終わると徹に言った。本当だった；倉庫は蒸し暑く、ダンスはすぐに不快に導いた。

「君の言う通りよ。かなり熱くなってる。ビール取ってきて、一分で戻るよ、OK？」

「はい！」彼女は答え、冷蔵庫へまっすぐ向かった。彼女は二本の氷冷えアサヒビールを掴み、ほとんどの日本人男たちがうろつくテーブルへ戻った。

カバが話をしていた。「……彼はただ私たちに支払わないと思ったけど、私が終わった時、彼はまだ息してるのが幸運だった。もちろん私たちは支払われた！ ハハ！」

カバに気づかれる機会を取り、さゆりは大声で笑いを強制し、すぐに彼女の方向へ頭が回転した。

「あ、ごめんなさい」彼女は誇張して謝り、「そんなに大声にするつもりじゃなかったわ」

「名前は何だっけ」カバが聞いた。

「佐藤さゆりです！」彼女は正式に答えた。

「徹と一緒になの？」

「まあ、いえ。徹が招待してくれたけど、彼と『一緒』じゃないわ、わかってるよね」さゆりは外交的に答えた。彼女の返事がカバの顔に小さなニヤリをもたらした。彼女は彼が何を考えているか正確に知っていた：新鮮な魚！

さゆりはタイやラオスのこの部分にどれだけの日本人女性が住んでいるかわからなかったが、推測するなら——あまり多くない。カバはバーの女より日本人女性を好む——すべての日本人男性のように。日本のパトリアルカル社会は日本人女性が性的アプローチにノーと言うのを少なくし、それはさゆりが何世紀も存在する複雑な日本のジェンダーダイナミクスの現実で育ちながら「我慢して耐える」ことを学んだもう一つのことだった。彼女は経験から、カバがこの瞬間から彼女を潜在的な性的征服としてだけ見る——それ以上じゃない——ことを知っていた。

もう一つフックされた。誰が今魚なの、悪い子？ 彼女は自分に思い、心の中で自分を叩いた。

彼女はわざとカバに背を向け、それが彼女のフックをさらに沈めるだけだと知っていた。ちょうどその時、徹が二つの巨大な産業用ファン——各手に一つ——を持って現れた。彼女は彼が重さで苦労しているのが見えたが、彼女の前で勇敢な顔をしていた。

男って本当に基本よ、彼女は自分に微笑みながら思った。徹は彼女の笑みを見ると、すぐに笑み返したが、彼が静かに嘲笑されているとは気づいていなかった。ダンスエリアの周りに戦略的にファンを置き、彼はさゆりに加わり、彼女は夕方がどれだけ突然複雑になったかをよく知っていた。セックスシンボルとしての彼女の自然な魅力が彼女の人生をあまりにも何度も複雑にした。彼女は空気をクリアにする必要があった。

彼女は実際徹をかなり魅力的だと思った。彼の遊び心のあるおしゃべりと簡単な笑みが彼女を安心させたが、彼女は彼に近づきすぎるのはいくつかの理由でいいアイデアじゃないと自分に思い出した：チャドとリチャードとの複雑な恋の三角関係が彼女に重く掛かり、彼女はヤクザの下界へ再び吸い込まれなくなかった。最も重要に、カバに近づく

彼女のミッションは彼女の徹とのいちやつきをエスカレートさせたら危うくなる。彼女が必要とする最後のものは彼女がカバといちやつくのを見て嫉妬した徹が爆発すること；それは特に彼が武装しているので、惨事になる。

熟考の後、さゆりは正直が最善の政策だと決めた。彼女は深呼吸し、徹へ振り向いた。

「徹、あなたは本当にいい男で、あなたの会社を楽しむけど、パーティーの招待を受け入れたのはあなたとつながりたいからじゃないの。日本語話せる人と社交するチャンスが長い間なかったからだけよ」

徹の顔が少し落ち、彼女は失望が彼を洗うのを見た。「あ！ ごめん、さゆり。君が俺を好きだと思ったよ」

彼女は彼の反応に罪悪感の刺しを感じた。優しく、彼女は彼の前腕に手を置き、彼を慰めようとした。「好きよ、徹——ただその方法じゃないわ。ごめん。でもノンパイで私の親友になるのを受け入れてくれる？」

彼の表情が少し柔らかくなり、彼は驚きと安堵の混ざりで彼女を観察した。「親友、へ？ それならできるよ」彼は答え、試みの笑みが顔に忍び寄った。

彼らの間に数秒のぎこちない沈黙があり、徹が言う前に、「まあ、少なくとも君は俺を早くフレンドゾーンしたわ。それを評価するよ。誰も真実を聞きたくないよ。痛いよ。でも俺に正直でいてくれて敬意するよ」彼は微笑み、続けた、「でもそれで君が今パーティーを離れるわけじゃないよ」彼は遊び心で言い、優しく彼女の手を掴み、再びダンスフロアへ導いた。

「もちろんないわ」彼女は肩の重みが持ち上がるのを感じて言った。「ダンスできる友達が必要よ」彼女は答え、本物の笑みを形成した。徹は頷き、彼の態度がより軽い調子へ移った。

「OK、親友。ただ知っておいて、俺はまだ君を見守るよ」

彼女はクスクス笑い、彼の理解に感謝した。「それを評価するわ。ただ今はもうパーティー招待なしよ、OK？」

「合意」彼は言った、ビールを模擬乾杯で上げた。彼らはボトルをカチンと合わせ、一瞬緊張がバックグラウンドへ消えた。徹は彼がファンを取っている間に起きたさゆりとカバのやり取りにまだ気づいていなく、さゆりはそれをそのまま意図していた。パーティーが笑いとエネルギーで膨張し続ける中、さゆりはアルコールの緩む初めの緊張を解き、数本のビールをさらに飲んでいて自分を発見した。

音楽が彼らの周りを脈打つ中、さゆりは目的の更新された感覚を感じた。徹を味方として、この世界をより簡単に航海できる。でも彼女の焦点は究極の目標に残った——カバとのつながりを鍛えること。彼女は彼をちらりと見て、まだグループから敬意を命令し、彼女のミッションの次のステップに自分を固めた。

家に帰る時間だわ、さゆりはトイレへ向かう途中でつまずきながら決め、自分をスペクタクルにせずにはバランスを回復した。

「今行かなきゃ」彼女は彼が飲むテーブルに戻って徹に言った。彼女はカバが近くに立ち、ビールを持っているのに気づいた。

「家まで送れるよ」カバは徹が返事するチャンス前に申し出た。さゆりは徹が申し出るのを予想していたが、カバは速すぎ——そして熱心すぎた。

「大丈夫よ。いいわ」彼女は嘘をつき、すぐに離れなければ自分を馬鹿にすることを知っていた。ビールは彼女のクリプトナイトだった。

「どうやって帰るの？」徹は本気で心配して聞いた。さゆりは鉄則を持っていた——いつもどこに住んでいるか嘘をつく。男は信頼できなかった、特に彼らが小さな頭で考え大きな頭じゃなく。

「トゥクトゥクの番号持ってるわ」彼女は真実を言い、近くに住んでいるのを明かさなかった。

「本当にリフト与えられない？」カバは再び試した。

「本当に」さゆりは言った。「でも困ったら番号くれるかも？」彼女は提案し、カバが彼女に番号を与えるのをためらわないと知っていた。

彼は「苦境の乙女」を救うのを愛さないかしら、さゆりは思い、そして強制的に彼女を利用するわ、彼女の思考の列車が続いた。

「OK。俺の番号は0655332830よ」

さゆりはカバの電話番号を彼女の電話に入力し、そうする間徹の顔の酸っぱい表情に気づいた。

「OK。行きます。パーティーに招待してくれて本当にありがとう徹。素晴らしい時間だったわ」さゆりは徹の腕に愛情を込めて触れながら言った。

「来てくれてありがとう」徹は答え、笑みを強制した。

第40章

さゆりはジョリーンの家のバスルームに立ち、ベリーのシャンプーの香りが空気を満たす中、髪を泡立てていた。温かい水が体を流れ落ち、彼女は一人時間の瞬間を楽しんだ。リチャードは数時間前に着き、南アフリカからの3日間の旅で疲れ果てていた。今、彼は寝室でぐっすり眠り、思い浮かべるだけで興奮の波が彼女を通り抜けた。ようやく彼が戻り、彼女はどれだけ彼を恋しく思っていたか気づいた。彼女は忠実で、誘惑に抵抗し、他の人——徹を含めて——から距離を置いていた。彼には友達だけになりたいと固く言っていた。

カバとの最近のコーヒーの短いミーティングはみやぎレストランで安全な場所のように感じたが、カバを思いとどまらせなかった。彼は彼女に自分の家を見に来るよう主張した。彼女はリチャードが戻る前に拓也のためにカバの問題を解決するのを望んでいたが、そうならなかった。それ以来、カバはラオスへ2週間行っていた。

髪からシャンプーを洗い流した後、さゆりは濡れた裸の体にタオルを巻いた。いたずらっぽい笑みが顔に広がり、彼女は寝室へつま先立ちで歩いた。マットレスの端に座り、リチャードの眠る姿の隣で、彼女は彼の裸の背中を優しく撫でた。

「はに一」彼女は優しく呼び、目を覚ますようからかうささやき声。

リチャードはゆっくり動き、彼女のほうへ背を向け、ひげの剃っていない「眠り顔」が少し乱れていた。さゆりは内心想った。あれは彼のベストルックじゃないわ。でもそれでも彼を評価した。

「はろー、べいびー。何時？」彼は眠気に満ちた声で呟いた。

「起きる時間よ。シャワー来て。臭うわ」彼女は意地悪くなくただ正直にストレートに言った。彼の欠点を受け入れ、ただ新鮮に感じさせてあげたかった。リチャードは眠そうにクスクス笑い、目はまだ半分閉じたが、彼女の手を取り、導かれるのを許した。バスルームへ入ると、さゆりは冷たい水をすくい、彼の頭にかけた。

「うわあ！」彼は叫び、笑いながら目を覚まし、ショックが彼を完全に目覚めさせた。
「爽快だ！」

さゆりはクスクス笑い、心が軽くなった。彼女は石鹸を掴み、彼の体を泡立て、瞬間の親密さを楽しんだ。彼女は彼を洗い流し、指が肌を滑り、彼女の下の彼の体の温かさを感じた。

「OK、今髭を剃って歯磨きして」彼女は遊び心で指示した。「ベッドで『歓迎プレゼント』を持って待ってるわ」

リチャードは眉を上げ、笑みが顔に忍び寄った。「本当？ 男を誘惑する方法を知ってるね」

「ただ面白く保ってるだけ」彼女はからかい、バスルームを離れる前に頬に素早いキスをした。

寝室へ戻る途中、さゆりは幸せの波を感じた。リチャードが家にいて、彼女の人生の複雑さにもかかわらず、彼女は先の夜を受け入れる準備ができていた。彼女はベッドになり、彼の帰りを熱心に待ち、彼女のヤクザの問題から一時的に心を逸らした。

彼女はバスルームの蛇口が流れているのを聞き、リチャードが彼女の指示に従っているのを示していた。彼女は彼に伝えていなかったが、彼のタバコの息が好きじゃなく、彼らのキスで髭のひげが顔を刺し、親密さを完全に楽しめなかった。蛇口が閉まるのを聞き、彼女は尻を上げ、タオルをほどき、ほとんど乾いているのに気づいた。

リチャードの大きな体が部屋へ入った。なんて改善！ 彼女は彼が清潔に剃られ、内股で歩くのを見て思った。とても可愛いわ。それは自動的に彼女の顔に笑みを浮かべさせた。彼は瞬間立ち、彼女の裸の姿を見下ろし、それからベッドの足元へ回り、優しく足を掴み、脚を広げた。これは彼女のお気に入りの部分だった。リチャードは思いやりのある恋人で、いつも彼の前に彼女のニーズを優先した。彼は足にキスを始め、骨盤エリアへゆっくり働き、脚を交互にした。それは天国だった。彼が太もものすぐ上で瞬間的に留まり、顔を見上げて彼女に悪戯な笑みを送った時、不随意の震えが背中を下った。さゆりは彼が仕事へ入る時、恍惚で身をよじり、熟練して彼女を戻れないポイントへ連れて行った。

今彼が欲しい！ 彼女は緊急に思い、一方の手を彼の首の後ろに置き、空気へ上がるよう合図した。性的に、彼は自己中心的な恋人チャドよりずっと優れていた。でも彼女はなぜかチャドに強いつながりを感じていた。彼女は膝を体の両側へ引き上げ、リチャードが彼女へゆっくり入るのを許した。はい、それは間違いなく天国よ、彼女は再確認し、アニメで神に話した——信者じゃないにもかかわらず。

* * *

リチャードはリラックスしてソファに座り、大型のラウンジファンの背景のブーン音が彼を無意識に落ち着かせ、野生動物のビデオを見ていた。さゆりは午後をウェブデザインの仕事に浸って過ごし、ラップトップを叩きながら集中していた。でも彼女は彼の帰りのために特別なものを計画していた。

仕事から必要な休憩を取り、彼女はロータスへ長い散歩をし、計画した特別な夕食のための材料を買った。ジョリーンのスクーターが使えたにもかかわらず、歩くのは健康に良く、下背筋を緩め、一生の痛みを和らげた。自宅でラップトップで仕事するのは人間工学的に良くなく、それが彼女がコーヒーショップで仕事をするもう一つの理由だった。

彼女は家に戻るとずっと良くなり、バックパックが料理の喜びで満杯だった。彼女はリチャードが彼女を恋しく思っているのがわかった。彼は来てキッチンのドアにもたれ、ランダムな夕食の質問を始めた。

「夕食に何作ってるの、ベイビー？」

「サプライズよ」彼女は言い、質問を止めてテレビを見ろと言う視線を彼に送った。

リチャードは彼女がキッチンを忙しく動き、動きは優雅で目的的だったのを数分見た。スパイスと調理された皿の香りが空気を漂い、期待で彼の胃を鳴らした。

「はに一、今夜キッチンに入っちゃダメよ、OK？」さゆりは優しく足を下ろし、彼女は彼へ滑り寄り、頬にキスをし、「行ってリラックスして」彼女は遊び心の突きで言った。

「OK、ベイビー」彼は譲歩し、アヒルのように歩いてラウンジへ戻った。

さゆりは満足の輝きで顔を輝かせてほとんど1時間後にキッチンから出てきた。

「ようやく」彼は彼女がすべての皿のトレイをコーヒーテーブルに置くのをからかった。

「家へようこそ！」彼女は遊び心で宣言し、目を興奮で輝かせてごちそうをジェスチャーした。リチャードは微笑まずにはいられず、心が感謝で膨らんだ。

「わあ、ベイビー、これすごい！」彼は座り直し、彼女が食事にかけた努力を取り込んだ。「本当に全力を出したね」

「特別にしたかったの」彼女はソファの彼の隣に座りながら答えた。彼女の存在の温かさが慰めで、彼は彼女がすべての皿に注いだ愛を感じた。

「確かに特別だ」彼は言い、素早いキスを盗むために寄りかかった。「完璧だ」

突然、彼女は再び跳ね上がり、「あ、何か忘れた！」彼女は叫び、キッチンへ戻った、彼女の「室内スリッパ」が彼女が行く時にカチカチ音を立てた。瞬く間に、彼女は戻り、二本のロングトム・チャンビールを手にしていた。

「グラス欲しい？」彼女は立ったまま聞き。

「いや、いいよ」リチャードは答えた、「座ってベイビー。食べよう」

彼らは馴染みのルーチンに落ち着き、テレビがバックグラウンドで柔らかくちらつきながら、自分たちに盛り付けた。さゆりはビールを開け、一本をリチャードに渡した。

「かんぱい！」彼女は乾杯した。

「かんぱい！」リチャードは唱和し、彼女の缶に自分のを軽く叩いた。

食事に取り掛かると、リチャードは各一口を味わい、さゆりの料理の腕に驚嘆した。「このカレーは信じられない！　ほとんど俺のと同じくらいうまい！」彼は一口の間で言った。

「知ってるよ、嘘ついてるのよ。あなたのカレー味わったことあるわ！」彼女は笑い、頬が少し赤くなった。

「まあ、母親がカレー作りを教えてくれた。でもあなたは俺のを『インドカレー』と呼び、あなたのを『日本カレー』と言うと思うわ。カレーのレシピは数百あり、私たちは皆家を思い起こす食べ物を食べるのが好きだと思うわ」

「だからあなたの母親があなたに料理を教えたのね。彼女と近かったの？」さゆりは答え、この素敵な男についてもっと知りたく、タイで彼女と一緒に暮らすことに決めた。

「できるだけ近かったと思うわ。彼女は難しい人だった。かなりドラマチックよ」リチャードはゆっくり言い、言葉を慎重に選んでいるようだった。

「ドラマチックって何？」さゆりは聞き、英語で新しい言葉を学ぶのをいつも喜んだ。

リチャードは瞬間考え、それから言った、「彼女は注目されるのが好きだった」

「OK。わかるわ」彼女は頷き、ビールをもう一口飲んだ。

「じゃあ、あなたの育ちはどうだったの？　母親と近かったの？　両親が離婚したって言ってたわよね」リチャードは一番甘い声で聞いた。

「うん、学校にいた時は父親より母親に近かったわ。彼女も私に料理を教えてくれたわ」彼女は弱い笑みを浮かべて答えた。

「父親に何が起きたの？　母親が東京で一人暮らしだって言ってたわよね。彼は亡くなったの？」リチャードは優しく探った。

「私の父親はいい父親だったけど、悪い夫だったわ」さゆりは思い出しながら答え。

「どういう意味？」リチャードは好奇心をそそられて聞いた。

彼女は正しい言葉を探してためらった。「彼は銀行の仕事が嫌いだったわ。仕事の後毎日飲んで、幸せな人じゃなかったわ」

リチャードは頷き、彼女の言葉を吸収した。「まだ生きてるの？」

「そう思うわ」さゆりは彼について最後に聞いたのを思い浮かべようとして眉を寄せて推測した。「両親は私がまだティーンエイジャーの時に離婚したわ」

「それは残念だわ」リチャードは本気で言い、顔に悲しみの影が横切った。

「うん、私も残念だわ。私は母親に彼と離婚するよう言ったの」彼女は痛い思い出を思い出しながら沈思的に言った。

「飲酒のせい？」リチャードは状況をまとめながら聞いた。

「飲酒、ギャンブル、女性……」さゆりは父親の欠点をリストし始め、各言葉が怒りと失望の混ざりで染まった。

「話したくなかったら話さなくていいよ」リチャードは会話が周囲の雰囲気をも暗くしているのに気づいて提案した。

「大丈夫よ」さゆりは答え、目を彼に合わせた。「これまでどんな男にも話したことないけど、あなたと話すのが好きよ」

「ありがとう」リチャードは柔らかい笑みが顔に広がって言った。

「うん、あなたは本当に私を気にかけてくれると思うわ」さゆりは彼らの間の空気に正直を強調して言った。

「気にかけてるよ」リチャードは本気で同意した。

「母親が父親と離婚した後、彼はますます飲むようになって仕事失ったわ」彼女は心に重く掛かる言葉の重みで続けた。

「それはひどいわ」リチャードは少し前かがみになり、表情が共感的で彼女を慰めた。

「それから彼は毎月母親にお金を払えなくなったわ」彼女は失望の表情を顔に浮かべて言った。「私は旅行したかったけど、母親の面倒を見るために東京に残ったわ」

「それはあなたにとって本当に難しかったはずだわ」リチャードは優しく言った。「あなたは自分のニーズを彼女の前に置いたわ」

さゆりはため息をつき、後悔が目にも明らかだった。「我慢よ。私は責任を感じたわ。彼女は苦勞してて、一人にさせたくなかったわ。でも時々、違う選択をしたら私の人生はどうだったかと思うわ」

リチャードは手を伸ばし、彼女の手に慰めの手を置いた。「愛から犠牲をしたよね。それは後悔するものじゃないわ」

彼女は少し微笑み、彼の理解に感謝した。「それを言ってくれてありがとう。ただ……痛みにそんなに近いと肯定的なものが見えにくいわ」

「代わりに未来に焦点を当てよう」リチャードは調子を少し明るく変えて提案した。「あなたはタイで新しい人生を持ってるわ。あのすべてから自由になって、今何をしたいの？」

さゆりの表情が会話のシフトで明るくなった。「探検したいわ。行ったことない場所へ旅行し、新しい人に会い、この美しい国が提供するすべてを経験したいわ」

リチャードは笑い、目に熱狂が輝いた。「じゃあ、それを実現しよう。私はあなたと新しい冒険をするのが楽しみだわ」

「男とどこへも旅行したことないわ。できるかわからないわ。私はいつも一人で旅行するわ」彼女は正直に言い、言葉がリチャードを傷つけるかも知っていたが、真実を遅らせる意味がないと決めた。彼女は自分の正直がリチャードをショックさせたのが見えた。彼は彼女を思慮深く見つめ——言葉を失っていた。

ついに、彼は言った、「知ってるよ、これまで気づかなかったけど、私も一人で旅行するのが好きだわ」そして彼は笑い始めた。

「わあ！ 私の最初の反応は動揺することだったけど、今考えてみると、私も同じだわ！」

彼の笑いを聞いて安心し、さゆりはクスクス笑い始めた。「かんぱい！」彼女はもう一度乾杯し、気分が上がった。

「かんぱい！」リチャードは唱和し、彼女のビールに自分のを叩いた。

リチャードと話すのはチャドと話すよりずっと簡単だった。判断なし；ドラマなし、そして不機嫌なし。さゆりはなぜ最初にチャドに落ちたか疑問に思い始めていた。彼女はどこかでフェロモンが性的魅力で役割を果たし、多くの効果が無意識レベルで起きると読んだことがある。

それに違いないわ、彼女は決め、ビールをもう一口飲んだ。これまで——関係のこれらの初期の日々で——彼女はリチャードが彼女の人生にいるのを楽しんでいた。ハネムーン期間が終わったら物事が変わるのは確かだけど、今のところ彼女は満足だった。リチャードは彼女を安全に感じさせた。そして愛された。とても愛された。彼に両親の離婚について話したのは彼女を驚かせた。彼女はその秘密を決して共有しないと決意していたのに、2週間しか知らない男に圧力なしで自発的に痛い思い出を共有した。でも両親の離婚は何年も前だった。それはもう彼女の現在生活に本当の影響はなかった。一方ヤクザは……

第41章

さゆりはジョリーンの家のソファに胡座をかいて座っていた。午後の遅い陽射しがカーテンを通して濾過され、部屋に温かい輝きを投げかけていた。タイは日差しが強い国——日本とは違って。雪の冬に育つのは普通に思えたが、アジアを旅し始めてから、雪の考えが彼女を震えさせた。

リチャードは数日前にノンパイに戻り、二人の時間は至福だった。でも満足の下にカバについての食い尽くす不安が潜んでいた。彼女は彼の横領についての情報を必要とし、これまでの方法は結果を出していなかった。

彼女は選択肢を考えながら心が競った。彼女は電話を取り出し、連絡先をスクロールして徹の番号を見つけたまで。計画が形成され始めた——少しの魅力といちゃつきを含むもの。徹とのつながりを再燃させたら、彼は知っていることを共有しやすくなるかも。深呼吸して、彼女はコールボタンを押し、待った。徹がつながると、彼の声は陽気で少し驚いた。

「さゆり！　元気？」

「やあ、徹！　いいよ、ありがとう。今日の夜飲みに行かない？　ただ友達として？」

相手側で短い間があり、彼女はほとんど彼が招待を考えるのを聞いた。「もちろん！　いいね。どこで会う？」

「川近くのあの小さなバーどう？　7時頃そこにいるわ」さゆりは提案した。

「どの小さなバー？　いくつかあるよ」徹が聞いた。

「ブッダバーって呼ばれてる。お寺の隣で夜市があるところ。知ってる？」さゆりは説明した。

「OK、あそこ知ってる。7時に会おう。じゃあね」

「OK。最高！　じゃあね」

通話を終わると、さゆりは興奮と不安の混ざりを感じた。彼女は徹がカバについての情報を持ってるかも知ってたが、ヤクザはすべて秘密に誓い、話さないように恐れを使っていた。ヤクザの環境は脅迫に満ちていて、さゆりは徹が何かを共有するのをためらうかも知ってた。でもさゆりは彼女の力を知っていた。男たちはいつも彼女に惹かれ、しばしば彼女の注意を巡って争った。自信の笑みを浮かべて、彼女は夕方の準備を始めた。

さゆりはリチャードが彼女が行くと言った時決して質問しないのを感謝した。彼には理由がなかった。二人が一緒に住み始めてから、彼女は一度も彼に嘘をついたことがなかった。はい、情報を伏せたことはあったが、決して嘘をついたことはなかった。彼女は彼女の姿を強調するフィットしたドレスを選び、リチャードが彼女のすべての服装をセクシーだと思うのをわかっていたので、彼の疑念を起こさないと考えた。

メイクを塗りながら、彼女は徹へのアプローチを熟考した。彼女は彼をいちゃつき、かつて共有した化学反応を思い出させる必要があった。彼を重要で欲せられるように感じさせたら、彼はガードを下げてくれるかも。

「夜市に行くわ」彼女は調理に忙しいリチャードに宣言した。彼は木のスプーンを手に彼女を見上げ、「いつものように素敵だよ、ベイビー」ジェスチャーで彼女にさようならのキスをさせ、それを彼女は義務的にした。

「帰ったら食べるわ。あのスパイシーソーセージ取ってくるわ、あなたの好きなやつ」彼女は微笑みながら言い、嘘をつかずに済んでホッとした。彼女は徹とのミーティング後、お寺近くの夜市に行くつもりだった。

バーに着くと、雰囲気は活気があり、笑い話し声で満ちていた。夜市はエリアのバーにいいビジネスで、タイ人と「ファラン」の折衷的な混ざり。彼女は後ろのテーブルの徹を見つけ、彼女を見つけると彼の表情が明るくなった。

「さゆり！　すごいよ！」彼女が近づくと彼は叫んだ。

「ありがとう、徹！　あなたもきれいだわ」彼女は遊び心の調子で答え、彼の向かいの席に滑り込んだ。

彼らは飲み物を注文し、会話は最初簡単に流れた。さゆりは彼の話に笑い、少し前かがみになって親密さの感覚を作った。彼女は空気の緊張が彼女の魅力が魔法を働かせるにつれて移るのを感じた。

「ねえ、徹、私の告白があるわ」さゆりは女優モードに入って言った。

「あ、そう？　面白い。全部教えて」徹は片眉を上げて言った。

「最初、あなたをただのチンピラだと思ったわ。全部筋肉で中身なし。でも今あなたをもっと知って、間違ってたのがわかったわ」さゆりは告白した。

「うん。たくさん聞いわ。教えて、私について何を間違ったの？」徹は好奇心で聞いた。

「まず、あなたは思ったより優しい性格ね」さゆりは彼に最高の笑みを送って言った。

「ありがとう。そして……他は何？」徹は褒め言葉を釣って聞いた。

「ユーモアのセンスがいいわ、ヤクザの執行者から決して予想しなかったわ」彼女は続けた。

「俺が住む世界ではユーモアのセンスが必要だと思うわ。仕事の過程でひどいことをしなきゃいけなかったわ。笑う方法を見つけなかったら、たぶん狂うわ」彼は本気になって言った。

「挑戦的に聞こえるわ」さゆりは共感し、彼女の共感と褒め言葉が彼との絆を深めるのを楽にしているのをわかっていた。

「そうだよ。子供の頃、この人生を想像してなかったわ。パイロットになりたかったわ」徹は開いた。

「本当に？」さゆりは本気で驚いて叫んだ。

「うん。子供の頃、飛行機に情熱があったわ。両親はいつも誕生日モデル飛行機をくれたわ。作ってベッドルームの天井に吊るしてたわ。本当にクールだったわ」彼は思い出し——表情が少し引き締まった。

「じゃあ、何が起きたの？ なぜパイロットにならなかったの？」さゆりは優しく聞いた。

「両親は1995年の神戸地震で亡くなったわ」彼は静かに言った。「学校にいたわ。家を二度と見なかったわ」

「それを聞いてごめんわ」さゆりは本気で言った。

「ありがとう」徹は魂を込めて言った。

「どこに住みに行ったの？」さゆりは探った。

「最初、神戸の叔父と住んだわ。OKだったけど、彼は決して家にいなかった——いつも彼の従兄弟、渡辺良典のためにヤクザの仕事してたわ」

さゆりは良典の名前で驚いた。渡辺良典は渡辺健の叔父で、山口組のトップボスだった。

「彼を知ってるの？」徹はさゆりのショックに気づいて聞いた。

「いいえ」彼女は嘘をついた。「でも話を聞いたわ。彼は強力な男だわ」

「うん、そうだよ」徹は確認した。「また、信じられないほど賢くて賢いわ。彼にたくさん借りてるわ」徹は少し頭を下げて言った。

「なぜ？」さゆりは本物の好奇心で聞いた。

「彼は叔父が俺をよく面倒見てないのを気づくほど鋭くて、高校卒業したら俺に仕事を提供したわ——ヤクザのために働くわ」

さゆりは徹が高校卒業したのを聞いて感心した。彼女は今徹をそんなに急いで判断したのを少し罪悪感を感じ、彼女自身高校に通ってない。

「仕事は何だったの？」さゆりは徹の話に吸い込まれて聞いた。

「ゴーファー」彼はクスクス笑った。

「ゴーファー？」さゆりは疑問に繰り返した。

「うん——これを取ってきて、あれを取ってきて……」彼は説明しようとした。

「まだわからないわ」さゆりは顔にしかめっ面を形成して言った。

「気にしないで。基本的に使い走りだったわ。パイロット訓練を始めるのに十分貯まるまでだけやるって自分に言ったわ。あれは決して起きなかったわ」徹は聞こえるため息をついて言った。

さゆりは徹が彼の人生の道を後悔しているのがわかった——彼女のように。彼女が徹と絆を作るための策として始めたものが、彼との本物のつながりに変わった。二人は子供時代から悪い記憶があり、二人は意図せずヤクザのために働くようになった。それは偽れない絆だった。

「どうやってタイに終わったの？」さゆりは質問を続けた。

徹は瞬間止まった。彼はこれまでの会話の在庫を取っているようで、自分についてもっと明かすのはいい考えか量っていた。最後に、彼は言った、「男を殺したわ」

さゆりはこれにショックを受けなかった。彼女は東京のヤクザの下界で何年も過ごした。悲しいことに、悪いことはいいことより彼女をショックさせなかった。

「もう質問しないわ。認めるのが簡単じゃなかったのがわかるわ。共有してくれてありがとう」彼女は言い、彼の手の上に自分の手を置いた。

徹は恥ずかしそうに見えた。「もうラウンド？」彼は過去から話題を遠ざけて聞いた。

「もちろん」さゆりは微笑み、彼女が徹との進展に満足した。彼女は彼の最も痛い秘密のいくつかを明かした後、徹が今さゆりに深くつながっているのをわかった、まるで二人がヤクザ秘密結社に属するように。圧力を和らげる時間だった。もう個人的な探りなし。明日は別の日で、彼女はリチャードの疑念を起こさないように長く留まらなかった。

徹が二本のビールを持って戻ると、さゆりは言った、「徹、これが私の最後の飲み物よ。今夜まだウェブデザインの仕事があるわ」彼女は嘘をついた。「でもあなたと時間を過ごすのを本当に楽しんだわ。あなたは粗いダイヤモンドだわ」彼女は媚びるように微笑んだ。徹が頬を赤らめているかわからなかったが、彼は恥ずかしそうな笑みを彼女に送り、ただ「ありがとう。私も楽しんだわ」と言った。

彼らはビールを飲み干しながら東京での子供時代の日々について話し、さゆりは彼女もヤクザのつながりがあるのを滑らせないように注意した。

「行かなきゃ」彼女はビールの最後のひと口を飲み干して立ち上がりながら言った。

「今俺を十分知ってるかな、番号をもらうのに」徹は運を試した。

「いいえ、ごめん。誰も私の番号をもらわないわ。個人的じゃないわ。でも心配しないで、週中に絶対電話するわ。そんな魅力的な男にどう抵抗できるの」彼女は徹をフックに保ちながら媚びた。

「君から聞くのを楽しみにしてるわ」彼は少し熱心すぎて言った。

さゆりは彼が寄りかかって彼女にキスしようとすると思ったが、彼は心変わりしたようで、代わりに手を差し出した。さゆりは彼に知ったような視線を送り、手を振って、それから振り向いて去った——彼を振り返って見ない。それだと簡単すぎるわ。魚はフックにかかったけど、辛抱強く巻き取らないと、彼女の魚を失うかも。

第42章

さゆりはいつもの仕事スペース、長椅子に落ち着き、ラップトップを膝に置いてウェブデザインのプロジェクトに集中していた。画面の柔らかい輝きが顔を照らし、彼女はコーディングのリズムに没頭していたが、リチャードの声が集中を破った。

「『ちかてつ』ってどう言うの？」彼は突然、好奇心たっぷりの声で聞いた。

彼女は少し苛立って視線を上げた。「正しく言ったわよ」彼女は仕事に再び集中しようとして答えた。

「とてもセクシーな言葉だと思うわ」リチャードは言い、ベッドから起き上がり、彼女の側へ悠々と歩いてきた。彼の遊び心のある態度が伝染し、彼女は自分でも楽しさを感じた。

「あなたはちかてつよ」彼は低くささやき、かがんで頬に素早いキスを植えた。

「私は地下鉄？」さゆりはジョークを捉えながらも、彼のふざけを奨励したくないと思って反撃した。リチャードの西洋的なユーモアは彼女をしばしば驚かせた。嫌いじゃなかったが、彼のジョークの多くが彼女にはピンと来なかった。でも彼女は彼が日本のユーモアについても同じように感じることを知っていた。先日、Netflixで一緒に見た日本の映画でスタンダップコメディアンが出てきて、彼は字幕がおかしいかジョークが馬鹿げてるかって言っていた。あれが彼女の今の彼のジョークへの反応に影響したのかも彼女は思った。

「いいえ、あなたは地下鉄じゃない。セクシーよ」リチャードは真剣を装って反論した。「でも私はちかてつがセクシーな言葉だと決めたから、あなたを褒める時に使っていわよ」

彼女はもう真剣な顔を保てなくなり、笑みがこぼれた。「わかってるわ、はにー。ジョーク理解したわよ」

リチャードの遊び心のある笑みが広がった。「今たくさんのプロジェクトあるの、べいびー？」

「今は二つだけ。でももうすぐ終わるわ」彼女は英語で少し苦勞し、フレーズに気づいて小さなしかめっ面をした。

リチャードは微笑み、目に愛情が輝いた。彼は彼女の努力を評価し、時々英語の言葉が正しく出ないのをわかっていた。コミュニケーションは、彼の信念では、言葉の裏のメ

ッセージを理解することだと思ったし、時々文法のミスに気にするのは文法ナチだけだと思った。

「もうすぐ終わるの？」彼は長椅子にもたれ、本気で興味を持って聞いた。「それはすごいわ！ 何してるの？」

彼女は画面をジェスチャーし、プロジェクトを引き上げた。「東京のカフェのウェブサイトとフォトグラファーのポートフォリオ。両方もうすぐ終わるわ」彼女は声に誇りを込めて言った。

「忙しい蜂ね！」彼は遊び心でからかい、遊び心のある態度が戻った。

「リラックスしてるように見えるからって、懸命に働いてないわけじゃないわ」彼女は目を転がして反論したが、笑みが楽しさを裏切った。

「私がまだ教えていた時に君が私の生徒の一人だったら、たくさんの金星をあげたわよ」彼は愛情を込めて言った。

さゆりはクスクス笑い、頭を振りながらラップトップに集中を戻した。リチャードのユーモアに時々苛立つにもかかわらず、こんな瞬間が彼女と一緒に過ごす時間を評価させた。彼女は彼が彼女が仕事に没頭する中でも雰囲気をもくもくできる方法が好きだった。リチャードは彼女に投げキスをし、部屋を出ようとした時、彼女は言った、「あ！ 忘れてたわ。来週パタヤに行くかもよ」

リチャードは止まり、振り向いて言った、「本当に？」

「ほんとうに」彼女は気分を軽く保つために意図的に「L」を強調して言った。

「何しに行くの？」彼は真剣に聞いた。

「娘の誕生日よ。彼女はフィリピンへ行く前にタイへ飛んでくるわ」さゆりは正直に答えた。

「娘の誕生日」リチャードはゆっくり繰り返した。さゆりは彼の声に疑いのニュアンスを検知したかわからなかった。

「うん。私に娘がいるって言ったの覚えてる？ 名前はナオミよ」

彼女はリチャードの脳が思い出すためにオーバータイムで働いているのが見えた。

「うん、ナオミ。彼女はSCUBAダイバー？」彼は好奇心を持って聞いた。

「ハハ！ いいええ！ 彼女はダイバーじゃないわ。セブに日本の大学生が休みに英語を勉強に行く大学があるわ」さゆりはクスクス笑って答えた。

「OK。面白いわ。でもなぜフィリピン？」彼は困惑した顔で聞いた。

「日本よりずっと安いわし、私が払わなきゃいけないわ」彼女は事実として言った。

彼女は話す間リチャードが目に見えてリラックスするのを見、彼女が真実を話しているのを彼が気づいたのが明らかになった。

「OK。あれは理にかなってるわ。どれだけいなくなるの？」彼は寂しげに聞いて見た。

「一週間くらいよ。旅に二日、バンコクで買い物に一日、それからジョムティエンビーチで四日」彼女は説明した。

「わかったわ。じゃあ、ナオミと楽しい時間を過ごしてね」彼は言った。彼女は彼が言ったことを本気で思っているのが見えた。それは彼女がリチャードについて本当に好きなことのひとつだった——彼は黄金の心を持っていた。彼は少し風変わりだった、はい、でも彼は本気で他人を気にかけた。そして彼は猫を愛した。

* * *

さゆりは机に座り、思いにふけていた。彼女は来週ナオミとパタヤへの旅行前に「カバミッション」を完了する決意だった。これは未解決のビジネスを片付けるチャンスで、一度それをしたら、タクヤはついに彼女の借りを清算したと考えるだろう。クリーンなスレートが彼女を待っており、その考えが彼女に期待と不安の混ざりを満たした。決定的なクリックで、彼女はLINEメッセージアプリを開き、トルのメッセージを送った。

最後に一緒に過ごした時間をととても楽しんだわ。またやろうよ。

彼女は一瞬ためらい、それから送信を押した。ほとんどすぐに、彼女の電話が彼の熱心な返事でブザーした。

絶対！ 待ちきれないよ！

興奮の感覚を感じ、さゆりは本にラウンジングするリチャードへ振り向いた。「ナオミへのプレゼントを探しにショッピングセンターへ歩いて行くわ」彼女は宣言した。

「OK、べいびー。いいね」リチャードは微笑みで視線を上げて答えた。彼は彼女を完全に信頼していた。彼女はそれに感謝した。

外へ踏み出すと、熱が厚い毛布のように彼女を包んだ。6月のモンスーンシーズンの始まりが春の圧倒的な暑さから少し救済をもたらしたが、日はまだ極めて熱く湿気があった。幸い、毎晩の雨が家を冷やし、寝るのを少し楽にした。

ノンパイの馴染みの景色と音が彼女の周りをブザーし、トルとのランデブーへ歩く間、彼女は毎日の散歩を楽しむ時間を普通取っていたが、彼女の心は迫るミーティングの考えで満ち、楽しむのを不可能にした。

ブッダバーに着き、彼女はドアを押し開き、部屋をスキャンした。そこで彼がいた——トル、後ろ近くのテーブルに座り、彼女が入るのを見つけると広い笑みが顔に広がった。

「やあ、さゆり！」彼は少し熱心すぎて立ち上がりながら呼んだ。彼女は楽しさのフラッターを感じた；彼の迷いはほとんど触れられるようだった。

「ビールを買っておいたよ」彼は彼女の前のチャンビールをジェスチャーしながら興奮が声に通って言った。

「わあ、本当に女の子を扱う方法を知ってるわね」彼女は彼の向かいに座りながら答えた。彼女は彼が再び彼女に会うのをどれだけ本気で喜んでいるかが見え、彼の目は称賛で輝いていた。

トルは少し前かがみになり、彼の熱狂が伝染した。「楽しんでくれるといいわ。最後にチャンを飲んでたのを覚えてるわ」

さゆりは微笑み、冷たいビールを一口飲んだ。「完璧よ。ありがとう、トル」

さゆりはトルが緊張しているのが見えた。彼はおそらく彼女の飲み物の招待がより親密な活動へつながると思うかも知れなかった。すべての男は寝るのを望んで生きていた。

会話に落ち着くと、さゆりは彼がどれだけ迷っているかに気づかずにいられなかった。彼を感じさせる彼の熱心さが魅力的で、一瞬、彼女は注意を楽しむのを許した。彼らは地元の食べ物シーンからお気に入りの映画までについて話し、笑いが彼らのやり取りを強調した。

さゆりはリチャードが心配し始める前に二時間ほど余裕があることをわかっていた。先週、彼女は長い散歩をし、ミスをした。リチャードがどれだけいなくなるかを尋ねた時、彼女は二時間と言った。それは三時間だった。彼は何も言わなかったが、彼女の帰りにベランダでビールを手にとって待っていた、何か彼が前に決してしたことのないことだった。

彼女は彼らが会った最初の週の会話を思い出した、リチャードが南アフリカがどれだけ安全じゃないか、女性が夜に一人で町を歩かないのを話した時。それは彼が彼女の夜間の散策を心配しているのを伝える彼の方法だった。彼女はすぐに帰る時間を設定しないのがベストだと学んだ——それは彼をストレスアウトさせるだけだった。今彼女が家を

出る時に言うのは「また後でね、はにー！」だけだった。でも彼女はそれを乱用しなかった。二時間はリチャードの「ノーパニック」ゾーン内だった。

彼女の楽しみの表面の下に、彼女のミッションの重みが残っていた。会話の方向を正しい方向へ導く時間だった。彼女はカバについての情報を集める必要があり、トルが鍵かも知れない。彼女はビールを飲み、彼が最近の映画を活発に議論するのを見ながら、集中を保つよう自分に思い出させた。これはすべて彼女の計画の一部で、彼女はそれを注意深く航海しなきゃだった。

「ねえ、トル——カバは結婚してるの？」彼女は突然聞き、トルの完全な注意を引きつけた。

トルは視線を上げ、びっくりし、影が顔を横切った。「なぜそれを知りたいの？」彼は好奇心と何か暗いものの混ざった調子で聞いた。

彼女は落ち着いた態度を保って微笑んだ。「倉庫のパーティーを考えてたわ。あの夜彼はとてもスマートに見えたわ。なぜバーの女の子と一緒にいなかったか疑問に思ったわ。だから結婚してるか聞いたわ。会話を作ってるわ」

トルの表情が移り、顎が固くなった。さゆりは彼女が神経を突いたのが見えた。「彼はセクシーだと思うの？」彼は嫉妬が声に刺さって聞いた。

「まあ、彼が筋肉質の体でよく着飾ってるのに気づいたわ」彼女はポーカーフェイスを崩さずに平気で答えた。

「彼は服にたくさんお金を使うわ。日本からオンラインで買うわ。あんなの買えるといいわ」トルは言葉に恨みが忍び込んで呟いた。さゆりはスリルを感じた——彼女は彼のボタンを正しく押した。

「私の質問に答えてなかったわ。彼は結婚してるの？」彼女はカジュアルだが探る調子で促した。トルはためらい、目に見えて感情と格闘した。引き伸ばされたように感じた瞬間後、彼はついに言った、「いいえ、結婚してないわ」

彼女は少し前かがみになり、手が彼の腕に触れ、慰めと誘惑のジェスチャー。「彼についてあまり知らないけど、あなたほど素敵じゃないのは確かよ」彼女は言葉を残し、トルをフックに保つ必要があるのを知っていた。

彼は彼女を見、目に怒りの閃きがまだあったが、下に、彼女は希望の閃きを検知した。彼女が彼らの間に生み出した競争が彼の態度に火花を点けたようで、彼女はこの微妙なゲームで彼女が持つコントロールを楽しんだ。

* * *

さゆりはパタヤへの旅行のスーツケースを詰めながら活気づいた。ナオミとパタヤへ向かうのはとても必要な逃避のように感じた。彼女は朝早くパタヤへ出るだけだったが、すべてを時間内に終わらせるのを自分を信頼していなかった。朝は彼女の得意じゃない。彼女はリチャードがバンコクへのチケットを買うために前日電車駅へ連れて行ったのを感謝した——心配事が一つ減った。

彼女は人生を通じて愛を多くの形で経験し、各恋愛が急速に消えるスリリングなハネムーンフェーズを点火し、次のラッシュを渴望させた。リチャードへの感情が強いように、24/7一緒に暮らす現実が彼女の上に影のように迫っていた。

彼女の心で、永久同居の考えは息苦しかった。一人の人と永遠に一緒にいる考えは刑務所のように感じ、彼女の子供時代のトラウマの現れだった。彼女はしばしば最高の結婚はスペースで繁栄すると考え——両パートナーが自分の人生、仕事、呼吸スペースを持つところ。あのバランスが息苦しい継続的な一緒にいることなしに親密さを許した。彼女は長い間ひきこもりの概念を受け入れ、40歳以上の独身女性にしばしば適用される負け犬と呼ばれるのを全く心配していなかった。彼女はプライバシーを愛した。でも彼女は恋愛のあの至福の初期の日々に男がいるのを楽しんだ。厳格にひきこもりになりたくなく、彼女は妥協を決めた——孤独と恋愛のブレンド。

リチャードがフィリピンにいた時、彼女は大きな家で十分上手くやったが、特に夜に孤独が忍び寄った。枕を抱きしめるのは男の抱擁の温かさを複製できなかった。それは繊細なバランス行為だった。彼女にとって、それはタイムマネジメントに要約された——日中のプライバシー、夜の親密さ。

彼女がスーツケースをジッパーで閉じると、彼女はパタヤから戻ったらリチャードに机をラウンジへ移すよう言うのを心にメモした。日中彼と同じ部屋にいるのは彼女の心の平和にめったに良くなかった。彼女は彼がいるのを好きだったが、彼を常に彼女のスペースに欲しくなかった；冷蔵庫のチョコレートバーのように——選択して楽しめる贅沢なごちそうだが、顔を凝視して欲しくない。

前の夜は予想外に心地よかった。リチャードが夕食にストリートフードを買うのを提案し、彼女の出発前により質の高い時間を一緒に過ごすのを許した。さゆりはジェスチャーを評価し、それは彼らの通常のルーチンからのさわやかな変化だった。彼女は出発前に現在のウェブデザインプロジェクトを終わらせる必要はないけど、本当に試したいと彼に言い、ナオミとより多くの時間を過ごせるように。なので、彼女は一日中長椅子にくっついて過ごし、指がキーボードを飛んだ。リチャードは彼女がコーディングに捧げる時間をどれだけ驚嘆し、いつも彼女のプロセスに好奇心を持っていた。

「べいびー！」リチャードは部屋へ入る直前に呼んだ。

「なにいい？」彼女は苛立ちが調子に忍び込んで答えた。それは長く厳しい一日で、彼女は疲労の重みが彼女を押し下げるのを感じた。

「あなたのウェブサイトのスペルチェックが必要？」リチャードは明るく自発的に提案した。彼は彼女の前のプロジェクトでこれをしたことがあり、彼女は彼のサポートを評価した。

さゆりは止まり、彼をぼんやり見た。彼女はどれだけ疲れ、緊張し、苛立っているか気づいた。彼女は画面と締め切りのプレッシャーから休憩が必要だった。あの瞬間、彼女は代わりにリチャードに集中することを決めた。柔らかい笑みで、彼女は甘くささやいた、「OK。あとで。今あなたと横になりたいわ」

「もちろん！ あなたと横になるのを喜んでよ」リチャードは彼女の態度の変化で表情が明るくなり輝いた。「ただガストーブをオフにするわ。明日あなたの旅行のためにゆで卵を作ってるわ」

彼が部屋を出ると、さゆりは起き上がり、ベッドへ横になりに行った。彼女は深呼吸し、安堵の波が彼女を洗うのを感じた。肩の緊張が緩み始め、彼女は自分を瞬間に存在させるのを許した。何分か後、リチャードは遊び心の笑みを顔に浮かべて戻った、さゆりは背中を上にして目を閉じて横になっていたのを見えなかった。

彼は彼女の側に優しく横になり、シーツの柔らかい音が部屋の静けさをほとんど乱さなかった。彼が優しく意図的な動作で彼女の頭皮をマッサージし始めると、さゆりはストレスが溶けるのを感じた。目を閉じたまま、笑みが唇に忍び寄り、温かさが彼の触れから放射した。

「あなたはそんなに強い手を持ってるわ」彼女は低い落ち着いたメロディーで甘くささやいた。あの感覚が彼女の背中を震えさせ、彼女の中に深く座った欲望を目覚めさせた——愛され、触れられ、誰かの腕で安全を感じる渴望。あの瞬間、彼女は考えた、彼らはただ二人の孤独な旅人で、お互いの腕で慰めを見つける。

「にゃー」彼女は遊び心でまた甘くささやき、目を閉じたまま、瞬間の親密さを楽しんだ。

あの音は彼らの小さな秘密になり、彼らが共有する猫への愛を発見した時に咲いたいちやつきだった。彼女が愛情を感じる時、彼女は大きな茶色い招待的な目で彼を見て柔らかく「にゃー」と甘くささやき、彼女の満足と遊び心のサイン。彼は柔らかくクスクス笑い、指が驚きで一瞬止まり、それから落ち着くリズムを再開した。

「なんて完璧な小さな猫なの」彼はからかい、声は温かく豊かだった。

さゆりは胸に軽いフラッターを感じ、遊び心のやり取りが柔らかい毛布のように彼女を包んだ。彼女は瞬間のシンプルさを楽しんだ、共有の笑いと彼らの間に脈打つ静かなつながり。各優しいストロークで、彼女はより大切にされ、より家にいるように感じた。彼らの小さな世界で、それはただ彼らで、温かさと何かより深いものの約束に包まれた。

第43章

さゆりはバンコク行きの電車に座り、線路の規則的な音が心地よい背景を提供しながら、窓の外を眺めていた。風景がぼやけて過ぎ去り、緑の畑と遠くの山々が混ざり、彼女の中に期待が湧き上がった。彼女は娘のナオミに会うのを楽しみにしていた。ナオミは翌日東京から到着し、数日後フィリピンへ飛び、夏休みに英語を勉強する予定だった。さゆりは彼女と質の高い時間を過ごすのを待ちきれなかった。

ナオミは計画された赤ちゃんじゃなかったが、さゆりは彼女を強く愛していた。彼女はナオミがまともな子供時代を送れるように無数の犠牲を払い、一人で育てる課題を乗り越えた。二人の再会を考えただけで彼女は温かさを感じたが、拓也とのミーティングが迫っていた。

彼女はカバについて話し、人生のその章を閉じ、拓也と決着をつける必要があった。ナオミとパタヤで楽しむ前にこれを片付けるのは不可欠に感じた。ナオミが母親のヤクザとの過去の関わりを知らないのはさゆりに安堵を与えた。彼女は娘をその複雑さから守る決意だった。

電車が走るにつれ、さゆりはスマホにデータをロードするのを忘れたのに気づき、Wi-Fiもなかった。強制的に切断され、彼女は深呼吸し、リラックスした。それは彼女が長い間読むつもりだった村上春樹の『ノルウェイの森』を堪能する珍しい機会だった。彼女は本を開き、電車が目的地へ運ぶ中、散文に没頭した。

数時間経ち、彼女が気づかないうちに電車はバンコクの新しい中央駅、クルン・テープ・アピワットで減速した。さゆりは降り、賑やかなプラットフォームをちらりと見た。駅は現代的で印象的だったが、彼女は古いフアランポーン駅を好んだ。それは魅力と中央の場所があり、街をナビゲートしやすかった。ここからカオサン通り地区のミーティングへ行く考えが彼女に不安を与えた。夕方が落ちるにつれ旅は長く複雑になるだろう。でも軽く旅する——バックパックだけ——のは小さな祝福だった。彼女は負担を感じずにナビゲートできた。

素早く水のボトルを掴む寄り道の後、さゆりは人ごみを通り抜け、階段を下りてMRTへ向かった。最終的に、彼女はカオサン通り地区のトレンドィなスポット、マダム・ムザックバーに着き、屋上ビューを選んだ。階段を登り、彼女は一瞬雰囲気を楽しみ、それから拓也を探した。彼女は彼が手すりにもたれ、リラックスしたが警戒した姿勢で立っているのを見つけした。

「こんにちは」彼女が近づくと挨拶した。

彼は振り向き、顔に笑みが広がった。「さゆり！ 会えてよかった」

挨拶を交換する間、さゆりは先の夜の重みを感じた。このミーティングは重要で、彼女は次に何が来ても直面する準備ができていた。彼女は過去の影を彼女の後ろに残したく強く望んでいた。

「座ろう」拓也はテーブルを示して提案した。

「はい！」さゆりは同意した。

可愛いタイ人のウェイトレスがすぐに現れ、飲み物の注文を取った。二人はチャンビールを注文した。

「ノンパイでの生活はどう？」拓也はスモールトークを無駄にせず聞いた。

「静かよ」さゆりが言っただけだった。

「正志が周りにいないのを不思議に思ってるなら、君が調査してる間低姿勢を保つよう言ったわ」拓也は先取りした。

「まあ、正直そんな気がしてたわ。一度も見かけなかったわ」さゆりは答えた。

「乾杯！」ビールが着くと拓也が乾杯した。

「乾杯！」さゆりは乾杯し、軽く彼女のビール缶を拓也の缶に触れた。

「それで、さゆりちゃん、私にニュースあるの、いいか悪いか？」

「はい！」彼女は微笑みながら肯定した。「私の知る限りで、カバが薬物作戦からお金を抜いてるのを確認できるわ」彼女は言った。

「それはいいニュースだわ。どうやって知ったの？」拓也は探った。

「徹は私に恋してるわ」彼女はクスクス笑った。「彼を酔わせて、彼は私と親密になるのを望んで全部話したわ。彼の心を壊したと思うわ」さゆりは続けた。拓也は眉を上げ、唇の端にニヤリが遊んだ。

「情報を得る方法があるわね？」彼は言って、後ろにもたれ、明らかに楽しんだ。

さゆりは肩をすくめ、顔に遊び心の笑み。「時々勝つためにゲームをプレイしなきゃよね？ 徹は数杯飲んだらかなり魅力的なの」彼女は笑いが声に踊って答えた。

「魅力的？ それともただ必死？」拓也はからかい、目に悪戯がきらめいた。

「両方かも」彼女は返事し、チャンビールを一口飲み、喉を滑り落ちる涼しさを味わった。

「魅力的？ それともただ必死？」拓也はからかい、目に悪戯がきらめいた。

「両方かも」彼女は返事し、チャンビールを一口飲み、喉を滑り落ちる涼しさを味わった。

「それは貴重な情報よ、さゆり。カバが作戦からお金を抜いてるなら、行動しなきゃ。責任は私にあるわ」拓也は本気で言った。「ノンパイに戻るのはいつ？」彼は続けた、さゆりがナオミとパタヤへ数日行くのを知っていた。

「土曜日の夜よ」彼女は答えた。「なぜ聞くの？」彼女は好奇心で聞いた。

「ただ聞いただけよ。君が戻る前にカバを扱う計画を立てなきゃ。土曜日にまた会える？ 駅に行く前に？」拓也は聞いた。

「はい！」彼女は答えた。

「それまでにもっと証拠を集められるか見てみるわ。ただの酔った告白では行動できないわ」彼は返事した。「でも君が言うのが本当なら、すべてを変えるわ」

「拓也……」さゆりは始めた。

「うん？」拓也は聞いた。

「今私たちは決着がついたって言ってよ。お願いしたことをしたわ。この『借金』を永遠に頭の上にぶら下げたくないわ」彼女は言葉で「借金」と言いながらエアークォートをした。

彼は彼女を見て、顔に無表情が広がり、質問を熟考した。一瞬、空気が共有された歴史と負担で濃くなった。それから彼はゆっくり息を吐き、笑みのヒントが忍び寄った。「OK、さゆりちゃん。君のカバーを吹き飛ばさずに君がもっとできるとは思わないわ」

突然、悪戯のきらめきを目に、彼は手のひらに唾を吐き、彼女へ伸ばした。さゆりは眉を上げたが、ニヤリを抑えられなかった。彼女は彼の行動を真似し、自分の手に唾を吐き、彼らは握手した、手のひらがねばねばしたが象徴的だった。

「公式に決着をつけるわ」拓也は顔にニヤリで宣言した。「よくやったわ、さゆりちゃん。ありがとう」彼の視線が彼女のものにロックされ、一瞬、二人の周囲の世界が消えた。

あの共有された沈黙で、さゆりは彼の目の後ろで渦巻く感情の嵐を見た。感謝、苛立ち、そして30年以上にわたって鍛えられた彼らの複雑な絆を示唆する何か深みが踊っていた。二人は状況の犠牲者で、それぞれ選択と後悔の自分の迷路を航海していた。この理解はいつも彼らの間に言葉にされないのに触れられるつながりを作っていた。

「ありがとう、拓也さん」さゆりは誠実に答え、声が柔らかくなった。彼女は彼に知ったような笑みを送り、彼らが運ぶ重みを認識した。「あなたが私にしてくれたすべてを感謝するわ」

「もう少しでさらに感謝するわ」拓也はニヤリし、「君に評価するかも知れないニュースを君から隠してたわ」

「あ、そう？」さゆりは興味をそそられて言った。

「うん。君が私たちの『友達』、ともこを覚えてるのは確かよ？」拓也は続けた、手のひらでエアークォートをした。

「ともこ！」さゆりはショックで吐き出した。「あの女！ 彼女について何？」

「君がこれを聞いたかわからなかったけど、彼女は刑務所にいるわ」拓也はチェシャ猫のように微笑みながら続けた。

「わあ！ どうやって？ 全部教えて」さゆりは興奮して言った。

「彼女が私たち——君と私——への行動に決して結果を被らなかったのが何年も私を悩ませたわ。だからスコアを決着つけることにしたわ」

「何したの？」

「正志に彼女の東京のアパートにヤバを置くよう頼んだわ。彼はビルマネージャーを『説得』して助けさせたわ」拓也は説明し、再び「説得」でエアークォートを使った。

「ヤバって何？」さゆりは混乱して聞いた。

「ごめん、タイに長くいたわ」拓也はクスクス笑った。「メタンフェタミンのことよ。ここではヤバって呼ぶわ」

「わあ！ 何が起きたの？」さゆりは信じられない様子で聞いた。

「まあ、もちろん私が警察に電話したわ。彼女は今東京女子刑務所で7年の刑に服してるわ。あれが彼女に人生でより良い選択をする時間を考えるわ」拓也は喜びで言った。

「それを聞いてどれだけ幸せかわからないわ」さゆりは告白し、突然軽くなった。拓也との借金完全に支払われ、ともこは彼女の行動によりやうやく罰せられた。パタヤでのストレスフリーの一週間になるわ！

拓也の笑みが少し薄れ、彼は彼女の目深くを見て言った、「ただ覚えておいて、私たちはこれで一緒よ、さゆりちゃん。いつもよ」彼は声低く本気で言った。彼らが自分たちの周りに築いた障壁が一瞬ひび割れ、さゆりは未来が何を持っていたとしても、拓也に前進し

て頼れると感じた。彼女は顔き、共有された歴史が彼らをより強く結びつけたのを感じた。

さゆりはまだショックと不信の感覚を感じた。彼らの激しいライバル関係にもかかわらず、ともこは決して深刻な境界を越えなかった。はい、彼女は拓也の傷跡と彼女の妊娠につながった仕掛けを計画したが、さゆりはともこがあの結果を予見できたとは信じなかった。もしくは彼女はしたかも。でもショック以外に、彼女は正当性のちらつきを感じた——彼女はしばしばともこの大胆さと自信に陰を落とされていた。

しかし、青年期にともこへの激しい憎悪の感情を認めたにもかかわらず、さゆりの感情は今懸念へ移った。彼女は彼らのライバル関係の複雑さを振り返り、ともこの状況につながった状況について疑問に思った。彼らの敵意にもかかわらず、彼女は共感のひねりを抑えられず、誰も自分の戦いに直面しているのを認識した。この啓示はさゆりにライバル関係についての自分の価値観と視点を再考させ、強さと回復力の真の意味を振り返らせた。我慢。

さゆりはジョムティエンビーチのホテルでプール脇のガゼボの下に快適に横になり、夏の暖かい陽射しが上方の屋根のスラットを通して濾過されていた。水しぶきと笑い声が空気を満たし、彼女はラップトップで最後の二つのウェブデザインプロジェクトを勤勉に働きながら聞いた。彼女はプールでナオミを見え、明るいビーチボールで元気に遊ぶ彼女の笑いがさゆりにプレッシャーにもかかわらず微笑ませた。

ドイツアクセントで話すハンサムなティーンエイジャーがナオミの近くにうろつき、東洋の水の精を目から離せなかった。20歳のナオミは母親より少し背が高く、さゆりはそれが遺伝で、ナオミの父親からだと思っていたが、彼女は彼について話すのを避けた。ナオミはまだ父親が誰かわからなかった。さゆりはナオミが彼女の美貌を遺伝したのを喜んだ。彼女の父親はラジオ向きの顔だった。

「ママ、何時に終わるの？」ナオミの声が陽気で軽く呼んだ。

「あと二時間よ、ナオミちゃん。それから全部あなたよ！」さゆりはラップトップから上げて見て答えた。娘を見ながら温かさが彼女を通り抜け、彼女は人生と喜びに満ちた彼女の娘がとても生き生きしているのを見て心が軽くなった。

コーディングから素早い精神的な休憩を取ることに決め、さゆりは後ろにもたれ、単に観察するのを許した。ナオミが水に飛び込むのを見、太陽の下で輝く彼女の漆黒の髪が彼らの一緒に過ごした旅の思い出を呼び起こした。一人でナオミを育てるのは長く厳しい道で、あの年の重みが彼女の心に軽く落ち着いた。

彼女は東京を離れた日を思い出した、絶望と必要性から生まれた決定。街は危険すぎになり、彼女は逃げる必要があった。あの日、彼女はナオミを妊娠したばかりで、彼女の中に育つ命が新しい始まりへ導くことになる。彼女はナオミに父親が誰か決して話さなかったし、質問はナオミが10歳の時に一度だけ来、さゆりは彼女の沈黙の重みを感じたが、娘を痛く複雑な過去から守るために質問を巧みに逸らした。

南房総での彼らの生活は比較的普通で、さゆりは12年ラーメン店で働き、7年もの長い間セックスを避けた。彼女はナオミがまともな育ちを送れるように犠牲を払い、最終的にナオミがいい中学校へ通えるように横浜へ移った。さゆりはナオミが学校で優秀だったのを誇りに思い、その誇りはシングルペアレントの子供としてナオミが直面した課題を知って悲しみで染まった。

日本でシングルペアレントの家から来るのは珍しく、ナオミは横浜のインターナショナルボーディングスクールでからかわれに耐えた。さゆりはナオミが学校のいじめっ子の一人にクラシックないたずら——椅子引き——をした後だけこの不幸な真実を発見し、それが彼女を校長室へ導いた。あれがさゆりが初めていじめを知った時で、彼女の心は娘のために痛み、ともこと直面した自分の課題を思い出した。

でもナオミはさゆり自身のものを鏡像したストイシズムでそれすべてに直面した。彼女は我慢の概念を受け入れ、静かな強さで苦難に耐えた。さゆりは彼女の回復力を賞賛し、彼女を世界のすべての痛みから守りたいと願ったが、人生の課題が成長の一部だと知っていた。水に飛び込むナオミのスプラッシュを見ながら、さゆりは感謝の波を感じた。苦闘にもかかわらず、彼らは愛と笑いに満ちた人生を築いた。彼女はプロジェクトを完了したら完全にナオミに時間を捧げるのを自分に約束した——二人のための報酬。

「ママ！ 私に加わって！」ナオミの声がさゆりを思いから破り呼んだ。

「少しでいくわ！ あと少し仕事よ、OK？」さゆりは呼び返し、後で一緒に泳ぐ考えで心が軽くなった。更新された決意で、さゆりはラップトップに戻り、タスクに集中した。彼女はほとんど終わり、二人はプールで一緒に楽しむのを想像できた——母親と娘、過去の負担から自由に、太陽の下でついに彼らの時間を楽しむ。

第44章

さゆりはバンコク空港の賑やかなターミナルに立っていた。旅行者の活発なエネルギーが興奮と不安の渦を作り出しながら、彼女の周りを駆け巡っていた。彼女とナオミは朝をMBKモールでショッピングに費やし、ナオミのすでに詰まったバッグに収まる夏服を慎重に選んだ。各アイテムは目的を持って選ばれ、手荷物の重量制限を超えないようにした。今、時計が進むにつれ、さゆりはその日の重みを彼女に押しつぶされるように感じた。

ナオミはフィリピンのセブへ飛ぶところだったし、さゆりは娘の冒険的な精神と勉強へのコミットメントを誇りに思っていた。しかし、セキュリティチェックポイントに近づくにつれ、悲しみの痛みが彼女を襲った。別れは決して簡単じゃなく、特に一緒に過ごした素敵な日々の後では。

「お母さん、すぐ会えるよ！」ナオミは明るく言い、声に少し緊張が混じりながら制限エリアへ導くエスカレーターに近づいた。

「はい！」さゆりは答え、胸の締めつけにもかかわらず笑みを強いた。「楽しんで！」

ナオミは頷き、目が興奮で輝いたが、さゆりは彼女の熱狂の下の不本意を見た。二人は瞬間を共有し、二人の間で迫る別れを鋭く意識した。エスカレーターの入り口でタイのセキュリティオフィシャルが忍耐強く待っていた、さゆりとナオミが別れを言った。さゆりは寄りかかり、ナオミの頬にキスをした。

「安全な旅を、ナオミちゃん。あなたのことを考えてるわ」

「私もよ」ナオミは微笑み、彼女のパスポートと搭乗券をエスカレーターへのアクセスをブロックする忍耐強い女性に渡した。ナオミがエスカレーターに踏み出そうとした瞬間、さゆりは素早くポケットに手を入れ、スニッカーズバーのサプライズを引き出した。

「待って！　これ！」彼女は呼びかけ、声が明るくなった。ナオミは振り向き、表情が不安から喜びに変わった。「お母さん！　私の大好きなの買ってくれた！」

「もちろん！　これが私たちのものだわ」さゆりは言い、それを貴重なトークンのように差し出した。

二人はクスクス笑い、彼らの伝統の馴染みの快適さが瞬間の悲しみを和らげた。スニッカーズは彼らの言葉にされない愛のサインになり、言葉が時々足りない時に愛情を伝える甘いお菓子だった。

「ありがとう、お母さん！ 後でこれ食べるわ」ナオミは言い、キャンディを取って広い笑みを浮かべた。「愛してる！」

「私も愛してるわ、ナオミちゃん！ 旅を楽しんで、できる時に電話して！」さゆりは呼びかけ、娘がセキュリティエリアへ消えるのを見た。さゆりは誇りと切なさの混ざりを感じた。

彼女はリチャードを思って予想より恋しく思っていた。再び彼の強い腕に横になる考えが心地よい期待だった。彼はナオミとの時間中とても思いやりがあり、チェックインのための毎日のテキストだけを送り、彼女が気を散らさずに一緒に過ごすのを許した。

深呼吸して、さゆりはエスカレーターから振り向き、自分を次のタスクに集中するよう強いた。彼女はまだ拓也と会い、ノンパイへ戻る夜行列車に乗る前に。

さゆりはバーの屋上の手すりにもたれ、夕方のそよ風が髪を乱しながら、バンコクのきらめくスカイラインを眺めていた。彼女は電話の時間を見た。午後4時で、太陽は地平線に向かって沈み、明るいオレンジに変わり、空気汚染が色フィルターのよう働き、街に赤みがかった輝きを投げかけていた。でも彼女の中では嵐が醸成されていた。彼女は空港でナオミを見送ったばかりで、誇りと脆弱さの両方を彼女に残す苦甘い別れだった。

今、彼女は拓也と一緒にいて、彼が取った決定に苦闘し、それが彼女を不快にさせた。拓也はカバに関する次のステップを考えるために数日を取ったし、今彼はノンパイへの夜行列車に彼女と一緒に乗ることを決めた。彼の決定は彼女を通り抜けるパニックの衝撃を送った。彼女は平静の仮面を保とうとして強いた笑みを浮かべたが、心臓は表面の下で競った。

「拓也、これが本当にいいアイデアだと思う？」彼女は声が安定しているが懸念が混じりながら聞いた。

彼は彼女へ振り向き、眉を上げた。「なぜダメ？ これを解決しなきゃ。わかるだろ」

さゆりの脳が爆発した。彼女は拓也にノンパイでリチャードと一緒に住んでいるのを決して明かしていなかったし、そうするつもりもなかった。彼女が住む二つの世界は繊細なバランスのように感じ、それらが衝突する考えが彼女に恐怖を満たした。彼女は過去の影から自由な人生を懸命に築き、拓也の存在がそれを危うくするのを許すつもりじゃなかった。

「ただ……複雑にさせたくないわ」彼女は答え、声が今より柔らかく、ほとんど懇願した。

「複雑に？ さゆり、これは大事だわ。カバを野放しにできない」彼は寄りかかりながら主張し、彼の激しさが触れられるようだった。

苛立ちの波が彼女を通り抜けた。「それが意味じゃなくって」彼女は頭を振りながら言った。「ノンパイで男と一緒に住んでるわ。彼の名前はリチャード。今のボーイフレンドだって言えるわ。彼が私があなたと一緒に旅行してるのを知ったらどうなる？ 彼は私を信頼してるわ、拓也。でもこれ……これがその信頼の限界を押しちゃうかも」

拓也は軽く嘲笑し、懸念を払った。「彼が私が誰かわかると思うの？」

さゆりの心が沈んだ。「彼は知る必要ないわ。彼に過去を隠してるのは理由があるわ」彼女は視線を逸らし、秘密の重みが彼女に押しつぶされた。リチャードはいい男で、彼女はヤクザのつながりを発見したら厳しく彼女を判断するのを恐れた。それは彼女が誇りに思わない人生の一部で、彼女はその世界に彼をさらしたくなかった。

彼女はリチャードの早いテキストを意図的に無視した、シンプルな「こんにちはべいびー」。関わらないのがより安全に感じた、質問や懸念を招待しない。でも今、罪悪感が彼女を蝕んだ。彼が何かおかしいと感じたら？ 彼女がヤクザボスと一緒に旅行してるのを発見したら？ その考え自体が彼女の胃をひっくり返した。さゆりは深呼吸し、上昇するパニックを落ち着かせた。「拓也、わかって。お願い。これのためにリチャードとの人生を危うくしたくないわ。私たちの世界を別々に保たなきゃ」

「さゆり」拓也は言い、調子が少し柔らかくなった。「本当に何が起きると思うの？ ただの電車乗りだわ。私たちは慎重に扱い、それからあなたは彼との人生へ戻れるわ」

でもそれに安心はなかった。拓也の存在は彼女の慎重に構築した仮面のひび割れのように感じ、リチャードにそのどれかをさらしたくなかった。

「拓也、再考して。お願い。私は私が築いたものを守る必要があるわ」

彼はため息をつき、表情が固くなった。「これなしでこれをできないわ、さゆり。私を助けられるのはあなたただけだわ」

さゆりは彼女の中の嵐が激しくなるのを感じ、彼女の過去への忠誠とリチャードとの脆弱な未来の間で引き裂かれた。街を見下ろしながら、彼女の競う思考のようにきらめく活気ある光、彼女は交差点にいることに気づいた。すべてを変えられる選択をしなきゃ。ちょうどその時、彼女の電話がピンと鳴き——リチャードからのもう一つのテキストだった。

こんにちはべいびー。あなたは大丈夫？ あなたはまだノンパイへ夜行列車で来るの？

「クソ！」彼女はリチャードのテキストを読んで自分に思った。

さゆりは苛立ちと不安の混ざりで電話を凝視した。リチャードのテキストは着実に来ていて、各一つが最後のより強い、彼女が大丈夫か聞く。でも彼女はリチャードにすべてを伝えるのを自分に持ち込めなかった；彼女の心は拓也の考えに消費され、彼はノンパイへの夜行列車に彼女と一緒に乗るのを決めた。彼女は嘘をつくの嫌だったが、詳細の省略が彼女の唯一の選択のように感じた。数分の熟考後、彼女はようやく応答をタイプした、

一時間で駅へ行くわ。それは少なくとも部分的に真実だった。

二時間後、彼女はバンコクの中央駅にいた、周囲の賑やかな雰囲気は彼女の心の乱れと対比した。拓也は彼女の隣に立ち、電車のスケジュールをチェックし、彼女が安堵のため息を吐こうとした瞬間、彼女の電話がまたブザーした。それはリチャードだった、

こんにちはべいびー。チケット買ったの？

彼女は彼が彼女のチケット購入へのラストミニットアプローチを知り、ただ思い出させたいと思ったのを知っていた——ただの場合。

こんにちははにー。はい、チケットあるわ、彼女は返信し、再び彼女が一人じゃない事実を無視した。

夕方が進むにつれ、彼女は彼らの毎晩のリチュアルの馴染みの温かさが彼女の心を引っ張るのを感じた。リチャードはいつも思いやりがあり、特にフィリピンと南アフリカにいる間。午後10時頃、彼女の電話がまた照らされた、

OK、素晴らしい！ 安全な旅。朝に会おう。おやすみ。

OK。明日会おう。おやすみ、彼女はテキストし、胃の罪悪感を無視しようとした。

30分後、パニックが稲妻のように彼女を襲った。彼女はリチャードに駅へ迎えに来ないよう言うのを忘れていた！ 心臓を競らせ、彼女は素早くタイプした、

こんにちは。明日駅へ来なくていいわ。トゥクトゥク取るわ。

彼女が送信を押した瞬間、彼女は彼女の上に恐れが洗うのを感じた。リチャードの応答は即時だった——

なぜ？ あなたはバックパックだけよ。スクーターの後ろに飛び乗れるわ。問題ないわ。

彼女の心がスピンし始めた。彼女が望む最後のものは彼を心配させることだった。明瞭さの瞬間で、彼女は少なくとも部分的に真実を伝えることを決めた、

一人で旅行してないわ。私たちはトゥクトゥク取るわ。大丈夫よ。

応答は素早いもので疑いで満ちていた、

誰と旅行してるの？

日本人男性よ、彼女はテキストし、彼女が缶の虫を開けたことに気づきながら心が沈んだ。

あ！　そしてこの日本人男性は誰？　名前あるの？　リチャードの調子が変わり、彼女はスクリーンを通してひび割れる緊張を感じた。

拓也よ、彼女は返信し、これがさらに質問につながるだけだと知っていた。

そしてこの男との関係は何？　リチャードは聞き、彼の嫉妬が言葉を通して滲み出ていた。

さゆりは瞬間の重みを彼女の肩に重く感じた。彼女はいつも正直を重視したが、リチャードの反応の恐れがより大きく迫った。深呼吸して、彼女は返信した、

彼はただの友達よ、リチャード。約束するわ。

でも彼女は「ただ」が彼女が必要とする真実の重みを運ばないことを知っていた。続いた沈黙は永遠のように感じ、各時計のチックが彼女の不安を増幅し、リチャードの応答を待った。

電話していい？　一分後応答が来た。

それはおそらく彼が聞ける最悪のことだった。

いいえ。私は拓也のホットスポットを使ってるわ。プライベートな場所へ行けないわ、さゆりは説明し、自分自身でも疑わしく聞こえるのを知っていた。

まあ、彼がただの友達なら、彼の前で話すのに問題ないはずだわ、リチャードは主張した。

いいえ。電車で他の人もたくさんいるわ。失礼よ、それに私たちはおそらく口論するわ。それをしないわ、さゆりはテキストした。

OK。ただなぜ彼がノンカイに来てるのか、彼はどこに泊まるのか教えて？　私たちと？

彼はノンカイに友達がいるわ。私たちと泊まらないわ、さゆりはテキストした。

OK、べいびー。よく寝て。すぐ会おう。

おやすみはに一。明日会おう。

さゆりは深呼吸し、彼女の中に落ち着いた不安を振り払おうとした。リチャードにテキストするのは小さな安堵のように感じたが、彼女の心は彼女が夜行列車の寝台車の上のバンクナンバー45に横になるにつれてスピンし始めた。彼女はリチャードの立場に自分を置いた——彼のガールフレンドは一週間離れていて、今彼女は他の男——しかも日本人男性——と一緒に戻っている。

彼女はほとんど彼がソファに座り、眉をひそめ、彼らの最後の会話を再生するのを見えた。あの考えが彼女の心を痛めた。彼はおそらく疑念と格闘し、彼女を信頼できるか疑問に思っているわ。結局、彼女は今まで拓也について言及していなかった。なぜ彼女が日本からの男とノンパイへ来るの？ 小さな町は親密に感じ、さゆりはリチャードがそこで日本人の男が友達を持つのがどれだけありそうにないかを考えているのを想像した。

彼女が状況を分析するにつれ、彼女の話はより疑わしく聞こえ始めた。彼女はリチャードの不安のエコーを彼女の心で聞いた。なぜ彼女はこれをより慎重に考えなかったの？ 彼女は彼が歩き回り、彼女の不在と拓也との突然の友情のパズルを組み合わせようとするのを想像した。

リチャードが駅に着く考えが彼女に恐れを満たした。彼女が望む最後のものは彼が筋肉を緊張させて「彼の所有物」を守る準備で現れることだった。対決の考えが彼女をひるませた；彼女は喧嘩とドラマを嫌った。彼女は明瞭さと落ち着きを好み、嫉妬がしばしば伴う混沌じゃなかった。各経過する瞬間で、電車の到着は差し迫りながらも遠く感じた。彼女は電話の時計をちらりと見て、時間がより速く動くのを願った。すぐ、彼女はリチャードの顔を見ることになり、彼女はその上で遊ぶ感情の無数を直面する準備をした。彼は怒る？ 傷つく？ 混乱する？

さゆりは頭を振り、渦巻く思考を払った。彼女は現在に焦点を当て、先に何があるかにしなкゃ。どんなことが起きても、彼女はそれに直面しなкゃ。彼女は最善を望みながら最悪に備えた。あと数時間で彼女は家で待つ現実を対峙しなкゃ、どんなに複雑かも。

電車は時間通りに着き、ブレーキが優しく止まるにつれきしむ音がした。ドアがヒス音で滑り開き、乗客の安定した流れを解放し、プラットフォームへ注ぎ込んだ。一部は目的意識で現れ、他の人は荷物を集めるために止まった。

さゆりと拓也が電車から降りると、さゆりはリチャードの兆候を不安にプラットフォームをスキャンした。群衆は彼女が予想したより厚く、人を見分けるのを不可能にした。人々が駆け巡り、声が興奮と緊急の混沌に溶け込み、町ヘトゥクトゥクを取ったり友情橋へ急いだり。

エネルギーは触れられるよう；スーツケースの輪がコンクリートにガタガタ音を立て、喜びの再会が空気にエコーした。さゆりの心は彼らの早い会話の緊張がまだ残るリチャードの考えで満ちていた。彼女はジョリーンの家の隣のキャット・ミーB&Bヘトゥクトゥクを取るよう彼に言っていた、彼女たちが会った日の同じ場所。

彼女は多くの待つトゥクトゥクの一つに後ろへ登り、バックパックが膝に重く休んだ。拓也は彼女の反対に落ち着き、バッグをカジュアルに調整し、さゆりの上昇する不安と対比するように見えた。ドライバーが縁石から離れようとした前に、彼女は動きの渦に気づき、リチャードの巨体が群衆から現れ、表情が決意と懸念の混ざりだった。それは彼女を完全に驚かせた瞬間だった。さゆりの息が喉に詰まった。リチャードは周りを見回し、顔をスキャンし、それから彼女と目をロックした。

「さゆり！」彼は叫び、声が騒音を切り抜けた。

パニックが彼女を通り抜けた。彼女はこの瞬間を準備していなかった、たとえリチャードが駅に来る細いチャンスがあるのをわかっていたとしても。さゆりは言葉に詰まり、どう彼に挨拶するか確かじゃなく、拓也の存在が彼女の当惑を増幅する沈黙の重みだった。

リチャードはトゥクトゥクへ歩き、眉をひそめて疑念で。「家へ行く準備できた？」彼は聞き、視線が今彼女に固定された。「スクーターで連れて行けるわ」

「いいえ」さゆりは素早く答え、声が彼女が意図したより鋭かった。彼女は拓也の目が彼女にあり、ヒントを探しているのを感じたが、彼女が考えられるすべては真実からリチャードを守る方法だった。リチャードの表情が暗くなり、混乱がより深い疑念へ変わった。彼は拓也をちらりと見て、さゆりの反対にカジュアルに座っていた、彼の顔は読めない。

苛立ちのため息をつき、リチャードは振り向き、顎が固くなった。「いいわ。後で会おう」彼は素っ気なく言い、振り向き、素早くスクーターへ歩き、馴染みの光景がさゆりの心を痛めた。彼女は彼に呼びかけたかった、説明したかったが、言葉を見つけられなかった。リチャードがエンジンを回すのを見、彼女は後悔の波が彼女を洗うのを感じた。彼女は彼が去るのを見、埃が彼の後ろに落ち着き、彼女を拓也と彼女の選択の重みと一緒に残した。

「これらの世界を混ぜるのは複雑になるわ」拓也は表情なしで言った。さゆりは何も言わなかった。彼女の心がスピンしていた。彼女が忠実な女で拓也がただの友達だとリチャードを信じさせる方法ある？

彼女は先に道路を見、決定の重みで心が重かった。彼女の過去と現在の線が危険にぼやけ、彼女は彼女の周りの緊張が締まるのを感じた。彼女がリチャードと築いたものを守るだけ望んだが、今、すべてが解けているように感じた。

キャット・ミーヘトゥクトゥク乗りはさゆりにとって神経をすり減らすものだった。小さな車両の緊張は触れられるようだった。拓也が泊まるB&Bへ近づくにつれ、彼女は空気に掛かる言葉にされない質問の緊張を感じた。トゥクトゥクが控えめなゲストハウスの車道外で止まると、さゆりは最初に飛び降り、パニックの波が彼女を洗うのを感じた。彼女はリチャードをなだめなきゃ、彼は当然彼女の拓也との関係について疑っているわ。時間を無駄にできない。

「拓也、レセプションにあなたと一緒にいけないわ。本当にリチャードと話さなきゃ。彼があまり疑わしくなる前に。大丈夫？」彼女は声が緊急と懸念のブレンドで言った。

拓也は軽くクスクス笑い、頭を振った。「さゆりちゃん、私は老人だわ。自分でチェックインできるのは確かだわ。行ってしなきゃいけないことをして。私は君の番号持っているわ」彼は返事し、調子が安心させた。

「OK、ありがとう」さゆりは言い、彼女は頷きながら安堵が彼女を洪水のようにした。

「じゃあね」拓也は彼女に小さな手を振りながら言った。

「じゃあね」彼女はエコーし、彼女の心が重いながら彼がトゥクトゥクから降りるのを見た。

拓也が見えなくなるとすぐに、さゆりはジョリーンの家への最短ルートを取った——建設現場の隣の狭い路地。彼女は足場を通して彼女の脈を速くし、リチャードがあまり疑わしくなる前に彼のところへ着く緊急さでナビゲートした。

一番近い隣人を収容する小さな波形鉄の小屋を通り過ぎ、彼女はそこで住む三人の老タイ女性の一人が木の切り株に座り、指で粘り気のあるご飯を食べているのに気づいた。彼らはコミュニティの固定物で、彼らの人生が近所の布地に織り込まれていた。彼女はタイの老化寡婦をサポートする努力について読んだのを思い出し、彼らに共感の痛みを感じた。三人の一番若いのが毎日夜明けに起きてボクシングロードへ自転車で空のビール瓶をリサイクルに集め、なんとか生活を成り立たせていた。

さゆりは彼らの回復力を賞賛した；彼らは静かな強さで苦難に耐える我慢の精神を体現していた。ついにジョリーンの家の裏口へ着き、彼女はためらい、リチャードが彼女を待っているのを望んで正面へ回ることを選んだ。

「こんにちは！」

予期せぬ挨拶にびっくりし、さゆりは回り、リチャードが彼女へ歩き、近づくにつれ笑みが顔に広がるのを見た。

「裏口から入りなよ、べいびー」彼は優しく言い、声が温かく招待的だった。「ここよ、バックバック取るわ」彼は伸ばし、彼女の肩から重いバッグを楽に取った。

さゆりはそこで立っていた、感情のラッシュを感じ、言葉に詰まった。彼女はそんなに脆弱に感じるのに慣れていなく、ヘッドライトに捕まった鹿のように言葉を失っていた。リチャードの存在は落ち着いていたが、それは彼女の不安を高めた。どう状況を説明するの？

「リチャード、私は——」彼女は始めたが、言葉が喉に詰まった。

「やあ、大丈夫よ。少し揺れて見えるわ。大丈夫？」彼は懸念が目にちらついて聞いた。

彼女は頷き、平静を取り戻そうとした。「私は大丈夫よ。ただ少し圧倒されただけ。ここにいるのを予想してなかったわ」

「うん、離れていられなかったわ。電車の後で大丈夫か確かめたかったわ。トゥクトゥクが着くのを待って道路向かいの公園にいたわ」彼は言い、調子が柔らかくなった。「中で話そうよ、OK？」

裏口を通過してキッチンへ入ると、さゆりはどれだけリチャードに明かすか心を落ち着かせて考えた。彼女はリチャードに正直になりたかったが、拓也と過去についての真実は彼女が彼とのすべてを危うくせずに横断できない峡谷のように感じた。彼女は深呼吸し、来る会話に自分を固め、リチャードの信頼を失わずにこの繊細な状況を航海できるのを望んだ。

でも彼女が予想していた対決は決して来なかった。リチャードはもう拓也へ突進する準備の猛牛のように見えなかった。さゆりが謎めいた「日本人男性」と一緒に旅行しているのを学んだ初期のショック後、彼の気分は柔らかくなり、今彼はより落ち着いて見えた。さゆりは気分変化の突然さを全く理解できなかったが、彼女の上に安堵の波が洗った。

「バックパック取るわ」リチャードは彼女がちょうど置いたバッグを掴むために動いて優しく言った。彼は寝室へ向かい、付け加えた、「コーヒー欲しい、べいびー？」

「今はいらないわ」さゆりは即座に答え、調子が固かった。「本当にシャワー必要！」

彼女は脱ぎ始め、瞬間の温かさとリチャードのスペースに戻る快適さを感じた。リチャードの最も愛すべき性質の一つは彼女のプライバシーを尊重することだった。ほとんどの男は彼女が脱ぐのを見て留まっただろうが、リチャードは彼女の不快を理解した。彼は背を向け、彼女が必要とするスペースを与えるために部屋から出た。さゆりは素敵な涼しいシャワーを楽しみ、水がその日の緊張を洗い流すのを許した。それはさわやかで、彼女が出てタオルを巻くと、更新の感覚を感じた。今はリチャードが彼女が忠実なパートナーだと信じさせる時間だった、たとえ彼女がそのラベルを嫌い、自分を彼の「現在のパートナー」と考えるのを好んだとしても。

メインエリアへ戻ると、彼女はリチャードがソファに座り、コーヒーをすすりながらロシア/ウクライナ戦争のBBCニュースレポートを見ているのを発見した。ニュースは重かったが、彼女はより軽く感じ、より明るい気分へシフトする準備ができていた。言葉を言わずに、さゆりは彼の後ろへつま先立ちで上がり、遊び心の精神が表面に泡立った。彼女はソファの後ろへアヒル歩きし、彼のハゲ斑に素早いキスを植えた、彼女がいたずらな気分をシグナルする悪戯なジェスチャー。リチャードは彼女へ振り向き、目に驚きがちらついたが、すぐに知ったような笑みに置き換わった。

「あ、本当に？」彼は楽しさが声で踊って言った。彼はマグを置き、立ち上がり、激しさが彼らを彼女の心を速くさせた視線でロックした。

「ここに来て」彼は低く招待的に言い、彼女へ一歩踏み出した。さゆりはニヤリを抑えられず、彼らの間の馴染みの火花を感じた。彼女は振り向き、寝室へ導き、興奮で心臓を鳴らした。

部屋へ入ると、彼女は落ち着きの毛布が彼女を覆うのを感じた。あの瞬間、彼女の人生の混沌が消え、すべて重要だったのは彼らが共有するつながりだけだった。リチャードは近くに続き、彼の存在は過去の重みと秘密から自由である——たとえ少しの間でも——場所であるのを思い出させる快適なものだった。

さゆりは頭をリチャードの胸に置き、まだ彼らの親密な出会いから紅潮し、安堵を感じた。リチャードをなだめる戦略は少なくとも今は働いた。彼女は彼の心拍の安定したリズムを聞き、それがもたらす安心に感謝したが、彼女の心の後ろで、拓也についての不快な質問がすぐに起きる期待を振り払えなかった。

「ナオミとの時間はどうだった、べいびー？」リチャードは低く温かい声で聞き、快適な沈黙を破った。

「素晴らしかったわ。プロジェクトを素早く終わらせたから一緒に過ごす時間がたくさんあったわ」さゆりは娘を思い浮かべて顔に笑みが広がって答えた。

「素晴らしい。あなたたち女の子は何したの？」リチャードは本気で興味を持って促した。

「ほとんど泳いだわ。海で泳ごうとしたけど、パタヤの水はプーケットみたいにきれいじゃないわ。だからプールでより多くの時間を過ごしたわ」彼女は軽い調子で説明した。

「サンオイル使ったの？　あまり日焼けしてないように見えるわ」リチャードは懸念が明らかになって聞いた。

「あ、はい！　サンオイルたくさん使わなきゃ。私の肌は日光にとっても敏感よ」さゆりは強調して言い、声に少し誇り。「そして市場で買ってくれた日よけ帽子で泳いだわ」彼女はショッピング中に共有した遊び心の瞬間を思い出しながらクスクス笑った。

「だからあなたの肌は柔らかいわ」リチャードは褒め、優しく指を彼女の腕に下ろし、彼女から喜びの震えを引き出した。

「はい！」彼女は考えずに日本語へ戻って答え、言語の馴染みが彼女を慰めた。

「寝る必要ある、べいびー？」リチャードは懸念が声に混じって聞いた。

「いいえ、大丈夫よ。数回起きたけど、十分寝たと思うわ」さゆりは彼の思いやりを評価して彼を安心させた。

「夕食の食べ物を買に行こうか？」彼は少し起き上がりながら申し出、去る準備のように。

「いいえ、後でロータスへ歩いて行くわ。一週間怠惰だったわ」彼女は生産性の欠如に少し罪悪感を感じて答えた。

「OK、べいびー。あなたが欲しいなら料理できるわ」リチャードはカジュアルに提案した。

「いいえ、あなたのために今夜特別な日本料理を作るわ。あなたは作り方知らないわ」彼女は笑い、彼女が連続で「いいえ」のハットトリックを産んだことに気づいた。

リチャードはクスクス笑い、目に悪戯が輝いた。「あなたが私にノーと言うのに慣れてないわ」彼は眉を上げて冗談を言った。

さゆりはクスクス笑い、空気に軽さが感じた。「もしかしてただよりアサーティブになってるだけかも」彼女はからかい返し、心が彼への愛情で膨らんだ。

「アサーティブ、へ？ それ好きだわ」リチャードはニヤリして言った。「でも本当に、あなたはすべて自分でなくていいわ。喜んで助けるわ」

彼女は彼を見上げ、表情が柔らかくなった。「知ってるわ、それ評価するわ。でも料理は私が大好きなこと、特にあなたのために」

「じゃあ、それを楽しみにしてるわ。ただ今日は楽にね」彼は優しい声で答えた。

「はい！」彼女は言い、寄りかかり、彼の胸に柔らかいキスを植え、瞬間への感謝を感じた。でも、拓也についての苛立つ考えが彼女の心の後ろで残り、影のように彼女の上に迫っていた。ただ今、少しの間、彼女はより長い間不確実さを脇に押しやるのを許した。

第45章

さゆりは枕にもたれて横になり、平和の瞬間を楽しんでいたところに、電話のピンという音が沈黙を破った。彼女はそれに手を伸ばし、拓也からのメッセージを見て、胃に不安のざわめきを感じた。ノンパイに彼と一緒に戻ってから二日経ち、これが彼が連絡してきた二度目だった。

さゆりちゃん。話す必要がある。できる時に電話して。

彼女の心臓が鳴った。拓也はキャット・ミーB&Bで最初の夜だけ過ごし、よりいい場所へ移ったが、それは驚きじゃなかった。ノンパイは観光地じゃなく、宿泊施設は限られていた。キャット・ミーは十分心地よかったが、どんな意味でも豪華じゃなかった。

彼女のように、拓也はプライバシーを重視し、他のヤクザメンバー——ビーフの父親の関勝のような——と一緒に泊まる選択肢があったが、孤独を好んだ。それは彼に距離を保つ感覚を許し、他の人が馴れ馴れしくなるのを防いだ。タイのヤクザのボスとして、彼の孤立は彼の地位に伴う敬意を維持するために不可欠だった。

さゆりは彼がどこに泊まってるか聞くのを避けた方がいいと知っていた。それは繊細な話題で、探るのは彼女が対処したくない複雑さを招くかも。返信をシンプルで要点だけに保つのが最も安全に感じた。

OK。いつどこで？ 彼女はタイプし、二度考えずに送信を押した。

ビヨンド・カフェ、午後6時、という素早い返事。

OK。そこで会おう、さゆりは同意し、送信を押すと胃が締まった。

じゃあね、拓也が返事した。

彼女は電話を置き、心が考えで競った。拓也は何を話したいの？ 彼女はそれがリチャードとの関係に関わらないのを望んだが、そうじゃないかもという感覚を振り払えなかった。彼女の二重生活の重みが彼女を押しつけ、拓也についてのもう一つの会話に航海する考えが彼女を不安にした。時計をちらりと見て、彼女はミーティングまで数時間あるのに気づいた。さゆりは深呼吸し、不安を押し下げた。彼女は目の前のタスクに集中する必要があった——リチャードに約束した特別な日本食を準備すること。料理はいつも彼女を落ち着かせ、現在に根付かせるものだった。彼女がキッチンへ動くと、彼女は拓也が何を話したいにせよ扱えるのを自分に思い出させた。結局、彼女はこの

遠くまで来て、二つの世界をバランスさせた。でも奥深くで、彼女は先の会話が簡単じゃないのをわかっていた。

さゆりは夕食の調理を終え、特別な日本食の誘う香りが小さなキッチンに広がった。午後6時近くで、彼女はリチャードと食事を共有するのを愛したが、彼らは通常午後8時まで食べなかった。彼女は胃に不安の膨らみを感じた；彼女は拓也に会う必要があったが、その考えが彼女を不安にした。

「はにー」彼女はラウンジへ入り、リチャードがデスクでメールをチェックに忙しいところで甘く呼んだ、デスクはリビングエリアへ移されていた。ラップトップの柔らかい輝きが彼の集中した表情を照らした。

「はい、親愛なる？」リチャードは画面に没頭したままぼんやり答えた。

「川沿いを散歩に行くわ。日没まで30分で、下がるのを見たいわ。夕食前に戻るわ、OK？」彼女はカジュアルに聞こえるように言った。

今まで、リチャードはさゆりがどれだけ「一人時間」を評価するかを理解し、参加を押しつけなかった。彼はしばしばラップトップの世界に没頭し、ニュースのあらゆるビットを読み、彼の好奇心がすべてについてすべてを知るのを駆り立てた。

「もちろん、べいびー。散歩を楽しんで」彼は素早く彼女に微笑んで画面へ注意を戻す前に言った。

さゆりはドアから滑り出ると、安堵と罪悪感の混ざりを感じた。夕方の空気は暖かく、太陽は空に低く、オレンジの火球だった。彼女はビヨンド・カフェへ歩きながら深呼吸し、心臓が不安で競った。拓也との交流はいつも複雑で、言葉にされない緊張と彼女の秘密の重みで満ちていた。

それは10分だけの散歩だったが、各ステップが期待で重かった。カフェに近づくと、彼女は拓也が遠い角に座っているのを発見した、入り口を見張りながら後ろからのサプライズを避ける戦略的な選択だった。彼は落ち着いて見え、姿勢はリラックスしたが警戒した。

さゆりは外で瞬間止まり、考えを集めた。このミーティングはすべてを変えるかも。決意の息で、彼女はドアを押し開き、中へ入り、部屋をスキャンして拓也の視線を探した。彼らの目が合った時、彼は軽く頷き、彼女が参加するのを示した。

「さゆりちゃん」彼は調子が中立的だが目が鋭く彼女を迎えた。「来てくれてありがとう」

「もちろん」彼女は彼の反対の椅子に滑り込みながら答えた。カフェの雰囲気は居心地よかったが、彼女は嵐雲が来るのを知っていた。

「何を話したいの？」さゆりは不安に聞いた。

「カバに関するニュースがあるわ」拓也は真剣な調子で始めた。

「OK」さゆりは自分を固めた。

「今日倉庫へ行き、彼とミーティングしたわ。彼は私を見て驚いたわ。通常ノンパイに着く前に彼に知らせるわ。彼はとても神経質に見えたわ」拓也は続け、視線が安定して揺るぎなかった。

「それで？」彼女はサスペンスが彼女を蝕むように押した。彼女は何が起きているかを知る必要があった；カバ事件は長引きすぎ、彼女はそれを一度で解決したかった。

「彼が金を抜いてるかを直接聞き、目を見て真実を言うか嘘を言うか見ることにしたわ。もちろん否定したけど、彼が嘘をついてるのがわかったわ」拓也は声低く言った。

「何が起きたの？」さゆりの熱心さが今明らかになり、彼女はより近くに寄り、詳細を必死で求めた。

「加藤と浩人に彼をウォークインフリーザーに閉じ込めさせたわ。彼はまだそこにいるわ」拓也は続け、表情が読めなかった。

「じゃあ、今どう？」さゆりは彼の言葉の含意で心臓が競って聞いた。

「まあ、このミーティング後彼を尋問するつもりだって伝えたかったわ。面と向かって伝えたかったわ。これから物事がメチャクチャになるわ。もちろんあなたの名前は出さないけど、ノンパイは小さな場所で、今夜後、安全じゃないかもよ」拓也はカフェの薄暗い雰囲気を切る深刻さで述べた。

「私はここで幸せよ」さゆりは頑なに反撃した。「私を愛する男がいて、川の大きな家があるわ」

拓也は椅子にもたれ、彼女を熱心に観察した。彼は一瞬黙り、10秒が永遠のように感じた。最後に、彼は言った、「さゆりちゃん、遅かれ早かれ、トルと他の人々が二と二を合わせてあなたがカバをスパイしてたのを理解するわ。彼らが何をするかわからないわ。誰もスパイを好きじゃないわ」

さゆりは彼の言葉の重みが彼女の肩に重く沈むのを感じた。彼女は彼が言うのを処理し、心が含意で競った。それから、敗北を感じて、彼女は答えた、「私は決してそんなにスパイじゃなかったわよね？」彼女の視線が拓也の顔の傷跡へ漂い、彼女が光井会のカジノで健渡辺のためにスパイしていた時に間接的に彼に痛みを引き起こした過去の行動の厳しい思い出だった。

拓也の目が少し柔らかくなったが、彼らの共有した歴史の重みが亡霊のように空気に掛かっていた。「生き延びるためにしなきゃいけなかったことをしたわ」彼は声が今より優しく答えた。「でも生き延びるだけじゃもう十分じゃないわ。未来を考えなきゃ」

「去りたくないわ」彼女は言葉の脆弱さが明らかになりながらささやいた。

「わかるわ。でも時々、残るのはすべてをリスクにすることよ

第46章

さゆりは翌朝ベッドに横になり、カーテンを通して柔らかい朝の光が濾過されていた。彼女は昨夜の情熱と笑いの渦巻きから高揚し満足を感じた。

リチャードの表情が心に閃いた——彼女がタ方をコントロールした時、彼の驚きと喜び、彼女が完全に気づいていなかった自信で彼らの動きを導いた。それはいいショックで、心地よいサプライズだった。彼ら間に点火した火花が激しい火事へ燃え上がり、リチャードのホースですら長引く努力なしに消せないものだった。彼女は記憶に力づけられ、共有したつながりに感謝し、この新発見のダイナミクスが彼らを未来へどこへ導くか好奇心を感じた。もし未来があるなら。彼女はそれを疑い始めていた。

愛する女性に性的暴行されるのはリチャードにとって心地よいサプライズだったに違いないと思った。彼は彼女のそんな側——支配的で完全にコントロール——を前に見たことがなかった。日本のパトリアルカル社会で育つのはベッドルームで従順で合意する女性になるのを産み、決してノーと言うのを大胆にしない。従順が期待され、それが日本で報告されたレイプの数がそんなに低い理由だった。女性の役割は予め決められ、それからの逸脱は眉をひそめられた。日本での裁判官のほとんどが男なのも助けなかった。日本でレイプで有罪になるのはほとんど不可能だった。一度それが彼女に起きた時、彼女は報告しないのが最善と知っていた——様々な理由で。でも今彼女はタイにいて、すべての側面で日本の文化をコントロールする制限的な伝統から離れていた。

彼女は自分に微笑み、彼らの「真夜中のごちそう」の思い出が心を洪水のようにした、心を温める楽しいフラッシュバック。彼女は前夜の7-Elevenへのビールラン中にチョコレートの詰め合わせをストックして計画した。彼女の隠し場所を明かした時のリチャードの驚いた表情の考えが彼女のニヤリを広くした。でも彼女は朝に白パン、砂糖、そして特定の炭水化物を切るよう彼に常に思い出させていたので、少し罪悪感の刺しが忍び寄った。どうやって節制を説教できるの、彼女が贅沢の瞬間にすべてのチョコレートを貪り尽くす時？

彼女がそこに横になるにつれ、彼女はコーヒーテーブルを彼らが最終的に満足で疲労に屈する前に片付けたか思い浮かべられなかった。彼女の考えは彼女が持ち帰ったポーキー・チョコレートコーティングのブレッドスティックの詰め合わせへ漂った——彼女の絶対的な弱点。彼女は各フレーバーを一つずつ買った、スニッカーズとキットカットの腕一杯と共に。日本のキットカットへの愛はよく知られていて、彼女は利用可能なバラエティを楽しんだ——どんな国より多い。

今日長い散歩に行かなきゃ、彼女は昨夜すべての悪習に屈したのを自分を叱るように考えた。でも彼女は再び顔に笑みを浮かべた、笑い、共有した瞬間、そしてリチャードの

抱擁の温かさを思い出した。それは彼らが一緒に発見した喜びの思い出で、彼女はそんなに多くのチョコレートの甘い菓子のように心に踊る思い出に助けられず、経験に感謝を感じた。

でも新日が明け、彼女はベッドに横になり、天井を見上げ、心が不安で渦巻いた。彼女の状況の現実が彼女の上に重い毛布のように押しつけ、彼女はノンパイから離れるのは予想よりずっと早くかも知れないのを恐れた。あの考えが彼女を恐怖で満たし、彼女は拓也からの次のテキストを待つ間、彼女の人生の次の章が何を持っているか疑問に思った。

学校でのともこからのいじめの思い出が心に閃き、無力感が戻ってきた。でもそれすらマッサージパーラーで真治が現れた夜の恐怖に比べなかった。彼女は時計をちらりと見て、拓也が彼女に何を言うか想像しようとしたが、考えは霧のようにぼやけた。彼女は自分を叱った——今は嘆きの時じゃないわ。我慢よ。私は直面する準備をしなきゃ。

彼女はベッドの隣にリチャードが横になり、背を向けて優しくいびきをかいているのを見下ろした。あの柔らかい音が奇妙に慰めだった。彼女は彼がそんな姿勢でいるのを二つの理由で知っていた：彼は喫煙者の息を自覚していて、それより彼が呼ぶ「眠り顔」をさらに自覚していた。彼は長年ラグビーをプレーし、鼻を3回折ったと言っていた。それは彼のいびきを悪化させるだけでなく、睡眠で少しよだれを垂らす原因でもあった。

記憶に自分に微笑み、睡眠でも彼の思いやりを評価した。リチャードはいつも他人を考えて、彼女が前に出会ったことのない優しさだった。それは「穏やかに話し——しかし大きな棒を振るえ」の格言の典型だった。あの隠された暴力を産む能力が彼女を興味をそそり安心させた。それは必要なら彼女を守れるのを知って安全を感じさせた、たとえそれが彼女の独立を放棄することを意味しても。

でも今、彼女は不確実さの重みを産んだ。彼女は過去の影から自由であるより長い人生を望んだが、彼女の選択が彼女をこの瞬間に導いた。それは彼女が懸命に戦って逃げた世界だったが、今彼女は再びその引きに屈していた。彼女はリチャードの優しいいびきを聞きながら、彼女の心が競った。あの音が彼女を落ち着かせたが、彼女は眠れなかった。彼女は拓也の次のメッセージを待つ間、彼女の人生の次の章が何を持っているか疑問に思った。

さゆりの電話がピンという音を立て、彼女の考えから引き出した。彼女は画面をちらりと見て、拓也の名前が不気味に閃くのを見た。

こんにちは。私はキャット・ミーにいるわ。ガゼボの下に座ってるわ。あなたに緊急に会う必要があるわ。今来れる？

さゆりの背中を寒気が走った。それは起きていた。最悪が起きた。彼女は胃に結び目を感じ、重く耐え難い。世界が瞬間ぼやけ、彼女は自分をセンタリングするために深呼吸した。彼女は若い時、解放され無謀に感じた選択を産んだ。今、年月が後ろにあり、まるで宇宙が彼女に対して共謀し、彼女の選択肢を剥ぎ取り、彼女を何も残さないように感じた。後悔が彼女の心にきつく巻きつき、彼女はそれを脇に押した。今は嘆きの時じゃないわ。

10分ちょうど、彼女は虚空へメッセージを送ってテキストした。

彼女がジャケットを着るにつれ、彼女の決定の重みが彼女の肩に重く降りかかった。彼女はキャット・ミーで待つものを知っていた。彼女は過去の影から自由になるのを望んだが、彼女の選択は彼女をこの瞬間に導いた。彼女は道を下る各ステップで深くへ深く踏み込むように感じ、逃げた世界へ戻るのを拒否できなかった。でも後戻りはなかった。ただ前進だけ。

拓也はキャット・ミーの庭ガゼボの下長い木のテーブルに座っていた、さゆりが着いた時、彼女の表情が深刻だった。彼女は彼の反対に座り、パスを見張る位置を選び、リチャードが彼女と拓也の関係についてまだ疑っているのを鋭く意識していた。これまでのところ、彼は劇的に行動していなかったが、彼女はサプライズを避けたかった。

「さゆりちゃん、あなたに問題があるわ。カバは死んだわ。そして——」拓也が始めたが、さゆりは彼が産んだ口頭の核を彼女の脳が処理するやいなや途中で彼を切った。

「待って！ 続ける前に、何が起きたか教えて！ 昨日、あなたは彼を尋問するって言ったわ……」

彼女は周りを見回して彼らが一人だけか確かめてから、寄りかかり、声が怒りのささやきへ下がった。「……そして今彼は死んだわ！」

「チャンスをくれ。私はすべてを説明するわ」拓也は落ち着いた態度で状況をエスカレーターを解消しようとして言った。

「OK。すみません」さゆりは柔らかく答え、深呼吸を取り、平静を取り戻した。

「はい、私たちはカバを尋問したわ。彼は中国のパートナーを責めようとしたけど、彼らは最初に彼を疑っているのを私に言ったわ。そして——」

さゆりは寄りかかり、彼女の目が狭まった。「どうやってあなたが中国人を信頼できるのを確かめるの？」彼女は寄りかかり、彼女の激しさが触れられるようだった。

拓也はためらった。「はい、私もそれについて考えたわけ、彼らがカバを死なせたい動機を考えられないわ。彼は仕事でとても上手いわ。ただ貪欲になったわ。彼は誘惑に屈したわ」彼は落ち着きを保とうとして説明した。

「OK。私は薬物作戦について何も知らないわ、だからコメントできないけれど、あなたを信頼するわ、拓也」さゆりは譲歩し、彼女の目がまだ疑いのちらつきで彼にロックされた。

「中断しないように努めて」拓也はアドバイスし、彼女の介入なしに事実をレイアウトするのを望んだ。

さゆりは頷き、彼女の心が彼の言葉のホラーに沈んだ。彼が続けるのを準備し、彼女は彼女を変える可能性のある啓示に自分を固めた。

「あなたに何が起きたか教えてあげるわ、聞きたいなら……」拓也は続け、彼女が彼のプロセスしたホラーに反応するのを見ながら。「でもそれはあなたを不快にするわ。確かよ、さゆりちゃん？」

「はい！」彼女は知る決意で答えた、それが彼女の人生を逆さまにする理由だった。

「カトとヒロトが尋問してたわ。カバは椅子に縛られていて、知ってるわよね、映画で見るように、彼らは水で満たしたプラスチックボトルで彼を殴ったわ。通常かなり効果的な方法よ。彼は止めてくれと叫び、すべて話すって言ったわ。でも彼は中国のパートナーを責め、私が買わないわ。だから——これはきつい部分——私たちは彼に乾いた犬の糞を強制的に食べさせたわ」拓也は続け、さゆりの反応を見るために彼女を近くで見た。彼女は叫び出そうとした時、拓也が手を上げ、彼女に静かにするようジェスチャーした。

「彼は窒息し始め、それから心臓発作のように見えたわけ、そこにいた誰も彼に口対口をしようとしなかったわ。カトが彼の胸をポンピングしようとしたけど、彼は死んだわ」拓也は終えた。

さゆりは驚いた沈黙に座り、拓也の言葉を処理するために心が競った。彼女は彼が産んだホラーに吐き気を催し、彼女は彼に叫び叫んで怒りをぶつけたくなった。でも彼らは公共の場所で、彼女は平静を保たなければならなかった。代わりに、彼女は拓也を長い緊張した瞬間見つめ、再保証の兆候を彼の顔に探した。

ついに、彼女は窒息して言った、「今何？」

「彼は今夜川に捨てられるわ」拓也は事実として答え、調子が冷たく落ち着いていた。

「いいえ、私の意味は、どうやってそれが私に影響するの？ 私はまだ離れなきゃいけないの？」さゆりは彼がノーと言う期待で震える声で聞いた。

彼は寄りかかり、懸念の表情を顔に刻んだ。「私はあなたが気づいたかわからないけど、カバは忠実なクルーを持ってるわ——ラオスで物流を走らせる連中。私は彼らがカバが誰かが密告したのを疑ったら何をするかわからないわ。古田純子に何が起きたか覚えてるわよね？」拓也は彼女に聞いた。

「はい！ それが起きた時、私は13歳だったわ。吐き気悪いわ。野蛮よ」さゆりは答え、事件のホラーな詳細を思い出しながら怒りと嫌悪で声が染まった。あの純子に起きた記憶が彼女を憎悪でほとんど吐き出した、会話の深刻さを強調した。

「まあ、ノンパイから離れるかどうかを決める時にそれを心に留めておいて」拓也は寄りかかり、顔が深刻だった。「私は強くあなたが離れるのをアドバイスするわ——早ければ早いほどいいわ」

さゆりは拓也の警告の重みが彼女の上に暗い雲のように沈むのを感じた。彼女は彼女のノンパイで見つけた安全が今不安定に感じ、彼女の心が競った。「でもリチャードについて考えなきゃ」彼女はささやき声で言い、恐怖が忍び寄った。

拓也は頷き、表情が少し柔らかくなった。「あなたは自分を最初に守らなきゃ、さゆりちゃん。物事がエスカレートしたら、あなただけじゃなくなるわ。あなたはなんでも準備しなきゃ。でもリチャードと何かを議論する前にあなたに教えておくもう一つのことがあるわ」

「それは何？」彼女は変化のためにそれがいいニュースである期待で聞いた。

拓也は寄りかかり、調子が緊急になった。「中国のパートナーはカンボジアでいくつかの詐欺センターも走らせてるわ。彼らはあなたに仕事を提供したわ——部分的にあなたが危険にいるから、部分的にあなたが英語と日本語を話すから。君のような言語とITスキルを持つ人を詐欺センターで働くのを喜んで見つけるのは稀だわ」

さゆりはアイデアで眉をひそめた。

「給料は何？」彼女は申し出の不穏な性質にもかかわらず好奇心をそそられて聞いた。

「月2500米ドルよ」拓也は答え、彼女に視線をロックした。

さゆりにとって、それは大きなお金だった——彼女の財政負担を大幅に緩和し、ナオミの勉強を払い、母親をサポートできる額。考えが心に渦巻いたが、彼女は何も言わず、彼女の沈黙が重く考え込むものだった。拓也は彼女がそれを考えるのを見、彼女の頭の歯車がプロとコンを量るのを見た。

「いつでも始められるわ」彼は彼女にアイデアを「売り」ながら続けた、「でも言ったように、早ければ早いほどいいわ。私はあなたと一緒に来るわ。彼らはあなたが欲しい時にウドンタニからプノンペンへ飛ばす準備ができてるわ。あなたはエリアのハブの物流のハブから出るチャンスだわ」

「コンパウンド？」さゆりは聞いた。

「はい、彼らは自己完結型コンパウンドで働くわ。すべての宿泊と施設がコンパウンドにあるわ。フードコートを含むわ」拓也は説明した。

さゆりは状況の現実が沈むのを感じた。財政的安全の約束は魅力的だったが、詐欺センターで働く道徳的含意が彼女の良心を蝕んだ。「どんな仕事をするの？」彼女は声が安定して聞いた。

「基本的なITサポート、コミュニケーションの管理、そんなものよ。あなたはスキルを使えるわ。そしてそれはここから出るチャンスよ、危険から」拓也は寄りかかり、調子が本気だった。

彼女は木のテーブルの穀物を下に見下ろし、彼女の考えが競った、彼女の現在の人生と不確かな先の道の間で引き裂かれた。「考えさせて」彼女はついに言い、声が固く不確実で染まった。

「もちろん」拓也は答え、表情が柔らかくなった。「ただ覚えておいて、時間はあなたの味方じゃないわ。あなたは選択を早くしなきゃ。実際、あなたに決定を明日テキストで知らせるのを主張するわ。そして、もしイエスなら、タイムラインを知る必要があるわ、だから私は飛行機をすぐに予約できるわ、OK？」

「はい！」彼女は同意し、彼女の心が光の速さでスピンした。

さゆりは拓也とのミーティングの重みが彼女の肩に重く残りながら家へ入った。彼女はシャワーが会議の残骸を洗い流すのを切実に必要としたが、リチャードと話すのを最初に直面したかった。彼女は彼が彼女の不在について考えたのをわかった。

「こんにちは」彼女はリビングルームへ踏み込みながら強いた笑みを浮かべて挨拶した、リチャードはデスクに座り、ラップトップに集中していた。彼は寄りかかり、彼女に微笑みを送り、彼女は言葉にされない感情の無数に彼の重い視線を感じた。

「やあ、ベイビー。ミーティングはどうだった？」彼は好奇心で聞いた。

一瞬、彼女は言葉に詰まり、どう状況を説明するか確かじゃなかった。彼女は嘘をつきたくなかったので、ハーフトゥルースを伝えることを決めた。

「それはOKだったわ。拓也——日本人男性——は私に仕事を提供したわ」

リチャードの表情が移り、彼女の言葉の含意を処理した。「仕事のオファー？　どんな仕事？」彼は寄りかかりながら聞いた。

「カンボジアの詐欺センターで働くわ」彼女は寄りかかりながら答え、彼の反応を測った。

彼は沈黙し、彼女に情報を処理するのを許した。「詐欺センター？　どういう意味？」彼はついに聞き、調子が用心深かった。

「拓也はこれらの詐欺センターを運営する中国人の友達を持ってるわ。彼らが私が英語と日本語を話すのを聞いた時、彼らは彼に私に仕事を提供するよう頼んだわ」さゆりは寄りかかりながら説明し、彼女の心臓が胸で鳴った。

「私は見るわ」リチャードはゆっくり答え、ニュースを吸収した。さゆりは彼が彼女の決定について彼の考えを処理するのを見、彼女のプロセスに少しのスペースを許した。彼女は彼の目で苦闘を見、彼女を成功させる欲求が彼女を失う恐れと衝突した。彼女は寄りかかり、彼の腕に手を置き、彼らの間に形成されるギャップを橋渡ししようとした。

「私はそれを理解するように努めるわ、さゆり。私はあなたが成功するのを望むわ、どんな形でも」彼は言い、言葉が彼女の心に響いた。それは彼女が嘘をつかずに産んだ会話だったが、彼女は彼女の秘密の重みを産んだ。彼女はリチャードが彼女のヤクザのつながりを発見したら彼がどれだけ厳しく彼女を判断するかを恐れた。それは彼女が誇りに思わない人生の一部で、彼女はその世界に彼をさらしたくなかった。

彼女は深呼吸し、彼女の感情を安定させた。「ありがとう、リチャード。あなたはいつもそんなに理解してくれるわ」

彼は頷き、表情が柔らかくなった。「それが愛の意味よ」彼はささやき、言葉が彼女の心を温めた。それは彼が彼女に産んだもう一つの告白だったが、彼女はそれを受け入れる準備ができていなかった。彼女は彼が彼女の過去を知ったら彼が感じるように変わるのを恐れた。彼女は彼の目を見て、彼女の秘密の重みを産んだが、彼女は今彼と一緒にいるのを楽しむことを決めた、より長い間彼らが一緒にいるのを許すかも知れない。

さゆりはベランダに座り、彼らの間が触れられる緊張に満ちた拓也から明かされた仕事のオファーを産んだ翌日だった。リチャードは勇敢な顔をしていた。さゆりは朝食後に拓也に確認をテキストし、彼女の受諾を産んだ。彼はすぐに返事し、すべての詳細とタイムラインで夕方に彼女に連絡するのを産んだ。

今、彼らがベランダに座り、周りの葉をそよ風がざわめく中、さゆりは興奮と悲しみの苦甘い混ざりを感じた。彼ら二人は一緒に残した瞬間に快適な沈黙で互いの会社を楽しんだ。リチャードは時々彼女の手を絞り、彼女の出発前の限られた時間の黙認で、彼女は彼へ寄りかかり、彼の存在の温かさを味わった。

彼女は彼が前夜の長い会話で彼が彼女を愛しているのを彼女に言ったのを考え、それから彼が彼女の決定を受け入れるのを彼女に言ったのを考えた。彼は彼女を所有しないわ。彼らは両方彼らが試して一緒に働くのを産んだ。

「リチャード」さゆりは始めた、声が安定したが穏やかで、「あなたをどれだけ好きか……」彼女は「愛」という言葉を避けて故意にためらった、「あなたを好きだと思ってたより多く好きだわ。正直、私はあなたにそんな強い感情を持つとは予想してなかったわ。でも私たちはこれを前に議論したわ。私は関係に6ヶ月以上留まらないと言ったわ。それはあなたじゃないわ。それは私よ。私は動き続けなきゃ」

「知ってるわ」彼は言い、言葉が受け入れのヒントで染まった。

さゆりは深呼吸し、彼女の感情を安定させた。「リチャード、ベビー、あなたは私の気持ちを知ってるわ。もちろん、あなたと時間を過ごしたいわ。でも私たちはこれを前にしたわ。だからまたできるわよね？」彼は希望的に聞いた。

「あなたは何を意味するの？」さゆりは聞いた。

「まあ、私がフィリピンへ去ってから南アフリカへ家族に会いに行った時、私たちは何が私たちの間に起きるかわからなかったわけど、最終的にうまくいったわ」リチャードは説明した。

「あれは本当よ」さゆりは同意し、リチャードが言うのを理解した。彼らは両方旅行者だった。両方デジタルノマド。もし彼らの関係が強ければ、彼らは互いへ道を戻すわ。

「あなたが仕事を取るかどうか決めるのにどれだけ時間があるの？」リチャードはささやき声で聞いた。

「明日」さゆりは答え、言葉が空気に重く掛かった。彼女は彼の目で苦闘を見、彼女は彼が彼女を失う考えに苦しんでいるのを知っていた。

「仕事はどこ？」彼は聞いた。

「プノンペン」彼女は答え、彼女の心が彼女を離れる考えで沈んだ。

彼はゆっくり頷き、彼女の言葉を吸収した。「私はあなたが成功するのを望むわ、さゆり。私はあなたが幸せになるのを望むわ、どんな形でも」

言葉が彼女に響き、彼女は彼と一緒にいるのを評価した。それは彼女が嘘をつかずに産んだ会話だったが、彼女は彼女の秘密の重みを産んだ。彼女は彼が彼女の過去を知ったら彼が感じるように変わるのを恐れた。それは彼女が夜の間彼と一緒にいるのを許すかも知れない冒険だったが、彼女はそれがより長い間持続するのを望んだ。

第47章

さゆりはキャリーバッグをラウンジへ転がし入れ、空気に漂う自然の音の柔らかいブーン音が広がっていた。リチャードはソファに座り、Netflixのブループラネットのエピソードに没頭していた。彼女は彼が考えに没頭している時に野生動物のビデオを流すのが好きだと知っていた；彼は動物番組が彼をリラックスさせ、感情を処理しやすくすると言っていた。彼女が彼を見ながら、彼がおそらく彼女の翌朝の早い出発でストレスを感じていると思った。

前日、リチャードは自撮りのためにスマートな服を着るのを主張した。さゆりは彼の熱狂に面白がって同意した。彼はすぐに写真をスティックドライブへ転送し、コピーを作り、カメラショップへ急いだ。戻ってきた時、彼は彼女に「最高のショット」と思われるものを誇らしげにプレゼントした——さゆりがリチャードの頬にキスしている6x9のフレーム入りプリント。彼は彼が「教師の仕事服」と呼ぶクリスプなボタンアップシャツと綺麗にプレスされたスラックスでスマートに見えた。写真の二番目のフレーム入りコピーを彼はTVスタンドに置いた。

「あと12時間あなたを持ってるわ」彼は彼女がドアの側にスーツケースを置き、彼の隣のソファに座った時、軽く言った。突然、彼は振り向き、表情が真剣になった。

「愛してるよ」

「知ってるわ」それだけがさゆりが言い、声は安定していたが心臓が少し速く鳴った。リチャードはさらにコメントせず、彼らの共有した沈黙の重要さが空気に掛かった。二人はこの瞬間に愛を告白するのが物事を複雑にするだけだと理解していた。

さゆりは彼女が週末中リチャードを甘やかした理由の一つが、彼らが二度と会わないなら、彼が彼女を愛情深く思い出すのを確かめるためだと知っていた。二度と彼らの道が交差しない可能性の考えが彼女の心に影のように残り、彼女は完全にその現実を受け入れたくなかったが、この特別な週末を彼女の「万が一」のさようならの方法として認識した。

言うことは何も残っていなかった。彼女の行動がすべてを言っていた、彼女の感情を彼らが共有した静かな親密さにカプセル化した。それは日本の方法、言葉を決して必要としない愛の微妙な表現だった。バックグラウンドで海の心地よい音が流れる中、さゆりはリチャードの肩に頭を寄せ、瞬間を味わい、未来が何を持っていたても、彼らの過剰の週末が永遠に大切な思い出として残るのをわかっていた。

午後7時で、普段の夕食時間より少し早かったが、彼女は翌朝プノンペンへ長い旅の前にバッテリーを充電する必要があると知っていた。朝は決して彼女の強みじゃなく、早

起きる考えが彼女を内側でうめかせた。ウドンタニへ着くのはいつも最悪の部分；その後飛行は二時間未満だが、彼女がぼんやりした目をしている時、旅行はいつも永遠のように感じた。

「はに一、食べ物準備できた？」彼女は優しく聞いた。

「はい、べいびー。準備できたわ」彼は部屋を明るくする笑みを浮かべて答えた。

リチャードは自発的な夕食を決め、刺身と寿司のセレクションを選び、カラフルなサラダの容器とすべての必要な調味料と共に。彼女の胃が鳴くのを引き起こす光景——彼女はすでに新鮮な風味を味わえた。もちろん、彼は夜市からの残り物を主張し、彼女が愛するようになったあのスパイシーソーセージ。

「デザートを味わうまで待って」彼はいたずらっぽいニヤリで言った。「オーガズム的よ！」

彼のウィスキーに浸したコーヒースイスロールの約束が彼女を笑わせた。「いつもそう言うわ。感心させる準備できたわ」

すぐに、彼らはソファに落ち着き、居心地いい食べ物の広がりがあるのが彼らの前に置かれた。リチャードはバックグラウンドでプレイするチーズなアメリカンロムコムを見つけた。さゆりは決して映画に注意を払わなかったが、彼らが食べ話しをする間、笑いとおロマンスの心地よいブーンを楽しんだ。

「これは素晴らしいわ！」彼女は刺身の一片を味わいながら叫んだ。「アサワンセンターのあの場所を買ったの？」彼女は彼女の大好きな寿司屋から来る容器を認識して聞いた。

「はい！」リチャードは笑った。

彼らは食べ続け、会話が彼らの間に簡単に流れ、画面のキャラクターのべたべたしたロマンチックないたずらが強調した。おいしい食べ物と自発的な笑いが彼女が一日中運んだ緊張を和らげた。映画が進むにつれ、彼女はますますリラックスし、先の課題に直面する前にこの小さな快適のオアシスに感謝した。

「それで、最後の晚餐——もう一度」リチャードは考え深く言い、少しのクスクス笑いがため息のように逃げた。「私たちの三度目」

「あれはいい兆候よ」さゆりは彼の気分を上げるために明るく言った。彼女は明るい笑みを閃かせ、彼の言葉の重みを払おうとした。

夕食が終わると、リチャードは皿を片付け始め、キッチンへ運んだ。さゆりは彼に続き、部屋の明るい光へ踏み込み、彼が洗い物を始めると。流水の音が皿のカチカチ音と混ざり、心地よいリズムを作った。彼女はシュリンクラップに残り物を包むのに忙しくし、各容器を冷蔵庫に置く前に注意深く封をした。

彼女が働くにつれ、さゆりは彼らがどれだけよく同居するかを振り返らずにはいられなかった。彼らはお互いのスペースを尊重し、直感的に少し部屋を与える時とチームとして集まる時を知っていた。それは繊細なバランスで、彼女に快適で馴染みのあるものだった。

またこれを人生で持てるかしら、彼女は最後の容器を封しながら考えた。考えは重くしかし希望的に残った。

リチャードは水を止め、ディッシュタオルで手を乾かし、視線が彼女に安定した。

「あなたのためのシャワータイムだと思うわ、べいびー」彼は彼女の就寝ルーチンを知ってシンプルに言った。

「はい！」彼女は言い、彼に大きなハグをし、つま先立ちで口にキスした。「今何するの？ TV見るの？」

「いいえ、ベッドに横になって本を読むわ。数日読んでないわ。全部あなたのせいよ」彼はからかい、彼女にいたずらっぽい笑みを送った。

「ほんとうお？」彼女は遊び心で答えた。

「はい！」リチャードはふざけて言った。

リチャードとさゆりはキッチンを片付け終え、最後の皿がラックで乾いていた。さゆりはあくびし、過去二晩の遅くまでの活動の疲労が骨に染み込んだ。

「OK、シャワーに行くわ」彼女は宣言し、バスルームへ向かった。

「いいわ」リチャードは返事し、寝室へ向かった。彼は本を拾い、少しの間読む希望でベッドに落ち着いた。二晩の遅くまでの活動の後、彼は今夜の繰り返しを期待していなかった。彼らは両方疲れていて、さゆりは彼女の早朝を控えていた。

さゆりは頭に水のもう一つのスクープを注ぐにつれ、体に流れる涼しい水を楽しみにした。シャワー後、彼女は彼女の旅行のための大きなバックパックを確かめるのに数分を過ごし、プノンペンへ必要なすべてを持っているのを確かめた。彼女のキャリーバッグはすでに詰められ、ドアの側で待っていて、彼女の前の冒険だけでなく、リチャードとの関係の危険な未来の思い出だった。

一度準備ができたなら、さゆりは寝室へ滑り込んだ。リチャードはまだベッドに支えられ、彼のランプの光が本のページに柔らかい輝きを投げかけていた。彼は目を開いておくのに苦労しているようで、顔に疲労が明らかだった。さゆりはベッドに登り、彼女の頭をリチャードの頭と彼が持つ本の間にくねらせた。彼女は寄りかかり、彼におやすみのキスをした。

「ぐっどないと、はにー。私のポッドキャストを聞いてそれから寝るわ。あなたは疲れて見えるわ。あなたも寝るべきよ」彼女は優しく言った。

リチャードは彼女の頭のとっぺんにキスし、それから彼女の顎を上げ、彼女の唇に温かく残るキスを植えた。「はい、私はとても疲れてるわ。あなたは私のバッテリーを排出したわ」彼は愛情で輝く目で笑みを浮かべて言った。

「あれが私が排出したすべて？」彼女はふざけて聞いた。

「あなたはそれの答えをすでに知ってると思うわ」彼は微笑み、彼女に最後のぐっどないとキスをするために寄りかかった。「ぐっどないと、べいびー。よく寝て」

「寝る前に、5:30 AMのアラームをオンにしておいて。お願い。朝どれだけ遅いかわかるわ」さゆりは微笑み、目がからかいながらも誠実だった。

「OK。すぐにやるわ、べいびー」リチャードは同意し、電話に手を伸ばした。彼は数タップでアラームを設定し、それから彼女へ振り向き、表情が柔らかくなった。「ぐっどないと」彼は言い、声が低く慰めだった。

彼女に最後の視線を投げ、彼はランプをオフにし、部屋を居心地いい暗闇へ沈めた。さゆりは枕へ寄り添い、ポッドキャストの音が静かなスペースを満たし、リチャードが目を閉じ、睡眠へ降伏し、彼らが共有した瞬間に感謝した。

さゆりはタクヤの隣のミニバンの後ろに座り、エンジンのブーン音が彼らがウドンタニ空港へ向かう中、定常的なバックドロップだった。感情の対立が彼女の中でスパークし、彼女は一方でまともなお金を稼ぐ新しい冒険を始めるのに興奮し、他方では出産後のうつ病を思い起こさせる憂鬱の感覚が彼女を洗った、ナオミの誕生後経験したものだった。

「どう感じてる、さゆりちゃん？」タクヤは本気の懸念で彼女へちらりと見て聞いた。

「新しい冒険を始めるのに興奮してるわけど、本当にリチャードが恋しいわ」彼女は正直に答え、声が熱狂と悲しみの混ざりで染まった。

「本気のように聞こえるわ」タクヤは眉を上げてコメントした。

「まあ、私が予想したより本気よ。彼は私に育ったわ」さゆりは小さな笑みを唇に忍び寄せながら認めた、心の重さにもかかわらず。

「いぼもそうよ」タクヤはユーモアを試みて撃ち返したが、的外れだった。

「どういう意味？」さゆりは眉をひそめて聞いた。

「いぼも人に育つわ」タクヤは調子が軽いが言葉に少しぎこちなさが染まって説明した。

「何を言おうとしてるの？」さゆりは今少し苛立って聞いた。彼女は的外れのジョークの気分じゃなかった。

タクヤは彼女の苛立ちを感知し、素早く後退した。「何もないわ。ただ悪いジョークだったわ。すみません」彼は羊のような笑みを送って言った。

さゆりはため息をつき、電話を取り出してメッセージをチェックした。何もない。彼女は普段より頻繁に電話をチェックしていることに気づき、彼女の分離不安で発展した習慣だった。ノンパイを離れたばかりで、彼女はすでにリチャードの存在への渴望を感じた。

窓の外の風景がぼやけて過ぎ去るにつれ、彼女は彼の不在の感覚を振り払えなかった。各経過する瞬間がより重く感じ、彼女は目を閉じ、一瞬目を閉じた。彼女は深呼吸し、彼女の新しい冒険の現実が前方に迫るにつれ自分を安定させた、彼女がそんなに深く気にしていた誰かを離れる苦甘い痛みと混ざった。

さゆりはミニバンの窓から眺め、道路の両側に無限に広がる豊かな緑の稲田へ目が漂った。黄金の茎がそよ風に優しく揺れ、明るい太陽の下できらめく海を作った。小さなタイの村が風景に点在し、木の家が杭の上に置かれ、木々の間に張られた線から洗濯物がはためいていた。時々、彼女は水牛の近くで遊ぶ子供たちの群れを捉え、暖かい空気に彼らの笑いが甘いチャイムのように響いた。

絵のような景色にもかかわらず、胃に不安の結び目がねじれ、彼女の新しい詐欺センターで働くのの威圧的な現実を思い起こさせた。彼女は周囲の美しさが彼女の落ち着かない心を和らげるのを望んで風景の活気ある色に焦点を当てた、彼女の前の未知のもののへの考えを押しやり。

その朝、さゆりはアラームが不歓迎の呼び声を鳴らした5:30 a.m. にベッドから跳び起きた。6:30 amまでに彼女は準備ができ、彼女にタクヤに会うためにキャット・ミーゲストハウスへ隣へ向かう前にリチャードと過ごす貴重な30分を残した。

リチャードは二人に新鮮なコーヒーを淹れ、彼らはベランダに一緒に座り、朝の空気が鳥の陽気なさえずりで満たされていた。彼女は彼の目の下の暗い袋に気づき、不眠の夜の明らかな兆候だった。離れる時間が近づくにつれ、さゆりは彼女にキャット・ミーへ同行しないよう頼む時にぎこちなさの波を感じた。リチャードは理解して頷き、彼女の最後の言葉は彼にベッドへ戻るのを優しく提案した。彼が彼女のアドバイスを取ったと判断して、彼女が出発してから1時間未満の沈黙による。

さゆりは考えに没頭し、混乱と不確実さの心が渦巻いた。彼女の隣のタクヤは黙り込み、彼女の困惑した状態を鋭く意識しているようで、彼らの間の雰囲気言葉を言葉にされない言葉で厚くした。彼女は過ぎ去る景色を眺めたが、それはすべてぼやけ、色と形が彼女の考えが百万の異なる心配で渦巻くにつれ霞に溶けた。

突然、タクヤの声が彼女の瞑想を切った。「さゆり！」彼は叫び、現実に戻した。彼女はまばたきし、彼らが空港に着いたことに気づき、彼女があまりにもゾーンアウトしていたので彼が最初に聞いたのを聞かなかったと思った。荷物をトロリーへ積んだ後、彼らはチェックインカウンターへ向かった。チェックインの女性は申し訳なさそうな表情でタクヤを見上げた。

「申し訳ありませんが、あなたのフライトは1時間前で、すでに離陸しました」

タクヤの顔が落ち、苛立ちが目で閃き、彼はチケットを彼女に振りながら議論を始めた。

彼女はすべての乗客にフライト時間の変更についてのメールとテキストメッセージが送られたのを落ち着いて説明した。タクヤは素早く電話をチェックし、恥ずかしさで航空会社からのテキストを確認した。感じが悪く、彼は女性へ振り向き、頬が紅潮した。「迷惑かけて本当にごめんなさい」彼は今声が柔らかく言い、見落としを認識した。

さゆりとタクヤはプノンペンへのフライトを逃した現実が沈む空港のチェックインカウンターに立っていた。タクヤは素早く次の利用可能なフライトに二枚のチケットを予約したが、待ち時間は耐え難かった——長い5時間。「まあ、少なくとも次のフライトに乗れたわ」彼はターミナル内のコーヒーショップへ向かいながら楽観的に保とうとして言った。

カフェは新鮮に淹れたコーヒーの豊かな香りで賑わっていた。それはパッド入り椅子、数個の招待的なソファ、電話充電ステーション、無料Wi-Fiを誇り——さゆりには完璧だった。彼らは快適な角へ落ち着き、柔らかいクッションが彼らがフライトの呼び出しを待つ間リラックスするのを招待した。さゆりがコーヒーを一口飲むと、電話がピンした。彼女は下を見てリチャードからのメッセージを見た。

はに一。あなたにとって忙しい日だわ。興奮の新しい冒険。私は旅行日にあなたにあまりメッセージしたくないわ、だからあなたが連絡するまでまたメッセージしないわ。恋しいよ。

さゆりの顔が明るくなり、唇に笑みが広がった。

心配しないで、はに一、テキストできるわ。私はまだウドンタニよ。私たちはフライトを逃したわ。

ほんとうお？ リチャードは遊び心の調子で返事し、スマイリーフェイスを添えた。

ほんとうに、さゆりは彼のユーモアをクスクス笑いながら遊んで答えた。

OK。新しいフライトはいつ？

あと4時間、彼女は遅れで苛立って感じながらタイプしたが、彼らのつながりに慰められた。

OKべいびー。いいフライトを。新居に着いたらメッセージして。

OK、はに一。恋しいよ。またね、彼女は返事し、彼らのやり取りが心を温めた。

電話を置くと、さゆりは自分のメッセージをスクロールしているタクヤを見た、顔に眉をひそめていた。

「どうしたの？」彼女は聞いた。

「ただ中国のパートナーに私たちの遅れたフライトを知らせてるわ。コンパウンドは街の外で、私たちを迎えに車を送る必要があるわ」彼は説明した。

「見えたわ」さゆりはコンパウンドが街にないことに失望して言った。

さゆりは前にプノンペンへ行ったことがある。彼女はカンボジアの活気ある首都、プノンペン、その豊かな魅力のタペストリー——歴史、文化、現代生活のブレンドを楽しんだ。彼女は特に壮大な王宮の訪問を楽しんだ、その見事な建築と静かな庭で、シルバーパゴダが貴重なアーティファクトを収めていた。

トゥールスレンジェノサイドミュージアムとキリングフィールドの感動的な場所が彼女を骨まで冷やし、カンボジアの激動の歴史の厳しい思い出。彼女の大好きな場所は印象的なアールデコ建築に収められた賑やかなセントラルマーケットで、地元の工芸品を買い、美味しいストリートフードをサンプルした。夕方、彼女は川沿いのプロムナードを歩き、メコン川の絵のような眺めを楽しんだ。もちろん、彼女の街の大好きな部分はカフェ地区だった。

さゆりは次の三時間を健康とフィットネスのポッドキャストに浸って過ごした、馴染みの声が彼女が旅への残る不安を振り払おうとする間、慰めの気晴らしを提供した。空腹が結局彼女に何か食べるのを強制し、彼女はタクヤとトーストサンドイッチを共有した、彼女のプノンペンへのフライトへの搭乗前の最後の食事。

フライトは短くイベントレスだった。到着時、カンボジアのドライバーが温かい笑みとまともな英語で彼らを迎えた。彼は荷物をバンへ積み、コンパウンドへ出発した。彼らが暗くなる街を歩いてドライブするにつれ、さゆりは彼らの目的地へ近づくにつれ彼女の期待が不安へ変わるのを感じた。

コンパウンドが前方に迫り、夜空に対して厳しく。一つの巨大なフェンスがエリアを囲み、歓迎する場所より刑務所のように見せた。さゆりの心が沈み、彼女はシーンを取り入れ——一つのゲートにガードハウスとブーム。ノンパイのジョリーンの家の周囲の豊かな緑と対比する暗く閉じ込めるように感じた。

タクヤは彼女の不安を感知し、彼女の肩に手を置き、中へ導いた。彼らは作戦を管理する三人の中国のパートナーに迎えられた。彼らは愉快だったが、言語障壁がすぐに明らかになった；彼らの誰も英語や日本語を話さなかった。タクヤの中国語の限られた把握が基本的なコミュニケーションを助けたが、行ったり来たりする翻訳がさゆりには疲れるように感じた。彼女が望んだすべては彼女の寝室へ示されること、長い旅の後静かなスペースで安らぎを見つけることだった。しかし、パートナーは最初に「歓迎の食事」を主張した。さゆりは彼らが彼女をフードコートへ導く時、笑みを強いたが、彼らを待つ手の込んだ広がり彼女を心からひらめかせた。

テーブルは中国と日本の珍味の配列で飾られ、彼女の疑念から瞬間的に彼女を気晴らしした。彼女は綺麗に並べられた寿司ロールを見つけ、新鮮な魚のスライスと活気ある野菜で輝き、氷に芸術的にプレゼントされた繊細な刺身と共に。海藻と豆腐の香り高い味噌汁の蒸気立ち上るボウルがあり、カラフルな漬物のアソートメントが家を思い起こした。綺麗に作られたぎょうざのトレイが一方でクリスプで他方で柔らかく、誘うように誘い、近くに温かくふわふわのご飯のポットが座っていた。

馴染みの香りと活気ある色が懐かしの波をもたらし、彼女の不安を和らげ、彼女の新しい環境について少しよく感じさせた。少なくとも料理する必要ないわ、彼女はアソートメントのサイドプレートを満たしながら合理化した。コンパウンド生活は私が予想したほど悪くないかも。

テーブルの隣に、無料のビールで溢れるクーラーがあったが、長い旅の後の疲労が彼女の肢を引っ張った。彼女はビールより一つ以上飲んだら、ビールが終わるまで止まらなと知っていた。

「私の寝室を示してくれない？」彼女は空のビール瓶をテーブルに置き、声に疲労のヒントでタクヤに聞いた。

「もちろん」タクヤは返事し、彼女をお祭りから離れて導いた。彼は中央にダブルベッドのある広々した部屋のドアを開けたが、少し他には——角で静かにブーン音を立てる小さな冷蔵庫とアイドル状態の洗濯機が立つ小さなベランダだけ。

「数日でトレーニングを始めるわ」タクヤは説明した。「それまで、あなたは休んで探検できるわ。フードコートはすぐ歩いてすぐよ」さゆりは安堵の波が彼女を洗うのを感じた；充電する数日の考えは彼女が必要としたものだった。明日はシンプル——リラックスし、空腹が襲ったらフードコートへ向かう。一度タクヤが彼女を落ち着かせるために去ると、さゆりは電話を取り出し、リチャードにメッセージした。

はにー。コンパウンドに着いたわ。大丈夫よ。食べ物はいいわ。あなたはどうか？

リチャードの返事は素早く来た。

はにー。安全に着いてよかったわ。あなたのテキストを待ってる間、あなたにメールを書いたわ。最初に読んでそれからテキストして。簡単になるわ。

OK。今読むわ、さゆりは好奇心で心臓をひらめかせて返信した。

彼女は秘密主義の人で、世界に何を共有するか注意深かった。ソーシャルメディアは彼女の人生を乱さなかった——テキストのためだけにLINEだけ。彼女は異なる人々に複数のメールアドレスを持ち、入ってくるメールをほとんど認識しなかった。実際、彼女はリチャードのためだけに予約したアドレスの受信箱をほとんどチェックしなかった；彼はいつも新しいメッセージについて彼女に思い出させなければならなかった。

メールを開くと、さゆりは感情で滴る長いラブレターを見つけ、各行が彼女の胃に罪悪感をひねった。彼女が彼の心を壊したのが明らかで、彼女は彼を慰め、距離にもかかわらず彼を安心させたかった。読んだ後、彼女は素早く彼にテキストした。

メールありがとう。ノンパイに2ヶ月で戻るわ、はにー。約束するわ。彼女はそれが安全なら戻れるのを望んだ——時間だけが教えてくれるわ。

やった！

さゆりの顔に小さな笑みが忍び寄り、心を温め、先の不確実さの中でも。

TVある？

いいえ、部屋にベッドと冷蔵庫だけ。洗濯機はベランダよ。使おうとしたけど水が漏れるわ。

おお、ないわ。ごめん。Netflixを見る時間あれば、私があなたをアカウントに追加したのを覚えてるわ。またログイン詳細を送るわ。

ログイン詳細が彼女の電話に現れた。彼女はスクリーンショットを撮った。ありがとう、はにー。明日見るわ。

OK。必要ならメッセージして。

ありがとう。

あなたは疲れてるわ、だから愛して離すわ。

はい、私は疲れてるわ。すぐに寝るわ。おやすみはにー。

おやすみべいびー。

公式だわ。私たちは長距離関係だわ、さゆりは自分に思った。これできるわ。我慢よ。

第48章

東京

2002年春

さゆりは山口組のマッサージパーラーの一つで8年働いていた。渡辺健が彼女の増大するマリファナ依存のために関係を終わらせて以来だった。しかしそれは問題の一部だけで、彼らの3年一緒に過ごした間、彼女の飲酒も激しくなっていた；主に退屈からだった。

健と一緒に生活するのは快適だった——彼はアパートの一つを彼らの秘密の隠れ家へ変え、彼女を家賃無料で住ませた。彼が結婚していたので、彼女はたくさん一人時間を持っていたが、仕事なしで、彼女の日々が飲酒と彼が管理するヤクザの施設から薬を求める単調なサイクルになった。15歳で関係を始め、さゆりはVIPのように扱われ、現実の線をぼかした特権を楽しんだ。

贅沢な生活は彼女を魅了し、捕らえ、形成期の年々に形成したパターンを自由にするのを難しくした。健がついに彼女と縁を切った時、それは厳しい目覚めの呼びかけだった。高校卒業証書なしで仕事経験なしで、彼女はパーラーでの仕事の申し出を受け入れる選択肢がほとんどないと感じた。

皮肉なことに、タイミングは幸運だった。彼女の父親は最近母親への養育費を払うのを止め、アルコール中毒に屈して仕事を失っていた。彼女がパーラーで知った同じクライアント——彼女の父親と同じ銀行で働いていた——から最後に聞いたのは、彼が最後の資金をギャンブルに使い、奇跡が彼の下り坂から彼を救うのを絶望的に望んでいたということだった。

残念ながら、彼のように多くの人々の前に、彼は失敗し、彼の依存への降伏は本格的に始まった。同じクライアントによると、彼女の父親は日本の政府の職業訓練プログラムの一つに参加しようとした、失業者を高需要分野で新しいスキルを獲得するのを助けるのを目的とした。しかし、彼の工場労働者のスティントは彼の持続する飲酒問題のために短命だった。

さゆりは集中し、手が薄暗いマッサージブースでクライアントの緊張した筋肉に専門的に働いていた。エッセンシャルオイルの馴染みの香りが空気を満たし、彼女を落ち着かせた。

しかし今日、その落ち着きは粉々になった。

ドアが爆発的に開き、二人の男が嵐のように入り、雰囲気は静けさから混乱へ即座にシフトした。部屋を確保し、一人の男が「OK、ボス」と叫び、さゆりは歩き棒のクリック-クリック-クリックが大きくなりながら聴き、地面に凍りついた。

年上の男がドアをよたよたと通り、金メッキのハンドルが付いた華やかな歩き棒がミニチュアディスコボールのように光の柔らかい光線を放射した。彼の顕著なよたよたにもかかわらず、彼の存在は入り口に重く支えられ、脅威的に見える二人の重い若い男に横から挟まれて、命令的だった。

「出て行け！ 出て行け！」リーダーが裸のマッサージを受けている男に吠えた。パニックが男の目に閃き、手が震えながら角の椅子から服を集めようと慌て、足が自分の足につまずきながら急いで出た、顔が恥ずかしさと恐れで紅潮した。さゆりは凍りついた、彼女の心が状況を理解しようとして競った。空気は緊張で濃く、彼女の心臓が胸で鳴った。

「あなたは私が誰かわからないわね？」リーダーが彼女に冷笑し、彼女の背骨に震えを送る強さで彼女の視線をロックした。

「いいえ」彼女は声がささやき以上ほとんどないで控えめに答えた。

男は彼の二人の仲間を招き、彼らは部屋から出て、彼女を一人で彼と残した。ドアがクリックと閉まり、彼らを不確実さの泡に封じた。さゆりの考えが彼女の選択肢を通して競り、彼女の恐れが上がるにもかかわらず落ち着きを保とうとして強いた。

「剛！」彼女は喉が乾いて叫んだ。剛はパーラーで秩序を維持する執行者、用心棒だった。でも返事はなかった。

「恐らく剛は来ないわ」よたよたの男がクスクス笑い、声に悪意が滴り落ちた。「渋谷のこのセクションは今私に属するわ。剛は君の救出に来ないわ。そして渡辺健も」

健の名前を言及したのはさゆりに衝撃を送り、彼女の心臓が喉で跳ねた。部屋が彼女の周りに小さく感じ、彼女を閉じ込め。

「何が欲しいの？」彼女はついに聞き、彼女の視線が彼の視線を保つために強いた。

男は一步近づき、狭いスペースを支配し、「あなたに理解してほしいわ。あなたはもう山口組のために働かないわ。今あなたは私たち——三井会——のために働くわ」

さゆりの息が喉に詰まり、彼女の心が競った。「決して！」彼女は言い、決意を強く保とうとして強いたが、声は少し震えた。

さゆりは彼の言葉に冷え、彼女の過去の決定の重みが彼女の肩に重く降りかかった。彼女は彼の威圧的な視線を避けられず、彼女の心が競った。彼女は健とつながる彼女の選択が彼女の人生をこの瞬間に導いたのをわかった、こんなに危険に満ちたもの。

「間違ってる！ 吉則渡辺、組長は私に渋谷での山口組の作戦のこのブロックを私への好意の返礼に与えたわ」彼は言い、調子に冷笑が入った。

「それは不可能よ！」さゆりは返事し、「私はこのエリアの健のすべての仲間を知ってるわ。私はあなたを知らないわ！」

「あなたは私の名前を知ってるかも」彼は唇を曲げて冷笑しながら答えた。「もしかして拓也があなたに私について話したかも？」

「拓也と私はもう話さないわ」彼女は怒りを込めて答え、各言葉が傷と反抗の混ざりで染まった。

「惜しいわ。自己紹介させて。三井真治、あなたのサービスに」彼は言い、嘲るお辞儀をし、熱狂的な傲慢さが彼から放射したように。

あの瞬間、彼のアイデンティティの重みが彼女に降りかかり、彼女の心臓が喉で跳ねた。空気が彼女の周りに濃くなり、彼女は彼女が彼と共有した歴史の含意に気づきながら彼女の心が競った——そんなに深く絡まったもの。彼女は彼女の過去の選択の厳しい結果に直面し、彼女の人生が彼女の決定の複雑な網に永遠に捕らえられたのをわかった。部屋が彼女の周りに渦巻き、彼女は彼女の選択肢を必死で探したが、真実は残酷に明確だった——彼女は彼女の人生を永遠に変える決定の瀬戸際に立っていた。

「真治……」彼女はささやき、声が震え、過去の記憶が彼女の心を洪水のようにした。彼の存在が彼女の心を混乱へ送り、彼女の人生の混沌が彼女の周りに閉じ込められた。

真治は彼女の高校の先生、松本夫人の息子で、その認識が彼女に衝撃を送った。彼女の過去の行動が彼で知られ、彼女の心が競った。彼女は彼女が健に届けたメッセージ——彼女の行動が真治の人生を永遠に変えた——を送った銀行会長の息子でもあるのを思い出した。あの含意が彼女の心をひらめかせ、彼女の選択の結果に彼女を直面させた。

彼女がこの情報を処理するにつれ、彼女の考えがさらに混沌へ螺旋した。彼女は拓也が戻ってきた夜を思い出した、彼の手が真治の両アキレス腱を切った後に血で染まっていた。あれは彼女の誤った言葉の結果——彼女が健に真治が彼を裏切ったと嘘をついた——で、彼女は今その重みを産んだ。拓也の健への忠誠が彼女の心にダガーを送り、彼女の選択の痛みをひねった。

「真治……」彼女はささやき、声が震え、罪悪感とショックが混ざりながら。

「あ、はい。三井真治——あなたの最悪の悪夢よ」彼はカックルし、調子に残酷な楽しさが切り抜けながら。

さゆりの息が喉に詰まり、彼女の心が競った。「あなたは何が欲しいの？」彼女は聞き、彼女の声が彼女の感じる恐れより安定していた。

彼はさらに近づき、彼らの間の距離が縮まりながら彼女の周りの影が閉じ込めのように感じた。あの瞬間、彼女は彼女の過去の決定の結果に直面し、彼女の人生が彼女の選択の複雑な網に永遠に捕らえられたのをわかった。

「あなたはこれをしなくていいわ」彼女は言い、彼女の心臓が胸で鳴りながら懇願した。「別の方法を見つけるわ」

「別の方法？」彼は調子に不信が染まってエコーした。「別の方法はないわ、さゆり。あなたはあなたの選択をしたわ、そして今あなたはその結果に直面するわ」

彼はさらに一歩近づき、彼女の周りの部屋が閉じ込めのように感じ、彼女は彼の冷たい目に直視し、彼女の過去の間違いの反映——彼女の人生を永遠に変える運命の決定の瀬戸際に立っているのをわかった。

「リョウ！ 吉樹！」真治が彼の筋肉を招いた。彼らはドアを通過して爆発的に入り、さゆりを楽しむ瞬間から彼女にスペースを許さない力で彼女を掴み、パニックが彼女を通り抜け、彼女は足を蹴り叫んだが、彼女の叫びは薄暗いパラーの抑圧的な雰囲気飲み込まれた。あの残酷な瞬間、一人の男が彼女の顔を強く叩き、彼女を沈黙へショックした。彼女の世界がぼやけ始め、彼女は彼女の状況の厳しい現実が彼女に降りかかりながら意識を失うのを感じた。

彼らは彼女をマッサージテーブルに押しつけ、彼女の肌に押しつける冷たい表面が彼女に現実を思い出させた。彼女は深い絶望を感じ、真治がベルトをほどくのを見、彼の唇にひねくれたニヤリが曲がりながら、彼女の心臓が彼女の胸で鳴った。絶望が彼女の喉を爪で搔き、彼女は暗闇の脅威に抵抗し、彼女の人生の次の章が彼女の選択の複雑な網に永遠に捕らえられたのをわかった。

第49章

さゆりはポイペトでの日常に慣れ、コンパウンドの活気あるエネルギーが彼女の周りをブンブン音を立てていた。プノンペンでの3週間の厳しい訓練の後、移行は興奮的で疲労的だった。

彼女の勤務時間は午前7時から午後5時までで、厳格な規則のためコンパウンドから全く出られなかった。それでも食べ物は驚くほどおいしく、スタッフ——全員日本人男性——間の仲間意識が彼女の毎日に独特の風味を加えた。彼らは仕事後にしばしば飲み会をし、笑い声とグラスのカチンという音がホールに響き、彼女が家と呼んでいた日本の生活の心地よい思い出だった。

彼女がタスクをこなすにつれ、さゆりはリチャードを恋しく思うのを考えるのに忙しすぎた。長い時間は厳しかったが、日本人労働者として馴染みの領土だった。ウェブデザインの前仕事と比べて、言語の壁とパフォーマンスのプレッシャーで窒息的に感じたところ、ここは新鮮な空気のように感じた。お金は優れていて、彼女は毎日英語で苦労せずに日本語を話す容易さを楽しんだ。

愛はただのもう一つの依存よ、彼女はある夕方仲間と冷たいビールを飲む時に考えた。それは奇妙な慰めで、彼女が一度彼女を消費した感情のハイとローの両方から自分を切り離せる方法だった。あなたが愛にある快楽薬とホルモンを断ち切ったら、その習慣をキックできるわよ、彼女は自分に言った。

彼女は一部の夜にリチャードを考えていたが、彼らのテキストは一度共有した親密さを欠いたより無菌的なものへ変わった。メッセージは愛の表現より友達のチェックインのように感じた。

仕事はどう？

食べ物はおいしいわ。

あなたが元気だといいわ。

彼女はリズムに漂い、彼女の新しい生活の安定した脈拍を鏡像した。彼女が仲間と笑い、ルーチンを楽しむにつれ、さゆりは彼女が適応し、一度感じた激情の不在にもかかわらず現在に喜びを見つけているのに気づいた。愛の陶酔的なラッシュが薄れ、奇妙に心地よい安定感に置き換わった。そして長い間初めて、彼女は自分の中に平和を感じた。

さゆりは計画通り2ヶ月後カンボジアを離れるか疑問に思い始めていた。彼女の日本人同僚の一人がとても可愛く、明らかに彼女に興味があった。彼女はカンボジアにいる間

彼女の忠実についてリチャードにオープンで正直だった。彼らは互いに他の人と寝る許可を与えていた

357

人々、そんな側面は整理された。しかし、中国のボスはコンパウンドで同僚間のセックスについて厳格な規則を持っていた。コンパウンドでセックスして捕まった人は1ヶ月の給料を差し引かれるわ。だから彼女の身体的ニーズは彼女が1ヶ月無料で働くのを喜んでするポイントへまだ達していなかったが、誘惑は毎日増大していた。

リチャードは一方、彼女ほど上手く対処していないようだった。先日の夜、彼は彼女に週末ポイペトへ来たら会えるかとテキストした。彼女はノーと言った。彼は議論しなかったが、彼女は彼が深く失望しているのがわかった。彼女がカンボジアで2ヶ月だけ働くという元の決定に固執するか、ノンパイへ戻るかを決めるまであと数週間だけだった。すでに、タクヤ——今バンコクに戻った——が彼女に毎日テキストし、彼女の決定を尋ねていた。それはタクヤの責任でカンボジアで働く日本人市民をリクルートし、彼はバンコクのスクンビットとプロンチットの日本人レストランで多くの時間を過ごした。

さゆりは彼女がコンパウンドの唯一の他の女性、50代の日本人女性と共有する小さな部屋のベッドに横になり、彼女を尊敬した。彼女のルームメイトの敬意ある性質を評価した；彼女の旅の間様々なホステルで出会ったバックパッカーと違って、この女性はさゆりのプライバシーと静かな時間を価値した。彼らは両方清潔の暗黙の規則に従い、ドアで靴を脱ぎ、数日ごとに寝具を洗った。それは穏やかな雰囲気を作り、コンパウンドの賑やかなルーチンの中の小さな聖域だった。

さゆりは脈打つ頭痛で目覚め、もう一つの金曜日の夜の祝賀の残りが彼女の心に渦巻いた。彼女がベッドに横になるにつれ、彼女は彼女の二日酔いを彼女が経験した喜びの必要なバランスとして合理化せずにはいられなかった——冷たいビールの上に共有した笑い仲間とのいちゃつき。彼女は自分に柔らかくクスクス笑い、人生のすべてが楽しく感じるものがコスト付きで来るのを認識した——彼女の頭の痛みか、あの瞬間の儚い性質か。あのスリル——男の注意と仲間意識の温かさ——は彼らの価格を持っていた——そして今日、その価格は前の夜の過度な放縦の鈍く持続的な思い出だった。

彼女が天井を見上げ、彼女は一人で横になり、この数少ない瞬間のうちの一つでリチャードを考えるのを許した。彼女はベッドで彼に抱きつくのを恋しく思い、彼女の隣の彼の体の温かさ、夜の静けさの共有された息。ポイペトでは猫すら抱きつけるものがなく、彼女の人生の両方が馴染みがあり孤立的だったコンパウンドの静かなブーン音だけ。

彼女はまだポイペトに留まるかノンパイへ戻るかを決めていなかった。給料がそんなにおいしくなかったら、彼女はすでにバッグを詰めていたのを知っていた。

彼女の悩みの一点は自由の欠如だった——彼女がノンパイの周りを長い散歩をするのを好んだ、彼女の自分の時間を働ける能力、制限なしに彼女の顔に太陽を感じる。今、コンパウンドは刑務所のように感じ始めていた——いい食べ物と豊富なアルコールのあるVIP刑務所だが、それでも檻。それでも彼女の落ち着かなさにもかかわらず、さゆりはもう一ヶ月働くへ傾き、彼女が家からできる理想的な仕事を探す間財政のクッションを築くのを望んだ。

ノンパイはタイで彼女の本当の家のように感じ、彼女はリチャードと別れるつもりはなかった。それでも疑念が忍び寄った。彼女が戻ったらスパークはまだある？ もし彼女が戻ったら？ 人生は予測不能で、クソが起きるわ、そして彼女はそれをあまりにもよく知っていた。彼女が彼女の側へ転がるにつれ、これらの考えが彼女を悩ませ、彼女を不安にした。

彼女の不安に加えて、彼女は最後の2日間娘のナオミに連絡できなかった事実だった。彼女はKGU大学で交換プログラムに登録し、さゆりは彼女がコースが始まる前に寮へ落ち着くために横浜の共有アパートから神戸へすぐに旅行するのを知っていた。さゆりはあまり心配していなかった——まだ。彼らはしばしばコミュニケーションしたが、常に毎日じゃなかった。ナオミはおそらく旅行中で、さゆりはすぐに彼女から聞くのを期待した。

彼女の考えから自分を気晴らしするため、彼女はNetflixでウィッチャーのエピソードを見ることにした。ヘンリー・カヴィルは彼女の世代のジョン・トラボルタだった、彼女は彼が彼女にショーが彼女をファンにしたのは何かを聞いた時彼に言った。彼はファンタジーよりアクションとコメディが好きで、彼らが一緒に住んでいた時彼は多くの夜をNetflixでスタンダップコメディアンを見ながら過ごした。

「人生は真剣すぎて、笑いは最良の薬よ」彼は一度彼女に言った。

さゆりは彼女の部屋の薄暗い光でベッドに横になり、ラップトップを太ももに置いて彼女のNetflixシリーズの最新エピソードに没頭した。画面の馴染みの輝きは心地よく、コンパウンドの制限からの小さな逃避だった。

彼女が物語に深く沈むちょうどその時、彼女の電話がピンし、瞬間的な平穩を破った。ナオミカリチャードだと思い、彼女はベッドから素早く拾い上げ、彼女の心がメッセージの期待で競った。ロックを解除し、彼女はナオミの電話からのLINE通知を見た、

さゆりちゃん。今誰と一緒にいるか当てて？

あの謎めいたメッセージが彼女の背中を震えさせ、彼女の中に不穏な冷気が忍び寄った。

これは誰？ 彼女は熱狂的にタイプし、彼女の指先が彼女の言葉の緊急さが彼女の胃にプールする恐れを払えるようにタップした。

古い友達よ、返事が来、彼女の心にダガーのように感じる三つの笑い絵文字で区切られた。

さゆりの心が競った。誰かがナオミの電話を手に入れ、含意が彼女をアラームの状態へ螺旋させた。この人は誰で、何をしたいの？ 彼女は彼らが善意じゃないのを想像できたただけだった。私は何をするの？ 彼女は考え、彼女の心臓が胸で鳴った。

私の娘と話させて、彼女は熱狂的にテキストし、彼女の息が彼女の送信を押すにつれ引かかった。

今、なぜそれをさせてあげるの、さゆりちゃん？ 返事が嘲笑で滴り落ちて来た。

彼女がOKか知る必要があるわ、さゆりは持続し、彼女の指が震えた。

彼女は完全に安全よ、さゆりちゃん。なぜ私が自分の娘を傷つけるの！！

あの冷たい返事が彼女の静脈を通して氷水のように流れ、彼女はスクリーンから後ずさり、彼女の心が最悪ケースのシナリオで満ちた。恐れが彼女の喉を爪で搔き、彼女はコンパウンドの壁が閉じ込めのように感じた。彼女は行動し、何が起きているかを発見し、ナオミの安全を確かめる必要があった。でも不確実さの重みが彼女の上に重く、毎秒が永遠のように感じた。絶望が彼女を燃料し、彼女は彼女の次の動きを考え、彼女はこの不安定な状況で注意深く踏む必要があるのを知っていた。

それは一人だけだった。彼女は瞬間止まり、返事する前に自分を落ち着かせた。彼女は落ち着きを保たなきゃ。彼女の娘は危険だった。考えろさゆり！

私はあなたが何をしたいか協力するわけど、まずナオミの声を聞く必要があるわ。それはシンプルなリクエストよ、彼女は最終的にテキストし、協力の意志を表現した。

応答なしの苦しい一分後、彼女の電話が鳴り、彼女をびっくりさせた。彼女は素早く緑のボタンを押し。

「お母さん！ 神様ありがとう、電話に出てくれた！」ナオミは叫び、調子が熱狂的だった。「私は大丈夫だけど、注意深く聞いて。私は誰かと一緒に——シンジって呼ぶ男。彼と他の二人の男が通りから私を誘拐し、目隠しした——私がどこにいるかわからないし、彼が何をしたいかわからないわ。彼は奇妙に振る舞ってるし、怖いわ」

短い間が続き、ナオミが震える息を取った。「お願い、パニックにならないで。私は彼があなたを使って私に近づこうとしてると思うわ。ただ約束して、突然の動きをしたり無謀なことをしたりしないで」

ナオミの声が柔らかくなり、脆弱性が突破した。

「あなたが恋しいわ、お母さん。私はあなたと一緒にいられたらいいのに。ただ……お願い、注意して。何も起きてほしくないわ……」そして彼女は去り、もう一つの声がラインに来、彼女の悪夢でまだ聞く声。

「彼女は聞こえる通り元気よ」シンジの声がざらざらし、無意識にさゆりを震えさせた。さゆりは電話をきつく握り、額に汗の玉が形成され、喉がトーストのように乾いた。

「何が欲しいの、シンジ？」彼女は恐れと怒りの混ざりで震える声で聞いた。

ナオミがシンジが誰かわからない事実が彼女を蝕んだ。彼らの短い会話中の彼女の娘の話し方が混乱を示した；彼女はおそらく何かの狂った男が彼女を誘拐したと思い、彼らの間のひねくれたつながりを完全に知らない。さゆりはナオミに彼女の父親はひとりという男で、彼女が生まれる直前に車事故で死んだと話した。

2002年のあの運命の日——シンジが彼の二人のヘンチマンとマッサージパーラーへよたよた入ってきた瞬間——の記憶が戻った。それは彼女の人生の最悪の日で、彼女を混沌と恐れの世界へ突き落とした。

シンジに残酷にレイプされた後、彼女は彼のために働くのを渋々同意した、彼女が無力に感じた状況に捕らえられた。でも彼女がすぐに妊娠したのを発見した時、すべてが変わった。さゆりは彼女が彼女を嫌う男の残酷な攻撃の産物でも彼女の赤ちゃんを中絶することを一度も考えなかった。

ほとんどの若い女の子のように、彼女はいい男と結婚し、家族を始め、幸せに生きるのを夢見た。でも一度ヤクザのマッサージパーラーの煉獄に捕らえられたら、あの夢は消えた。ナオミはシンジじゃなく、これのどれも彼女の過ちじゃなかった。

一度さゆりが妊娠した後、彼女の母性本能が前へ湧き上がり、彼女は彼女の子にまともな育ちを提供するためにすべてを犠牲するのを強制した。自由になるのを必死で、さゆりは真夜中に逃げ、服とトイレタリーの詰まったバックパックだけを持って南房総へ電車に乗った。彼女はヤクザが彼女をそこで見つけないのを望み、新しい町の匿名性に避難を求めた。最初の数夜は厳しかったが、彼女はラーメンショップで仕事を見つけ、ナオミが2003年に地元の公立病院で生まれた時日本の素晴らしい医療システムに感謝した。

7年間、さゆりは娘に必要なすべてを提供するために自分を捧げ、ナオミにすべてを与えるために関係と親密さを放棄した。彼らの絆は強く、シングルペアレントの課題を通じたものだった。それでも南房総の年配住民からの未婚の母親をスティグマ化する higaisha として——ただの非難の視線は彼女の決意を燃料しただけだった。

「あなたに苦しんでほしいわ」シンジの返事が来、「あなたが私に引き起こしたすべての痛みを後悔してほしいわ。私はあなたの幸せを取り去りたいわ——あなたが私のを取り去ったように！」

シンジの言葉にさゆりは冷え、彼女は彼の冷たい目に直視し、彼女の過去の間違いの反映——彼女の人生を永遠に変える運命の決定の瀬戸際に立っているのをわかった。

「シンジ、私たちの間に起きたことはナオミに関わらないわ。彼女は生まれてもいなかったわ。お願い、彼女を放して！ 私たちはこれを決着つける方法を見つけられるわ——二人のみで！ お願い！」さゆりは涙でほとんどで懇願した。

「そうしないと思うわ。私は娘をもっとよく知るのを楽しみにしてるわ。ただあなたにあなたの美しい娘と私がこれからすべて一緒にやるのを知らせたと思ったわ。私たちは絆を築くわ。私は彼女が彼女の父親を知るのをかなり喜ぶのは確かだわ」シンジは皮肉で言い、すでにさゆりの心へ突き刺した言葉のナイフをひねった。彼女は電話を握りながら彼女の耳にエコーするシンジの冷たい笑いを聞き。

「お願い、シンジ」彼女は声から絶望がこぼれ落ちて懇願した。「彼女を放して。彼女はただの子供よ。彼女はあなたに何もしてないわ！」

「おお、しかし彼女は私の娘よ」彼は調子にひねくれた喜びで返事した。「そしてあなたは決して教えてくれなかったわ。あなたは彼女を私から隠したわ。さようならさゆりちゃん！」

彼女が返事する前に、ラインは死んだ。さゆりは不信で彼女の電話を凝視し、パニックが彼女を通り抜けた。彼女は深呼吸し、自分を安定させようと戦い、素早くタクヤの番号をダイヤルし、涙が目を刺した。

「タクヤ！ あなたの助けが必要！ シンジがナオミを誘拐したわ！ 私は何をするかわからないわ！ 私は……」

「ゆっくり、さゆりちゃん！ 息を取って！ すべてを最初から教えて」タクヤの声は落ち着き、彼女のパニックの嵐の命綱だった。

さゆりはすべてを説明し、冷たい電話とシンジの残酷な笑いを詳述した。彼女が話すにつれ、彼女はタクヤの安定した存在が彼女を混沌を通して導くを感じた。

「お母さん！ 神様ありがとう、電話に出てくれた！」ナオミは叫び、調子が熱狂的だった。「私は大丈夫だけど、注意深く聞いて。私は誰かと一緒に——シンジって呼ぶ男。彼と他の二人の男が通りから私を誘拐し、目隠しした——私がどこにいるかわからないし、彼が何をしたいかわからないわ。彼は奇妙に振る舞ってるし、怖いわ」

短い間が続き、ナオミが震える息を取った。「お願い、パニックにならないで。私は彼があなたを使って私に近づこうとしてると思うわ。ただ約束して、突然の動きをしたり無謀なことをしたりしないで」

ナオミの声が柔らかくなり、脆弱性が突破した。

「あなたが恋しいわ、お母さん。私はあなたと一緒にいられたらいいのに。ただ……お願い、注意して。何も起きてほしくないわ……」そして彼女は去り、もう一つの声がラインに来、彼女の悪夢でまだ聞く声。

「彼女は聞こえる通り元気よ」シンジの声がざらざらし、無意識にさゆりを震えさせた。さゆりは電話をきつく握り、額に汗の玉が形成され、喉がトーストのように乾いた。

「何が欲しいの、シンジ？」彼女は恐れと怒りの混ざりで震える声で聞いた。

ナオミがシンジが誰かわからない事実が彼女を蝕んだ。彼らの短い会話中の彼女の娘の話し方が混乱を示した；彼女はおそらく何かの狂った男が彼女を誘拐したと思い、彼らの間のひねくれたつながりを完全に知らない。さゆりはナオミに彼女の父親はひとりという男で、彼女が生まれる直前に車事故で死んだと話した。

2002年のあの運命の日——シンジが彼の二人のヘンチマンとマッサージパーラーへよたよた入ってきた瞬間——の記憶が戻った。それは彼女の人生の最悪の日で、彼女を混沌と恐れの世界へ突き落とした。

シンジに残酷にレイプされた後、彼女は彼のために働くのを渋々同意した、彼女が無力に感じた状況に捕らえられた。でも彼女がすぐに妊娠したのを発見した時、すべてが変わった。さゆりは彼女が彼女を嫌う男の残酷な攻撃の産物でも彼女の赤ちゃんを中絶することを一度も考えなかった。

ほとんどの若い女の子のように、彼女はいい男と結婚し、家族を始め、幸せに生きるのを夢見た。でも一度ヤクザのマッサージパーラーの煉獄に捕らえられたら、あの夢は消えた。ナオミはシンジじゃなく、これのどれも彼女の過ちじゃなかった。

一度さゆりが妊娠した後、彼女の母性本能が前へ湧き上がり、彼女は彼女の子にまともな育ちを提供するためにすべてを犠牲するのを強制した。自由になるのを必死で、さゆりは真夜中に逃げ、服とトイレタリーの詰まったバックパックだけを持って南房総へ電

車に乗った。彼女はヤクザが彼女をそこで見つけないのを望み、新しい町の匿名性に避難を求めた。最初の数夜は厳しかったが、彼女はラーメンショップで仕事を見つけ、ナオミが2003年に地元の公立病院で生まれた時日本の素晴らしい医療システムに感謝した。

7年間、さゆりは娘に必要なすべてを提供するために自分を捧げ、ナオミにすべてを与えるために関係と親密さを放棄した。彼らの絆は強く、シングルペアレントの課題を通じたものだった。それでも南房総の年配住民からの未婚の母親をスティグマ化するhigaishaとして——ただの非難の視線は彼女の決意を燃料しただけだった。

「あなたに苦しんでほしいわ」シンジの返事が来、「あなたが私に引き起こしたすべての痛みを後悔してほしいわ。私はあなたの幸せを取り去りたいわ——あなたが私のを取り去ったように！」

シンジの言葉にさゆりは冷え、彼女は彼の冷たい目に直視し、彼女の過去の間違いの反映——彼女の人生を永遠に変える運命の決定の瀬戸際に立っているのをわかった。

「お願い、シンジ」彼女は声から絶望がこぼれ落ちて懇願した。「彼女を放して。彼女はただの子供よ。彼女はあなたに何もしてないわ！」

「おお、しかし彼女は私の娘よ」彼は調子にひねくれた喜びで返事した。「そしてあなたは決して教えてくれなかったわ。あなたは彼女を私から隠したわ。さようならさゆりちゃん！」

彼女が返事する前に、ラインは死んだ。さゆりは不信で彼女の電話を凝視し、パニックが彼女を通り抜けた。彼女は深呼吸し、自分を安定させようと戦い、素早くタクヤの番号をダイヤルし、涙が目を刺した。

「タクヤ！ あなたの助けが必要！ シンジがナオミを誘拐したわ！ 私は何をするかわからないわ！ 私は……」

「ゆっくり、さゆりちゃん！ 息を取って！ すべてを最初から教えて」タクヤの声は落ち着き、彼女のパニックの嵐の命綱だった。

さゆりはすべてを説明し、冷たい電話とシンジの残酷な笑いを詳述した。彼女が話すにつれ、彼女はタクヤの安定した存在が彼女を混沌を通して導くを感じた。

「お母さん！ 神様ありがとう、電話に出てくれた！」ナオミは叫び、調子が熱狂的だった。「私は大丈夫だけど、注意深く聞いて。私は誰かと一緒に——シンジって呼ぶ男。彼と他の二人の男が通りから私を誘拐し、目隠しした——私がどこにいるかわからないし、彼が何をしたいかわからないわ。彼は奇妙に振る舞ってるし、怖いわ」

短い間が続き、ナオミが震える息を取った。「お願い、パニックにならないで。私は彼があなたを使って私に近づこうとしてると思うわ。ただ約束して、突然の動きをしたり無謀なことをしたりしないで」

ナオミの声が柔らかくなり、脆弱性が突破した。

「あなたが恋しいわ、お母さん。私はあなたと一緒にいられたらいいのに。ただ……お願い、注意して。何も起きてほしくないわ……」そして彼女は去り、もう一つの声がラインに来、彼女の悪夢でまだ聞く声。

「彼女は聞こえる通り元気よ」シンジの声がざらざらし、無意識にさゆりを震えさせた。さゆりは電話をきつく握り、額に汗の玉が形成され、喉がトーストのように乾いた。

「何が欲しいの、シンジ？」彼女は恐れと怒りの混ざりで震える声で聞いた。

ナオミがシンジが誰かわからない事実が彼女を蝕んだ。彼らの短い会話中の彼女の娘の話し方が混乱を示した；彼女はおそらく何かの狂った男が彼女を誘拐したと思い、彼らの間のひねくれたつながりを完全に知らない。さゆりはナオミに彼女の父親はひとりという男で、彼女が生まれる直前に車事故で死んだと話した。

2002年のあの運命の日——シンジが彼の二人のヘンチマンとマッサージパーラーへよたよた入ってきた瞬間——の記憶が戻った。それは彼女の人生の最悪の日で、彼女を混沌と恐れの世界へ突き落とした。

シンジに残酷にレイプされた後、彼女は彼のために働くのを渋々同意した、彼女が無力に感じた状況に捕らえられた。でも彼女がすぐに妊娠したのを発見した時、すべてが変わった。さゆりは彼女が彼女を嫌う男の残酷な攻撃の産物でも彼女の赤ちゃんを中絶することを一度も考えなかった。

ほとんどの若い女の子のように、彼女はいい男と結婚し、家族を始め、幸せに生きるのを夢見た。でも一度ヤクザのマッサージパーラーの煉獄に捕らえられたら、あの夢は消えた。ナオミはシンジじゃなく、これのどれも彼女の過ちじゃなかった。

一度さゆりが妊娠した後、彼女の母性本能が前へ湧き上がり、彼女は彼女の子にまともな育ちを提供するためにすべてを犠牲するのを強制した。自由になるのを必死で、さゆりは真夜中に逃げ、服とトイレタリーの詰まったバックパックだけを持って南房総へ電車に乗った。彼女はヤクザが彼女をそこで見つけないのを望み、新しい町の匿名性に避難を求めた。最初の数夜は厳しかったが、彼女はラーメンショップで仕事を見つけ、ナオミが2003年に地元の公立病院で生まれた時日本の素晴らしい医療システムに感謝した。

7年間、さゆりは娘に必要なすべてを提供するために自分を捧げ、ナオミにすべてを与えるために関係と親密さを放棄した。彼らの絆は強く、シングルペアレントの課題を通じたものだった。それでも南房総の年配住民からの未婚の母親をスティグマ化する higaisha として——ただの非難の視線は彼女の決意を燃料しただけだった。

「あなたに苦しんでほしいわ」シンジの返事が来、「あなたが私に引き起こしたすべての痛みを後悔してほしいわ。私はあなたの幸せを取り去りたいわ——あなたが私のを取り去ったように！」

シンジの言葉にさゆりは冷え、彼女は彼の冷たい目に直視し、彼女の過去の間違いの反映——彼女の人生を永遠に変える運命の決定の瀬戸際に立っているのをわかった。

「お願い、シンジ」彼女は声から絶望がこぼれ落ちて懇願した。「彼女を放して。彼女はただの子供よ。彼女はあなたに何もしてないわ！」

「おお、しかし彼女は私の娘よ」彼は調子にひねくれた喜びで返事した。「そしてあなたは決して教えてくれなかったわ。あなたは彼女を私から隠したわ。さようならさゆりちゃん！」

彼女が返事する前に、ラインは死んだ。さゆりは不信で彼女の電話を凝視し、パニックが彼女を通り抜けた。彼女は深呼吸し、自分を安定させようと戦い、素早くタクヤの番号をダイヤルし、涙が目を刺した。

「タクヤ！ あなたの助けが必要！ シンジがナオミを誘拐したわ！ 私は何をするかわからないわ！ 私は……」

「ゆっくり、さゆりちゃん！ 息を取って！ すべてを最初から教えて」タクヤの声は落ち着き、彼女のパニックの嵐の命綱だった。

さゆりはすべてを説明し、冷たい電話とシンジの残酷な笑いを詳述した。彼女が話すにつれ、彼女はタクヤの安定した存在が彼女を混沌を通して導くのを感じた。

「お母さん！ 神様ありがとう、電話に出てくれた！」ナオミは叫び、調子が熱狂的だった。「私は大丈夫だけど、注意深く聞いて。私は誰かと一緒に——シンジって呼ぶ男。彼と他の二人の男が通りから私を誘拐し、目隠しした——私がどこにいるかわからないし、彼が何をしたいかわからないわ。彼は奇妙に振る舞ってるし、怖いわ」

短い間が続き、ナオミが震える息を取った。「お願い、パニックにならないで。私は彼があなたを使って私に近づこうとしてると思うわ。ただ約束して、突然の動きをしたり無謀なことをしたりしないで」

ナオミの声が柔らかくなり、脆弱性が突破した。

「あなたが恋しいわ、お母さん。私はあなたと一緒にいられたらいいのに。ただ……お願い、注意して。何も起きてほしくないわ……」そして彼女は去り、もう一つの声がラインに来、彼女の悪夢でまだ聞く声。

「彼女は聞こえる通り元気よ」シンジの声がざらざらし、無意識にさゆりを震えさせた。さゆりは電話をきつく握り、額に汗の玉が形成され、喉がトーストのように乾いた。

「何が欲しいの、シンジ？」彼女は恐れと怒りの混ざりで震える声で聞いた。

ナオミがシンジが誰かわからない事実が彼女を蝕んだ。彼らの短い会話中の彼女の娘の話し方が混乱を示した；彼女はおそらく何かの狂った男が彼女を誘拐したと思い、彼らの間のひねくれたつながりを完全に知らない。さゆりはナオミに彼女の父親はヒトリという男で、彼女が生まれる直前に車事故で死んだと話した。

2002年のあの運命の日——シンジが彼の二人のヘンチマンとマッサージパーラーへよたよた入ってきた瞬間——の記憶が戻った。それは彼女の人生の最悪の日で、彼女を混沌と恐れの世界へ突き落とした。

シンジに残酷にレイプされた後、彼女は彼のために働くのを渋々同意した、彼女が無力に感じた状況に捕らえられた。でも彼女がすぐに妊娠したのを発見した時、すべてが変わった。さゆりは彼女が彼女を嫌う男の残酷な攻撃の産物でも彼女の赤ちゃんを中絶することを一度も考えなかった。

ほとんどの若い女の子のように、彼女はいい男と結婚し、家族を始め、幸せに生きるのを夢見た。でも一度ヤクザのマッサージパーラーの煉獄に捕らえられたら、あの夢は消えた。ナオミはシンジじゃなく、これのどれも彼女の過ちじゃなかった。

一度さゆりが妊娠した後、彼女の母性本能が前へ湧き上がり、彼女は彼女の子にまともな育ちを提供するためにすべてを犠牲するのを強制した。自由になるのを必死で、さゆりは真夜中に逃げ、服とトイレタリーの詰まったバックパックだけを持って南房総へ電車に乗った。彼女はヤクザが彼女をそこで見つけないのを望み、新しい町の匿名性に避難を求めた。最初の数夜は厳しかったが、彼女はラーメンショップで仕事を見つけ、ナオミが2003年に地元の公立病院で生まれた時日本の素晴らしい医療システムに感謝した。

7年間、さゆりは娘に必要なすべてを提供するために自分を捧げ、ナオミにすべてを与えるために関係と親密さを放棄した。彼らの絆は強く、シングルペアレントの課題を通じたものだった。それでも南房総の年配住民からの未婚の母親をスティグマ化する *higaisha* として——ただの非難の視線は彼女の決意を燃料しただけだった。

「あなたに苦しんでほしいわ」シンジの返事が来、「あなたが私に引き起こしたすべての痛みを後悔してほしいわ。私はあなたの幸せを取り去りたいわ——あなたが私のを取り去ったように！」

シンジの言葉にさゆりは冷え、彼女は彼の冷たい目に直視し、彼女の過去の間違いの反映——彼女の人生を永遠に変える運命の決定の瀬戸際に立っているのをわかった。

「お願い、シンジ」彼女は声から絶望がこぼれ落ちて懇願した。「彼女を放して。彼女はただの子供よ。彼女はあなたに何もしてないわ！」

「おお、しかし彼女は私の娘よ」彼は調子にひねくれた喜びで返事した。「そしてあなたは決して教えてくれなかったわ。あなたは彼女を私から隠したわ。さようならさゆりちゃん！」

彼女が返事する前に、ラインは死んだ。さゆりは不信で彼女の電話を凝視し、パニックが彼女を通り抜けた。彼女は深呼吸し、自分を安定させようと戦い、素早くタクヤの番号をダイヤルし、涙が目を刺した。

「タクヤ！ あなたの助けが必要！ シンジがナオミを誘拐したわ！ 私は何をするかわからないわ！ 私は……」

「ゆっくり、さゆりちゃん！ 息を取って！ すべてを最初から教えて」タクヤの声は落ち着き、彼女のパニックの嵐の命綱だった。

さゆりはすべてを説明し、冷たい電話とシンジの残酷な笑いを詳述した。彼女が話すにつれ、彼女はタクヤの安定した存在が彼女を混沌を通して導くを感じた。

「お母さん！ 神様ありがとう、電話に出てくれた！」ナオミは叫び、調子が熱狂的だった。「私は大丈夫だけど、注意深く聞いて。私は誰かと一緒に——シンジって呼ぶ男。彼と他の二人の男が通りから私を誘拐し、目隠しした——私がどこにいるかわからないし、彼が何をしたいかわからないわ。彼は奇妙に振る舞ってるし、怖いわ」

短い間が続き、ナオミが震える息を取った。「お願い、パニックにならないで。私は彼があなたを使って私に近づこうとしてると思うわ。ただ約束して、突然の動きをしたり無謀なことをしたりしないで」

ナオミの声が柔らかくなり、脆弱性が突破した。

「あなたが恋しいわ、お母さん。私はあなたと一緒にいられたらいいのに。ただ……お願い、注意して。何も起きてほしくないわ……」そして彼女は去り、もう一つの声がラインに来、彼女の悪夢でまだ聞く声。

「彼女は聞こえる通り元気よ」シンジの声がざらざらし、無意識にさゆりを震えさせた。さゆりは電話をきつく握り、額に汗の玉が形成され、喉がトーストのように乾いた。

「何が欲しいの、シンジ？」彼女は恐れと怒りの混ざりで震える声で聞いた。

ナオミがシンジが誰かわからない事実が彼女を蝕んだ。彼らの短い会話中の彼女の娘の話し方が混乱を示した；彼女はおそらく何かの狂った男が彼女を誘拐したと思い、彼らの間のひねくれたつながりを完全に知らない。さゆりはナオミに彼女の父親はひとりという男で、彼女が生まれる直前に車事故で死んだと話した。

2002年のあの運命の日——シンジが彼の二人のヘンチマンとマッサージパーラーへよたよた入ってきた瞬間——の記憶が戻った。それは彼女の人生の最悪の日で、彼女を混沌と恐れの世界へ突き落とした。

シンジに残酷にレイプされた後、彼女は彼のために働くのを渋々同意した、彼女が無力に感じた状況に捕らえられた。でも彼女がすぐに妊娠したのを発見した時、すべてが変わった。さゆりは彼女が彼女を嫌う男の残酷な攻撃の産物でも彼女の赤ちゃんを中絶することを一度も考えなかった。

ほとんどの若い女の子のように、彼女はいい男と結婚し、家族を始め、幸せに生きるのを夢見た。でも一度ヤクザのマッサージパーラーの煉獄に捕らえられたら、あの夢は消えた。ナオミはシンジじゃなく、これのどれも彼女の過ちじゃなかった。

一度さゆりが妊娠した後、彼女の母性本能が前へ湧き上がり、彼女は彼女の子にまともな育ちを提供するためにすべてを犠牲するのを強制した。自由になるのを必死で、さゆりは真夜中に逃げ、服とトイレタリーの詰まったバックパックだけを持って南房総へ電車に乗った。彼女はヤクザが彼女をそこで見つけないのを望み、新しい町の匿名性に避難を求めた。最初の数夜は厳しかったが、彼女はラーメンショップで仕事を見つけ、ナオミが2003年に地元の公立病院で生まれた時日本の素晴らしい医療システムに感謝した。

7年間、さゆりは娘に必要なすべてを提供するために自分を捧げ、ナオミにすべてを与えるために関係と親密さを放棄した。彼らの絆は強く、シングルペアレントの課題を通じたものだった。それでも南房総の年配住民からの未婚の母親をスティグマ化する *higaisha* として——ただの非難の視線は彼女の決意を燃料しただけだった。

「あなたに苦しんでほしいわ」シンジの返事が来、「あなたが私に引き起こしたすべての痛みを後悔してほしいわ。私はあなたの幸せを取り去りたいわ——あなたが私のを取り去ったように！」

シンジの言葉にさゆりは冷え、彼女は彼の冷たい目に直視し、彼女の過去の間違いの反映——彼女の人生を永遠に変える運命の決定の瀬戸際に立っているのをわかった。

「お願い、シンジ」彼女は声から絶望がこぼれ落ちて懇願した。「彼女を放して。彼女はただの子供よ。彼女はあなたに何もしてないわ！」

「おお、しかし彼女は私の娘よ」彼は調子にひねくれた喜びで返事した。「そしてあなたは決して教えてくれなかったわ。あなたは彼女を私から隠したわ。さようならさゆりちゃん！」

彼女が返事する前に、ラインは死んだ。さゆりは不信で彼女の電話を凝視し、パニックが彼女を通り抜けた。彼女は深呼吸し、自分を安定させようと戦い、素早くタクヤの番号をダイヤルし、涙が目を刺した。

「タクヤ！ あなたの助けが必要！ シンジがナオミを誘拐したわ！ 私は何をするかわからないわ！ 私は……」

「ゆっくり、さゆりちゃん！ 息を取って！ すべてを最初から教えて」タクヤの声は落ち着き、彼女のパニックの嵐の命綱だった。

さゆりはすべてを説明し、冷たい電話とシンジの残酷な笑いを詳述した。彼女が話すにつれ、彼女はタクヤの安定した存在が彼女を混沌を通して導くを感じた。

「お母さん！ 神様ありがとう、電話に出てくれた！」ナオミは叫び、調子が熱狂的だった。「私は大丈夫だけど、注意深く聞いて。私は誰かと一緒に——シンジって呼ぶ男。彼と他の二人の男が通りから私を誘拐し、目隠しした——私がどこにいるかわからないし、彼が何をしたいかわからないわ。彼は奇妙に振る舞ってるし、怖いわ」

短い間が続き、ナオミが震える息を取った。「お願い、パニックにならないで。私は彼女があなたを使って私に近づこうとしてると思うわ。ただ約束して、突然の動きをしたり無謀なことをしたりしないで」

ナオミの声が柔らかくなり、脆弱性が突破した。

「あなたが恋しいわ、お母さん。私はあなたと一緒にいられたらいいのに。ただ……お願い、注意して。何も起きてほしくないわ……」そして彼女は去り、もう一つの声がラインに来、彼女の悪夢でまだ聞く声。

「彼女は聞こえる通り元気よ」シンジの声がざらざらし、無意識にさゆりを震えさせた。さゆりは電話をきつく握り、額に汗の玉が形成され、喉がトーストのように乾いた。

「何が欲しいの、シンジ？」彼女は恐れと怒りの混ざりで震える声で聞いた。

ナオミがシンジが誰かわからない事実が彼女を蝕んだ。彼らの短い会話中の彼女の娘の話し方が混乱を示した；彼女はおそらく何かの狂った男が彼女を誘拐したと思い、彼らの間のひねくれたつながりを完全に知らない。さゆりはナオミに彼女の父親はヒトリという男で、彼女が生まれる直前に車事故で死んだと話した。

2002年のあの運命の日——シンジが彼の二人のヘンチマンとマッサージパーラーへよたよた入ってきた瞬間——の記憶が戻った。それは彼女の人生の最悪の日で、彼女を混沌と恐れの世界へ突き落とした。

シンジに残酷にレイプされた後、彼女は彼のために働くのを渋々同意した、彼女が無力に感じた状況に捕らえられた。でも彼女がすぐに妊娠したのを発見した時、すべてが変わった。さゆりは彼女が彼女を嫌う男の残酷な攻撃の産物でも彼女の赤ちゃんを中絶することを一度も考えなかった。

ほとんどの若い女の子のように、彼女はいい男と結婚し、家族を始め、幸せに生きるのを夢見た。でも一度ヤクザのマッサージパーラーの煉獄に捕らえられたら、あの夢は消えた。ナオミはシンジじゃなく、これのどれも彼女の過ちじゃなかった。

一度さゆりが妊娠した後、彼女の母性本能が前へ湧き上がり、彼女は彼女の子にまともな育ちを提供するためにすべてを犠牲するのを強制した。自由になるのを必死で、さゆりは真夜中に逃げ、服とトイレタリーの詰まったバックパックだけを持って南房総へ電車に乗った。彼女はヤクザが彼女をそこで見つけないのを望み、新しい町の匿名性に避難を求めた。最初の数夜は厳しかったが、彼女はラーメンショップで仕事を見つけ、ナオミが2003年に地元の公立病院で生まれた時日本の素晴らしい医療システムに感謝した。

7年間、さゆりは娘に必要なすべてを提供するために自分を捧げ、ナオミにすべてを与えるために関係と親密さを放棄した。彼らの絆は強く、シングルペアレントの課題を通じたものだった。それでも南房総の年配住民からの未婚の母親をスティグマ化する higaisha として——ただの非難の視線は彼女の決意を燃料しただけだった。

「あなたに苦しんでほしいわ」シンジの返事が来、「あなたが私に引き起こしたすべての痛みを後悔してほしいわ。私はあなたの幸せを取り去りたいわ——あなたが私のを取り去ったように！」

シンジの言葉にさゆりは冷え、彼女は彼の冷たい目に直視し、彼女の過去の間違いの反映——彼女の人生を永遠に変える運命の決定の瀬戸際に立っているのをわかった。

「お願い、シンジ」彼女は声から絶望がこぼれ落ちて懇願した。「彼女を放して。彼女はただの子供よ。彼女はあなたに何もしてないわ！」

「おお、しかし彼女は私の娘よ」彼は調子にひねくれた喜びで返事した。「そしてあなたは決して教えてくれなかったわ。あなたは彼女を私から隠したわ。さようならさゆりちゃん！」

彼女が返事する前に、ラインは死んだ。さゆりは不信で彼女の電話を凝視し、パニックが彼女を通り抜けた。彼女は深呼吸し、自分を安定させようと戦い、素早くタクヤの番号をダイヤルし、涙が目を刺した。

「タクヤ！ あなたの助けが必要！ シンジがナオミを誘拐したわ！ 私は何をするかわからないわ！ 私は……」

「ゆっくり、さゆりちゃん！ 息を取って！ すべてを最初から教えて」タクヤの声は落ち着き、彼女のパニックの嵐の命綱だった。

さゆりはすべてを説明し、冷たい電話とシンジの残酷な笑いを詳述した。彼女が話すにつれ、彼女はタクヤの安定した存在が彼女を混沌を通して導くのを感じた。

「お母さん！ 神様ありがとうございます、電話に出てくれた！」ナオミは叫び、調子が熱狂的だった。「私は大丈夫だけど、注意深く聞いて。私は誰かと一緒に——シンジって呼ぶ男。彼と他の二人の男が通りから私を誘拐し、目隠しした——私がどこにいるかわからないし、彼が何をしたいかわからないわ。彼は奇妙に振る舞ってるし、怖いわ」

短い間が続き、ナオミが震える息を取った。「お願い、パニックにならないで。私は彼があなたを使って私に近づこうとしてると思うわ。ただ約束して、突然の動きをしたり無謀なことをしたりしないで」

ナオミの声が柔らかくなり、脆弱性が突破した。

「あなたが恋しいわ、お母さん。私はあなたと一緒にいられたらいいのに。ただ……お願い、注意して。何も起きてほしくないわ……」そして彼女は去り、もう一つの声がラインに来、彼女の悪夢でまだ聞く声。

「彼女は聞こえる通り元気よ」シンジの声がざらざらし、無意識にさゆりを震えさせた。さゆりは電話をきつく握り、額に汗の玉が形成され、喉がトーストのように乾いた。

「何が欲しいの、シンジ？」彼女は恐れと怒りの混ざりで震える声で聞いた。

ナオミがシンジが誰かわからない事実が彼女を蝕んだ。彼らの短い会話中の彼女の娘の話し方が混乱を示した；彼女はおそらく何かの狂った男が彼女を誘拐したと思い、彼らの間のひねくれたつながりを完全に知らない。さゆりはナオミに彼女の父親はひとりという男で、彼女が生まれる直前に車事故で死んだと話した。

2002年のあの運命の日——シンジが彼の二人のヘンチマンとマッサージパーラーへよたよた入ってきた瞬間——の記憶が戻った。それは彼女の人生の最悪の日で、彼女を混沌と恐れの世界へ突き落とした。

シンジに残酷にレイプされた後、彼女は彼のために働くのを渋々同意した、彼女が無力に感じた状況に捕らえられた。でも彼女がすぐに妊娠したのを発見した時、すべてが変わった。さゆりは彼女が彼女を嫌う男の残酷な攻撃の産物でも彼女の赤ちゃんを中絶することを一度も考えなかった。

ほとんどの若い女の子のように、彼女はいい男と結婚し、家族を始め、幸せに生きるのを夢見た。でも一度ヤクザのマッサージパーラーの煉獄に捕らえられたら、あの夢は消えた。ナオミはシンジじゃなく、これのどれも彼女の過ちじゃなかった。

一度さゆりが妊娠した後、彼女の母性本能が前へ湧き上がり、彼女は彼女の子にまともな育ちを提供するためにすべてを犠牲するのを強制した。自由になるのを必死で、さゆりは真夜中に逃げ、服とトイレタリーの詰まったバックパックだけを持って南房総へ電車に乗った。彼女はヤクザが彼女をそこで見つけないのを望み、新しい町の匿名性に避難を求めた。最初の数夜は厳しかったが、彼女はラーメンショップで仕事を見つけ、ナオミが2003年に地元の公立病院で生まれた時日本の素晴らしい医療システムに感謝した。

7年間、さゆりは娘に必要なすべてを提供するために自分を捧げ、ナオミにすべてを与えるために関係と親密さを放棄した。彼らの絆は強く、シングルペアレントの課題を通じたものだった。それでも南房総の年配住民からの未婚の母親をスティグマ化するhigaishaとして——ただの非難の視線は彼女の決意を燃料しただけだった。

「あなたに苦しんでほしいわ」シンジの返事が来、「あなたが私に引き起こしたすべての痛みを後悔してほしいわ。私はあなたの幸せを取り去りたいわ——あなたが私のを取り去ったように！」

シンジの言葉にさゆりは冷え、彼女は彼の冷たい目に直視し、彼女の過去の間違いの反映——彼女の人生を永遠に変える運命の決定の瀬戸際に立っているのをわかった。

「お願い、シンジ」彼女は声から絶望がこぼれ落ちて懇願した。「彼女を放して。彼女はただの子供よ。彼女はあなたに何もしてないわ！」

「おお、しかし彼女は私の娘よ」彼は調子にひねくれた喜びで返事した。「そしてあなたは決して教えてくれなかったわ。あなたは彼女を私から隠したわ。さようならさゆりちゃん！」

彼女が返事する前に、ラインは死んだ。さゆりは不信で彼女の電話を凝視し、パニックが彼女を通り抜けた。彼女は深呼吸し、自分を安定させようと戦い、素早くタクヤの番号をダイヤルし、涙が目を刺した。

「タクヤ！ あなたの助けが必要！ シンジがナオミを誘拐したわ！ 私は何をするか分からないわ！ 私は……」

「ゆっくり、さゆりちゃん！ 息を取って！ すべてを最初から教えて」タクヤの声は落ち着き、彼女のパニックの嵐の命綱だった。

さゆりはすべてを説明し、冷たい電話とシンジの残酷な笑いを詳述した。彼女が話すにつれ、彼女はタクヤの安定した存在が彼女を混沌を通して導くのを感じた。

「お母さん！ 神様ありがとうございます、電話に出てくれた！」ナオミは叫び、調子が熱狂的だった。「私は大丈夫だけど、注意深く聞いて。私は誰かと一緒に——シンジって呼ぶ男。彼と他の二人の男が通りから私を誘拐し、目隠しした——私がどこにいるかわからないし、彼が何をしたいかわからないわ。彼は奇妙に振る舞ってるし、怖いわ」

短い間が続き、ナオミが震える息を取った。「お願い、パニックにならないで。私は彼女があなたを使って私に近づこうとしてると思うわ。ただ約束して、突然の動きをしたり無謀なことをしたりしないで」

ナオミの声が柔らかくなり、脆弱性が突破した。

「あなたが恋しいわ、お母さん。私はあなたと一緒にいられたらいいのに。ただ……お願い、注意して。何も起きてほしくないわ……」そして彼女は去り、もう一つの声がラインに来、彼女の悪夢でまだ聞く声。

「彼女は聞こえる通り元気よ」シンジの声がざらざらし、無意識にさゆりを震えさせた。さゆりは電話をきつく握り、額に汗の玉が形成され、喉がトーストのように乾いた。

「何が欲しいの、シンジ？」彼女は恐れと怒りの混ざりで震える声で聞いた。

ナオミがシンジが誰かわからない事実が彼女を蝕んだ。彼らの短い会話中の彼女の娘の話し方が混乱を示した；彼女はおそらく何かの狂った男が彼女を誘拐したと思い、彼らの間のひねくれたつながりを完全に知らない。さゆりはナオミに彼女の父親はひとりという男で、彼女が生まれる直前に車事故で死んだと話した。

2002年のあの運命の日——シンジが彼の二人のヘンチマンとマッサージパーラーへよたよた入ってきた瞬間——の記憶が戻った。それは彼女の人生の最悪の日で、彼女を混沌と恐れの世界へ突き落とした。

シンジに残酷にレイプされた後、彼女は彼のために働くのを渋々同意した、彼女が無力に感じた状況に捕らえられた。でも彼女がすぐに妊娠したのを発見した時、すべてが変わった。さゆりは彼女が彼女を嫌う男の残酷な攻撃の産物でも彼女の赤ちゃんを中絶することを一度も考えなかった。

ほとんどの若い女の子のように、彼女はいい男と結婚し、家族を始め、幸せに生きるのを夢見た。でも一度ヤクザのマッサージパラーの煉獄に捕らえられたら、あの夢は消えた。ナオミはシンジじゃなく、これのどれも彼女の過ちじゃなかった。

一度さゆりが妊娠した後、彼女の母性本能が前へ湧き上がり、彼女は彼女の子にまともな育ちを提供するためにすべてを犠牲するのを強制した。自由になるのを必死で、さゆりは真夜中に逃げ、服とトイレタリーの詰まったバックパックだけを持って南房総へ電車に乗った。彼女はヤクザが彼女をそこで見つけないのを望み、新しい町の匿名性に避難を求めた。最初の数夜は厳しかったが、彼女はラーメンショップで仕事を見つけ、ナオミが2003年に地元の公立病院で生まれた時日本の素晴らしい医療システムに感謝した。

7年間、さゆりは娘に必要なすべてを提供するために自分を捧げ、ナオミにすべてを与えるために関係と親密さを放棄した。彼らの絆は強く、シングルペアレントの課題を通じたものだった。それでも南房総の年配住民からの未婚の母親をスティグマ化する higaisha として——ただの非難の視線は彼女の決意を燃料しただけだった。

「あなたに苦しんでほしいわ」シンジの返事が来、「あなたが私に引き起こしたすべての痛みを後悔してほしいわ。私はあなたの幸せを取り去りたいわ——あなたが私のを取り去ったように！」

シンジの言葉にさゆりは冷え、彼女は彼の冷たい目に直視し、彼女の過去の間違いの反映——彼女の人生を永遠に変える運命の決定の瀬戸際に立っているのをわかった。

「お願い、シンジ」彼女は声から絶望がこぼれ落ちて懇願した。「彼女を放して。彼女はただの子供よ。彼女はあなたに何もしてないわ！」

「おお、しかし彼女は私の娘よ」彼は調子にひねくれた喜びで返事した。「そしてあなたは決して教えてくれなかったわ。あなたは彼女を私から隠したわ。さようならさゆりちゃん！」

彼女が返事する前に、ラインは死んだ。さゆりは不信で彼女の電話を凝視し、パニックが彼女を通り抜けた。彼女は深呼吸し、自分を安定させようと戦い、素早くタクヤの番号をダイヤルし、涙が目を刺した。

「タクヤ！ あなたの助けが必要！ シンジがナオミを誘拐したわ！ 私は何をするか
わからないわ！ 私は……」

「ゆっくり、さゆりちゃん！ 息を取って！ すべてを最初から教えて」タクヤの声は
落ち着き、彼女のパニックの嵐の命綱だった。

さゆりはすべてを説明し、冷たい電話とシンジの残酷な笑いを詳述した。彼女が話すに
つれ、彼女はタクヤの安定した存在が彼女を混沌を通して導くのを感じた。

「お母さん！ 神様ありがとう、電話に出てくれた！」ナオミは叫び、調子が熱狂的だ
った。「私は大丈夫だけど、注意深く聞いて。私は誰かと一緒に——シンジって呼ぶ男
。彼と他の二人の男が通りから私を誘拐し、目隠しした——私がどこにいるかわからな
いし、彼が何をしたいかわからないわ。彼は奇妙に振る舞ってるし、怖いわ」

短い間が続き、ナオミが震える息を取った。「お願い、パニックにならないで。私は彼
があなたを使って私に近づこうとしてると思うわ。ただ約束して、突然の動きをしたり
無謀なことをしたりしないで」

ナオミの声が柔らかくなり、脆弱性が突破した。

「あなたが恋しいわ、お母さん。私はあなたと一緒にいられたらいいのに。ただ……お
願い、注意して。何も起きてほしくないわ……」そして彼女は去り、もう一つの声がラ
インに来、彼女の悪夢でまだ聞く声。

「彼女は聞こえる通り元気よ」シンジの声がざらざらし、無意識にさゆりを震えさせた
。さゆりは電話をきつく握り、額に汗の玉が形成され、喉がトーストのように乾いた。

「何が欲しいの、シンジ？」彼女は恐れと怒りの混ざりで震える声で聞いた。

ナオミがシンジが誰かわからない事実が彼女を蝕んだ。彼らの短い会話中の彼女の娘の
話し方が混乱を示した；彼女はおそらく何かの狂った男が彼女を誘拐したと思い、彼ら
の間のひねくれたつながりを完全に知らない。さゆりはナオミに彼女の父親はヒトリと
いう男で、彼女が生まれる直前に車事故で死んだと話した。

2002年のあの運命の日——シンジが彼の二人のヘンチマンとマッサージパーラーへよた
よた入ってきた瞬間——の記憶が戻った。それは彼女の人生の最悪の日で、彼女を混沌
と恐れの世界へ突き落とした。

シンジに残酷にレイプされた後、彼女は彼のために働くのを渋々同意した、彼女が無力
に感じた状況に捕らえられた。でも彼女がすぐに妊娠したのを発見した時、すべてが変
わった。さゆりは

第50章

さゆりと拓也は渋谷グランベルホテルのVIPスイートに座っていた。街のネオンライトが広大な窓から活気あるディスプレイを作り出していた。スイートは豪華で、タイでのヤクザのトップボスとしての拓也の地位にふさわしかったが、その贅沢さはさゆりには遠く感じ、彼女の状況の深刻さに苦しめられていた。拓也は椅子に寄りかかり、次の手を考えるように指を組んだ。

「このことについて渡辺健に話す考えはどうだい、さゆりちゃん？ 私たち三人がシンジが復讐を求めている理由だ。彼は健と山口組の筋肉に決して勝てないことを知っていた。だからナオミを誘拐したんだ。健に話すか？」

さゆりは下の賑やかな通りへ視線を漂わせ、心が思い出で重くなった。「健とは何年も話してないわ」彼女は感情のない平坦な声で答えた。「今の私たちの立場がわからないわ。彼は私の恋人だった、ボスだった、それから私は消えた。なぜ彼が助けられると思うの？」

拓也は彼女を観察し、彼女の姿勢の緊張に気づいた。「彼には資源がある、つながりがある。彼は今でもヤクザの強力な人物だ。シンジがどこに隠れているかを探り出せるのは彼だよ」

さゆりは沈黙した、思い出が洪水のように——情熱的な笑いの夜、それから裏切りと喪失の鋭い痛み。彼女はため息をつき、未解決の感情の重みを産んだ。「でもそんなに長いわ」彼女はささやき、彼女の解決された感情の重みを産んだ。「彼が私を助けたくなかったら？ それともすべてを私のせいだと思ったら？」

「拓也」彼女は言い、調子に苛立ちが入った。「これは過去のことじゃないわ。これは大事だわ。ナオミのことよ。私たちはシンジを逃がせないわ」

拓也は彼女を見、目が激しさで輝いた。「これは過去のことじゃないわ、さゆり。これは大事だわ。シンジを逃がせないわ。あなたは健を誰よりよく知ってるわ。彼が助けられるチャンスがあるなら、私たちはそれを取らなきゃ」

彼女はため息をつき、状況の緊急さが彼女の過去の感情の戦いと対立した。彼女は深呼吸し、彼女の型破りなアイデアを共有する準備をした。

「健に話す前に、私が試したいロングショットの計画があるわ」

拓也は眉を上げ、興味をそそられた。「それは何？」

「私はシンジの母親が中学校の私の先生の一人だったって話したことあったかしら？」

「いいえ、それについて話したのを思い出せないわ」拓也は意外な会話のターンに興味を持ってゆっくり答えた。

「まあ、そうだったわ。私は本当に彼女が好きだったわ」さゆりは続け、彼女の心があの形成期の年に漂った。「彼女は銀行会長のところへ行ったあの日のことを知ったわ——あなたがあの日のことを覚えてるのは確かだわ。あれは健のための私の最初の仕事だったわ」

「はい、あの日のことを忘れられる？」拓也は懐かしく微笑みながら答えた。「銀行会長からのパッケージを待たなきゃだったわ」

「その通り」さゆりは言い、表情が真剣になった。「まあ、松本夫人、シンジの母親は、学校の後の一日私に会ったわ。彼女は私が彼女の夫の職場を訪れた若い女の子で、彼の指が入った箱を持ってオフィスから出たのを理解したわ。私は彼女が怒っていると思ったけど、彼女は理解してるって言ったわ。彼女は電話番号をくれ、必要なら電話するよう言ったわ」

拓也の興味が深まった、彼女のつながりの可能性を認識した。

「だから、あなたは彼女が私たちを助けられるかも知れないと思うの？」

「知ってるわ、長ショットのように聞こえるわ」さゆりは認めた、「でも彼女はいつも私に優しくかったわ。誰かがシンジに届くなら、それは彼女かも。結局彼女は彼の母親だわ。もしかしたら彼女がナオミを放すよう彼を説得できるかも」

拓也は寄りかかり、可能性を考えた。「それは試す価値があるわ。松本夫人がまだ彼女の息子を気にかけているなら、彼女は彼に届く影響力があるかも。プラス、あなたは彼女と歴史があるわ。それは信頼を築くのを助けるかも」

さゆりは頷き、希望と不安の混ざりを感じた。

「彼女に電話するわ。リスクだわけど、ナオミを放すよう彼に届く私たちの最高のチャンスかも。ただ、まず母親に電話しなきゃ」

「母親？」拓也は質問した。

「はい。わかってるわ。ただ聞いて、話さないで、OK？」さゆりは警告した。

さゆりは彼女の母親の固定電話の番号をダイヤルし、馴染みの行動にもかかわらず神経が擦り切れていた。彼女はテキストを好んだ——圧力が少なく、簡単な脱出。でもこれは緊急で、彼女は母親の助けが必要だった。

「こんにちは母さん。元気？」彼女は声に軽さを強いて始めた。

他の端で、タクヤは彼女を観察し、彼女の表情が中立的で彼女の母親の声がスペースを満たすのをわかった、興奮で溢れる流れ。それは明らかだったさゆりの母親は孤独で彼女の最年少の娘とのどんなつながりにも感謝した、たとえその娘がhigaishaとラベルされても。

「わあ！ それは素晴らしいわ、母さん！」さゆりは彼女の母親が敦子の新しい花屋のビジネスを発表した時、人工的な熱狂を注入して叫んだ。あれは素晴らしい発展だったが、今、さゆりの心はナオミとシンジの迫る脅威で満ちていた。結局、彼女の母親が彼女の姉妹についてのおしゃべりに永遠のように感じた後、さゆりは割り込む瞬間を見つけた。

「聞いて、母さん」彼女は始めた、調子が礼儀正しい興味から緊急へ移った。「私の夢のホンまだ持ってる？」

他の端で、混乱の瞬間がさゆりの母親の眉をひそめるのを感じさせ、彼女は思考で彼女の母親の顔をひそめるのをほとんど見えた。さゆりの表情は真剣で、現在の状況の重みで心臓が競った。彼女は母親がまだチャートを持っているのを希望した——彼女は中学校の夫人松本の電話番号を安全のために彼女の夢チャートにしまっていた。

「私はそれまだ持ってるはずよ、さゆりちゃん。私は決して何も捨てないわ。知ってるわよね、時々私はあなたたちが残した箱を通り抜けるわ。そんないい思い出。あなたはそんなに賢くて才能があったわ、さゆりちゃん」市川陽子は思い出して答えた。さゆりは彼女の母親が彼女に「バックハンド」の褒め言葉を与えたばかりだとわかった、表面では無垢だが、下にさゆりが彼女の巨大な可能性を浪費したという非難が潜む。彼女はナオミの誘拐について母親に決して話せないのをわかった。これは彼女が母親から守らなきゃいけないものだった。彼女のすでに脆弱な心をストレスをかける必要はない。

「迷惑かけてごめんわ、母さん。でも今それを探しに行ってくれない？ 緊急よ。後で説明するわ。お願いだから今見に行って30分後電話するわ、OK？」さゆりは指示した。

「はい！ 今やるわ。すぐに話そう。バイさゆりちゃん」彼女の母親は答えた。

「ありがとう、母さん。すぐに話そう。バイ」さゆりは会話を終えた。

さゆりは30分が経つのを待つ間床を歩いた。彼女は待ちながら、突然懐かしくなった。夢のチャートはそんなに多くを表していた——無垢、志、そして彼女がかつて夢見た女性。今、それは命綱のように感じた。彼女はソファにくつろぐ拓也へ横目で見、彼女の電話が始まる前の呼び出しを待つ間、彼女の心が興奮で競った。あれは20分だけだった。さゆりは素早く答えた。

「さゆりちゃん、いいニュース！」彼女の母親の声がラインを通してチャイムした、興奮で溢れていた。「あなたの夢チャートを見つけたわ。とても美しいわ。そんな大きな夢があったわ」彼女は少し懐かしい調子で加えた。

さゆりは彼女の母親の刺す言葉に防御的なものが泡立つのを感じた。彼女は平静を強いた。「見つけてくれてよかったわ。今、注意深く聞いて、母さん、OK？」

「OK、親愛なる……3、5、4、5、7、2、6、8、1。それだけ」陽子は誇らしげに答えた、まるでスペリングビーで勝ったように。

「ありがとう、母さん。すぐに電話するわ。本当に助けてもらって感謝するわ」さゆりは言い、瞬間的な胸に広がる温かさを感じた。

「私はいつもあなたのためにいるわ、さゆりちゃん。ただそれを覚えておいて」彼女の母親は答え、声が今より柔らかくなった。

「知ってるわ、母さん。すぐに話そう」さゆりは言い、決意で心臓が競りながら電話を切った。彼女は拓也を見、彼女の決意が明らかだった。「今、あの電話をする時間よ」

さゆりの心臓が彼女の胸で鳴りながら、拓也が彼女に与えた渡辺健の番号をダイヤルした。電話が鳴り、彼が答えた時、馴染みの声がラインを通ってきた。

「もしもし？ 渡辺です」彼はいつも通り言った。さゆりの唇に笑みが忍び寄り、彼女のティーンエイジャーのリエゾンの思い出が彼女の心に残り、懐かしさと不安の混ざり。

「健。さゆりよ」彼女は言い、声が安定した。

少しの間があり、「さゆりちゃん！ 驚いたわ。最後に聞くのを予想した人だわ。元気？」彼は少しの驚きで答えた。

「よりよくできるわ。でも今追いつく時間じゃないわ」さゆりは答え、彼女の声に苛立ちが入った。「健、本当にあなたの助けが必要よ。私は今東京にいるわ。あなたは今日どこ？ 東京？」

「はい、私は今日東京にいるわ」健は確認した。

第51章

洗練されたN-700系新幹線が神戸に向かって滑らかに進む中、さゆりはケンとタクヤの間に座り、ケンのヤクザの子分3人と、シンジの妹である美雪を伴っていた。電車の穏やかな走行音は、彼女の心に渦巻く乱れと対照的だった。馴染みの携帯の振動を感じ、下を見るとリチャードからのテキストだった。

Hi baby. How are things going?

一瞬、罪悪感が胸を突いた。日本に着いてからナオミの追跡と過去の対峙に巻き込まれ、リチャードのことを考えていなかった。しかし、彼のメッセージの温かさが、二人のつながりを保つことの大切さを思い出させた。

今、神戸に向かっているところ。ナオミの携帯をチャイナタウンまで追跡したわ、と彼女は素早く画面をタップして返信した。

That's great news. Where in Chinatown? リチャードはほぼ即座に返し、言葉に安堵が表れていた。

さゆりの心に疑念がちらついた。

「どうしてその場所を知りたいの？」と彼女は聞き返し、眉を軽く寄せた。

Because, baby, I want to go on GOOGLE MAPS and look at the area. I have some experience in these matters. Maybe I will see a clue that will help. The more people who are trying to help, the better, don't you think?

彼女は言葉を考えて一瞬止まった。これまでリチャードを信じることには問題がなかったが、これは違う気がした。それでも、何の害があるだろう？彼は本気で助けたいようだったし、彼女が知らない一面があるのかもしれない。結局、彼女自身も彼に明かしていない秘密の過去を持っている。きっと彼にも語られていない人生の一部があるはずだ。

わかった、と彼女は打ち返し、不安と希望が入り混じった鼓動を感じた。住所は元町通1丁目3-6よ。どれだけ役に立つかわからないけど、サポートありがとう、ハニー。

ケンがタクヤと会話に没頭しているのを横目で見て、彼は彼女のやり取りに気づいていない。子分たちがわずかに体を動かし、その存在が常に賭けの高さを思い出させた。

OK, thanks baby. I'll look into it. Be safe. I'll message you again tomorrow. Love you.

携帯をしまいながら、彼女に決意が宿った。リチャードの助けがあれば計画を組み立てられるかもしれない。これまで過去と人間関係を分離してきたが、今、すべてが懸かっている状況で、その壁を越える時が来たのかもしれない。窓の外をぼやけた緑と灰のタペストリーに変える景色を見つめ、先にあるものに覚悟を決めた。神戸に着くと、駅の外で涼しい夜気が迎え、すぐにタクシーを2台拾ってホテルメリケンパーク神戸元町へ向かった。街は街灯の輝きにきらめいていたが、長旅の疲労がグループ全体に重くのしかかっていた。

各自に部屋が割り当てられたが、3人の子分はファミリールームに詰め込まれ、落ち着くにつれてかすかな笑い声が響いた。深夜を過ぎ、疲れが濃く漂っていた。さゆりはグループに向き合い、しっかりとした優しい声で皆に休息を促した。

「朝食で再集合して次の行動を話し合いましょう」と言い、一人また一人と頷いた。それぞれの部屋に散っていき、新しい日の約束が疲労と混じり合った。

ケンのスイートに朝の柔らかな光がカーテン越しに差し込む中、グループは低いテーブルを囲み、朝食の残骸が散らばっていた。ナオミをシンジから救う作戦を練るため、目的意識に満ちた緊張感が漂っていた。ケンが身を乗り出し、真剣な表情で口を開いた。

「昨夜、叔父の渡辺義則と話した。皆さんご存知の通り、彼は2005年まで山口組の組長だった」とケンは落ち着いた声で始めた。

そんな有力者の支援が得られる可能性に、さゆりの心が跳ねた。「何ておっしゃってました？」と希望を目に宿して尋ねた。

ケンは一瞬躊躇い、顔に影が差した。「実は、シンジに渋谷の縄張りを一つ譲られた後、僕たちは以前ほど親しくなくなった。あれ以来ほとんど口をきいていない。でも彼はもう20年近く引退していて、後悔に満ちた老人だ。だから—」

タクヤに突然遮られた。「何て言ってたんだ？」

ケンの目に苛立ちが閃いた。「もう、途中で割り込まないでくれ！」

「すみません」とタクヤとさゆりが揃って小さく言った。

「彼は文字通り死にかけていて、自分の言葉で『正しいことをしたい』と言っていた」とケンは重い口調で続けた。「現在の組長、篠田建市に話して、神戸の全組員にシンジを探すよう命じた。また、シンジは今『真珠』だと言っていた」

美雪が困惑した表情で眉を寄せた。「それはどういう意味ですか？」

「真珠とは『一緒に死ぬ』という意味だ」とケンを含みを持たせて説明した。「シンジは標的になった。ヤクザの庇護を失い、彼と関わる者は誰でも狙ってよい対象だ」

ケンの言葉の重みが部屋に沈み、安堵と不安が入り混じった。この新たな支援により、ナオミを連れ戻す賭けは劇的に高まった。

「よし。神戸のヤクザが彼を探している。これはいい。それ以外にナオミを見つけるためにできることは？」さゆりが会話を主導し、しっかりとした集中した声で言った。

「誰かアイデアは？」と続け、考え込んでいる様子の美雪に向き合った。

「私たちの家族は父が銀行頭取に昇進して東京に引っ越したんです」と美雪はゆっくりと始めた。「シンジは怪物になる前、私とかなり仲が良かった。小さい頃は週末にチャイナタウンで遊んでいた。彼の夢はいつもヤクザになることだった。グーグルマップを少し見させて。さゆり、一緒に来て」

さゆりは頷き、ケンのVIPスイート内のデスクに美雪について行った。ノートパソコンを開き、画面が薄暗い部屋で二人の顔を照らした。

「さゆり、ナオミの携帯を追跡した時の住所を見せて」と美雪が指示した。さゆりはすぐに位置を表示し、ナオミのことを再び考えると不安が高まった。

「ありがとう。今もう一度追跡して」と美雪。さゆりは従い、FIND MYアプリに現れた座標を美雪に見せた。

美雪はグーグルマップを熱心に眺め、指でキーを叩きながらエリアを移動した。しばらくして顔を上げ、心配そうに言った。「最初に追跡した時と同じ住所じゃないわ」

「あ、確認すべきだった」とさゆりは謝り、罪悪感が押し寄せた。「ごめんなさい、集中するのが難しくて」言い訳が情けなく聞こえた。これは自分の娘の危機—他人のではない。それから思いついた。

「美雪、アプリでシンジの携帯を探してみたら？」

「昨夜試したけど、Apple IDからサインアウトしてるみたい」と美雪は恥ずかしそうに答えた。「ごめん、言っておくの忘れてた」

「そうか」とさゆりはため息をついた。部屋を見回し、感謝の波が込み上げ、苛立ちを和らげた。どうにかナオミを探すことに専念するチームを組んでいた。その過程で、二度と向き合えないと思っていた恐怖に立ち向かっていた。近くに座るケンがその証だった。遅くなる前に話せてよかった。古傷を語るのは辛い、言えなかった後悔を抱えて生きるよりずっとましだった。

「でもシンジはまだチャイナタウンにいる」と美雪はノートパソコン画面に指を置き、主要なランドマークを指差した。

「ここを見て……」GPS座標が交差する場所を指した。「南京町広場よ」シンジの好きな場所を思い出しながら集中した。

「彼はいつも南京町広場が大好きだった。港も好き。高級なものも好き」

「チャイナタウンの高級ホテルにいる可能性があるってこと？」さゆりは確認し、心臓が早鐘のように鳴った。

「そう。そしてこのホテル、港がよく見えるわ」と美雪は画面上のホテルクラウンパレ神戸を指し、声に興奮が混じった。

「ホテルクラウンパレ」とさゆりは声に出して読み、希望の火花を感じた。「ここから1キロちょっとよ」と興奮して言った。

「何か分かったか？」とタクヤが部屋の向こう側から叫んだ。男たちは作戦を話し合っていた。

「ホテルクラウンパレにいる気がする」と美雪は今や自信を持って答えた。「あくまで推測だけど、出発点にはなるわ」

「よし、建市に連絡してあのエリアに人を集中させよう」とケン is 落ち着いた声で言い、決意の表情で携帯を取り出した。

ケンがダイヤルする間、さゆりは美雪と視線を交わした。これが突破口になるかもしれない。ナオミがすぐ近く、数ブロック先にいるかもしれないと思うと、アドレナリンが血管を駆け巡った。ようやく前進し、長らく感じていなかった希望が部屋に明るく灯った。

「さゆり、もう一度ナオミの携帯に電話してみたら」とケンが提案した。「まだ無事か確かめよう」

「日本に来てからずっとそればかり考えてる」と彼女は告白した。「でも怖くて。生きている希望を抱いている方が、死んだと知るより楽なの」と説明した。

「分かるよ、さゆりちゃん。でもそれが一番だと思う」とケンは同情を込めて言った。

さゆりは震える手でナオミの番号をダイヤルし、心臓が激しく鳴った。コール音が響き、部屋は静まり返り、皆が耳を澄ました。

「おかけになった番号は現在電波の届かない場所にあります」という冷たく無機質なメッセージが流れた。さゆりは内臓が落ちる感覚に襲われ、胸に寒気とパニックが広がった。娘に連絡する手段がなくなった。チームの心配顔を見回し、それぞれが彼女と同じ恐怖を映していた。

「よし！時間を無駄にするな！」ケンが突然緊張を切り裂くように宣言した。「すぐにクラウンパレへ行こう！」

ホテルからわずか1キロなのに、車の方が早いと判断した。建市が神戸滞在用に用意した車に急ぎ、アドレナリンに突き動かされてホテルへ向かった。車内でケンは山口組神戸派との連絡係サトシに素早く電話した。コール音が車内に響き、サトシが出るまで続いた。

「サトシ、ケんだ。ホテルのフロントにはもう話したか？」

ケンが会話を続ける間、車内の緊張ははっきり感じられ、一言一言が任務の緊急性とナオミの状況の危うさを増幅した。

「うん、うん」とケンはスーツのポケットに入れている小さな手帳に何かを書き留めた。

「サトシたちがフロントに話をした」とケンは短い通話を終えて伝えた。「松本シンジの名前で登録はない。でも昨日、足を引きずる男が若い女とチェックインした」

「何という名前でチェックインしたの？」美雪が急いで尋ね、目に心配を浮かべた。

「坂本正彦」とケンが答えた。

美雪は名前を聞いて表情を変え、数秒考えた後、叫んだ。「そう、それよ！彼の好きなアイドルの名前を組み合わせたの一坂本九と近藤真彦！」

その発見が空気に漂い、興奮と緊急性が混じった。ますます近づいているが、時間が過ぎるごとに、さゆりはナオミへの恐怖が重くなるのを感じた。時間がなくなっていた。

2台の車がクラウンパレホテルの洗練されたファサードに停まり、ガラス窓に陽光が反射した。さゆり、ケン、タクヤ、美雪、そして3人の子分が降り、決意の雰囲気包まれた。任務の緊急性が大きいのしかかり、入口に向かって目的意識を持って進んだ。

ロビーは磨き上げられ優雅だったが、レセプションに近づくにつれ緊張が高まった。ケンは身を乗り出し、威圧的な存在感で注目を集めた。「こんにちは。坂本正彦さんはどの部屋ですか？」と落ち着いても緊急を帯びた声で尋ねた。

女性レセプションニストは驚いた様子で、目の前の5人の強面の男たちに視線を走らせた。「申し訳ありませんが、会社の方針で客室番号はお教えできません」と震える手でどもりながら言った。

美雪が前に出て、心配から自信へと態度を変えた。「家族です」と滑らかに言った。「彼は私の兄です。これらはビジネスの関係者。取引の交渉に来ました」説得力のある落ち着いた声が緊張を切り裂いた。レセプションニストの表情が和らぎ、安堵が広がった。

「わかりました、家族なら大丈夫です」と彼女は言った。規程を守り、トラブルを避けられたと安心した様子で。「確認します……504号室です」

グループが視線を交わし、新たな目的意識が灯った。ナオミにまた一歩近づき、部屋番号がわかった。ケンがエレベーターに向かって先導し、決意の表情を浮かべた。さゆりはすぐ後ろを歩き、頭の中は恐怖でいっぱいだった。遅すぎたら？シンジが愛娘に何か恐ろしいことをしていたら？

エレベーターのドアが閉まると、タクヤは緊張しながらも決意を固めた美雪を見た。

「準備はいいか？」と静かに聞いた。

「やらなきゃ」と彼女は囁くような声で答えた。兄と対峙するのは不安だったが、止めるわけにはいかなかった。ナオミが必要としていた。

エレベーターが5階に着き、長い静かな廊下が現れた。ケンが再び先頭に立ち、504号室に向かって進み、一步一步が静寂に響いた。グループは密な隊形を取り、任務の重みが空気に満ちた。

504号室の前で、はっきりとした緊張が漂った。ケンが美雪に近づき、急いで囁いた。

「あなたがノックして、自分だと告げて。彼にはそれが聞こえる必要がある」

美雪は頷き、深呼吸して神経を落ち着けた。前へ出て、ドアを軽く叩いた。「シンジ、私、美雪よ！妹の！話があるの！」

ほぼすぐにドアが勢いよく開き、皆を驚かせた。ドア枠に立つ堂々とした姿が、余裕ある自信を放っていた。

その馴染みの顔が、混乱の中の希望の光となって彼女を不意打ちにした。何も考えず、衝動的に前へ出て、彼を強く抱きしめた。娘が捕らわれている恐怖が一瞬消え、つながりの温かさにとって代わられた。

「こんにちは！」と彼は明るく言った。「皆さんお元気ですか？」

「リチャード！来てくれて本当に嬉しい！」

エピローグ

さゆりとナオミは、ケンのVIPスイートにあるふかふかのソファに並んで座り、温かく安堵に満ちた雰囲気にもまれていた。その日の早い時間にリチャードによって無事救出されたナオミは、興奮した様子で自分の体験を生き生きと語り、神経の高ぶりが早口の言葉となって溢れ出していた。

「神戸外国語大学のグローバル・コミュニケーション学部英語コースに入学したのは、セブで英語の勉強がとても楽しかったから、もっと本格的なプログラムに挑戦しようと思ったの！」と彼女は目を輝かせて熱く語った。「お母さんのことが本当に誇らしいのよ。独学で英語を身につけたんだもの。それに憧れて、私もお母さんのような世界を渡り歩く女性になりたいと思ったの！」

部屋は皆が熱心に耳を傾ける中、喜びに満ちた空気に包まれていた。ナオミが無事でさゆりと再会できたことを、皆が心から喜んでいて。ケン、タクヤ、美雪は安堵の視線を交わし、ソファの横のアームチェアにくつろいで座るリチャードは少し身乗り出した。

「そうだね、君のお母さんは本当に素晴らしい」と彼は温かい声で同意した。「僕も日本語を学び始めたのは彼女に影響されてだよ」そう言ってリチャードは手を伸ばし、さゆりの手を握った。その連帯と支えの仕草に、さゆりは微笑んだ。

ホテルに向かう道中で、さゆりはすでにリチャードにシンジにレイプされたというトラウマを打ち明けていた。そして、彼は自分が口にするずっと前から真相を察していたのではないかと感じていた。それでも、自分の物語を語ることは必要だった。長年彼女を苦しめてきた過去に立ち向かい、声を奪い返したのだ。

今、ナオミが体験を語る中、さゆりの心はあの痛ましい告白の瞬間に戻っていた。裸にされたような、脆い気持ちだったが、同時に不思議な解放感もあった。リチャードは真剣に聞き、理解と支えの表情を浮かべていた。動揺したり裁いたりせず、ただ彼女が真実を語れる安全な空間を提供してくれた。ナオミが話を続けるにつれ、数時間前まで漂っていた緊張とは対照的に、部屋の空気は軽やかになっていった。

皆は知っていた—あの複雑な人物シンジは警察に引き渡されなかったことを。代わりにリチャードが彼をケンに託し、ケンは子分たちに神戸のヤクザの施設でシンジを監禁するよう命じた。あとで対処するつもりだった。ケンはさゆりに、シンジは「罪の代償を払う」と約束した。彼女はそれを信じていた。ケンはシンジの味方ではないし、劇的な過去があっても、彼女のことを深く想っていると知っていた。シンジはもう終わりだ。

しかし今は、ナオミに焦点が当たっていた。授業のこと、新しい友達、将来の夢を語る彼女の笑い声と興奮が部屋を満たしていた。さゆりは胸が誇りと安堵でいっぱいになり、混乱の後のこの普通でつながりのある瞬間に感謝した。

「KGUの新しい寮で荷解きをしていたら、その晩の新入生歓迎パーティーに誘われたのー要するに新入生のためのパーティーよ」とナオミは説明した。「楽しかった。目黒区出身の可愛い男の子に出会った。おしゃべりして、私がお母さんが目黒区出身だって言ったら、彼がお父さんがお母さんを知ってるかもしれないって。それで、お母さんの名前を教えたの」とナオミは申し訳なさそうに母を見て言った。

「それはきっと私の甥の直樹よ」と美雪が割り込んだ。「彼もKGUに通ってるの」

ケンのホテルスイートの空気は好奇心に満ち、皆がナオミの話にさらに身を乗り出した。彼女は深呼吸し、興奮を抑えながら真剣な口調で続けた。

「お兄さんがいるの？」と彼女は母を見て、聞いたことに衝撃を受けた様子だった。

「ナオミ」とさゆりは落ち着いたが感情のこもった声で始めた。「大事な話があるの。シンジ……彼があなたのお父さんなの」

ナオミの目が見開かれた。「知ってるよ、ママ。彼が電話でお母さんと話してるのを聞いたから。すごくショックだったけど、考える時間はあった。彼は一失礼な言い方だけど一精子の提供者でしかないの。私の人生に一切関わってないから、何も感じない。彼はただ私を誘拐した狂った怪物よ。だから心配しないで、ママ。私は大丈夫。我慢するから」

「それを聞いて安心したよ、私の子」とさゆりは優しく言った。「この騒動があなたにどんな影響を与えるか心配してたけど、今はそれについて話したくないの」「もうすぐ、いい？二人きりの時に」と娘に言い、痛みを帯びた微笑みを浮かべた。

「はい！」とナオミは素直に答えた。

「とにかく、続きを聞かせて」とさゆりは優しく促した。

「うん、彼一直樹のことだけど一本当に優しくて」とナオミは懐かしげに言った。「すぐに意気投合した。学校のこと、育った環境のこと、いろんな話をした。本当に楽しかった」

部屋は静まり返り、皆が彼女の言葉に聞き入っていた。ナオミはソファに深くもたれ、思い出を語る興奮が溢れ出した。

「パーティーは金曜の夜だった」と彼女は懐かしげに目を輝かせて始めた。「直樹は翌日、神戸を案内してくれるって。新しく来たばかりだからって。土曜に一緒にumieのモールに行く約束をしたの」

話すにつれ、部屋は変わっていき、最近の出来事の緊張が彼女の物語の温かさに溶けていった。「umieで買い物して、それから彼の携帯に父親からメッセージが来たんだって。週末はよく一緒にランチするらしい。彼は父親とランチするって言って、私も一緒にどうかって誘ってくれた。私はOKした」

ケン、タクヤ、リチャードは真剣に聞き、好奇心と心配が入り混じった表情を浮かべていた。さゆりはナオミを見て、娘の冒険心に胸が誇らしさで膨らんだ。

「直樹はチャイナタウン近くの店を選んだ。お父さんがそこが好きだって」とナオミは生き生きと続けた。「お父さんが来る前に、南京町広場のオープンエアのカフェに着いた。ラントンや屋台がいっぱいで、色鮮やかで活気があって、びっくりした！」

ナオミは一瞬止まり、その賑やかな雰囲気を出した。「数分後にお父さんが来た。私たちは食べ物と飲み物を注文して、直樹が前夜のパーティーの話始めた。それで彼がお父さんに私の母を知ってるか聞いたの」

彼女は愛情を込めてさゆりを見て微笑んだ。「その時は本当に幸せで、無邪気な気持ちだった。ただその瞬間を楽しんでた」

さゆりはナオミの手を握り返し、思い出の甘酸っぱさに胸が痛んだ。「新しい人に出会うために勇気を出して、本当に偉かった」と優しく言った。「誇らしいよ」

ナオミは母に満面の笑みを返し、二人の絆がその瞬間にさらに強まった。

「でも、そこから変になった」と彼女は表情を少し変えて付け加えた。「私の名前を言ったら、直樹のお父さんがすごく興味を示して、何か考え込んでいるのがわかった」

「お母さんのこと、何か言ってた？」とケンが好奇心を刺激されて聞いた。

「その時は何も」とナオミは首を振った。「でも空気が変わったの。何かが彼の中で繋がったみたいだったけど、当時はわからなかった」

部屋が一瞬静かになり、皆がその一瞬のやり取りの重要性を考えた。さゆりの頭は駆け巡り、誰も気づかないうちに運命が彼らの人生を絡ませていたことを振り返った。ナオミは深呼吸し、誘拐に至る出来事を落ち着いて語り続けた。

「食事の後、周辺を散策して、観光スポットを全部見せてくれた。本当に活気があって、毎瞬楽しんでた」目は記憶に輝いていたが、次に進むと影が差した。

「私が婦人服の店の中で忙しく見てる間、二人は店の外で喫煙禁止だから路地に行って吸ってくるって。私はその時は気にしなかった」と彼女は軽く首を振って思い出を振り払うように言った。「でも店を出たら、直樹のお父さんだけがいた」

さゆりは身を乗り出し、物語の転換を感じて心臓が早鐘を打った。「それからどうなったの？」

「直樹はどこに行ったか聞いたら、特別なお楽しみだって、土曜の夜は寮がうるさいって直樹がいつも文句言ってるから、ホテルを予約したって。直樹はその夜そこに泊まるんだって」とナオミは眉をひそめた。初期の興奮の無垢さが、今では危険にあったことの氣づきに取って代わられていた。

「もちろん、私はそんなこと知らなかった。KGUに来て初めての週末だったから」

リチャードの眉が寄った。「それを信じたの？おかしくないと思った？」

ナオミは肩をすくめ、記憶に顔を強張らせた。「その時は優しいと思った。ただ会ったばかりだったし、深く考えなかった」ナオミは物語を続け、懐かしさから不安へと表情が変わった。

「直樹は買い物を部屋に置いてから、私を映画に連れて行くつもりで、買い物袋を持ちたくないんだって。それでホテルまで一緒に歩こうって。彼は急いで帰らなきゃいけないって、息子に別れを言って、私たち二人で楽しめって」

さゆりは苛立ちが込み上げた。娘の軽率さに叫びたい衝動を抑え、舌を噛んだ。しかし、自分の若い頃の無垢さを鏡のように思い出し、人は警戒すべきか、それとも信じるべきか—この内なる葛藤が長年彼女を苦しめ、今猛烈に蘇った。

「それで、彼と一緒にホテルに行ったんだな」とタクヤは問いというより確認のように言った。

「はい！」とナオミはまだ熱を帯びて答え、部屋に鳴り響く警鐘に気づいていない様子だった。

さゆりは意味を理解し、心臓が激しく鳴った。「ナオミ、あなたはわかって—」

「わかってる、わかってる！」とナオミは声を少し上げて遮った。「私は若くて無知だった。何も考えなかったの！新しい場所でただ興奮してただけ」

ケンが身を乗り出し、真剣な表情で言った。「でも、全く疑問に思わなかったのか？その男は他人だぞ」

ナオミは守勢に回った。「ただ楽しもうとしてただけ！何か悪いことが起きるなんて想像もしてなかった。直樹のお父さんだから信じられると思ったの」

リチャードが優しく割り込んだ。「人を信じるって難しいんだ。特に新しい場所では、誰が安全で誰がそうじゃないか判断がつかない」さゆりは頷き、娘への共感で胸がいっぱいになった。

「すみません！あなたのせいじゃないわ、ナオミ。ただ友達を作って楽しもうとしただけ。でも時には、その無垢さを利用する人がいるの。無事で本当に良かった」とさゆりは優しく言い、愛情の視線を娘に送った。

ナオミは下を向き、初期の興奮が薄れた。「危ないことに気づいた時にはもう遅かった」

「その通り」とケンはずきずきとしたが慈しみのこもった声で言った。「だから、違和感があっても慎重になることが大事だ。辛い教訓だけど、誰もがいつか学ぶことだ」

ナオミは言葉を噛みしめ、若さの無垢さと経験の厳しい現実がぶつかった。「今はわかる。本当に。ただ、兆候に気づきたかった」

さゆりはケンがさらに説教を続けそうになるのを見て、強い視線で睨みつけ、彼は開きかけた口を閉じ、ほとんど気づかれないほど小さく頷いて、無言の叱責を認めた。

さゆりは手を伸ばし、ナオミの肩を抱いて引き寄せた。「あなたはできることをした。今大事なのは、無事で、私たちが支えるってこと」

「質問がある」とケンが言った。

「はい？」とナオミが促した。

「ホテル部屋で、どうして助けを求めて叫ばなかった？」

「怖かったの」とナオミは認めた。「部屋には引き戸とベランダがあって、叫んだら『また一つ自殺統計が増えるだけ』だって。彼に言われて、思わず震えちゃった」

「確かに怖いな」とケンは同意した。それからリチャードに向き、「君がさゆりとタイと一緒に暮らしてた男か」と述べた。質問ではなかった。

「はい！」とリチャードは雰囲気軽くしようと答えた。

「元軍人だろう」とケンは敬意を込めて続けた。

リチャードは椅子に寄りかかり、考え込む表情を浮かべた。

「そうだよ。若い頃はパラバットの先遣隊だった」と彼はさらりと触れたが、口調は軽いが重みがあった。「でも、あまり話したくないんだ」

ケンハリチャードの境界を尊重して頷いた。「それは当然だ。誰にでもある過去だからな。でも、どうやってシンジを見つけた？」

リチャードは少し体を動かし、窓に視線を移してからケンに戻した。

「さゆりからナオミが行方不明だと聞いたけど、助けを断られた。彼女の頑固さは知ってるから、ただ飛行機で東京へ飛んで、さらなる情報を待った。状況にストレスを加える意味はないからな」とさゆりに意味深に微笑み、近くに座る彼女は温かく感謝の表情を返した。

「ありがとう」とさゆりは静かに言った。感謝で胸がいっぱいだった。

リチャードは続けた。「それから、彼女がナオミの携帯追跡の位置情報を送ってくれた時、東京からすぐにここへ来た。日本はいい電車があるね」と彼はくすくす笑い、会話の深刻さと対照的な軽さを見せた。

ケンは本気で興味を引かれて眉を上げた。「本当に時間を無駄にしなかったな。どうやって場所を絞った？」

「松本シンジの名前がわかったら簡単だった。南アフリカの親友マックはハッカー兼通信の専門家で、彼がシンジの携帯にトラッカーのウイルスを仕込んだ。あとはお安い御用さ」

ケンはリチャードの決意に感心して頷いた。

「立派だ。誰もがすべてを投げ出して世界の半分を追ってくるわけじゃない」

リチャードは謙遜を込めて肩をすくめた。

「ただ、どれだけ大事かわかってただけさ。さゆりとナオミは家族だ。家族は互いを守る。それに、彼女に気持ちがあるのかもしれない」と照れくさそうに笑った。

さゆりは彼に微笑み、心が満たされた。その瞬間、二人の絆は共有の経験と相互の敬意でより強くなった。

「先遣隊ってどんな感じ？」とケンは興味を引かれつつ、リチャードが深く話したくないのを尊重して聞いた。

「いや、そこには行かない」と彼はきっぱり言った。「でも、貴重なスキルと直感を信じることの大切さを教えてくれた。それは人生の他の面でも役立ってる」

「激しそうだな」とケンは頷いた。「でも、それがいい守護者になるのに繋がるんだろう」

リチャードはケンの視線を受け止め、一瞬真剣な表情になった。「予想外に備えて、皆をできる限り守ることさ」

二人の男は理解の瞬間を共有し、守る者としての役割を認め、無言の合意を結んだ。感情の乱れの中で、つながりを持ち、強さと献身の物語を分かち合うのは心地よかった。

さゆりは二人の男を見て、唇に遊び心のある微笑みを浮かべた。

「もう、男同士の友情は十分」と彼女はからかい、温かい声でケンに優しい視線を送った。「リチャードは私のものよ」

彼女はリチャードに向き、愛情で胸がいっぱいになり、これからの旅路に寄り添うパートナーを見つけたと知った—どんな挑戦も喜びも一緒に立ち向かう人。

物語と笑いを分かち合い、仲間意識の温かさが心地よい抱擁のように包んだ。その瞬間、彼らは我慢—忍耐と尊厳を持って苦難に耐える力—の意味を理解した。

また、真の癒しは許しから来ることも認識し、一緒に前へ進むことができ、より軽く、より強く。

終わり

